国士舘大学審査学位論文

「共和国から国民国家へ―サン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究―」

津村　夏央

氏　　名	津村　夏央
学 位 の 種 類	博士（政治学）
報 告 番 号	乙第５０号
学位授与年月日	令和２年３月２０日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学 位 論 文 題 目	共和国から国民国家へ－サン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究－
論 文 審 査 委 員	（主査）教　授　　中金　　聡
	（副査）教　授　　安永　　勲
	（副査）教　授　　的射場　敬一

博士論文

題　目　　共和国から国民国家へ－サン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究－

氏　名　　津村　夏央

博士学位請求論文

共和国から国民国家へ

――サン=シモンおよびサン=シモン主義研究――

津村　夏央

目　次

序　論

１．本研究の目的と研究史上の意義 …… 1

２．本研究の構成 …… 5

３．サン=シモン小伝 …… 7

第Ⅰ部　サン=シモンの思想とそのコンテクスト …… 10

第１章　ナショナリズム論の現在

はじめに …… 11

１．第１の座標軸：〈古代／近代〉 …… 12

２．第２の座標軸：〈自然／人工〉 …… 16

３．第３の座標軸：〈シヴィック／リベラル〉 …… 24

４．国民化と産業化 …… 30

おわりに …… 35

第２章　ポスト市民革命期の政治思想――サン=シモン主義の歴史的文脈について

はじめに …… 37

１．社会契約論の陥穽 …… 39

２．テロルという反証 …… 44

３．ユートピアと科学 …… 48

４．「百科全書」の精神 …… 54

おわりに …… 61

第３章　サン=シモンの〈産業体制〉論

はじめに …… 63

１．フィジオクラシーの遺産 …… 64

２．実証主義と宗教のゆくえ …… 68

３．〈産業社会〉とは何か …… 77

４．体制転換の政治学（ポリティーク） …… 83

おわりに …… 89

小結 …… 92

第Ⅱ部　第二帝政とサン=シモン主義 …… 95
第４章　サン=シモン教からサン=シモン主義へ
はじめに …… 96
１．分光する思想 …… 98
２．「感情の科学」とその実践――アンファンタン …… 103
３．サン=シモン主義の経済学（エコノミー）――シュヴァリエ …… 111
４．「ナポレオン的観念」――ルイ=ナポレオン・ボナパルト …… 122
おわりに …… 130
第５章　サン=シモン主義者の人工庭園
はじめに …… 132
１．物質（マテリー）の血脈――鉄道と銀行 …… 136
２．「消費都市」――パリ大改造 …… 143
３．物神（フェティッシュ）の祭礼(1)――1855 年パリ万国博覧会 …… 149
４．物神（フェティッシュ）の祭礼(2)――1867 年パリ万国博覧会 …… 154
おわりに …… 159
第６章　第二帝政期における〈国民〉の誕生――ゾラの小説を中心に
はじめに …… 164
１．「精神の空虚」をめぐって――ユイスマンスとゾラ …… 165
２．『ルーゴン=マッカール叢書』の自然主義 …… 170
３．鉄道と時間の変容 …… 176
４．客車の経験――見知（エ）らぬ（ト）同（ラ）乗（ン）者（ゼ）たちの世界 …… 183
５．〈産業化〉としての国民化 …… 189
おわりに …… 194
結　論 …… 197

参考文献一覧 …… i
年　表 …… xxvii

序　論

１．　本研究の目的と研究史上の意義

本研究の目的は、サン=シモン(Claude Henri de Saint-Simon, 1760-1825)を社会主義の系譜から解き放ち、フランスにおける国民国家の成立に決定的な役割を果たした政治思想家として再評価することにある。

サン=シモンの思想をフーリエ(Francois Marie Charles Fourier, 1772-1837)やオーウェン（Robert Owen, 1771-1858）とともに「ユートピア的社会主義(utopischer Sozialismus)」と規定したのはマルクス（Karl Marx, 1818-1883）およびエンゲルス（Friedrich Engels, 1820-1895）であった。もちろんこの思想史上の位置づけには、サン=シモン主義とはマルクスとエンゲルスの「科学的社会主義(wissenschaftlicher Sozialismus)」の先駆思想であるというだけでなく、それによって乗り越えられた歴史の遺物であるという負のニュアンスが伴っている。従来のサン=シモン研究は影響力のあるこの解釈枠組みに災いされたため、サン=シモンの思想を評価する場合にも、マルクス=エンゲルスの思想の先取りとみなされるもの、例えば人間の最も重要な活動力としての労働、人間集団の基礎的単位としての階級、「科学」を頂点とする人間精神観などの教義のみに着目し、キリスト教の重視、職能制社会の構想、ある種の君主制の擁護などのサン=シモンに独特な主張は「ブルジョワ的」として端的に無視する傾向に陥ってきた。サン=シモン研究は事実上、エンゲルスの『空想（ユートピア）から科学への社会主義の発展』(*Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*, 1880)以来顕著な進展を見ていないといっても過言ではない。フランスにおける最近年の研究書ですらそうである。例えばP・ミュッソは、サン=シモンの思想において「社会の下部構造は精神的なもの」であって、「ある社会体制の諸部分を結びつけるもの、その基盤を構築するものとは科学的、宗教的、道徳的、あるいはその他の思想や信仰である」と主張するが、この図式そのものは言うまでもなくマルクスの「土台／上部構造」の区別を無条件に前提したものである[1]。また、社会主義がつねにマルクス主義を基準として理解される風潮を作り上げた知識人たちを批判し、社会主義思想の多様性を重視するCh・プロシャッソンでさえ、サン=シモンとサン=シモン主義を論じる時には、まずマルクス主義の「科学的社会主義」の

[1] Cf. Pierre Musso, *Saint-Simon et le saint-simonisme*. Que sais-je ? (Paris : Presses Universitaires de France, 1999), pp.21-22.

オルタナティヴとしてフーリエの「ユートピア的社会主義」に言及し、そのフーリエへの影響という観点からサン=シモンの思想を評価するという具合である[2]。

サン=シモンの思想の全体像を解明するモノグラフとしては、現在までに社会思想史家フランク・マニュエルの記念碑的大著『サン=シモンの新世界』(*The New World of Henri Saint-Simon*, 1956)ただ一冊を数えるのみであり、政治思想史に分野をかぎるとさらに乏しく、わずかにシェルドン・S・ウォリンが『政治とヴィジョン』(*Politics and Vision*, 1960)で一章を割いてその組織論的社会観を紹介しているだけである。だがマニュエルにしても基本的にサン=シモン主義をユートピア思想の系譜のなかに位置づけて解釈しており、マルクス=エンゲルスによって作り出された「ユートピア的社会主義者」サン=シモンのイメージの呪縛がいかに強いかを証明する結果になっている。こうした研究状況は、マルクス主義が多大な理論的影響力をもった第二次大戦後の日本の社会科学界でも近年まで変わらず、マルクス=エンゲルスの社会主義思想に飽き足らない論者がサン=シモンに着目しても、その議論はお定まりの「ユートピア的社会主義」の枠内にとどまっていたといってよい。そのような状況下で画期的であったのは、世界に先駆けてサン=シモンの主要作品に綿密な校閲を加えた森博の個人訳『サン=シモン著作集』全５巻（1987-88 年）の刊行である。これにより日本での本格的なサン=シモン研究はようやく緒に就き、本研究もこの労作に大いに依拠している。

サン=シモン研究のむずかしさはサン=シモンその人に責任の一端がある、とは多くの論者が指摘するところである。残したすべての著作がいわばトルソであり、着想は断片的で思いつきの域を出ず、一作毎に前言を翻して創造的破壊をくり返すため、統一的な思想家像を結ばせない。何よりも、サン=シモン自身が自分の仕事の歴史的な意義について明瞭な認識を持っておらず、政治・経済・文化・宗教など無数の領域を漫然と渉猟しているだけに見える。彼の思想が社会主義、ユートピア思想、真摯なカトリック信仰など多様なカテゴリーの下に論じられつつ、そのいずれによっても語り尽くされないのはそのためである、と。しかしサン=シモンの思想は、単に「ユートピア的」でもなければ単なる「社会主義」でもない。またその大言壮語とも大風呂敷ともとれる数々の発言でさえ、時々の状況に配慮した周到な意図を伴っており、支離滅裂なものではない。それを彼の生きた時代という

[2] Cf. Christophe Prochasson, *Saint-Simon ou l'anti-Marx : Figures du saint-simonisme français xixe-xxe siècles* (Paris : Perrin, 2005), pp.207-208.

歴史的コンテクストに関連づけて理解するならば、すべてはフランス革命後という思想環境への応答であったことが明らかになる。

サン=シモンとフランス革命の関係は、マルクス=エンゲルス的な解釈図式から抜け落ちている視点であった。若きサン=シモンが革命に共鳴しつつ、やがてそれがもたらした暴力の酸鼻を目の当りにして大いなる幻滅を抱くようになったことは、よく知られた事実であるが、それは革命を導く理念の否定にまではけっして至らなかった。このアンビヴァレンスこそがサン=シモンの思想を読み解く鍵となる。

フランス革命は絶対王政を打倒して民衆の権力を樹立する政治革命であっただけではない。それはまた社会的諸価値の不可逆な転換でもあったのであり、王権を正当化するカトリック教会の聖職者たち（第一身分）と王権を補佐する貴族たち（第二身分）が体現する伝統的な敬虔や名誉の徳の支配に代わって、「平民」の、すなわち上層ブルジョワジー（第三身分）と無産労働者・農民（第四身分）の求める物質的な快楽と相互利益の道徳的正当性を、それゆえ無為徒食の人から働く人への権力の必然的移行を証明する社会革命であった。18 世紀から 19 世紀にかけて生じたこの社会的価値の転換、わけても「蔑まれるべきもの」から「価値を生み出すもの」への労働観の転換が、市民革命の後に産業革命が続く社会史的な背景となっている。そしてこの巨大な歴史的転換の帰結を〈産業社会(société industriel)〉の到来として予言したのが、まさしくサン=シモンなのである。

その意味ではサン=シモンもまた一人の「革命の子」であったのだが、彼自身がこの自覚を持つようになったのはそれとはやや違った観点からである。確かにフランス革命は、自由で平等な諸個人からなり、彼らの市民としての意志を主権として行使する「共和国」の理想に貫かれていた。その後に続いた革命戦争は、フランスはもとよりその周辺諸国に「国民」意識を覚醒させ、「国民国家」の観念の成立すら促した。しかしフランスにおいてさえ、それが歴史のなかで実在性を獲得するには、まがりなりにも選挙で政府を決定する習慣が定着する第二共和制期（1848-1852 年）と選挙王政とも称された第二帝政期（1852-70 年）まで半世紀近く待たなければならなかった。暴力的な体制転換が繰り返される革命後の混乱の中で、多くの人々はいまだ衣食住にさえ事欠く生活を余儀なくされていたのである。政治革命として始まった近代市民革命は、万人が自由と平等と、何よりも幸福を享受するために必要な物質的諸条件を確立する経済革命をもって完成するのではないか？　サン=シモンの思想は、各種の社会主義思想と並んでこの問いをめぐってくり返された試行の一つとして理解することができるが、その理論的志向性はマルクス=エンゲルスとは明らかに

異なっていた。一言でいえばそれは、階級社会を政治的支配の道具として否定するのではなく、万人が職能を通じて社会の物質的諸条件の維持・拡大に関与する〈産業社会〉へと再編成することであった。

サン=シモンが形而上学的な意味での唯物論者（マテリアリスト）であったかどうかについては材料が乏しいため判断を留保せざるをえないが、道徳的な意味でのマテリアリストであったとはいえるだろう。サン=シモンにとっては自由も平等も幸福も、人間本性についての抽象的規定から導かれる概念ではなく、具体的な社会的現実のなかで生きる人間の存在の状態のことであり、したがって物質(matière)による裏づけがなければ無意味であった。〈産業社会〉こそが、観念としての「国民」にこの裏づけを提供し、共和国を「国民国家」として歴史的実在たらしめたのである。

来たるべき〈産業社会〉の構想にあたり、サン=シモンはしばしば相互に矛盾するフランス政治経済史上の多様な伝統を縦横無尽に動員した——17 世紀のコルベルティズム（重商主義）からは国家主導で〈産業〉の興隆を図るある種の集産主義を、18 世紀のフィジオクラシー（重農主義）からは自然法によって統御されるある種の有機体的社会観を、そしてカトリシスムの伝統からは儀礼に基づくある種の道徳的・霊的社会統合の方策さえも援用した。ときにマルクス=エンゲルスの社会主義の先取りであるとも評価されるサン=シモンの〈産業社会〉論は、それらの伝統のきわめてユニークな融合の上にはじめて成立したのであり、それを無視してはサン=シモンのサン=シモンたるゆえんはなくなってしまうだろう。その思想の独創性はまさしく総合の仕方にあったというべきなのである。

その一方で、サン=シモンの思想は 19 世紀に開花した多くの社会思想の共通の揺籃にもなった。サン=シモンの秘書となったオーギュスタン・ティエリ（Jacques Nicolas Augustin Thierry, 1795-1856）は歴史家ミシュレ(Jules Michelet, 1798-1874)と双璧をなすフランス・ロマン主義の代表的歴史家となり、サン=シモンに直接師事したオーギュスト・コント（Isidore Auguste Marie François Xavier Comte, 1798-1857）は実証主義と社会学の祖となった[3]。J・S・ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）の倫理的功利主義は、サン=シモンとの交流・対話がひ

[3] ティエリとコントは後にサン=シモンと決別したが、かつての師を軽蔑し葬儀にも現れなかったコントとは違って、ティエリは師への敬意を終生忘れずその葬儀にも参列したという。ティエリが歴史家として目覚めたのはシャトーブリアンの『殉教者』を読んだことがきっかけであったと言われるが、サン=シモンと結んだ交誼もなにがしかの感化を与えたと考えられる。代表作に『ノルマン人によるイギリス征服史』（1825 年）、『メロビング王朝史話』（1840 年）、『第三身分の考察』（1853 年）などがある。

とつの機縁となって成立したことが今日では確認されている。そして言うまでもなくマルクス=エンゲルスは、サン=シモンの「ユートピア的社会主義」を超克の対象に設定することによりはじめて「科学的社会主義者」を名乗ることができたのであった。

とりわけ注目すべきは、サン=シモン主義者を自称する人々がナポレオン三世治世下で政府要職につき、師の思想を現実の体制のかたちで実現していったことである。フランスの第二帝政期は、理論と実践の幸福な統一を見た人類史上希有の時代であるとともに、サン=シモンの予言の正しさが証明された時代でもあった。このときに確立した〈産業社会〉こそ、その後に長く続いた第三共和制期（1870-1940 年）において開花する国民国家フランスの礎にほかならないからである。

こうしてサン=シモンの著作のなかに、ホッブズ(Thomas Hobbes, 1588-1679)の『リヴァイアサン』（*Leviathan,* 1651）を評して M・オークショットがいう「傑作の真の性格」を、すなわち「同時代および歴史上の無数の思想潮流を内部に引きずり込み、その求心力によって思想にかたちをあたえ、圧縮してつかのま意義あるものにし、ふたたび未来のなかへと放りだす、諸理念の渦巻きの静止せる中心[4]」という性格を見ることは不可能ではない。サン=シモンという「中心」が目指していたのは、後に「国民国家」と呼ばれるようになったものの礎を築くことであった。本研究はそれを論証する試みである。

２．本研究の構成

本研究は、サン=シモンの思想を歴史的コンテクストに関連づけて考察する前篇と、サン=シモン主義が現実の「国民国家」建設に実践的に適用されていった過程をたどる後篇の二部構成になっている。

第 I 部「サン=シモンの思想とそのコンテクスト」では、まず現代のナショナリズム言説の中に〈国民〉を考える視座の対立があることに着目し、それを（1）〈古代／近代〉、(2)〈自然／人工〉、(3)〈リベラル／シヴィック〉の 3 つに分類する。このうちサン=シモンおよびサン=シモン主義と直接に関わるのは、第 2 の座標軸で強調される産業化による〈国民〉形成という観点であることを確認し、サン=シモンの〈産業社会〉とフランスの集産主

[4] マイケル・オークショット『リヴァイアサン序説』（中金聡訳、法政大学出版局、2007 年）、10 頁。

義の伝統との関連を明らかにする（第１章）。次いで、従来あまり注目されることのなかったサン=シモンの社会契約論批判に着目し、フランス革命が失敗した原因を啓蒙合理主義の利己的な人間観に求め、それを新たな協同社会によって克服することがサン=シモンの思想のモチーフとなっていたことを明らかにする。そこから、マルクス=エンゲルスの「ユートピア的社会主義」というサン=シモン評価を批判的に検討し、むしろ彼が革命後に貧窮した大衆を救済するために、身分制社会を前提としたフランス型集産主義を科学的に構築し直していく過程をたどる（第２章）。最後にサン=シモンの〈産業体制〉論を全体として捉え返す。思想家サン=シモンには、フィジオクラシーの政治経済学の継承者という近代的な一面と「新キリスト教」の主唱者という固陋な一面とが同居するといわれるが、後者は、革命後に登場した保守派の反動的宗教思想を牽制しつつ、革命後の道徳的真空状態を埋める「暫定道徳」として提起されたものと解釈される。〈産業社会〉そのものは、労働および生産を科学的に組織した体系をなし、その担い手である〈産業者〉階級に主権を委ねる統治体制として提示され、サン=シモンはすでにヨーロッパ大の〈産業体制〉すら構想していた。その実現がひとえに労働者大衆の精神的覚醒にかかっていたことを明らかにし、サン=シモンの後期著作を体制転換論として解読する（第３章）。以上の考察から、サン=シモンの〈産業社会〉が近代国民国家の理念に実質を与えるものであり、それをフランスに実現することが弟子のサン=シモン主義者たちに使命として課されたことを指摘して、第Ⅰ部の結論とする（小結）。

第Ⅱ部「第二帝政とサン=シモン主義」では、サン=シモンの没後に始まったサン=シモン主義運動とその政治的・経済的実践について考察する。アンファンタン率いる正統派の精神主義運動が頓挫したのち、サン=シモン主義は殖産興業を主張するミシェル・シュヴァリエやペレール兄弟らの経済派に主導され、やがてナポレオン三世のボナパルティズムの下にフランス第二帝政をサン=シモン主義的〈産業社会〉へと変貌させていくことになった（第４章）。次いで、ナポレオン三世という庇護者を得たサン=シモン主義者たちが、フランス金融界の近代的再編成、全国規模の鉄道網の敷設、首都パリの大改造など、サン=シモンの〈産業社会〉の構想を具体的に実現していく過程を説明する。パリで二度にわたり開催された万国博覧会はそれを象徴する一大ページェントとなり、押し寄せる来場者に来るべきヨーロッパ大の〈産業体制〉を待望させる巨大な啓蒙装置として機能したことを明らかにする（第５章）。サン=シモン主義の実践によってフランスに実現した〈産業社会〉において、物質的にも精神的にも豊かになった人々の心の中に「国民」意識が根付いていく

経緯を、第二帝政期の庶民生活を描いたエミール・ゾラの小説で確認する。この考察から、〈産業化〉を通じて均質で客観的な時間と空間が形成され、その中を運動することにより人々が「国民」と化していった経緯を明らかにする（第６章）。

最後に、サン=シモンの思想とその実践を近代国民国家形成史に決定的な役割を果たしたものと解釈することにより、「国民」の観念が国民という実在を創造するという「想像の共同体」論の観念性を明らかにし、唯物論的ナショナリズムの可能性を指摘して本研究の結論とする（結論）。

３．サン=シモン小伝

本論に先立ち、主人公であるサン=シモンの人となりを簡単に紹介しておこう[5]。

サン=シモンは本名をクロード・アンリ・ド・ルヴロワ・サン=シモン伯爵(Claude-Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon)といい、1760 年 10 月 17 日に通説ではパリで生まれ、同地において 1825 年 5 月 19 日に 65 歳で没した。サン=シモン家はシャルルマーニュ大帝（Charlemagne, 742-814. フランク王在位：768-814, 神聖ローマ皇帝在位：800-814）を租と信じる古い名門貴族の家柄で、本家のほかにラッス、グルメニル、サンドリクール、モンブレリュの四つの分家を有し、われらがサン=シモンはサンドリクール伯爵家の長男として生まれ、弟姉妹が 9 人いた。本家の公爵家には同じサン=シモンの名で知られるルイ(Louis de Rouvroy, duc de Saint-Simon, 1675-1755)がおり、彼の『回想録』(*Mémoires*, 1829)はヴェルサイユ宮殿の内実を暴露した歴史資料としていまなお読み継がれている。

われらがサン=シモンは、旧体制下に生まれ、革命期を生き延び、第一帝政、ブルボン復古王政、ナポレオン百日天下、七月王政と体制が目まぐるしく転換する時代を強かに、時に貧困に喘ぎながら、また自殺を図るほど憂鬱に悩まされながらも生き抜いた。その青年期には不屈の思想家の生涯を予兆する二つの経験がある。一つは 18 世紀貴族的子弟教育である。跡取りのサン=シモンは、父のバルタザール・アンリ（Balthasard-Henri de Saint-Simon, 1721-1783）に家庭教師をつけられて早期英才教育を施された。それが育んだ時代思潮にお

[5] 以下の記述にあたっては、フランク・マニュエル『サン=シモンの新世界（上）』（森博訳、恒星社厚生閣、1975 年）、1-109、161-200、576-613、641-646 頁、また森博「サン=シモンの生涯と著作（全 5 シリーズ）、『サン=シモン著作集（全 5 巻）』（森博監訳、恒星社厚生閣、1987 年）を参照した。

もねることのない独立独歩の精神は、彼を不屈の在野学者にするとともに、コント、リカード（David Ricardo, 1772-1823）、マルクスとエンゲルスのようなイデオロギー的志向を異にする思想家たちに共通の思索の土壌を提供し、後年のデュルケム（Émile Durkheim, 1858-1917）、テンニエス（Ferdinand Tönnies, 1855-1936）、フォン・シュタイン（Lorenz von Stein, 1815-1890）らの社会科学に多大な影響を与えることになった。もう一つはアメリカ独立戦争での従軍経験である。貴族のならいとして 16 歳でフランス王国陸軍少尉に任じられたサン=シモンは、アメリカ独立戦争に身を投じることになる。そこで見聞した職人から農場主までが一介の兵士となるアメリカ軍の有様は、万人が身分によってではなく職能によって社会の維持・発展に寄与する新しい人間的協同のイメージを彼の心に胚胎させた。

だが壮年期のサン=シモンの行動は、一転して首を傾げたくなるほど節操がない。王権的な体制とカトリック教会の権威が灰塵に帰したフランス革命期に、サン=シモンの従兄弟の侯爵はスペインのブルボン宮廷に亡命したが、サン=シモンは領地ペロンヌと貴族称号を自ら返上し、「ボノム(bon home)」すなわち「善き人（田吾作の意）」と改名した。その度を越した革命体制礼賛は、旧領民ですら旧領主の「革命的人柄」を保証するほどであったという。その一方でサン=シモンは、駐英プロシア大使レーデルン（Graf Sigismund Ehrenreich Johann von Redern, 1761-1841）やボエームらと国有地投機の基金を組織してアシニャ紙幣暴落により巨万の富を築き、またパリのパレロワイヤル近傍に宏壮なアパルトマンを手に入れて夜毎のように酒池肉林の宴を催し、「サド侯爵の双璧」の異名をとる。そうかと思えば、反動体制下ではその多彩な人脈によりイギリス宮廷から絶大な信頼を寄せられる民間外交官としても活躍した。この一連の振る舞いを無軌道な日和見主義と見るか、抜け目ない政治的マキアヴェリズムと見るか、はたまた深淵な思想のあらわれと見るかによっても、後世のサン=シモン評価は大きく揺れ動いている。

革命の動乱が終わり、投機から経営の時代がやってくるとサン=シモンの才能は振るわず、レーデルンらとの基金の運用に驚くべき赤字と使途不明金が生まれ、投機事業は清算を余儀なくされた。サン=シモンの膨大な著作や論文は、もはや貴族でも事業家でもなくなって、貧窮のあまり無心に奔走した苦しい時期に書かれている。絶望から自殺を図った後、彼を慕う弟子たちに励まされ、かつて書き散らした論考に手を加えて体系化する意欲がようやく甦った頃、すでに彼の身体は老いと病に蝕まれつつあった。1825 年、多くの弟子たちに見守られつつ、また多くの仕事をやり残したまま彼は旅立った。サン=シモンは自らの

人生を「実験的」と形容したが、その生き方はむしろ古風(Romanesque)という言葉がふさわしいだろう。

第Ⅰ部　　サン=シモンの思想とそのコンテクスト

第１章　ナショナリズム論の現在

はじめに

〈国民（ネーション）〉の観念および政治的イデオロギーとしてのナショナリズムについては、思想的・哲学的立場から多くの先達による記念碑的研究が既にある。本研究はそこに屋上屋を重ねようとするものではない。本章が意図するのは、観念としての〈国民〉が歴史的定在を得て社会的現実となるにいたるプロセスをたどり、「国民国家状況[1]」という意味でのナショナリズムが確立するための一般的条件を析出することである。また、そうすることによって、サン=シモンの思想がなぜこの広義のナショナリズムという文脈において理解されうるのかを明らかにし、本研究の総序を提供することである。

「国民国家状況（ナショナリズム）」の成立過程の研究は、近年では主として社会学的ないし歴史学的な観点から国民国家を現実に産出するメカニズムの解明に焦点を当ててきた。本研究においては、それを政治学的な観点から〈国民化〉の方法の問題として取りあげ直したい。確かに〈国民〉を基盤とする統治のあり方は、「国家の退場[2]」を求める今日のコスモポリタニズムの立場からは克服されるべき課題とみなされがちである。しかし国民国家は、現代でも依然として民主的参加を可能にする最大の政治的単位でありつづけている。少なくともフランス革命に端を発して世界に広がった立憲デモクラシーを実現可能な最も正当な統治形態と考えるとき、国民国家というあり方とその与件である〈国民〉は、近代の最も重要な達成物とみなされねばならないだろう。近代的諸個人は、付与された権利を享受する多数者であるというだけではなく、自分の所属する社会を政治的な単位として意識し、その集合的な構成要素であるという自覚を有していなければならない[3]。大衆はいかにして〈国民〉になるのか。政治学を魅了してやまないのはこの問いである。

現代のナショナリズム研究は、第二次世界大戦中の「自由民主主義対ファシズム／全体

---

[1] ‘-ism’には①主義・信条・思想運動、②組織化されたもの・職業・状況の二つの意味がある。capitalism は「資本主義」とも「資本制」とも訳すことができるし、postmodernism は「ポストモダン状況」という意味に解するほうが適切な場合もある。

[2] スーザン・ストレンジ『国家の退場――グローバル経済の新しい主役たち』（櫻井公人訳、岩波書店、1998 年）、参照。

[3] Cf. David Miller, *National Responsibility and Global Justice* (Oxford University Press, 2007）デイヴィッド・ミラー『国際正義とは何か――グローバル化とネーションとしての責任』（富沢克ほか訳、風行社、2011 年）。

主義」の構図に遡り、つづく冷戦状況の中で西側文明の普遍性を正当化する過程で体制論争の副産物として始まった。その後、1980 年代以降に社会主義体制の政治的・経済的ひずみが明らかになるにしたがって、あらためて近代国家とは何かが問われるようになり、多様なアプローチが混在する現在のナショナリズム研究状況を出現させた[4]。〈国民〉の観念が今日なお依然として論争的でありつづけている背景には、このような戦後世界の錯綜した状況がある。

だが従来のナショナリズム研究の成果を概観してみると、そこには〈国民〉の観念をめぐって３つのトポスの存在が確認できる。第一のトポスは、〈国民〉の起源を前近代にまで遡らせる立場と、近代市民革命に由来するものと主張する立場からなる〈古代／近代〉という対抗軸である。第二のトポスは、人間集団としての〈国民〉は人種や環境によって条件づけられた自然的なものだとする立場と、理念に導かれ制度によって形成される人工的なものだとする立場とが織りなす〈自然／人工〉の対抗軸である。そして第三のトポスは、〈国民〉を民主主義国家の構成員に必要な徳・倫理・文化のような実質的価値の担い手と位置づける立場と、民主主義国家の法的権利の形式的な主体とする立場からなる〈シヴィック／リベラル〉という対抗軸である。この３つのトポスは相互に重なり合っており、〈国民〉を論じる様々な理論家は、そのどれかに明快に割り振られるわけではなく、この３つのトポスを絡め合わせることで自らの理論を展開してきた。そこで以下では、まずいままでのナショナリズム言説から抽出した３つの座標軸について詳論し、本研究の主題であるサン=シモンの思想がどのような意味でナショナリズムという文脈の中に位置づけられるのかを明らかにしよう。

１．第１の座標軸――〈古代／近代〉

ナショナリズム研究は、〈国民〉論がおおむね出揃ってから開始され、約 100 年程度の歴史しか持たない。ナショナリズム研究に先立つ〈国民〉論の最古典ともいうべきは、自然的な母語の共有こそが〈国民〉の核であるとした J・G・フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814）の『ドイツ国民に告ぐ』（*Reden an die deutsche Nation,* 1807-08）と、「国民とは

[4] 大澤真幸・姜尚中編著『ナショナリズム論入門』（有斐閣アルマ、2009 年）を参照。

……日々の人民投票である」と主張したE・ルナン(Joseph Ernest Renan, 1823-92)の『国民とはなにか？』（*Qu'est-ce qu'une nation ?* 1882）の二つである。前者は「自然的ナショナリズム」論の、後者は「理念的ナショナリズム」論の嚆矢と位置づけられており、現代のナショナリズム研究者はおおよそこのどちらかの立場に立脚点を見出している。

そのなかで浮上した第1の座標軸は、特定の国家や文化に帰属し、またその存立に関与しているという自覚を〈国民〉という集団の特徴と捉えるとき、〈国民〉の成立を古代にまで遡って認めるのか、それとも近代市民革命以後のできごとと考えるのかの対立をめぐって定立されている。日本において近年まで nation の訳語が「民族」と「国民」に二分されてきたこともこれと関連するであろう。

〈国民〉を古代起源とする立場に立ち、後年のナショナリズム研究のフィールドを用意した人物として挙げられるのは、アメリカの歴史家・政治学者のH・コーンである。彼は『ナショナリズムの思想』（*The Idea of Nationalism: A Study in Its Origins and Background*, 1944）の中で、ナショナリズムに顕著に見られる排外主義を選民意識のあらわれとみなし、その歴史的起源を古代のアテナイ市民やローマ市民にまで遡って探った。それを〈国民〉を構成する諸個人の権利として整序したものが「西のナショナリズム」となり、集団としての〈国民〉の主権および独立の根拠としたのが「東のナショナリズム」となったとする、いわゆる「コーン・ダイコトミー」はあまりにも有名である[5]。「コーン・ダイコトミー」は、その後のナショナリズム研究において「シヴィック・ナショナリズム／エスニック・ナショナリズム」さらには「善いナショナリズム／悪いナショナリズム」などの二分法の原形を形作った。

一方、〈国民〉近代起源説の立場をとる代表的な論者として、ここではE・ケドゥリーを挙げよう。彼は『ナショナリズム』（*Nationalism*, 1960）において、フランス革命を擁護したカント（Immanuel Kant, 1724-1804）の思想から〈国民〉の歴史を説き起こす。カントが科学体系や神学体系から独立させた近代的道徳体系と自由の思想は、プロテスタント神学者シュライエルマッハー（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768-1834）の言説と類似しており、世界の人種構成の多様性が神の意志であるならば、これを保存するためにそれぞ

---

[5] Cf. Hans Kohn, *The Idea of Nationalism* (New York: Macmillan, 1944). H・コーン「ナショナリズム――近代史における普遍的推進理念としてのナショナリズム――」（A・P・ダントレーブほか編『国家への視座――［叢書］ヒストリー・オブ・アイディアズ』佐々木毅ほか訳、平凡社、1988 年）を参照。

れの人種は国家を持たねばならないという論理的帰結を導いた。それが後にフィヒテを経てシェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854）へ至る民族自決権の思想的系譜を正当化したというのである[6]。

〈国民〉の起源をめぐる〈古代／近代〉の矛盾相克は、コーンとケドゥリーを折衷するI・バーリンのナショナリズム論において鮮明になった。すなわちバーリンは、市民革命を成し遂げ近代国家を樹立したイギリスおよびフランスの近代個人主義の伝統と、その抽象性への反発から誕生したイタリアおよびドイツのロマン主義の古代的要素との対立に、「血腥い」イデオロギーとしてのナショナリズムの起源を見出したのである。

バーリンによれば、ナショナリズムはつねに抑圧された人々の反発と結びついて急進化する。ドイツの場合、画家デューラー（Albrecht Dürer, 1471-1528）や宗教者ルター（Martin Luther, 1483-1546）を輩出した16世紀の文化的豊穣さとは対照的に、17世紀の状況はフランスと比較して著しく見劣りした。「17・8世紀のドイツ人についての明らかな事実は、彼らは幾らか後進的な地域を構成しているということである。……とくに、17世紀末頃、世界の思想や芸術にさえ何らかの重要な仕方で影響を与えた人物を見出すことはきわめてむずかしい[7]」。17世紀ドイツの黄昏の原因は、1618年に始まる30年戦争によってフランスをはじめとする諸外国の軍隊が莫大な数の人口を殺戮し、文化的発展をもたらしただろう才能を血の海の中に押し潰したことにある。その結果ドイツは、絶対王政を文化的中枢として確立したフランスに対して劣等意識を抱かざるをえず、悲哀と屈辱の永続的な感覚を植えつけられ、多くの知的エリートたちが精神世界の広がりと深みの中に旅立っていった。しかしバーリンによれば、それははるかな古代から歴史の中に繰り返し見られることなのである[8]。傷ついた〈国民〉的感受性、恐るべき〈国民〉的屈辱感は、ドイツでは政治的ロマン主義となり、これがナショナリズムの揺籃となった。フィヒテに代表される民族自決権型のナショナリズムも、彼ら新興ドイツ知識階級が自らの出自をフランスの知識人層の出自と対照させ，ある種のルサンチマンを動因としながら、古代に投影された幻想の〈国民〉を追求するかたちで発達する。バーリンによればナショナリズムは、正当な評価を受けられず、社会参加を阻害されてきた層による既得権層に対する反逆の側面が大きいので

---

[6] Cf. Elie Kedourie, *Nationalism,* Fourth and Expanded Edition (Oxford: Blackwell, 1993). E・ケドゥリー『ナショナリズム』（小林正之・栄田卓弘・奥村大作訳、学文社、2000年）。

[7] アイザイア・バーリン『ロマン主義講義』（田中治男訳、岩波書店、2000年）、53頁。

[8] 同書、54-56頁参照。

ある。

劣等感に悩まされた諸国民には、現実のものか想像上のものかはともかく、豊かな歴史上の過去が価値を持つようになる。それが、おそらくはいっそう輝かしい未来を約束するからである。もしそのような過去を引き出してこられない場合には、まさにそのような過去がないという事実が楽観論の根拠となる。今日のわれわれは原始的で貧乏、おまけに野蛮かもしれない。しかしわれわれの後進性そのものが若さとまだ使い尽くされていない生命力の現われなのだ。……このような救世主的テーマをドイツ人が、次いでポーランド人とロシア人、その後の現代には自分達は歴史の偉大なるドラマの中で本来の役割を果たしていない（間もなく果たすが）と感じている多くの国家と国民が、強く打ち出すようになるのである[9]。

バーリンの「曲げられた小枝」（*The Bent Twig: On the Rise of Nationalism,* 1972）は、次のようなナショナリズムへのシニカルな、そして他人事のような視線を凝縮した一文で終わっている。「それは、支配階級にたいする反抗へと駆りたてる。ナショナリズムは、世界の様々な文化の中であまり重要とは認められなかった人々の願望が炎症を起こした状態だからである。ナショナリズムの行き過ぎで引き裂かれた現代社会にあっては、現代ナショナリズムの野蛮で破壊的な側面を強調する必要はあるまい。それでもあるがままのものとして――新たに解放された奴隷たち、「脱植民地人」の側の深くかつ自然の要求にたいする、世界的拡がりをもった反応として認めねばならない[10]」。

しかしナショナリズムの起源をロマン主義における〈古代／近代〉の相克に求めるバーリンの説明は、ロマン主義が政治化した経験を持たないにもかかわらず〈国民〉の概念がナショナリズム・イデオロギーの温床となったイギリスやアメリカの状況にはあてはまらない[11]。この限界は結局、ケドゥリーのいう「カントに由来する民族自決権の系譜学」にま

---

[9] アイザイア・バーリン「曲げられた小枝」（『バーリン選集４――理想の追求』（田中治男ほか訳、岩波書店、1992 年）、299-300 頁。

[10] 同書、318-319 頁。

[11] バーリンのナショナリズム論の要約にあたっては、上森亮「バーリンとナショナリズム」（早稲田大学大学院社会科学研究科編『社学研論集』、2008 年）、川上文雄「バーリン――多元主義における道徳的主体性と多様性」（藤原保信・飯島昇蔵編『西洋政治思想史Ⅱ』、新評社、1995 年）、および山内昌之『民族問題入門』（中央公論社、1996 年）を参照した。

で遡る。フランス革命と革命戦争が立憲デモクラシーと〈国民〉主権という新しい政治への希望を世界に伝播したことに異論はない。しかし、プロテスタンティズムも啓蒙主義思想も経験しなかった東洋、アフリカ、南米においてさえナショナリズムという現象が起こったことは、思想史的考察だけでは説明できない。ケドゥリー自身もその限界を認めて、ナショナリズム研究に社会学的観点が不可欠であると告白している[12]。近年では、後述するスミスの研究史整理の視点から〈国民〉の起源をめぐる〈古代／近代〉の対立を捉え直し、前者の立場を「原初主義」、後者の立場を「近代主義」、あるいは政治的支配のために〈国民〉観念を操作・利用するという意味で「道具主義」と呼称する傾向がみられる。

1980 年代に入ると、この近代主義の中に、空前絶後の人口を擁する政治社会としての〈国民〉は自然に成立するものではなく、何らかの人為的な手段により構築されるものだとするナショナリズム研究者が現れ始めた[13]。その代表格が、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスでケドゥリーの薫陶を受けたＥ・ゲルナーであり、「想像の共同体」論で知られるアメリカのＢ・アンダーソンである。左翼の立場から〈国民〉を近代に固有のものと位置づけつつ黄昏の思想として批判した『ナショナリズムの歴史と現在』（*Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*, 1990）の著者Ｈ・ホブズボームも、これに加えてよいだろう[14]。これらの議論から〈国民〉をめぐる〈自然／人工〉論が確立すると、第１の〈古代／近代〉の座標軸は歴史的な役割を終え、第２の座標軸に解消されていくことになった。

２．第２の座標軸――〈自然／人工〉

第２の座標軸は、〈古代／近代〉の起源を問わず、〈国民〉というアイデンティティは人々が生まれながらに持っている特徴や自然条件、民俗文化に規定されるものなのか、それとも、人種や宗教という自然的な条件を超克するべく人工的に精製され諸個人に植えつけられる集合的表象なのか、という〈自然／人工〉をめぐる論争である。それがトポスして確

---

[12] Cf. Kedourie, *op.cit*., pp. 143-144. ケドゥリー前掲書、143-144 頁参照。
[13] 佐藤成基「ナショナリズムの理論史」、大澤ほか前掲書、39 頁参照。
[14] Ｅ・J・ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』（浜林正夫ほか訳、大月書店、2001 年）を参照。

立する以前にも、例えばナチス・ドイツの「血と大地」のイデオロギーや軍部独裁期の日本における農本主義イデオロギーに前者の視点が見出され[15]、また 1789 年のフランス革命によって発足した共和国から 1945 年のインドネシア独立までが後者の視点で理解されうることは、すでに指摘されていた[16]。第２の対立軸の成立は、第１の対立軸におけるフィヒテの「自然的ナショナリズム」論とルナンの「理念的ナショナリズム」論とのやや非対称な対立の修正版ともいうべき色合いがあり、近代の理念として掲げられた後者の〈国民〉概念を構築すべき目標として捉え直したものである。〈自然／人工〉の座標軸は、近代論者が不問にしていた〈国民〉生成の方法の問題を「人工」の概念によって明示化したことで成立したともいえるだろう。

人工論の代表的な論者として、ここではゲルナーとアンダーソンを取りあげよう。まずゲルナーは『民族とナショナリズム』（*Nations and Nationalism,* 1983）において、自然論の嚆矢と目されるフィヒテが人種的相違をベースに公教育によって〈国民〉を作り上げようとしたことに注目する。公教育は素材となる人間の相違を問題とせずに識字能力のような教育効果の画一性を重視する。そのような教育が求められる社会的背景には、「産業化の要請」があった。ゲルナーはヴェバー（Max Weber, 1864-1920）に依拠しながら、人類史を農耕社会期と産業社会期に区分し、エリート集団の識字共同体が作り上げた高レベルの文化は、「産業化の要請」により皆教育制度の整備を通じて人々に提供されたと主張する。これが〈国民〉の核となったのである[17]。またアンダーソンは『想像の共同体』（*Imagined Communities*, 1983）において、産業社会における大衆メディアの重要性に着目し、「出版資本主義」ムーブメントが〈国民〉の醸成に果たす役割を指摘した[18]。また後年の『比較の亡霊』（*The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia, and the World*, 1998）では、「国民的規模の（ナショナル）」出来事と国際的な出来事を併記する日刊新聞のような活字メディアの「系列性」機能に着目し、これが人々に「ナショナル」のものを意識させるのに役立ったことを指摘した[19]。つまりいずれの場合にも、〈国民〉とは人工物であり、旧来のローカルなア

---

[15] Cf. Kedourie, *op. cit.*, p. 143. ケドゥリー前掲書、143-144 頁参照。
[16] アントニー・D・スミス『ネーションとエスニシティ』（巣山靖司ほか訳、名古屋大学出版会、1999 年）、9 頁参照。
[17] Cf. Ernest Gellner, *Nation and Nationalism* (New York: Cornell University Press, 2008; originally published, 1983). アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』（加藤節ほか訳、岩波書店、2000 年）。
[18] Cf. Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Revised Edition (London and New York: Verso, 2006). ベネディクト・アンダーソン『（増補）想像の共同体』（白石さや・白石隆訳、NTT 出版、1997 年）。
[19] ベネディクト・アンダーソン『比較の亡霊』（糟谷啓介ほか訳、作品社、2005 年）、45-76 頁参照。

イデンティティを忘却させ、国民国家の成員に必要とされる集合的な自己表象として人々の「心の中」に植えつけられるものだとされるのである。

一方、自然論の立場に立つ論者も、単純に〈国民〉を人間本性に根づいたものと考えるのではない。むしろ、〈国民〉の人工性をみとめながら、それが成立するためにも母胎となる前近代起源の基盤やなんらかの「自然的」要素が最小の核とならねばならないと主張するのである。その代表として挙げられるのが、ゲルナーの弟子に当たる歴史人類学者 A・D・スミスである。すでに歴史家 W・モッセは『大衆の国民化』（*The Nationalization of the Masses: Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic wars through the third Reich,* 1975）において、近代になって一部のエリートがエスニックなものを素材として人々を神話的価値観の中に閉じ込めたと指摘していた[20]。スミスは『ネーションのエスニックな起源』（*The Ethnic Origins of Nations*, 1986）でこの主張をさらに発展させ、神話や血統といった様々な歴史の産物が国民国家のシンボルに採用されることで、はじめて個人の生が当該国家の歴史の中に組み込まれると主張し、「ナショナルなもののエスニックな起源」の重要性を指摘した[21]。ゲルナーの人工論に対してスミスが〈国民〉の準自然性を強調することにより、〈自然／人工〉の座標軸は成立したといっていいだろう。

この複雑な対立の構図をさらに細かく見てみよう。フィヒテは『ドイツ国民に告ぐ』のなかで、ドイツ人が「民族(Volk)」であるということの意味を次のように説明している。

> 創造的に新しいものを生み出しながら自ら生きている人、あるいは、あたらしいものの創造が、不可能でも少なくとも取るに足らないものはきっぱりと廃棄し、始原的な生命の流れがどこかで自分を捉えているのではないかと注意を怠らない人、あるいはまた、そこまでは至らないにしても、少なくとも自由の存在に気づき、自由を憎んだり恐れるのではなく自由を愛する人。――このような人々はすべて始原的な人間であり、もし彼らを一つの民族としてみるならば、一つの根源的な民族、民族そのものである民族、すなわちドイツ人なのです[22]。

---

[20] G・L・モッセ『大衆の国民化』（佐藤卓巳ほか訳、柏書房、1994 年）を参照。
[21] スミス前掲書を参照。
[22] J・G・フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』（細見和之・上野成利訳、鵜飼哲ほか編訳『国民とは何か』（インスクリプト、1997 年）、119 頁。引用にあたっては、岩波文庫版のフィヒテ『（改訂）ドイツ国民に告ぐ』（大津康訳、岩波書店、1940 年）を参考にした。

ドイツ人は偉大な文化的資質を有するがゆえに偉大な国家と文化を創設することができ、その国家は帝国となって人々を吸収し、様々な異なる人種を巻き込んで同化させ、ドイツ人に変えていくことができるという。この主張の奇妙な点は、なぜそれが「ドイツ人」であるのか、という点である。だからフィヒテも「ドイツ人」を定義して次のように主張しなければならなかった。

> ドイツ人とはまず第一に、ゲルマン人全体のなかの一種族です。ゲルマン人については、次のように規定しておけばここでは十分でしょう。すなわち、ゲルマン人とは、古代ヨーロッパで確立された社会秩序と古代アジアで保持されていた真の宗教を一つにまとめ、それによって、没落していった古代とは対照的に、自分自身に即して自分自身のうちから、新しい時代を生み出していった人々である、と。続いてそのなかからドイツ人を取り出して、彼らとともに成立した他のゲルマン系の種族と対照させてみるだけで、ドイツ人を特徴づけるのには十分です[23]。

種族の文化的功績を寿ぎながら、その種族の優秀性や種差性が何によって根拠付けられるのかがまったく示されないこの雑駁な定義に、フィヒテの〈国民〉論の危うさがある。人間集団の分化と区別の基準が完全に恣意的かつ偶然的なのである。フィヒテがこのような演説を行った背景には、ナポレオン一世（Napoléon Bonaparte, 1769-1821. Napoléon Ier, 在位 1804-14, 15）を戴くフランスによりドイツが蹂躙された真因は、当時のドイツ支配層たる教養市民の外国かぶれにあるという診断があった。ドイツ人の現状と新しいドイツ文化の確立との間は、〈国民〉皆教育によって架橋されねばならないのである。フィヒテによれば、国語教育による内面形成をつうじて誰でもドイツ人になれるのであり、他の〈国民〉であってもドイツの同胞たりうる。普遍的で世界市民的な自由の精神こそが新しいドイツ〈国民〉の中核となり、公教育の結果として人種的相違は超克できるとさえいうのである。

ゲルナーはフィヒテの公教育論から〈国民〉成立過程の人為的要素を剔出し、それを近代産業社会の課題として強調する。ゲルナーによれば、われわれの暮らす近代社会は「巨大であり、社会が慣れ親しんできた（あるいは慣習としたいと熱烈に思っているような）生活水準を維持するためには、信じがたいほど複雑で、全面的な分業と共同とに依拠しな

[23] フィヒテ前掲書、76-77 頁。

ければならない[24]」。農耕社会と産業社会の相違はまさしくそこにある。農耕社会においては人間の交流も基本的に限定され、知識階級の文化と民衆の文化はそれぞれに内閉的である。知識階級の人口は農耕人口に対して圧倒的に少ないため、文化的分断が先鋭化され、階級を超えた移動が妨げられることはかえって体制の安定性を高めるがゆえに知識階級にとって明らかに都合が良い[25]。しかし産業社会になると、すべてが一変する。識字能力が一般的に要求され、世襲職業が一掃され、労働と居住の流動性が高まり、秩序はゆらぐ。そのために、近代においては体制の安定化にいっそうの平等主義が必要になる。こうして「文化と政治体との関係は根本的に変化する。ある高文化が社会全体に広まり、社会を定義づけ、政治体によって支えられなければならなくなる。それこそがナショナリズムの秘密なのだ[26]」。

公教育はそのようなシステムの最重要部門である。ゲルナーもいうように、「産業社会は、たいていの基準から見て、最高度に専門化された社会であろう。しかし、その教育制度は、かつて存在した中でも、明らかに最も専門家の度合が少なく、もっとも普遍的に標準化されている。同一の種類の訓練や教育が、すべてのまたはほとんどの子供や青年に、驚くほど遅い年齢に達するまで施される[27]」。なぜなら「近代社会は、新人全員に対してかなり周到な長期間の訓練を施し、一定の共有された資質、すなわち読み書き能力、計算能力、基礎的な労働習慣、社会的な技能、基礎的な技術的、社会的技能の熟知といった資質を強く求める[28]」からであり、「人口の大多数の人々にとって、労働生活に付随する特殊技能は、仕事を通じて、またはあまり長引かない補助的訓練の一部として、基礎的な訓練の上に追加されるのである。ここに想定されているのは、全住民に共通の全般的な訓練を終えたものは誰でも、大した困難もなく、たいていのほかの仕事のために再訓練されうるということである」。そうした軍隊組織や官僚制度にも似た新人訓練の一元性はなぜ必要となるのだろうか。

……この逃れがたい規範を生むのは、流動性と再訓練とばかりではない。それはたいていの職業活動の実質でもあるのである。産業社会においては、労働は対象を動かすこと

---

[24] Gellner, *op.cit.*, p. 5. ゲルナー前掲書、9 頁。
[25] *Ibid.*, pp. 9-18. 同書、16-31 頁。
[26] *Ibid.*, p. 18. 同書、31 頁。
[27] *Ibid.*, pp. 26-27. 同書、46 頁。
[28] *Ibid.*, p. 27. 同書、47 頁。

ではなくなる。労働の範例はもはや耕作、収穫、脱穀ではない。労働は通例、もはや物事ではなく意味を操作することになる。労働は概して他者とのコミュニケーションの交換、あるいは機会の巧みな操縦を伴うことになる。自然界の採炭切羽に立つ人々、つまり自然物に直接身体的な力を加える人々の比率は徐々に減少しつつある。「人と一緒」の労働を実際に伴わない仕事は、ボタン、スイッチ、レバーの操作を伴うことが多い。そうした操作は理解される必要があるため、参加者の全員がわかる標準的な慣用句によって説明できるようになっているのである[29]。

産業化社会において言語は能率的なコミュニケーションの前提であり、詩情を解するかどうかなどもはや教育の成果としては問われない。同時に、このような普遍的かつ抽象的な教育プログラムとその教員、あるいは初等教育・中等教育・高等教育のシステマティックなヒエラルキーも、あまりに巨大であるがゆえに小共同体では調達できない。ゲルナーによれば、識字能力に象徴される文化は、産業社会を再生産するための空気のような活力源、メディアと化しており、この「最重要の産業、すなわち生育可能で有用な人間の製造業における品質管理[30]」を国家が独占する。ここに、なぜ政治と文化が絶えざる結合を求めてナショナリズムを醸成するのかが明らかになる。国家が教育組織を独占して人々を画一的に育てるからにほかならないというのである[31]。

かくしてゲルナーは、「ナショナリズムとは、第一義的には政治的な単位と民族的な単位が一致しなければならないと主張する政治原理である[32]」と主張する。この「民族的な」の語感は誤解を招きやすい。フィヒテがゲルマン民族の文化的功績を前提に「新ドイツ人」によって作りだされるべき「新しいリベラリズムを基調とする文化」を夢想したように、ゲルナーの「民族」もすでに〈国民〉教育制度を通じて共同体から切り離され刷新された「新しい民族」を、すなわち「国民」へと再構成された人々を指している。ここに人工論の基本的立場が確立したといえるだろう。つまり近代国家が産業化の要請に応じて教育により〈国民〉を作るということである。

一方、アンダーソンが問うのは、なぜナショナリズムが人々に強烈な国家崇拝や国家の

---

[29] *Ibid.*, p. 32. 同書、55 頁。
[30] *Ibid.*, p. 37. 同書、64 頁。
[31] Cf. *ibid.*, pp. 34-37. 同書、59-65 頁参照。
[32] *Ibid.*, p.1. 同書、1 頁。

ために死ぬことも厭わない熱情を生むのか、という一見ゲルナーとはなんの接点もない問題である。しかし、その答えもやはり〈国民〉を人工物と考えることによって与えられるのである。

アンダーソンはナショナリズムには三つのパラドクスがあるという。すなわち、①歴史家の目には近代的現象であるのにナショナリストにはアンティークに見えること、②形式的普遍性があるにもかかわらず土着性があること、③政治的影響力の大きさと対照的に哲学的には貧困であり支離滅裂であること、である。

> こういう問題が起るのは、われわれが、無意識のうちに、大文字のNで始まるナショナリズムの存在を――ちょうどわれわれが大文字のAで始まるエイジ〔時代〕の存在を実体化するように――実体化して、その上で「それ」をイデオロギーのひとつとして分類しようとするからである（だれでも、いま何歳、という意味では歳をもっている。しかし、大文字のAで始まるエイジは単なる概念的な表現にすぎない）。つまり、ネーションとナショナリズムは、「自由主義」や「ファシズム」の同類として扱うよりも、「親族」や「宗教」の同類と扱ったほうが話は簡単なのだ[33]。

アンダーソンによれば、〈国民〉と信者は想像力の効果であるという点で同一のカテゴリーに属している。〈国民〉がお互いの存在すら知らないにもかかわらず共同生活を営むことができるのは、信者の共同の聖餐のイメージと同じものがそこに作用しているからなのだ。「国民は主権的なものとして想像される。なぜなら、この国民の概念は、啓蒙主義と革命と神授のヒエラルキー的王朝秩序の正統性を破壊した時代に生まれたからである[34]」。アメリカ合衆国の「忠誠の誓い」の文言――「わたしは、アメリカ合衆国の国旗およびそれが代表する共和国、神の下、一つの、不可分の、そしてすべてのために自由と正義をもつ国民に忠誠を誓う」――を例にとり、アンダーソンは次のように説明する。

> それは普遍宗教のいかに篤信な信者といえども、そうした宗教が現に多元的に並存しており、それぞれの信仰の存在論的主張と、その領域的広がりとのあいだに乖離があるという現実に直面せざるをえない時代であり、人類史のそういう段階に成熟をみた国民は、

---

[33] Anderson, *op.cit.,* p. 5. アンダーソン前掲書、23-24 頁

[34] *Ibid.*, p. 7. 同書、25 頁。

自由であることを、そしてかりに「神の下に」であれば、神の下での直接的な自由を夢見る[35]。

今日どこの国にも必ず存在する「無名戦士の墓と碑」が故意に空っぽであることは、それが宗教的想像力を喚起されてはじめて満たされることを意味している。つまりそれは、人間の死の意味づけは近代においては国家が受け持っていることを表すのだ[36]。こうして「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である。――そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なものとして想像される[37]」というアンダーソンの有名なテーゼが導かれる。

さらにアンダーソンは、この「想像の共同体」の成員が等しく同じ成員意識で結ばれるための近代的な文化装置として、科学的な尺度に基づいた時間と空間を挙げる。宗教性や権威性を削ぎ落とされた均質な時空間の意識が人々の中に浸透するにしたがって、ローカルで多様な時間と空間、およびそれによって支えられたアイデンティティは後景にしりぞき、〈国民〉という意識が共有されていく。均質かつ透明な脱宗教時代の空間が宗教的空間を代替し、その空間に人々の意識が移行することが、ナショナリズム発生の条件であるというのである。その具体的手段が、新聞に象徴される活字メディアであり、「出版資本主義」を通じて流布する「国民文学」であった[38]。

〈国民〉および国民国家の疑似宗教性については、アンダーソンに先立ちモッセも論じている。それによれば、ナチス・ドイツは「自由」や「平等」の観念のような理性的シンボルの恣意的な操作を通じて人々を支配したというよりは、むしろヒトラー（Adolf Hitler, 1889-1945）の美術における懐古趣味に象徴されるように、人々の生活のなかに生き続ける神話的シンボルを徹底的に政治に活用することで大衆を〈国民〉に変えたのである[39]。

自然論に立つスミスの批判は、人工論のこの点に向けられている。

このことは、すでに私たちがみてきたように、近代のナショナリズムを理解するにあた

---

[35] *Ibid.*, p. 7. 同書、25-26 頁。
[36] Cf. *ibid.*, pp. 9-12. 同書、32-35 頁参照。
[37] *Ibid.*, pp. 5-6. 同書、24 頁。
[38] Cf. *ibid.*, pp. 22-36. 同書、47-64 頁。
[39] モッセ前掲書、13-30、191-217 頁参照。モッセによれば、このナショナリズムは産業化がもたらした能率社会の過酷な現実から逃避するための「世俗宗教」として機能した。

っては、非常に長い時間に基礎づけられた歴史的な土台を分析することが大切である、ということを意味する。つまり、ナショナリズムがかかえている主題や形態が、いかに古い時代から形成されてきたのか、またナショナリズムとそれ以前のエスニックな紐帯や感情との間の結びつきは、どれほどの前に成立したのか、といった点を見なければならない[40]。

スミスによれば、アンダーソンらのいう人工の〈国民〉は、宗教的・民族的基盤の存在を前提としてはじめて成り立つのである。それをスミスは「エトニ」と名づけている。「エトニとは、共通の祖先・歴史・文化をもち、ある特定の領域との結びつきをもち、内部での連帯感をもつ、名前をもった人間集団である[41]」。「エトニ」という最小の実体的基盤なしには、権力と制度を有するにまで高められた〈国民〉共同体の形成は、不可能ではないがむずかしいとスミスは主張するのである[42]。だが〈国民〉の起源を前近代の実体的基盤に求めるスミスにしても、「エトニ」が近代を境に決定的に〈国民〉へと形を変えたことは否定しておらず、〈古代／近代〉の論争を蒸し返そうというのではない。ナショナリズムが近代イデオロギーであるように、その基盤となる〈国民〉の概念が政治的に重要な意味を持つようになるのは、やはり近代という時代においてなのである。

３．第３の座標軸：〈シヴィック／リベラル〉

第３の座標軸は、〈国民〉の存在意義をめぐる〈シヴィック／リベラル〉の対立であり、「国民国家状況」が所与の事実となった現代において「ナショナルなもの」の意味をめぐって登場した。この対立の基軸は、〈国民〉を民主政国家に限定し、〈国民〉が徳、倫理、文化といった包括的で共同的な生活様式の実質的価値を担うことを重要視する立場と、〈国民〉は国家の法的な条件に従属することにより、それが保障する権利の主体であるとする立場との間に設定される。さらにそれと直交するようにして、国民国家を単位とする個別

---

40 スミス前掲書、16 頁。
41 同書、39 頁。
42 スミスはその失敗例としてフランス第一共和政期におけるジャコバン政権を、成功例としてインドネシア独立を挙げている。

的な文化を重要視するパティキュラリズムの立場と、国境を越えた市民の穏かな連帯を基調とするコスモポリタンな文化を重要視する立場との対立がある。

フィヒテやルナンのナショナリズム論は、〈国民〉たることには単に国家への帰属にとどまらないもの、例えば自らの属する政治的秩序への奉仕、それが体現する諸価値への忠誠、あるいは国家防衛への義務が伴うと考えるもので、これが「シヴィック・ナショナリズム」の原型となった。さらにそれは、フランス革命とその後の革命戦争の記憶に結びついて、しばしばナショナリズムを好戦的な愛国主義イデオロギーとみなす風潮を醸成してきた。しかし現代の「シヴィック・ナショナリズム」論は、教養のある豊かで秩序を尊ぶ心をもった市民に政治を委ね、国家の役割を最小限に止めようとする姿勢が際立っている。その代表がM・イグナティエフである。イグナティエフは、ナショナリズムを正当な評価を受けられず社会参加を阻害されてきた階層による既得権層への反逆とみなすバーリンの血腥い「エスニック・ナショナリズム」とは異なる、より洗練された「シヴィック・ナショナリズム」がありうるという。

> 形態のいかんを問わず、すべてのナショナリズムは本来、「人民主権」である。ネーションとは、そもそも「人民」をも意味する言葉であるのだから。しかしながら、ナショナリズムの運動が必ずしも「民主社会」を生むというわけではない。ナショナリズムによっては、住民すべてが社会の成員として認められるとは限らないからである。／そうしたなかで、市民（シヴィック）ナショナリズムだけは、人種、肌の色、信条、性別、言語、民族性にかかわらず、その国の政治理念を支持するものはすべて社会の成員である、と定義する。なぜ「市民」ナショナリズムなのかといえば、平等な権利を有する市民が政治上の一連の価値や手続きを共有し、その一点において社会への忠誠を誓い、結ばれているからであり、このような共同体を「国（ネーション）」とみなすからである。すべての住民に主権があるとする以上、市民ナショナリズムは「民主社会」でしかありえない[43]。

イグナティエフはこの実例として、フランス語系住民、英語系住民、アメリカ先住民族の三種類の人々が一つの〈国民〉を形成している現代カナダや、「４つの民族」（アイルランド、スコットランド、ウェールズ、イングランド）から成る国民国家であった18世紀半

---

[43] マイケル・イグナティエフ『民族はなぜ殺しあうのか』（幸田敦子訳、河出書房新社、1996年）、13頁。

ばのイギリスを挙げ、特に後者では、各民族が立憲君主制の社会制度への敬意と信頼を共有することで「市民」すなわち〈国民〉として結束し、それが 18 世紀末のアメリカとフランスでの共和国建国を期に世界へ広まったと指摘する。

だが「シヴィック・ナショナリズム」派は、〈国民〉を単純に様々な民族集団を下部構造とした一種の上部構造として想定するのではない。市民的（シヴィック）な諸価値は西欧の文化と社会によって規定された具体的内容を有しており、市民の連帯を可能にするその実質的価値は最も神聖なものとみなされる。現代の穏和な「シヴィック・ナショナリズム」ですらが、市民的価値への挑戦に対しては武力で対抗することも厭わないのはそのためである。例えばイグナティエフは、多民族化がすすんでいる先進諸国の大都市も東欧同様の民族抗争の危険性を孕んでおり、その秩序維持は国の法治力という一点にかかっていると主張する。

> この意味で、わたしのようなコスモポリタンもまた「国」を超えてはいない。ポストナショナルな世界主義の精神は、結局のところ、市民に安寧秩序を保障する国家なしには存立しえない。この意味においてのみ、わたしは市民ナショナリストである。国家の必要を信じる。コスモポリタンとして暮らすためにも誰もが必要とする安全と権利、それを与えてくれる国の力を守るため、市民の義務を果たすべきであると思う。自分の国を打ち立てようと獰猛なまでに闘っている民に対し、世界主義者はあきれはて、侮蔑の目を向けるけれども、見当違いもはなはだしい、とこれだけははっきりいおう。彼ら多くの民族は、われわれコスモポリタンが長いこと空気のように享受してきた権利を求めて闘っているだけなのだ[44]。

一方の「リベラル・ナショナリズム」論の特徴は、諸個人の自由を社会のレベルで制度的に保護・育成しようとするリベラリズムの基本原則に基づいて〈国民〉を構想する点にある。古典的リベラリズムの自由概念には〈国民〉の含意が希薄であったため、「リベラル・ナショナリズム」は現代的リベラリズムの「欠乏からの自由」の観念に依拠しながら、一方で教育・医療サーヴィス・社会保障が「ナショナル」レベルで画一的に提供される点にナショナリズムの「リベラル」な可能性を見つつ、他方でこの画一性が一つの〈国民的〉文化という新次元を確立することから、このような新文化との集合的な自己同一化を重要

[44] 同書、22-23 頁。イグナティエフの思想については、イグナティエフ『ライツ・レヴォリューション――権利社会をどう生きるか』（金田耕一訳、風行社、2008 年）を参照。

視する。近年の「リベラル・ナショナリスト」に挙げられるのは、Y・タミールとD・ミラーである。

タミールは「リベラル・ナショナリズム」をナショナリズム言説のリベラルな言語への「翻訳」であると定義し[45]、その特徴を次のように説明する。

> リベラル・ナショナリズムの主な特徴は、ナショナルな理想が比較される際に、必然的に考慮される他の人間的な価値への配慮を欠落させることなくその理想を育成することにある。このような仮定の行き着く先は、正当なナショナルな目標とそれを追求するために用いられる手段とを再定義することにある。したがって、リベラル・ナショナリズムは、文化の独自性を普遍的な人権とともに称揚すると同時に、社会や文化に個人が根ざしていることや個人の自立を称揚する。この意味において、リベラル・ナショナリズムは、個人のアイデンティティを国民の成員資格によって基礎づけられるものとしており、成員の個別的な意思が一般意思に没入したときにだけ「完全な自由」が達成されると仮定する有機体的なナショナリズム解釈とは大きく異なっている[46]。

この意味での「リベラル・ナショナリズム」においては、「リベラリズムが個人の自由と私的な自律とを尊重する理論であるのと同じく、ナショナリズムはナショナルな文化的成員資格と歴史的連続性とを尊重する理論であり、個人の現在の生活および未来の発展を他者と共有可能な経験として認めることの重要性に関する理論である[47]」。そこから彼女は国民国家内部の複数民族主義を前提に連邦や地域主義へと枠組みを広げ、国際社会における多極主義こそがナショナリズムの暗黙の前提であると主張する。

またミラーは、〈国民〉そのものをメディアを媒介して想像されたものだとするアンダーソンの前提を共有しつつも、そうして誕生した〈国民〉を維持する国家の役割を現代的リベラリズムの立場から擁護することに傾注する。ミラーによれば、「「ナショナリティの原理」こそ、私たちが何らかの〈ナショナル〉な問題に個人あるいは市民として、実際上の対応を迫られたときに理性的な指針を与えてくれるものである[48]」。

---

[45] Yael Tamir, *Liberal Nationalism* (New Jersey and Chichester: Princeton University Press, 1993), p.14. ヤエル・タミール『リベラルなナショナリズム』（押村高ほか訳、夏目書房、2006 年）、71 頁。
[46] *Ibid.*, p. 79. 同書、191 頁。
[47] *Ibid.*, p. 79. 同書、191-192 頁。
[48] David Miller, *On Nationality* (Oxford, Clarendon Press, 1995), p. 2. デイヴィッド・ミラー『ナショナ

「ナショナリティの原理」の基底にあるいは次のような事実である。「たいていの歴史研究は、次のことを認めている。すなわち、ナショナル・アイデンティティの役割は時とともに変化すること、そして最初にナショナルな意識を生み出した要求やニーズは、やがて別の要求やニーズに取って代わられるが、アイデンティティそのものには根本的な断絶はみられないということである。私が強調したいのは、「ナショナリティ」の持つ開放性であり、様々な政治構想を実現するに際してナショナル・アイデンティティをどこまで使いこなせるのかということである[49]」。ミラーによれば、国民国家ないし〈国民〉は義務の共同体にして一つの公共文化を有するものであり、普遍的世界と個別的世界を仲介するアリーナである。個人はまったく白紙の状態から選択や判断を行うのではなく、ある程度の年齢まで所与の環境／文化のなかで意識を育み、社会生活を営む過程で自由を獲得していくのであって、最も個人的な自由ですら、歴史的に形成された社会の「公共文化」を身につけること、すなわち「ナショナリティ」によりはじめて可能になるのである[50]。さらにミラーは、〈国民〉をお互いの社会生活を成り立たせる「公共文化」に媒介された相互扶助の集団としてとらえる。「ナショナリティ」はそのような基底倫理の核となるのであり、「兄弟は助け合うべきだ」という個別主義倫理と「貧しい者には手を差し伸べるべきだ」という普遍主義倫理の中間に位置して、両者を媒介する。倫理的普遍主義が時に非現実的であり、倫理的個別主義が社会性をあまりに狭小に捉えているのに対して、「公共文化」に裏打ちされた〈国民〉は最も妥当な相互扶助の範囲となるというのである[51]。

ミラーによれば、「ナショナリティ」を「エスニシティ」の差異と同一化の問題と考えてしまうと、義務や倫理の問題を民族的既得権の保護のような観点から理解する誤りに陥りやすくなる。多文化主義はその典型であり、個人がそれぞれの文化的アイデンティティに沈潜・逼塞することにより、かえって社会的分断を招きかねない。「ナショナル」な文化は一定のエスニックな起源を有しつつも、政教分離、国家による暴力の独占、シティズンシップといった近代的機構を吸収することにより次第に抽象化され、もはや民族的な文化とイコールではない[52]。「わたしたちの国民意識についての観念には、たとえそれが近代をさかのぼるはるか昔に生じた人類の部族への分裂についての観念に根を持っているにしても、

リティについて』（富沢克ほか編訳、風行社、2007 年）、5 頁。

[49] *Ibid.*, p. 4. 同書、9 頁。

[50] Cf. *ibid.*, pp. 17-47. 同書、32-90 頁参照。

[51] Cf. *ibid.*, pp. 49-80. 同書、92-144 頁参照。

[52] Cf. *ibid.*, pp. 119-154. 同書、212-274 頁参照。

たしかにそこにはすぐれて近代的な要素が含まれている。ナショナリティは、流動的で――それゆえ部族や村落がもはや共同体の主要な形態として役立ちえない――、平等主義的な――それゆえ人々はもはや領主と領民といった垂直的絆によっては結びつかない――社会にふさわしい連帯の形であるといえよう[53]」。

こうしてミラーは、「ナショナリティ」こそが個人と集団がより善く生きるための「共通文化」へいたる手がかりを提供し、民主的なシティズンシップの基盤になるだけではなく、現代の福祉国家を成立させる基底倫理でもあると主張する。「福祉国家――そして実際のところ、マイノリティの権利を守る計画――はこれまでも、つねにナショナルな構想であったのであり、そうした構想は共同体構成員が互いに扶助しあい、平等な尊敬を相互に保障しあう基礎の上に正当化されてきたのである[54]」。エスニシティを超えた共通の「公共文化」のさらなる抽象化を奨励することにより、ナショナリズムを国家主義の軛から解放してリベラリズムの手に戻させること、これがミラーのいう「リベラル・ナショナリズム」の構想であるといえよう[55]。

ナショナリズムはときに民主制にも平和にも挑戦するイデオロギーと考えられがちであるが、〈シヴィック／リベラル〉の対抗軸は、ナショナリズムをむしろこの二つの価値ときわめて親和的なイデオロギーとして正当化する。しかしそれが近代市民革命以後の民主主義国家に限定した議論となることは否定できない。また〈シヴィック／リベラル〉の対立そのものが、論者のイデオロギー的スタンスに対応した民主主義国家の理解の相違に由来している可能性もある（好戦的にも平和志向にもなるナショナル・デモクラシーの本質的なアンビヴァレンスを単純化してしまう傾向は、「リベラルなタカ派（ホーク）」を自称するイグナティエフの議論に特に顕著にあらわれている）。ナショナリズムが本質的に「シヴィック」な価値と結びつくのか、それとも「リベラル」な価値と結びつくのかは、依然としてきわめて論争的なのである。そしてそれは結局、〈シヴィック／リベラル〉の対立が過熱する影で、〈国民〉とは何かという問題そのものが置き去りにされてしまったことに起因していると考えられる。

---

[53] *Ibid.*, p. 184. 同書、328 頁。
[54] *Ibid.*, p. 187. 同書、332 頁。
[55] 小田川大典ほか編著『国際政治哲学』（ナカニシヤ出版、2011 年）、76-83 頁。および藤原保信「デイヴィッド・ミラー『市場・国家・共同体』――市場社会主義の理論的基礎」（『藤原保信著作集（第 10 巻）』、新評論、2005 年）、参照。

４．国民化と産業化

ナショナリズム研究の３つのトポスのうち、〈国民〉の問題性を理論的に最も深く掘り下げ、今日なおくりかえし言及され引証される価値を有しているのは、第２の〈自然／人工〉を対立軸とする議論であり、特に、〈国民〉を人間本性に根ざした自然的与件ではなく、近代国家の創設という課題に応えて作り出されたものだとする〈国民〉人工論である。人間のあいだに集合的差異を作り出す性別や人種のような「自然」の壁はたしかに実在するが、それは〈国民〉を規定するものとしてはもはや機能しない。〈国民〉とは、そのような自然的差異を法の下に人為的に無化され、平等に権利を保障された人間のことであり、この保障を履行する責務を負う国家が「国民国家」と呼ばれるのだからである。さらに〈国民〉人工論は、第１の座標軸から起源としての近代という視点を継承するだけでなく、そこに規模という新たな次元を加えている。たとえ古代や中世に〈国民〉が存在したとしても、それと近代の〈国民〉とで異なるのは巨大で同質的な人口の問題である。空前絶後の人口を抱える政治社会の〈国民〉が、法体系の下で秩序を維持したり文化的価値を共有したりすることができるためには、その前提条件として、少なくとも一定水準以上の生活を享受できるという状態が確立していなければならないだろう。それには何が必要であったのか？　この問題に〈国民〉人工論だけが一つの説得力ある解答を提供している。すなわちモッセ、ゲルナー、アンダーソンらが指摘するように、〈産業化〉こそが巨大な人口を擁する近代社会を「国民国家」たらしめる歴史的前提要件なのである。

〈国民〉近代起源説の嚆矢となったケドゥリーは、民族自決から帝国主義的夢想までを包含するナショナリズムをイデオロギーとしては空疎であるとし、（モリエール（Molière, 1622-73）『町人貴族』（*Le Bourgeois Gentilhomme,* 1670）に出てくる無知と自惚れの権化の名にちなんで）「ジュルダン氏症候群」の烙印を押しながら、その生成の原因を解き明かすには社会学的な視点が必要だと述べた。〈国民〉人工論者たちは、まさしくこの社会学的な視点に立って〈国民〉近代起源説を次のように読み替えたのだといえる。〈国民〉は近代の産物であるという場合に、その起源を 1789 年のフランス革命に求める物語は偏頗であった。なぜならそれは、ナショナリズムの起源と称して近代市民革命による〈国民〉意識の覚醒のみを語り、〈国民〉の身体の創造という側面を等閑視しているように見えるからである。デモクラシーを近代国家の統治原理として確立したフランス革命と、そのイデオロギ

一的支柱となったルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-78)の共和国論こそは、言うまでもなくナショナリズムの最も重要な淵源である。しかしそうして歴史のなかに胚胎した〈国民〉の意識は、いかにして身体を獲得し、完全な歴史的実在を得るにいたったのか。〈国民〉という主体の自己意識は、どのような身振りをそなえ、またその特有のふるまいを可能にする空間を、すなわち自分たちが棲息する社会をいかにして築き上げたのか。ジュネーヴのような小国寡民の都市国家を理想として掲げるルソーの共和国論が、フランスの巨大な人口に適用され 19 世紀の国民国家を産出するにいたるまでに何が起ったのか、そしてそれはどのような歴史的・社会的諸条件の重合により可能になったのであろうか。これらの問題群に答えるのがナショナリズムにおける〈産業化〉の契機なのである。サン=シモンの〈産業社会〉論がナショナリズムの文脈で理解されるべき理由もそこにある。

まず出発点を確認することから始めよう。ルソーは『社会契約論』(*Du contrat social*, 1762)の初稿（いわゆる「ジュネーヴ草稿」）でこう述べている。

> われわれは、自分たちの特殊社会になぞらえて一般社会を考える。小さな共和国の設立が、われわれに大共和国を構想させる。だから、われわれは、市民(citoyen)であったのちにはじめて、まさに人間となり始めるのである。そこから、人類への愛にもとづいているという条件で、祖国への愛を弁明し、全世界を愛していると誇ることで、何びとも愛さない権利を持とうとする例の自称世界市民(コスモポリット)について、どう考えなければならないかがわかる[56]。

古代ギリシアの都市国家で産声をあげた「共和国」の理念が近代の巨大社会に適用されるときに生じる問題は、ここではまだ意識されていない。「小さな共和国」が「大共和国」へとスムーズに接続されるのは、すでに「市民(シトワイヤン)」という言葉がほぼ国家構成員ないし近代的な意味での「国民」にまで形式化されてしまっているからである[57]。しかし古代の都市国家とは比較にならないほど社会の規模が拡大すると、もはやこの連続性は成り立たなくなる。問題は、人口の増大とともに拡大する人々の経済格差であり、またその政治的な帰結である。

---

[56] ルソー「ジュネーヴ草稿」（作田啓一訳『ルソー全集第 5 巻』（白水社、1979 年）、27 頁。
[57] 西川長夫「国民(Nation)再考――フランス革命における国民創出をめぐって」、京都大学『人文學報』第 70 号（1992 年）、7 頁参照。

フランス革命の指導者の一人シィエス(Emmanuel- Joseph Sieyès, 1748-1836）は、「第三身分は国民（ナシオン）に属するすべてのものを包含するものであり、第三身分でないものはすべて国民だとはみなされない。第三身分とは何か――すべてである」と述べた。しかしこの「国民」の抽象的観念性は、革命の主体とみなされた「第三身分」すなわち上層ブルジョワジーが、都市労働者階級や零細農民を自分たちと区別して「第四身分」と蔑み、共和国の「市民=国民」――「共通の法律の下に生活し、同じ立法機関によって代表される共同生活体[58]」――から排除し始めたときに明らかとなった。革命とそれに続く政治的・経済的混乱の中で、彼ら「第四身分」、すなわち当時のフランスの人口の大半を占める無産者大衆は、法律の保護も自活のすべを失って貧窮にあえぐことになったからである。彼らを社会に包摂し、国民として認知しようとする勢力が当時存在しなかったことは、革命とナポレオン戦争に続く混乱の中でも権力闘争が繰り返され、目まぐるしく体制が転換したことが物語っている。そしてこれが、既存の政治権力を見限って無産大衆の権力樹立を説くアナーキズムや、原始共産主義社会の到来を夢想して後にエンゲルスによって「ユートピア的」と一喝された社会主義思潮が陸続と登場する歴史的背景になっていた。

さて、サン=シモンも革命後にあらわれたそのような社会改良主義者の一人と考えられている。彼もまた、近代市民革命によってすら見放された貧困大衆を包摂することによって救済する理想社会の到来を切に願った思想家であった。しかしサン=シモンが同時代の他の社会改良主義者たちと異なるのは、巨大な人口の問題に答えることが革命後の思想の最重要課題であることを認識していた点である。空前絶後の人口を養うためにも、来たるべき理想の社会は大衆の生活に物質的な基盤を確保しなければならず、それにはまた人々自身の労働を適切に組織する必要があるだろう。そのようなやり方であらゆる階級に属する膨大な人口を包摂し、彼らを真に国家に帰属する〈国民〉たらしめる社会を、サン=シモンは〈産業社会〉と名づけた。ウォリンもいうように、フランス革命後も取り残された貧困大衆の救済が政治思想の最重要問題であった当時、〈産業化〉を介して国家と諸個人の利益を一致させるサン=シモンの〈産業社会〉構想は、大衆社会のアノミー（デュルケム）問題に対する最も有力な解決策を提示していたのである[59]。

---

[58] シィエス『第三身分とは何か』（稲本洋之助ほか訳、岩波書店、2011 年）、18、19 頁。

[59] Cf. Sheldon S. Wolin, *Politics and Vision* (Princeton: Princeton University Press, 2004), pp.337-338. シェルドン・S・ウォリン『西欧政治思想史』（尾形典男・福田歓一ほか訳、福村出版、2007 年）、435-436 頁参照。

しかし、サン=シモンがナショナリズム思想史に決定的に重要な位置を占めると考えられる理由は、〈産業化〉による国民化という彼の目論見だけにあるのではない。そう考えることにより、フランス革命を近代ナショナリズムの起点とする場合に生じる疑問に一つの答えが与えられるからである。自由で平等な市民たちが法の下に自治をおこなう政治社会、公共善を追求する市民の徳が支配する「共和国」が、フランスを含む大陸ヨーロッパにおいては、巨大な社会を維持・管理するための集権的な統治機構を備え、主権という巨大な力を国民の名において行使する「国民国家」となったのはなぜだろうか？　サン=シモンの〈産業社会〉は、同時代の社会主義者たちの理想社会とは異なり、階級の違いが厳然と存在する上に統治者と被治者の区別もあり、統治者は諸産業の「後見人」であるなら君主であっても構わないとされる。つまりそれは、紛れもなく「国家」の体裁を持っているのである。国家権力が被治者に仁慈を施すという発想は、現代の福祉国家に通じるものがあるとはいえ、19 世紀初頭のヨーロッパにおいては前世紀の啓蒙専制君主の支配の記憶を呼び覚ますだけであったろうし、思想家サン=シモンの貴族という出自に由来する限界をそこに見ることも可能である。しかし国家権力に対するサン=シモンの楽観には、近代国家の成立をめぐるフランスに独特の歴史的事情も深く関わっている。

イギリスで自由市場経済と議会により諸利益の均衡を図る混合政体が早くから定着したのは、個人主義の長い伝統があったからであり、それが 17 世紀のホッブズやロック(John Locke, 1632-1704)の社会契約説に結実し、18 世紀にはアダム・スミス（Adam Smith, 1723-90）の市場経済論やヒューム（David Hume, 1711-76）の立憲主義に基づく穏和な統治論を支えた[60]。一方、絶対王政の時代が長く続いたフランスでは、貴族や大土地保有者階層のような社会集団を王権を補佐する官僚組織に編入し、財政機構を通じて国家主導で経済運営を行う集産主義(collectivisme)の伝統が強い。その嚆矢となったのは、ルイ 14 世（Louis XIV, 1638-1715. 在位 : 1643-1715）親政を財政的に支えたコルベール（Jean-Baptiste Colbert, 1619-1683）の重商主義である。コルベールは、肥大化する官僚機構と対外戦争に対応するための諸経費を調達するために一元的な租税制度を導入する一方、工業先進国・海洋国家として躍進するイギリスに対抗するために、関税操作、助成金、独占権付与を中心とする強力な保護主義と産業振興策によりフランスの製造業を救出しようとした[61]。それが市民革命

[60] C・B・マクファーソン『所有的個人主義の思想』（藤野渉ほか訳、合同出版、1980 年）、および藤原保信『自由主義の再検討』（『藤原保信著作集（第 9 巻）』、新評社、2005 年）、参照。
[61] コルベールの集産主義政策については以下を参照。アレクシス・ド・トクヴィル『旧体制と大革

によって絶対王政が打倒された後も政治的慣行として維持されたフランスでは、中央集権および諸産業への強力な国家介入がイデオロギーの違いを超えて政治体制の基本原則となり、20 世紀にもマクロ経済管理や労使間調整から社会保障や社会政策に至るまで責任を持つ政府が集産主義の名で理解されているのである。「自由放任（為すに任せよ）」という訳語が定着しているフランス語の laissez-faire は、コンスタン(Henri-Benjamin Constant de Rebecque, 1767-1830)やギゾー(François Pierre Guillaume Guizot, 1787-1874)の思想を表すのに用いられることはあっても、体制原理や政権の理念として実行されたことは、ナポレオン失脚後の一時期をわずかな例外としてごく近年までなかった[62]。

フランス発の集産主義を激越に批判したのはF・A・ハイエクである。ヒュームの商業社会やスミスの市場社会に個人主義的自由と適合する「自生的秩序」を見るハイエクは、集産主義的体制に共通する特徴として「ある決定的な社会的目標へ向けて，社会全体の労働を計画的に組織化すること」を挙げ、「社会全体とその全資源を単一の目的へ向けて組織することを欲し、個人それぞれの目的が至高とされる自主独立的分野の存在を否定することにおいて，等しく自由主義や個人主義と一線を画している」点で、集産主義を共産主義やファシズムとともに「全体主義」にカテゴライズする[63]。そしてハイエクがそのすべての起源としてサン=シモンを名指しで批判したことが、その後のサン=シモン評価にも隠然たる影響を及ぼす結果となった[64]。

命』（小山勉訳、筑摩書房、1998 年）。イマニュエル・ウォーラーステイン『近代世界システム 1600～1750――重商主義とヨーロッパ世界経済の凝集』（川北稔訳、名古屋大学出版会、1993 年）。福井憲彦ほか編『世界歴史大系・フランス史２――16 世紀から 19 世紀なかば』（山川出版社、1996 年）、42-48、201-204、217-221 頁。

[62] 安藤隆穂『フランス自由主義の成立――公共圏の思想史』（名古屋大学出版会、2007 年）、第 8 章参照。

[63] F・A・ハイエク『隷属への道』（西山千明訳『ハイエク全集 I 』別巻、春秋社、1992 年）、70 頁。ハイエクの主張については、山中優「ハイエク――自生的秩序を守るための統治にひそむ問題性」（小野紀明・川崎修・齋藤純一ほか監修『岩波講座　政治哲学 5――理性の両義性』、岩波書店、2014 年）、参照。ハイエクの集産主義批判は、戦中・戦後にイギリス労働党のイデオローグとして活躍したK・マンハイムの『現代の診断』（*Diagnosis of our Time*, 1943）が西欧知識人たちを社会主義へと総雪崩的に宗旨替えさせたことを直接のきっかけとしていた。添谷育志「ナチズム・戦時動員体制・企業国家――マイケル・オークショットの思想形成と戦争体験〈2002〉」（添谷育志『近現代英国思想研究、およびその他のエッセイ』風行社、2015 年）を参照。

[64] ハイエク前掲書、24-28 頁。例えばバーリンによれば、サン=シモンはベンサムと並ぶ「特殊な社会効用学派[64]」の一人であり、社会主義よりもテクノクラシーの予言者とみなされるべきである。アイザイア・バーリン「ナショナリズム」（『バーリン選集１――思想と思想家』福田歓一ほか訳、岩波書店、1983 年）、411 頁。

しかしハイエクのサン=シモン理解は、アンチ社会主義者ですらマルクスとエンゲルスの「ユートピア的社会主義」という規定を鵜呑みにしてしまう典型例であるだけでなく、必ずしも「計画化」とは結びつかないフランス集産主義を一律に社会主義と同一視するイデオロギー的な粗雑さを露呈していた。サン=シモンの〈産業社会〉論がフランスにおける集産主義の伝統に一部依拠していることは事実であるが、絶対王政の権力維持・強化と結びついた 17 世紀の集産主義とは歴史的課題を明確に異にしていた。一言でいえばそれは、フランス革命以降の 19 世紀大陸ヨーロッパが直面した喫緊の事態、すなわち、膨大な人民をいかにして養うべきかの問題に答えることである。革命後のフランスは、ナポレオン戦争に続いて第一帝政、復古王政、ナポレオンの復帰、第二次復古王政と目まぐるしい体制転換を経験した。その間にイギリスよりはるかに遅れて始まった産業革命は、国富を増大させる一方、その無軌道な追求が革命以前よりも大きな格差社会を生み出し、困窮した労働者階級による革命運動を頻発させた。「革命の子」を自認するサン=シモンが〈産業社会〉の構想に着手したのは、そのような政治的・経済的混迷の時代であった。そして彼は、たとえ当代の君主の手を借りてでも、人々の生存と幸福追求を可能にする物質的基盤の確保という時代の課題を最優先させ、結果として、巨大な近代社会においては「共和国」が理想に終わらざるを得ないことをルソーとともに証明し、後に「国民国家」と呼ばれるものへの道を準備したのだといえる。自由への権利と生存への権利に加え、政治に参加する権利がすべての人間に対して平等に保障される完全な国民国家状況が実現するには、もちろん 20 世紀を待たなければならない。それでも、未だ「想像の共同体」（アンダーソン）でしかなかった観念としての〈国民〉に、労働・生産・産業を通じて実質を与えようとしたサン=シモンの思想を、「唯物論的」ナショナリズムと呼ぶことはできるのである。

おわりに

バーリンは、19 世紀ヨーロッパでナショナリズムが「共和国」を求める左翼思想として扱われ、イタリアの独立運動家マッツィーニ（Giuseppe Mazzini, 1805-72）が労働者インターナショナルの会合に招かれたことに注目する[65]。またケドゥリーは、今日では右翼の象

[65] バーリン「ナショナリズム」、437 頁参照。

徴であるマッツィーニ、ムッソリーニ（Benito Amilcare Andrea Mussolini, 1883-1945）、ヒトラーが、最初は左翼の運動家として登場したことを強調している[66]。つまりかれらは最終目的こそ異なれ、国内の経済的・政治的不平等を是正し、経済格差や政治的特権の解消に奔走する国民国家主義者（ナショナリスト）だったのである。その意味でのナショナリズムは西欧に限定した現象ではない。コーンは第二次大戦以後のアジア・アフリカ世界のナショナリズムが民族自決と社会主義の混交としてあらわれる理由を、この二つは文化・政治と並んで経済の凝集をも可能にし、またそれが全体の協力を促す思想であるからだと説明した[67]。

人は自然に〈国民〉となるわけではない。近代社会が抱える巨大な人口を、生存や幸福追求の権利を平等に保障された〈国民〉にするためには、社会そのものが少なくとも人々の基本的なニーズを満たせる程度にまで生産力を高め、またそれに必要な人的・物質的リソースを適切に配置し、生産の果実を適正に配分できるように整序されること、つまり〈産業化〉が不可欠である。サン=シモンはマルクスに先んじて、市民革命を経て成立したように見えた近代国家が、いまだこの歴史的課題を完遂していないことに気づいた最初の近代政治思想家であった。革命により〈国民〉としての集合的自己意識に覚醒した巨大な人口は、さらにその集合的な身体を養うために〈産業社会〉を必要とする。それを政治の永遠の課題と考える者は、誰もがサン=シモン主義的ナショナリストなのだといえる。ルソーの共和国論に始まったナショナリズムは、サン=シモンの〈産業社会〉論を要請するのである。

---

[66] Cf. Kerourie, *op.cit*., p.85.
[67] コーン前掲書、174-175 頁参照。

第２章　ポスト市民革命期の政治思想
――サン=シモン主義の歴史的文脈について

はじめに

マルクス主義によって「ユートピア的社会主義」の烙印を捺されて以来、サン=シモン主義は社会主義思想史の中に封印され、近代政治思想史におけるその位置づけは明確でなくなってしまった。しかしサン=シモンの思想の中には、社会主義の先駆思想という解釈に完全には解消されない要素が多々ある。特に注目するべきは、サン=シモンがフランス革命を失敗した革命とみなし、その遠因を革命のイデオローグたちの啓蒙合理主義そのものに見て、その超克を目指していたことである。

サン=シモンは 62 歳のとき、『産業者の教理問答』(*Catéchisme des industriels*, 1823-24)を準備する傍ら、自ら積年の課題と考えていた『社会契約論』（*Du contrat social*, 1822）と題する論考に着手した。結局はまた未完に終わり断片しか残っていないが、そこで彼はあらためて「社会契約の基礎としての役を果たすべき観念はいかなるものであるか[1]」と問い、諸個人の理性の推論が収斂して政治社会を生み出すという近代社会契約論の合理主義的楽観を根底から疑問視している。1789 年に起こったフランス革命において歴史の逆証を受けたのは、まさしくホッブズからのちのロックやルソーに受け継がれていったこの合理主義的な仮定であった。

フランス革命の指導者たちは、当初こそ絶対君主制から立憲君主制への転換を模索していたが、国王一家の国外逃亡計画が露見したのをきっかけとして、形勢は共和派有利に展開する。共和派内部の急進勢力であったジャコバン派は、主導権闘争に勝利すると公安委員会制と革命裁判所を設置し、対抗諸派の粛清を進めていった。この血で血を洗う激しい権力闘争の過程で、本来はきわめて世俗的な近代国家の樹立を志向していたはずの共和派の中でさえ、革命の熱狂はある種の宗教性を帯びていく。詳細な一次資料をもとにフランス革命の暗黒面を描いたアナトール・フランス(Anatole France, 1844-1924)の『神々は渇く』(*Les Dieux ont Soif*, 1912)において、ジャコバン政権の頭目ロベスピエール（Maximilien François Marie Isidore de Robespierre,1758-94）の信奉者で革命裁判所の陪審員を務める主人

[1] 『社会契約論』アントロポ版未収録／（4）410 頁。

公ガムランはこうつぶやく。

「自然」――決して謬りを犯すことのないあのよき母なる「自然」の衝動に従わなければならない。心によってこそ裁かなければならない。こう考えて、ガムランは、ジャン=ジャック〔ルソー〕の亡霊にその加護を祈った。
――有徳の人よ、人間に対する愛と、人間を再生させる熱情とを、どうか私に吹鼓してください！[2]

人々の契約に基礎をおく世俗的な政治社会、すなわち近代的な意味での国家の樹立を目指す革命の中に、思いもかけない宗教的次元があらわれる。旧体制（アンシャン・レジーム）における王権の正当性を保証してきたのはカトリック教会であり、フランス革命は王権に対する庶民の挑戦であるとともに、宗教の専横に対する世俗的な価値の反乱であった。実際、フランス革命時にパリ市内の教会は襲撃され、ノートルダム大聖堂の聖人像はことごとく破壊された。しかしその後に荒れ狂った粛清のテロルは、宗教を否定した革命が、宗教に代わって良心という集団形成の基礎を支えるものを見出せなかったことをあらわしている。人々は契約履行の前提となる相互信頼の基盤をも喪失したのである[3]。社会形成の論理から排除された宗教は狂信に姿を変えて舞い戻り、革命の当事者たちの相互不信が招いたテロルの暴力を助長していった。

フランス革命を失敗した革命と見る点ではサン=シモンもマルクスも同じである。しかしその失敗の本質をマルクスが革命の不徹底と見るのに対して、サン=シモンはそもそもの出発点に誤りがあったと考える。この診断の相違が、革命の廃墟の中から甦る社会について両者に異なった処方箋を書かせることになった。結論からいえば、マルクス主義がさらなる革命によりいっさいの階級が消滅した共同体を構想するのに対して、サン=シモンは、社会が必要とする物資の生産に人々がそれぞれの職能に応じて関与する有機的秩序を構想するのである。どちらもが革命によって裏切られた人間的共同性への希求に応えようとする思想であった。それでは、マルクスの階級なき共同社会が人間の「類的本質

[2] アナトール・フランス『神々は渇く』（大塚幸男訳、岩波書店、1977 年）、292-293 頁。
[3] 柴田三千雄ほか編『世界歴史体系フランス史２』（山川出版社、1996 年）、333、339−341、381−384 頁参照。また、社会契約の前提に「信頼」があることを強調するものとして、重田園江『社会契約論』（筑摩書房、2013 年）を参照。

(Gattungswesen)」に支えられたものであったとすると、階級を維持するサン=シモン的共同社会に調和をもたらすものは何であったのだろうか。

本章の目的は、サン=シモンのフランス革命診断を手がかりとして、彼の思想が誕生した歴史的コンテクストを明らかにすることにある。そのために以下では、まず近代市民革命の失敗の遠因を啓蒙合理主義にまで遡って探り（第１節）、アナトール・フランスの小説を題材にして、抽象的な理性への過信が革命を逼塞させていく過程を確認する（第２節）。次に、「空想的=ユートピア的社会主義」というマルクス主義のサン=シモン評価の妥当性をユートピアニズムの歴史から検討し（第３節）、むしろサン=シモンが啓蒙合理主義から批判的に摂取した「科学」により集産主義を近代的に再編成する意図を持っていたこと、そしてそこから〈産業社会〉の構想が生まれてくる過程を明らかにする（第４節）。

１．社会契約論の陥穽

近代市民革命を導いた社会契約説もまた啓蒙合理主義の一つの所産である。サン=シモンのフランス革命診断は散発的で体系的に論じられてはいないものの、人間理性に対する過度の信頼が革命の失敗をもたらしたという視点で貫かれている。そこでこの視点を敷衍しながら、社会契約論と革命の関係について概括しておこう。

ホッブズは近代自然科学の方法に依拠して政治社会の形成を説明する社会契約論によって近代政治哲学の祖を自負した。その基調となるのは、物体の運動を計算可能な表象に還元し、その論理的操作によってあらゆる現象を機械論的に論証する手続きを用いて、放埒な動きをする原子に擬せられた諸個人の合意から政治社会の成立を説明する方法論的個人主義である[4]。

ホッブズ社会契約論の出発点は、「国家(civitas)をほんとうに解体する必要はないが、少なくともそれをあたかも解体したかのようにして考察する[5]」仮説的世界消去の方法によって出現する「自然状態」である。「自然状態」は政治社会の理論的な起源であって、歴史的な起源ではない。そこでの人間（自然人）は、もっぱら自己保存への欲求に突き動かされ、

[4] 藤原保信『西洋政治理論史』（早稲田大学出版部、1985 年）、219 頁。また田中浩『ホッブズ――リヴァイアサンの哲学者』（岩波書店、2016 年）も参照。
[5] ホッブズ『市民論』（本田裕志訳、京都大学学術出版会、2008 年）、18 頁。

またこの自己保存に資するいかなる自己の力をも行使する自由を自然権として有する。ホッブズの想定する人間は、なによりも死の恐怖という基本的情念に支配され、自己の生存をつねに確保する合理的な方途をもとめる利己的な理性的動物である[6]。しかしそれは人間が本性上邪悪であることを意味するわけではない。

> 人間の意欲およびその他の情念は、それ自体では罪ではない。それらの情念からでてくる諸行為も、人びとがそれを禁止する法を知るまではやはり罪ではない。法がつくられるまで人びとはそのことを知りえないのだし、法をつくるべき人格について人びとが同意するまでは、どんな法もつくられえないのであるから[7]。

人間の行動も、徹底した機械論的自然観にもとづいて物体の運動のアナロジーでとらえられている。感覚とは、外界の映像が運動として感官を物理的に刺激し、身体内部の生命運動を助長したり阻止したりすることである。それが生命運動を助長する場合は「快楽」の感覚となり、それをもたらした外界の対象を「善」とみなしてそれへの欲求を生みだす。生命運動を阻止する場合は「苦痛」の感覚となり、対象を「悪」とみなして「嫌悪」し避けようとする行動を生む。これが自然のままの人間のありかたなのだとすれば、道徳や法による制約のない「自然状態」においては、「各私人が善悪の諸行為の判定者である[8]」以外にはない。

だがホッブズによれば、「各人があらゆるものに、互いの身体にたいしてさえ権利をもつ[9]」「自然状態」の悲惨をもたらした死の恐怖と利己的な理性が、「自然状態」を脱して政治社会に移行することをも可能にする。自己保存をもとめる各人の理性の推論は、より合理的な自己保存確保の手段として、自然法の命令にしたがい、主権者を設定してその定める法に各人が共同で服する合意を結ぶことをよしとするからである。こうしてできる「コモンウェルス(国家)」の下では、「善悪の諸行為の尺度は市民法であり、判決者は立法者であって、かれはつねにコモンウェルスの代表である[10]」。

ホッブズの社会契約論においては、政治社会の維持・継続はひとえに各人の契約遵守義

---

[6] 藤原前掲書、223−225 頁参照。
[7] ホッブズ『リヴァイアサン（1)』(水田洋訳、岩波文庫、1992 年)、212 頁。
[8] 同書（2)、242 頁。
[9] 同書（1)、217 頁。
[10] 同書（2)、242 頁。

務の履行にかかるが、それを担保するのもやはり各人の合理的な判断である。各人は社会契約を破棄して「自然状態」に舞い戻るよりは、たとえ自然人の自由が一部制約されることになっても政治社会の平和のほうが自己保存には得策だと利己的に判断するからこそ、契約を遵守すると見込まれるのであり、契約遵守をそれ自体で価値のある「徳」として奉じているわけではない。これが国家の主権性の基盤を徹底して脱宗教化するために、超国家的権威であるカトリック教会と、国家内に「聖職者権力」を群生させるプロテスタント教会を否定したホッブズ政治哲学の理論的結論なのである[11]。しかしこの結論は、社会契約論につきまとって離れない「ホッブズ問題」――人間社会は利己心のみによって構築・維持されうるか？――の淵源にもなってきた。かつて宗教は、人間の本質的な善性への信頼に訴え、社会秩序を維持する市民の徳を人びとに吹き込んできた。社会契約論が想定する利己的な理性は、道徳教育の主たる担い手であった宗教の機能を代替することができるのであろうか。

ルソーの「一般意志」および「市民宗教」の思想には、この社会契約論の陥穽を回避する意図があったように思われる。人間の自然的な共同性の不在を埋め合わせるものはなにか？　ルソーの社会契約説の起点となる「自然状態」は楽園として描き出される。自然人たちは、自己保存を追求する「自己愛(amour de soi)」の感情と並んで「憐憫(pitié)」という感情を具えているとされ、この「憐憫」は一見すると他者との連帯を担保するもののように見えるかもしれない。しかし、「われわれの精神はこのふたつの原理を協力させたり組み合わせたりすることによって、自然法のあらゆる規則が生じてくるようにわたしには思われ、「社会性(sociabilité)」の原理を導入する必然性はない[12]」。「自然状態」の平和は、人間本性に由来するというよりも、もっぱら自然人の孤立という生存環境によって確保されているというべきであろう。ルソーにおいて共同性はむしろ、市民状態という高次のレベルで実現するべき課題なのである。

その第一はよく知られた「一般意志」である。

主権とは一般意志の行使にほかならないのだから、けっして譲りわたすことはできない。

---

[11] ホッブズを無神論者とみなすものに、レオ・シュトラウス『ホッブズの政治学』（添谷育志ほか訳、みすず書房、1990 年）がある。ホッブズのいわゆるエラストゥス主義（世俗権力による宗教の完全な統御を目指す）については、梅田百合香『ホッブズ　政治と宗教――『リヴァイアサン』再考』（名古屋大学出版会、2005 年）を参照。

[12] ルソー『人間不平等起源論』（原好男訳、『ルソー全集４』白水社、1978 年）、194 頁。

また、主権者とは集合的存在にほかならないのだから、この集合的存在そのものによってしか代表されえない[13]。

だが「一般意志」は一体の人格と化した人民の集合的意志のようなものではなく、また「一般意志」の実在にもとづいて人民集会での投票の全会一致が予定されているわけでもないことに注意しなければならない。反対に「一般意志」は、人民集会における市民の多数投票の一致点にそのつど出現する。「意志が一般的であるためには、それが全員一致であることをかならずしも必要としないが、全員の票が数えられることが必要である。数からの除外は、どんな方式をとろうとも、「一般性(généralité)」を破壊することになる[14]」。したがって「一般意志」の出現をもって「共和国」の一体性の保証と考えることはできない。社会の共同体を維持する社会契約遵守義務の根拠はどこに見いだせるのか？――「ホッブズ問題」はいまだ解決されてはいないのである。

そこでルソーが第二に提起するのが、ホッブズが最後まで退けた宗教による社会統合の可能性である。ルソーは「無神論者の社会」を夢想したピエール・ベール（Pierre Bayle, 1647-1706）への批判として、「宗教が基盤の役を果たすことなしに国家が建設されたことはこれまでいちどもない[15]」と主張する。だがいま求められている宗教は、人類のような「一般的社会」のための「人間の宗教」、すなわちキリスト教ではない。社会契約によって結合する「特殊社会」が必要とするのは、「神への愛と法への愛を結びつけるかぎりにおいて、また祖国を市民たちの熱愛の対象とさせ、国家に奉仕することがとりも直さず守護神に奉仕することになるのだと教える」宗教、すなわち「市民宗教」である。ルソーの共和国を構成する市民は、本性的に原初の自然人の個人性を維持している。そのような市民のあいだに「特殊社会の偉大なきずな」を強化するためには、「各市民に自分の義務を愛させるような宗教」が欠かせない。社会的統一の確保を第一に考えた宗教にもとめられる教義は、人々にもっぱら社会的善を志向させる次の五項目に内容を限定される。

全知全能で慈愛に満ち、全てを予見し配慮する神の存在
来世の存在

---

[13] ルソー『社会契約論』（作田啓一訳、『ルソー全集５』白水社、1978 年）、131 頁。
[14] 同書、133 頁。
[15] 同書、244 頁。

正しいものの幸福
悪しき者への刑罰
社会契約と法律の神聖さの保証[16]

「市民宗教」への信仰告白において市民たちは「社会性の感情」を表明するのだとルソーはいう[17]。『人間不平等起源論』（*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes,* 1755）で論じられる「自然状態」では不要とされた「社会性の原理」が、『社会契約論』（*Du contrat social,* 1762）の末尾で、「市民宗教」への参加を通じて喚起される「感情」となって再登場することは注目にあたいする。「市民宗教」は、共和国を維持するために必要な社会契約遵守の義務を市民たちに「徳」と錯認させるための政治的な装置と考えられるからである。しかしそれが「ホッブズ問題」への適切な解であるかどうかは疑問であり、歴史はむしろそれを逆証するかのように、社会契約論の陥穽を露呈させていくことになる。

「一般意志」に現れる市民の一致や「市民宗教」の必要性についての未完の論考は、ルソーが人間の善性への信頼を再建するというポスト・カトリシスムの思想的課題に気づいていたことを物語っていた。だが現実のフランス革命には、人権宣言を典型とする抽象的な理性のドグマしかなかった。確かに人権宣言の採択は、個人主義の精神をフランスに注入し、社会契約論的国家建設の基盤を据える画期的なものだった[18]。しかしその空虚さは、人権宣言の具体的履行が、その理性的な外見に似つかわしくない政治的妥協と暴力的な決断主義をつねにともなっていたことにあらわれている。理性の命令と同一視された正義は、人間の善性への楽観主義を人間の悪性への悲観主義へと容易に逆転させ、人々のあいだに相互不信を醸成することにより、正義の名において無慈悲な殺戮をエスカレートさせていった。「共和国」の麗しい理想とは裏腹な内部粛清によりかろうじて維持されていた革命政府は、混乱に乗じて権力の座についたナポレオンの主導で対外戦争に向けて暴走していく

[16] 同書、250 頁。市民宗教の信仰箇条が五項目に止まった理由をルソーの夭折に求めることは当を失している。それはむしろキリスト教へのルソーの最大の譲歩とみなされるべきであろう。
[17] 同書、250 頁。
[18] リン・ハント『人権を創造する』（松浦義弘訳、岩波書店、2011 年）を参照。彼女はなぜ歴史的に個人の権利を表す「自然権」ではなく「人間の権利」が、18 世紀末のフランスで突然明文化されたのかを丁寧に論証している。加えて、B・アンダーソンのナショナリズム論を引用しながら、キリスト教が不在となったときの個人の内面における共感力形成という課題を小説と新聞が補ったというのは、個別社会における古典文学と新聞の成立に関わって興味深い指摘である。

[19]。革命はなぜ失敗したのであろうか。理性だけでは何が不足していたのであろうか。フランス革命を群像劇として描いたアナトール・フランスの小説『神々は渇く』にそれを探ることにしよう。

２．テロルという反証

『神々は渇く』は膨大な史料を基にした歴史小説である。だがフィクションとはいえ、理想に燃える情熱を持って始まった革命がテロルの惨禍によって幕を引かれるまでを描いたこの小説は、一つの歴史の真実を描き切っているように思われる。

アナトール・フランスは、フランス革命を聖俗間の権力交代劇として描く意図を小説冒頭から次のように明らかにしている。

> ダヴィドの弟子の画家で「ポン=ヌフ」セクション(元の「アンリ 4 世」セクション)の一員であるエヴァリスト・ガムランは、朝早くからバルナバ会の旧聖堂に赴いていた。聖堂は 3 年以来、すなわち 1790 年 5 月 21 日以来、セクションの総会の本拠となっていたのである。この聖堂はパリの裁判所の鉄柵に近い、暗く狭い広場に建っていた。2 つの古典様式から成り、逆なった渦形持送りと、焔を吐いている壷とに飾られ、歳月によって陰気なものと化し、人間によって辱められた正面の、宗教的標章は槌で打ちこわされていた。そして戸口の上には、《自由、平等、友愛、然らずんば死》という共和国の標語が黒い文字で記されていた。エヴァリスト・ガムランは身廊の中にはいって行った。かつては聖パウロ会の聖職者達が短白衣を着て、聖務日課を誦するのが開かれた円天井の下は、今や、赤い帽子をかぶった愛国者達があつまって、自治体となった市の吏員を選挙したり、セクションの諸問題について討議したりする場所と化していた。聖者達の像は壁龕から引き出されて、ブルトゥスや、ジャン=ジャックや、ル・ペルティエの胸像がそれに取って代わっていた。裸にされた祭壇の上には、人権宣言を列記した板が立

[19] 柴田三千雄ほか編『世界歴史体系フランス史２』(山川出版社、1996 年)、352–353 頁、411−423 頁、スティーヴン・ルークス「個人主義」(フィリップ・P・ウィーナーほか編『西洋思想大事典』平凡社、1990 年)、遅塚忠躬『フランス革命――歴史における劇薬』(岩波書店、1997 年) を参照。

てられていた[20]。

「セクション」と呼ばれる革命政府支部は、かつてのカトリック教会の聖堂に設置されており、伝統的な宗教的権威の座を世俗的な権力が奪ったことが象徴されている。しかしそれに続くのは、世俗の「共和国」の一員たることが旧聖堂での署名という宗教的儀礼に似た行為によって証明されるという描写である。

その朝は、説教壇の足もとの、一つの事務机の前に、赤い帽子をかぶり、カルマニョルを着て、ティヨンヴィル広場の指物師、兄の方の市民デュポンが陣取っていた。監視委員会の 12 人の 1 人である。机の上には、1 本の瓶と幾つかのコップと、1 つのインキ壷と 1 綴りの紙とがあった。これは国民公会に対してその議員たるにふさわしからぬ 22 人の議員の追放を促す要請書であった。
エヴァリスト・ガムランはペンを執って署名をした。
――わたしにはちゃんとわかっていたよ、と市吏の指物職人はいった。市民ガムランよ、君が署名をしにやってくるだろうってことが。君は純粋な男だ。だがわれわれのセクションは熱の燃え上がるものがない。勇気を欠いている。わたしは監視委員会に提言しておいた、この要請書に署名しない者には、それが誰であれ、愛国者たることの証明書を交付しないようにと。
――僕はいつでも僕の血でもって署名する用意が出来ているよ、あの叛逆のフェデラリストどもの追放要請書には。奴らはマラを処刑しようとした。奴らをやっつけなければならない。
――われわれを破滅させるものは無関心主義だ、と兄の方のデュポンは答えた。投票権のある市民が 900 人もいるセクションなのに、集会にやって来る者は 50 人にも満たないとは！　きのうはわれわれはたったの 28 人だった。
――だったら、とガムランはいった。市民たちを無理にも来させなければならない、来ない者には罰金を課すことにするんだ[21]。

共和国に忠実な市民ガムランは、革命の大義のためには個人性を無にして、私的生活の

[20] アナトール・フランス前掲書、9-10 頁。
[21] 同書、10-11 頁。

すべてを公共のために犠牲にしてもかまわないと考える無慈悲な革命的人間として描かれている。自分は正義を体現する側にいるというガムランの傲慢さは、小説全体を通して改まることはなく、それが彼を積極的に粛清に加担させていく。革命裁判所陪審員に就任したガムランは、反革命的分子を摘発することこそが革命的市民の責務と信じ、あらゆる人々に事実無根の嫌疑をかけて死刑囚を量産していくのだ。しかしその傲慢さが、最終的には彼自身をも粛清の対象にしてしまう。壁龕にルソーの胸像が飾られ、祭壇に人権宣言が祀られた聖堂の中で交わされるガムランとデュポンの会話は、革命の崇高な大義への宗教的な陶酔がそのすべてをもたらしたことをすでに暗示している。

物語の中盤に、ある興味深いエピソードが挿入されている。共和国の対外戦争が後退を余儀なくされ、パリがいよいよ鬱屈した雰囲気に包まれる中で、ガムランは恋人エロディの浮気を疑う。そして間諜として誤認逮捕された若い青年貴族ジャック・モベルの裁判に臨み、年齢背格好からモベルをエロディの浮気相手と思い込む。ガムランは執拗な調査の結果、モベルの所持品を浮気の証拠と断定し、恋人の不義を確信する。彼がそれを伝えると、エロディは否定して激しくガムランをなじるが、その態度からかえって確証を得た彼は、大半の陪審員仲間を強引に説得してモベルを死刑にするのである。

——君の敵を打ったよ。ジャック・モベルはもうこの世にいない。あの男を刑場へと引いていく二輪馬車は、松明に囲まれて君の窓の下を通って行った。

彼女は事の真相を悟った。

——なんてひどい人！　あなたがあの人を殺したのね、わたくしの愛人でもなかったのに。わたくし、あの人は知らなかったのよ……見たこともなかったのよ。……あれはどういう男だったの？　若く、愛すべき男だったけれど、……無実だったのね。それだのにあなたが殺したのね、ひどい人！　ひどい人！

彼女は気を失って倒れた。しかし、この軽率な仕業に基づく死の影の下で、恐怖と同時に逸楽の思いにひたされるのを感じていた。彼女は半ば正気に返った。その重たげな瞼のかげからは白目があらわにのぞき、その胸はふくれ上がり、その両手は狂ったように愛人を探し求めていた。彼女は窒息させんばかりに男を両腕に抱き締め、男のからだに深くも爪を立てて、引きちぎられたような唇で、ただ黙々として、あたりの物音も耳に入らない、最も永い、最もいたましい、最も甘美な接吻を与えた。

彼女は肉体を挙げて男を愛していた、そして、男が恐ろしい、残忍な、兇暴な者にみ

えれば見えるほど、その手にかかった犠牲者たちの血を浴びて見えれば見えるほど、飢え渇いた者のように男を求めて飽くことを知らなかった[22]。

革命の未来はいまだ不透明なまま閉塞感ばかりが深まる中で、浅薄な男女は道徳的正邪の感覚をすら失い、原始的な欲望を甦らせて性愛に耽る。あたかもそれは、ルソーが夢想したような「社会性の感情」がいつまでたっても確立されず、その苛立ちから雌雄の原初的共同性へと刹那に回帰したかのようである。

ルソーは、「一般意志」と「市民宗教」の下で諸個人が真の社会的統一に至ると説いた。しかしこれを目指して建設された現実の共和国フランスは、真の意味での社会(société)ではなく、革命政府の主権の下に統合され、「人権」の名において一律に保護される孤独な個人たちの群れでしかなかった。ひたすら生存を求めて社会の形成に至るはずの個々人の利己的理性は、革命のテロルを生き残るために親兄弟や親しい隣人をも告発することを辞さない。「社会的感情」をともなわない理性は、むしろ人々を分断し、異見を排除し、他者を殺戮することに向かうのである。ガムランとエロディの荒々しくも甘美な性愛共同性は、革命によって打ち立てられるはずだった真の社会の陰画であるのかもしれない。だがそのような共同性の幻想に浸ることができない者たちは、逼塞しつつある革命と命運を共にする以外になかった。

陪審員達は、元の職業も性格もいろいろで、学問のある者もあれば無学な者もあり、卑劣な者もあれば高潔な者もあり、穏健なもの者あれば激烈なもの者あり、偽善者もあれば真摯な者もあったが、みんな、祖国と共和国との危機にあって、同じ苦悩を感じていた、或いは感じる振りをしていた。また同じ熱情に燃えていた、或いは燃えている振りをしていた、そしてみんな徳や恐怖によって兇暴になっていた。かくて彼らはただ 1 人の人間、他人の意見に耳を貸さない、いら立ったただ一つの頭、ただ一つの魂、ただ一匹の神秘的なけだものと化して、その職能のおのずからなる行使によって、ふんだんに死刑囚を産み出すのであった。彼らは感受性の赴くままに被告に対して好意的であるかと思えば残酷であるといった具合で、突如として急に憐れみの情に動かされて、一時間前だったら嘲笑を浮かべて断罪したであろう被告を涙ながらに無罪にすることもあっ

[22] 同書、238-239 頁。

た。彼らは、その任務を遂行してゆくにつれて、一段と性急に自分たちの心の衝動に従うようになって行った[23]。

革命の嵐に翻弄された彼ら多数者に、アナトール・フランスはこういう審判を下している。「要するに、彼らは人間であった、普通人以上に悪くもなければ、普通人以上に善くもない人間であった。無邪気さは、大てい、1 つの幸福なので、1 つの徳ではない。彼らと同じ地位に就くことを承諾した者ならば誰でも彼らと同じように振舞い、凡庸な魂を持っていながらもこれらの身の毛のよだつような任務を達成したであろう[24]」。フランス革命は、この凡庸な人間たちの理性に基づいて政治社会を構築する企てが必ずや失敗することを証明してしまったのである。

ここまでサン=シモンが『社会契約論』で暗示するフランス革命論を敷衍してきた。それでは、革命の失敗は、社会の形成にあたっては理性ではなく伝統的な宗教による統合という契機が不可欠であることを告げているのであろうか。ルソーが感じとっていたように、宗教無くして国家の道徳的基盤は無いのだとすれば、旧体制のカトリシスムに代替する新国家宗教を構想する者が現れても不思議はないし、サン=シモンはしばしばカトリシスム後という歴史的課題を負って登場した思想家、あるいはロマン主義者の一人とさえ考えられている。だがこの解釈の妥当性を吟味するのは後にとっておこう。いまはむしろ、サン=シモンがルソー政治思想の世俗的な面を代表する「一般意志」の観念について、それが公共の福祉を増大する「一般的計画[25]」との関連を欠いていると評していたことに着目したい。ここで問われているのは、公共の善を実現する社会を形成するのに理性が必要かどうかではなく、いかなる理性が必要とされるかということである。

３．ユートピアと科学

サン=シモンは最終的にフランス革命について、「……同一国民（la population française）の諸個人の間に存在するすべての関係が不安定になり、あらゆる禍のうちでも最大の禍で

[23] 同書、221-222 頁。
[24] 同書、222 頁。
[25] 『新キリスト教』Nc, t. III C, 152 ／(5) 272 頁。

ある無秩序状態（アナルシー）が思うさま猛威をふるい、その重圧のもとで全国民（la même nation）が悲惨な状態に陥って、国民（la nation）中の最も無知な者たちの心にも秩序の回復を願う気持ちが生まれる[26]」ようになったと手厳しく批判している。理想の政治共同体を地上に創造しようとして「無秩序状態」を生み出した革命の背理はどこに起因していたのか。

錯綜するサン=シモンの議論において一貫しているのは、コンドルセ(Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, marquis de Condorcet, 1743-94)の『人間精神進歩史』(*Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*, 1794)を例にとって、次の三点に合理主義者の誤りを求めていることである。第一に、理性は「約束によって定めた記号の体系」を用いざるを得ず、その習得は「知性のあらゆる仕事のうちで最も時間を要する[27]」こと、すなわち理性の非効率を等閑視している点である。第二に、「老衰したカトリック教の欠陥に気をとられて、この同じ宗教はヨーロッパ人がローマの習俗の復興、北部に住む蛮族たちの文明および彼らの住居する土地の開発刷新などの点で恩恵をこうむった制度である[28]」こと、すなわち宗教の効能を忘れている点である。そして第三に、人間の知性は「無限の完成可能性」をもっているが、すべての人間がいまそれを十分に発現させているわけではないということである。「コンドルセは、一般知性の発達が個人の知性の発達と同じ法則に従ったこと、それは個人のうちに小規模な形で、人類のうちに大規模な形で行われている同一の現象であること、を理解しなかった[29]」。それゆえ革命の失敗は、合理主義に教導された結果、いまだ十分な発達を見ない諸個人の理性を過信し、その収斂結果だけで理想の人間的共同性は実現可能だと考えてしまった点に原因があったのである。理性に基づく新しい社会を志向するという意味では、サン=シモンは依然として合理主義者であったといえる。しかし知性はすべての人間において均等に発現するわけではない以上、社会を導く精神はより優れた知性を発達させた人間のものでなければならない。後にみるように、サン=シモンはそれを「科学者」に求めている。

サン=シモンを啓蒙合理主義の伝統に連なる思想家として理解し直そうとする際につねに桎梏となるのは、「ユートピア的社会主義」者というレッテルである。一般に「ユートピア的社会主義」とは、フランス革命とマルクス・エンゲルスの「科学的社会主義」の登場

---

26 『ジュネーヴの一住人からの手紙』LHGC, t I, 32-33／（1）55-56 頁。
27 『哲学的・心情的書簡』LPhSe, t I, 114／（1）286 頁。
28 『哲学的・心情的書簡』LPhSe, t I A, 116／（1）287 頁。
29 『哲学的・心情的書簡』LPhSe, t I A, 118／（1）288 頁。

の間に生まれた初期社会主義の一形態であり、特にフランス革命において農地均田・私有財産の否定・富の再配分・生産性向上のための機械化を主張した急進的平等主義者と目される政治運動家バブーフ（François Noël Babeuf, 1760-97）の思想の後継に位置するものと捉えられている[30]。言うまでもなくこのような規定は、エンゲルスが『空想から科学への社会主義の発展』で与えた説明に依拠したものである。

エンゲルスは旧体制を打破したフランス革命を理性による革命と位置付けつつ、19 世紀初頭のフランスを工業化の未熟な、したがって階級対立も目立たない時期とし、初期社会主義の建設者たちはこうした歴史的事情の影響下にあったという。この時代にはまだ封建的遺制が色濃く残っており、まずこれを除去するために、理性的に考案された完全な社会制度のモデルを押し付けることが必要であったが、このモデルそのものはいかなる理性的=科学的根拠にも基づいてなかった。「このようにしてこれらの新社会理論が「空想的=ユートピア的」であったのは、さしあたり仕方のないことで、かれらがその細目を描けば描くほど、それはますます純然たる幻想となった[31]」。

この単に「ユートピア的=空想的」であったがゆえに「純然たる幻想」に終わるという点が「ユートピア的」社会主義たるゆえんであるが、それがなおも社会主義である点をもって、エンゲルスはサン=シモンを「大いなる勇気と歴史的先見の明」の持ち主、またその発見を「天才的」と讃えている[32]。こうした評価のアンビヴァレンスは、エンゲルス自らが結論部で認めるように、彼があくまでも社会主義をブルジョワジーとプロレタリアートの激しい階級闘争の中から弁証法的に帰結するものとみなす「科学的社会主義」の立場から、その実現に向かう歴史に諸々の社会主義類型すべてを包摂しようと意図したことによる[33]。そこでまずは、「空想（ユートピア）から科学へ」というマルクス=エンゲルス的な図式の中でサン=シモンの思想を理解することの妥当性を確認してみる必要があるだろう。

ユートピア的思考をイデオロギー的思考と同じ虚偽意識(falsches Bewußtsein)の一変種と見たのは、知識社会学者 K・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』(*Ideologie und Utopie,* 1929）であった。マンハイムによれば、社会秩序が流動化し既存の安定した世界像が動揺するときに、現実と世界像のあいだの矛盾から逃避する手段が「イデオロギー」と「ユー

---

[30] 関嘉彦『（金鶏叢書６）社会主義の歴史１――フランス革命から 19 世紀末へ』（力富書房、1984 年）、27-34 頁参照。
[31] エンゲルス『空想より科学へ』（大内兵衛訳、岩波文庫、1966 年）、39 頁。
[32] 同書、41 頁。
[33] 同書、49 頁参照。

トピア」であるという。両者はどちらも現実そのものを正確に表象しない虚偽意識であることに変わりはないが、「イデオロギー」と「ユートピア」は、現実との間にどれくらいの距離があるかという点で区別できるという[34]。すなわち「イデオロギー」が現実を歪めて表象する虚偽意識であるにもかかわらず、依然として特定の社会生活様態に根ざしてこれを正当化するのに比して、「ユートピア」は現実を超越した理想の社会秩序を表象するがゆえに、「それが行動に移されると、そのたびに現存する秩序が、部分的もしくは全体的に破壊される[35]」ものだというのである。だが「ユートピア」と「イデオロギー」を科学――虚偽意識を退けてものをみようとする――に対置するという点では、マンハイムの知識社会学が属する新カント派的伝統[36]とマルクス主義の伝統に差はない。

概して「ユートピア」と「科学」とを対置させる傾向については、「ユートピア」概念の歴史的多様性を強調するK・クマーの分析に従って批判的な考察を加えることにしよう。クマーによれば、「ユートピア」とはあるべき理想や規範を説くための伝統的な文学手法である。プラトン(Platon, BC427-BC347)の『国家』はその典型だが、「千年王国」、「お菓子の国（貧者の理想郷）」、「黄金時代」、「アルカディア」のように、理想の伝統的範型は楽園のイメージであった。特にキリスト教の千年王国主義は、元来「ユートピア」が救済のような宗教的目的を具体的にイメージさせるためのものであったことをいまに伝えている。それがトマス・モア（Thomas More, 1478-1535）の『ユートピア』(*Utopia*, 1516)に至って、現実を批判するための価値基準・規範や実現するべき理想という実践的な意味を獲得する。“utopia”のギリシア語語源は否定辞“u”と「場所」を意味する“topos”からなり「どこにもない場所」を表すが、この“u”を“eu”（善い）と読み替えたとき、未来に投影された理想を現実と地続きにする「近代ユートピア」が成立した。クマーによれば、あらゆる社会・政治理論は、現実批判に科学的判断基準を組み込んだユートピア文学、すなわちサイエンス・フィクションという形式を有するのである[37]。

---

[34] カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』（高橋徹責任編集『世界の名著68 マンハイム／オルテガ』中央公論社、1979年）、159-170、181-197、209-219頁参照。
[35] 同書、309頁。
[36] 直江清隆「存在被拘束性と相関主義――マンハイムの文化社会学と新カント派価値哲学との関わり」、社会学研究会編集委員会『ソシオロジ』35巻2号（1990年）、新倉貴仁「存在拘束性のナショナリズム――丸山眞男と知識社会学」、東京大学大学院総合文化研究科相関社会科学専攻編『相関社会科学』第18号（2009年）参照。
[37] クリシャン・クマー『ユートピアニズム』（菊池理夫・有賀誠訳、昭和堂、1993年）、3-70頁参照。転換点としてのモアについては、同書、39頁、および179頁の原注1参照。

ユートピア文学に共通するのは、すでに解決への確信をもって貧困や分裂のような矛盾に満ちた現実を眺める点であるとクマーはいう。つまり、ユートピアニズムの核心にあるのは超絶的規範の高みにいる理性なのだ[38]。「ユートピア」とは、実現可能性のある別の社会秩序を描出して現実の「諸悪の組織的な相互連関とその治療法を示す」ことにより、社会を根本から再建する必要性に応えようとする[39]。それは「善き社会」を中心的テーマとするがゆえに、理論や思想に止まらずに大胆な社会改良へと向かう運動を鼓舞し、ときに破壊的で不穏当でさえある[40]。その点からいえば、エンゲルスがサン=シモンの思想に付した「ユートピア的」という形容は正しい。的外れなのは、「ユートピア」即ち幻想ないし非科学的という理解である。

サン=シモンに科学的な組織理論の先駆者を見るS・S・ウォリンは、経験論哲学の祖ベーコン（Francis Bacon, 1st Viscount St Alban, 1561-1626）やアメリカの行政学者H・サイモン(Herbert Alexander Simon, 1916-2001)の考え方との一致を指摘している[41]。サン=シモンの思想の基盤に「科学と産業」があることは、そもそもエンゲルス自身も指摘していた。実はエンゲルスも、「非科学的」だからという理由でサン=シモンの思想を批判するのではない。むしろ問題は、「〔科学と産業の〕両者が新しい宗教で結びあえば宗教改革以来破壊されていた宗教思想の統一が復興され、それは必然的に神秘的で厳格な教階制度的な「新キリスト教」になるはずである[42]」というサン=シモンの主張にあった。エンゲルスによれば、サン=シモンは「科学」だけでは理想の社会を実現できず、分裂した人々に再び普遍的紐帯をもたらすには、かつてキリスト教が果たしていた役割を継承する「新キリスト教」が必要だと考えている。しかし、そうして宗教と融合した科学は、民衆支配のための新しい「阿片」になりかねない。サン=シモンも影響されたベーコンの『ニュー・アトランティス』(*New Atlantis*, 1627)には、「ソロモン館」という科学者たちの疑似宗教的集団に統率されたユートピアが描かれている。サン=シモンの弟子だったオーギュスト・コントは、「人類教」を奉ずる科学的聖職者集団に教導された「実証社会」を構想した。エンゲルスはそれらの理想

---

[38] 同書、61−104 頁参照。
[39] 同書、145 頁。
[40] 同書、178 頁参照。
[41] Cf. Sheldon S. Wolin, *Politics and Vision* (Princeton: Princeton University Press, 2004), pp 313-330, 336-347. S・S・ウォリン『西欧政治思想史』（尾形典男・福田勧一ほか訳、福村書店、1994 年）、407-425、434-447 頁参照。
[42] エンゲルス前掲書、40 頁。

国家論の系譜を念頭におきながら、宗教と科学が融合すれば理想の政治が可能になるという思想を「空想的=ユートピア的」と呼び、その頂点にサン=シモンを据えたのである[43]。

しかしそれは杞憂にすぎない。サン=シモンによれば、人間の活動は「今日までいわば無意識的に、緩慢に、ぐずぐずと、いたって効果のあがらぬやり方で」なされてきたが「明日からは意識的に、より直接的でより効果的な努力によって[44]」おこなわれる。宗教が必要とされるのは、科学的啓蒙が十分に浸透するまでの話である。

> 実証科学がヨーロッパに導入される以前には、……国民大衆は神学的指導者に……なんでも相談し、彼らの決定に盲目的に従った。神学的指導者が唱える説は、すべてそのまま民衆の説となった。要するに、民衆は神学的指導者に絶対的な信頼をおき、精神的にまったく服従する習慣をもっていたのである。しかし実証科学が一定の発展を遂げたとき、この信頼と尊敬は……次々に科学者に移っていった[45]。

サン=シモンの「ユートピア」は、十全に開花した「実証科学」の精神により合理的に再編成される社会である。それこそが頓挫したフランス革命が完遂された暁に実現されるものなのだ。しかし啓蒙合理主義の先達たちですら、それに必要な二つの条件に気づいていなかったとサン=シモンはいう。一つは言うまでもなく〈産業社会〉である。「封建的・神学的権力は、社会に絆としての役を果たせるほどの力と信用とをもはやもっておらず」、「われわれの救済と革命の終結とを求めるべき」は「産業的思想」であり、「あらゆる思想とあらゆる努力が傾注されるべき唯一の目的は、産業に最も好都合な組織をつくること[46]」である。もう一つは、社会の合理的再編成というラディカルな運動の担い手の問題であるが、その答えは先の引用文にすでに明らかであった。つまり科学者である。

> 18 世紀に起ったことを検討する労をとっていただきたい。そうすればあなた方は、特権の根絶が『百科全書』――この時代の最も卓越した科学者と芸術家たちとが協力した著作――によって主としてもたらされたことを認めるであろう。ところで、かれらの努力

---

43 クマー前掲書、99–100 頁、およびウォリン前掲書、423 頁参照。ユートピアの社会学的位置づけについては、富永健一『思想としての社会学』（新曜社、2008 年）を参照。
44 『産業　第二巻』Indu. 2e, t I, 166／（2）342 頁。
45 『組織者第二分冊』Org. IIe, t II, 152-153／（3）351 頁。
46 『産業　第二巻』Indu. 2e, t I, 165／（2）341 頁。

が社会を解体するために必要とされたのに、彼らを補助者とせずに社会を再組織できるとすれば、極めて不思議なことだろう。／要するに、諸君、社会再組織にぜひとも必要な作業を開始すべきは、科学者である[47]。

サン=シモンの思想は、「空想的」であるがゆえに非科学的だったわけでなく、マルクス主義的な歴史の「科学」――生産力史観に基づいて資本主義社会から共産主義社会へと「必然的」に移行するという考え方――を欠いているという特殊な意味において非科学的であったにすぎないのである。

４．「百科全書」の精神

マルクス=エンゲルスの理論とサン=シモンの思想の間に有意味な共通点があるとすれば、人間的共同性の回復を希求するという意味での「社会」主義であると主張する論者は多い[48]。だがこの点でも、例えば少なくとも初期のマルクスが人間の「類的本質」を前提に、封建的身分制度をしりぞけるのみならず、最終的には階級のない社会の実現を追求していたのに対し、サン=シモンは有産者と無産者の区別に最後まで拘り続けたばかりか、後者を指して「最も無知な者たち」のような侮蔑的表現を用いたり、〈産業社会〉に占める科学者の地位を特別視したりする傾向が見られるがゆえに、ある種の貴族主義を指摘することができる。サン=シモンにとって階級とは、「産業」という語から予想されるような経済的階級であるだけでなく、合理的に再編され組織化された社会の構成員とこの社会の精神的指導の任にあたる教導者との、いわば政治的階級でもあった。

……有産者たちは数において劣っているとはいえ、諸君よりも多くの知識を持っているということ、そして公益のためには支配力は知識に比例して配分されるべきであるということに、注意していただきたい。諸君の仲間たちが支配していた時期にフランスで起

---

47 『社会契約論』アントロポ版未収録／（4）413 頁。

48 クマー『予言と進歩』（杉村芳美・牧田実・二階堂達郎訳、文眞堂、1996 年）、および菊谷和宏『「社会」の誕生――トクヴィル、デュルケーム、ベルクソンの社会思想史』（白水社、2011 年）を参照。

ったことを考えてごらんなさい。諸君の仲間たちはフランスに飢饉をもたらしました[49]。

サン=シモンが構想する新社会は、知性を尺度としたヒエラルキーに基づく一種のソフォクラシー社会である。これだけではプラトンの理想国家論と大差ないようにも見えるが、サン=シモンの場合は知性といってもプラトンのような神的ロゴスではなく、社会に「飢饉をもたら」さない程度に実用的な、「実証科学」的知識を操る能力であることに注意しよう。だがいずれにせよサン=シモンは、「社会(société)」「協同体(association)」「コミュヌ(commune)」という言葉を用いるときにも人々が垂直的に統合された状態を考えており、無階級社会の実現を目指す平等主義者でなかったことだけは確かである。

そのようなサン=シモンの思想をなおも社会主義の系譜に位置づけることを可能にしてきたのは、個人主義や自由放任経済に反対する思想潮流を包含する広義の「集産主義（コレクティヴィスム）」という言葉の用法である[50]。フランスにおける集産主義の伝統についてはすでに前章で述べたが、ここでは主としてその政治的な側面を考察するために、19 世紀中盤のイギリスにおける集産主義を「教義を有せざる社会主義[51]」と呼んだ A・V・ダイシー（Albert Venn Dicey, 1835-1922）の説明に依拠することにしよう。

ダイシーの『法律と世論』(*Lectures on the Relation between Law and Public Opinion in England during the Nineteenth Century*, 1905)によれば、イギリスの「立法的世論」は、きわめて現状維持的な性格の強かった「立法休止時代」ののち、ベンサム（Jeremy Bentham, 1748-1832）の功利主義にもとづく「個人主義」からヴィクトリア朝期の「集産主義」へと変移した。「ブラックストーン(William Blackstone, 1723-1780)のトーリイズムはパターナルな政治の歴史的追憶であったが、ベンサム主義は法律改正にかんする一学説であり、集産主義は社会の再創造への願望である[52]」。ダイシーのいう集産主義とは、地主階級の守護者に過ぎなかったトーリー党を市民階級と労働者階級の対立を超克する国民政党へと転身させたディズレーリ(Benjamin Disraeli, 1st Earl of Beaconsfield, 1804-81)の政治を指している。台頭著しい労働者階級が政治的発言力を増す中で、ディズレーリは第二次選挙法改正（1867 年）を断行してマスデモクラシー化を推進しつつ、同時に積極的な社会・福祉政策（1833 年の工

---

[49] 『ジュネーヴの一住人からの手紙』LHGC, t I, 41-42／（1）62 頁。
[50] 阪上孝『フランス社会主義』（新評論、1981 年）、クマー『予言と進歩』を参照。
[51] A・V・ダイシー『法律と世論』（清水金二郎訳・菊池勇夫監修、法律文化社、1972 年）、257 頁。
[52] 同書、110 頁。

場法の制定や 34 年の救貧法改正、そしてこれに続く労働法典の完成）を展開し、あらたに有権者となった労働者大衆の中にトーリーの支持基盤を創造することに成功する。集産主義は単に政治的近代化運動であっただけではなく、就労年齢・労働時間・休息日などを画一化することで国民としての標準的な生活様式を形成する、一種の文化・社会運動の様相を呈していた[53]。ダイシーもいうように、それはイデオロギーの違いを超えて、「国家が活動ないし干渉すれば利益を得られるという国民大衆の信念[54]」に基づく政治体制だったのである。

デモクラシーと近代パターナリズムを融合させることにより労働者階級を既存の統治構造に吸収し、階級横断的な「一つの国民(One Nation)」を創設することがイギリス集産主義の特徴である。このダイシーの分析は、必要な修正を付加すればサン=シモンが棹差すフランス型集産主義の伝統にも適用可能である。フランスの集産主義は、伝統的な身分制秩序を前提に――モンテスキュー(Charles-Louis de Montesquieu, 1689-1755)の表現を借りるなら「事物の配置によって(par le disposition des choses)[55]」――、パターナリスティックな統治を「ノブレス・オブリージュ」（高貴な身分にともなう義務）の一環として展開してきたが、この前提はフランス革命を迎えるまでもなく崩壊しつつあった。トクヴィル（Alexis-Charles-Henri Clérel de Tocqueville, 1805-1859）によれば、革命により旧体制の「領主は、古くからの権力を奪われていたから、古くからの義務をも免れた」のであり、「もはやだれも、農村の貧民の世話をする法律上の義務を負っていなかった[56]」。貴族に代わって中央政府が貧困者救済の任にあたるようになり、農民への救済基金を割り当て、飢饉への備蓄を設け、生産性改善の方策を時に強制的に実践した[57]。中央政府だけが、その貧困に積極的に配慮しようとしたのである[58]」。こうして「ノブレス・オブリージュ」という貴族の倫理が近世国家の政策原理へと昇華するのに伴い、集産主義は革命後もフランス政治の要として継承されていった。トクヴィルは「行政的中央集権は旧体制の産物であ[59]」ると述べている。す

---

[53] 同書、222-283 頁参照。ダイシーの集産主義論については、中金聡「イギリス保守主義と近代化――《ポスト集産主義》的条件下の政治的伝統」（国士舘大学政経学会編『政経論叢』104 号、1998 年）を参照。
[54] ダイシー前掲書、260 頁。
[55] モンテスキュー『法の精神（上）』（野田良之ほか訳、岩波文庫、1989 年）、289 頁。
[56] トクヴィル『旧体制と大革命』（小山勉訳、筑摩書房、1998 年）、158 頁。
[57] 同書、158-159 頁参照。
[58] 同書、158 頁。
[59] 同書、147 頁。

でに旧体制において、国王顧問会議が行政を一元的に統括しており、領主が次第に権限を失う一方で国王勅任の地方長官が権力を拡大し、財務総監が地方長官を総括し、すべての行政機関の行動が事前許可に依り、行政と役人に関する特別裁判所が設置され、行政機構のみならず商業活動もパリに集中されていた[60]。革命は集権機構のまわりに聳え立つ封建的制度を取り除くだけで事足りたのである[61]。

サン=シモンは、この集産主義の遺産を彼の時代に相応しく『百科全書』(*L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres,* 1751-1772）の精神により刷新する必要があると考えていた。ディドロ（Denis Diderot, 1713-84）とダランベール（Jean Le Rond d'Alembert, 1717-83）を中心に 18 世紀フランスの一大思想運動となり、ルソー、ヴォルテール（Voltaire, François-Marie Arouet, 1694-1778）、ケネー(François Quesnay, 1694-1774)といった一流の知識人を巻き込んだ「百科全書」運動は、サン=シモンにも大きな影響を与えている。しかし彼の主たる関心は『百科全書』の個別の内容にあったのではなく、この書物の体裁そのものに向けられていた。その真の意義を説明したサン=シモンの言葉を、デュルケムは『社会主義およびサン=シモン』(*Le Socialisme, sa définition, ses débuts. La doctrine saint-simonnienne*, 1928)で引用している。

> よい百科全書とは、人間的知識の完全な集積であって、しかもそれは、読者が、均等に配分された各段階を通じて、もっとも一般的な科学の概念から次第に下降して、ついにはもっとも特殊的なそれにいたるように、配列されているものであるべきだろう[62]。

包括性、有機的統一、ヒエラルキーを特徴とするこの「百科全書」型の知のシステムが社会編成に投影されるとき、それは単純な均質的社会とは明らかに質的に異なる、近世フランスの社団国家をモデルとした能力主義的な社会となるはずである[63]。サン=シモンから

---

[60] 同書、147-157、184-188、206-212 頁参照。
[61] 同書、184 頁参照。
[62] エミール・デュルケム『社会主義およびサン=シモン』(森博訳、恒星社厚生閣、1977 年)、116 頁。『サン=シモン著作集』の邦訳では次のようになっている。「よい百科全書は、読者が、等しい感覚の諸段階によって、最も一般的な科学的概念から、最も特殊的な観念にまでおりていけるような、またその逆ができるような順序に配列されたもろもろの人間知識の完全な収録であろう」(「百科全書についての覚書」t I, 147-148／ (1) 214 頁)。
[63] 白瀬小百合「封建体制から産業体制へ――サン=シモンの社会思想」、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部ドイツヨーロッパ研究室『ヨーロッパ研究』(2013 年)、参照。

多大な知的感化を受けたデュルケムは『社会的分業論』(*De la division du travail social*, 1893)の中で、フランス革命のイデオローグたちが夢見たような単一の理性的原理に基づく均質的な社会編成が適用できるのは、逆説的にも、未開社会のような同質性と画一性に基盤を置く単純な社会だけであり、社会的分業が複雑になるにしたがって、巨大社会の統合や統一は諸々に分化した職能の相互補完作用を通じてはじめて達成されると主張した[64]。これはサン=シモンの思想の根幹にある興味深い特質を言い当てている。すべての人間がその職能に応じて社会の物質的基盤の生産に参加するサン=シモンの〈産業社会〉は、まさしくそのような分業と能力主義的ヒエラルキーに基づいて空前絶後の巨大な人口を養う近代集産主義システムとして理解されるべきものであった。

「百科全書」型の知のシステムには、単に伝統的身分を否定するのでなく、それに代わる知識を持てる者と持たざる者との新たな垂直的な人間関係の想定があり、知識人が「編集部」となって社会を教導するという発想が認められる[65]。この『百科全書』型啓蒙主義の普及に尽力したのはコンドルセであった。真の共和国の実現には革命政府内の急進派と保守・宗教勢力の双方から距離をおく理性的人間が必要だと考えたコンドルセは、万人に開放された教育制度を考案し、のちの国民教育論への道を開いた[66]。サン=シモンはこの面でのコンドルセの思想的営為を「王と僧侶の権力を排除した社会組織を全人民になんとしてでも採用させ[67]」るものだと擁護し、『人間精神進歩史』を「人間精神の最も素晴らしい産物のひとつ[68]」と賞賛した。そして過激な共和主義者として獄死したことを惜しみ、「コンドルセが政治から手を引き、自分の部屋に閉じこもったとしたら、彼はその生来の能力を自分の幸福と人類の幸福のために有益に用いたであろう[69]」とまで述べたのである。

しかしサン=シモンが肯定したのはあくまでも「百科全書」の精神であって、公刊された現実の『百科全書』には反面教師以上の意味を見ていなかった。

---

[64] エミール・デュルケム『社会分業論（上・下巻)』(井坂玄太郎訳、講談社、1984 年)、参照。
[65] 寺田元一『「編集知」の世紀――18 世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』(日本評論社、2003 年）を参照。
[66] コンドルセ「公教育の全般的組織についての報告と法案」(阪上孝編訳『フランス革命期の公教育論』、岩波書店、2002 年)、参照。また本節執筆にあたり同書所収の阪上孝の解説を参照した。
[67] 『19 世紀の科学的研究序説』ITS19S, t VI, 64／（1）119 頁。
[68] 『19 世紀の科学的研究序説』ITS19S, t VI, 65／（1）120 頁。
[69] 『19 世紀の科学的研究序説』ITS19S, t VI, 65／（1）119 頁。サン=シモンの宗教観・社会観・階級観・組織観には、コンドルセ「公教育の全般的組織についての報告と法案」の影響が顕著に見られる。

18 世紀の百科全書は、その時代にとっては良き、現代にとっては悪しき、精神においてつくられた。それは、当時の知識に見合った、しかしその後に獲得された知識が思いつかせたものよりずっと劣った、計画に従ってつくられた。その著作全体のうちには、序論のほかには百科全書的なものが何ひとつない。この序論と著作の本体との間には巨大な空隙が残されており、著作の本体は総合辞典でしかない[70]。

結局のところ『百科全書』が成功したのは、「宗教制度と王制とが国民の知識よりもずっと遅れていたので、必要かつ不可避的になっていた革命を引き起こす原因になった[71]」という事情のためでしかない。これから書かれるべき 19 世紀の「新百科全書」は、「新しい諸制度に対する尊敬と愛着心とを起こさせるであろう。この著作のみが、きわめて望ましいこの結果を、一般的な仕方で、迅速に、効果的に生み出すことができ、哲学的な諸観念の全体を一新でき、もろもろの精神が 18 世紀中にとった方向――本質的に革命的であった方向――を完全に変えることができる[72]」。一連の「百科全書」論考を執筆していた時点では、サン=シモン自身にも新しい啓蒙の展望が明確になっておらず、さしあたりベーコン的な経験科学とコンドルセ的な人間精神の進歩に対する素朴な信頼につき動かされていただけに見える[73]。しかし数年後の『ヨーロッパ社会の再組織について』（*De la réorganisation de la société européenne*, 1814）では、「18 世紀の哲学は革命的であった。19 世紀の哲学は組織化的（organisetrice）でなければならぬ[74]」という今日でも引用頻度の高い一文で啓蒙の目的が決定的に明瞭にされている。革命という暴力的手段によらず、したがって社会の根本的な作りかえではなく、人間精神の進歩を信じ、啓蒙された支配者層が「実証科学」に基づいて社会を漸進的に改良する――この「組織化(organization)」の哲学によってサン=シモンは、社会構造の根本的転換を求めるマルクス主義的社会主義から最も遠いところに位置

---

70 『百科全書についての覚書』ME, t I, 148-149／（1）214 頁。
71 『新百科全書』NE, t VI, 330／（1）231 頁。
72 『新百科全書』NE, t VI, 330／（1）231 頁。
73 「19 世紀の百科全書を作成する場合に従わなければならぬ原則は、科学はその全体においてもその部分においても観察に基礎をおかねばならない、という原理である。それゆえ、百科全書に基礎を与える役を果たさなければならないのは、人間精神の進歩の分析である。科学のこの大著の区分は、この分析によって与えられなければならない」。『百科全書についての覚書』ME, t I, 149.（1）215 頁。
74 『ヨーロッパ社会の再組織について』RorgSE, t I, 158／（2）200 頁。

し、意外にもボナール（Louis Gabriel Ambroise, Vicomte de Bonald, 1754-1840）やメーストル(Joseph-Marie, Comte de Maistre, 1753-1821)のような同時代の保守思想家たちの有機体論的な社会進化論に近づくとさえいえるだろう。

後年の著作で多用する「産業(industrie)」概念――〈産業社会〉、〈産業体制〉、〈産業者〉――に先立ち、サン=シモンが社会の「組織化」に言及したことは重要である。サン=シモンにとって「組織化された社会」とは、身分や階級のない状態のことではなく、多様な人間たちが公共の利益の追求において調和している社会をいう。

> 貴族の利害と第三身分の利害はこれまで常にきわめて相異なり、……今なおそうである。……社会を構成する二つの階級の間には現在なお闘争が存在しており、この闘争は公益(intérêt publique)にとって言うまでもなく極めて有害である。……もはや国民が二つの階級に分割されておらず、もはや国事がまったく対立した原理によって運営されなくなる時代を、われわれが早めることができれば幸いである[75]。

『組織者』(*L'Organisateur*, 1819-20)では、身分や階級のような社会集団間の利害対立が未だ解消されない現実は「逆立ちした世界(le monde renverse)[76]」と形容される。では諸集団に共通する「公益」はどうすれば実現できるとサン=シモンは考えるのだろうか。

> すべての人間が抱いている関心は、生活の維持と福祉とに関わる関心であります。この関心はすべての人間が知っていて従おうとする唯一のものであり、万人が共通に熟考し、それにもとづいて行動しなければならない唯一のものであって、それゆえ政治をおこなう際の基軸となしうる唯一のものであり、かつまたすべての社会制度とすべての社会的事柄を批判する場合に唯一の尺度として用いられなければならないものです。／それゆえ政治は、二語で要約すれば、「生産の科学(la science de la production)」であります。つまりあらゆる種類の生産に最も好都合な秩序の創出を目的とする科学です[77]。

---

[75] 『コミュヌ』Com, t VI, 386-387／（3）153-154 頁。コンドルセは「公教育」で以下のように述べる。「人類は依然として、二つの階級――自分で考える人々の階級と鵜呑みにする人々の階級、主人の階級と奴隷の階級――に分かれたままだ」（コンドルセ「公教育の全般的組織」、阪上孝編訳『フランス革命期の公教育論』、18 頁）。

[76] 『組織者第一分冊』Org. 1e, t II, 24／（3）267 頁。

[77] 『産業　第二巻』Indu. 2e, t I, 188／（2）347 頁。

晩年の主著『産業体制論』(*Du système industriel*, 1820-22)および『産業者の教理問答』（*Catéchisme des industriels*, 1823-24）でサン=シモンが追求したのは、まさしくこの「生産の科学」としての政治学であった。政治はいまや、万人の関心事である「生活の維持と福祉」への要求に応え、人間の知識と労働力の最適な配置を科学的に導いて「あらゆる種類の生産に最も好都合な秩序」を作り出す営み、すなわち人間の社会生活を根底から「組織化」するテクノロジーの問題となるのである。

たしかにサン=シモンの場合には、資本家と労働者はイギリスのように深刻な階級対立の関係にはなく、来たる〈産業社会〉の中でともに〈産業者(industriels)〉として富の生産に邁進するパートナーとみなされている。しかしだからこそ労働者は、たとえ政治的階級としては統治の客体でしかないにしても、国家によって保護されるべき最も重要な対象となる。「ノブレス・オブリージュ」の観念に基づくパターナリスティックな集産主義の伝統は、サン=シモンの〈産業社会〉において科学主義に基づくテクノクラシーとして甦るのである。近代市民革命を経た社会が露呈した階級分化という現実に、マルクス主義的社会主義がさらなる革命による超克という解答で応じたのに対して、近代集産主義は同じ問題を科学による有機的社会統合によって解決しようとしたのだといえるだろう。

おわりに

かつてマンハイムは、「民族や国民にかわって階級が登場してくる」と述べた[78]。しかし現実の歴史はそれとは逆のことを証している。すなわち、身分制を打破して平等社会の実現を目指した近代市民革命が上層ブルジョワジーのみの解放にとどまり、あとに残された階級社会という現実をめぐって、「階級なき社会」という社会主義の回答と「一つの国民」というナショナリズムの回答とがせめぎあう状況が醸成されたのである。この思想史的図式において、従来もっぱら前者の系譜の一エピソードとして理解されてきたサン=シモンの思想は、いまや後者のコンテクストの中に位置づけ直して理解することができる。〈国民〉が国家への集合的な帰属意識によって結ばれた人々のことであるとしたら、この意識

[78] マンハイム前掲書、178 頁。

は何よりもまず、人々の「生活の維持と福祉」へのニーズを物質的に満たす生産のために組織化された社会の成立を前提とし、自らもこの生産過程に参加して社会の維持・拡大に貢献する一員となることにより生じるだろう。サン=シモンが革命の廃墟の中で構想した〈産業社会〉論は、それを可能にするポスト市民革命期の最も有力な理論であった。

しかもそれは、当初からきわめて遠大な展望を持つ理論であったといえる。ナポレオン戦争がヨーロッパを荒れ狂う最中に書かれた「百科全書の計画」（“Projet d’Encyclopédie,” 1810）において、サン=シモンは、民族や言語の共通性を前提とした文化的ナショナリズムを主張したフィヒテに反論してこう述べている。

> ヨーロッパ社会の組織とは、ヨーロッパの諸国民がそれぞれ互いに依存しあいながら、しかも特定のどの国民にも依存しないような、一つの政治制度によって結び付けられている状態をいう。それは、これら諸国民のそれぞれの国家組織が一つの原理に基礎づけられているような状態をいうのである[79]。

ヨーロッパに恒久的な秩序と平和を樹立する唯一の方法は、諸国民を単一の国家組織の下に解消することでも、民族共同体を個別の主権国家として自立・並存させることでもない。各国がそれぞれに〈産業社会〉として「百科全書」のように有機的かつ科学的に組織化され、国内のあらゆる社会階層に属する人々が各々その職能を通じて生産過程に関与する〈産業化〉の原理を貫くことが、ひいてはヨーロッパ大の諸国民の連帯をもたらす。〈産業社会〉としての国民国家は、すでにその内部にインターナショナリズムへの展望を有していたのである。

---

[79] 「百科全書の計画」PE, t VI, 315／（1）265 頁。

第３章　サン=シモンの〈産業体制〉論

はじめに

サン=シモンの思想を総覧した英語圏で唯一の研究書を著したＦ・マニュエルは、そのむずかしさを繰り返し訴えている。彼の思想は、ジャコバン派失脚後に政治的混迷をきわめた総裁政府時代に現れ、今では忘れ去られた無数の思潮を素材にしてできており、その無節操ぶりはさながら稀代の「思想標本製作者」である[1]。その一方で、サン=シモンの著作から社会主義、実証主義、歴史主義など 19 世紀を代表する思潮が誕生したことを思えば、彼の言説はルソーのそれと同様に、後世の思想にとっての「共通の貨幣」であるともいえる[2]。さらにその上に、サン=シモン自身の思想家としての欠陥が加わる。まず言葉で思想を表現する能力に乏しいため、彼の繰り出す概念は常に正確さを欠いている[3]。論理に一貫性がなく、実証科学の重要性を説きながら自分では実証主義の範疇を簡単に踏み越え、また宗教を批判したかと思えば擁護した[4]。サン=シモンの著作に多々見える矛盾撞着を、マニュエルは最終的に思想家自身の個人的特質――「直感の人」あるいは「統合失調症[5]」――に起因するものと理解している。

しかしそのサン=シモンが、時代の思想的課題を察知し、その解決に必要なものを玉石混交の雑多な素材から取捨選択する直感に秀でていたことはマニュエルも否定しない。サン=シモンの著作の中にある相反する性質の共存は、思想家個人の人格的特質である以前に彼が生きたフランス革命後という時代の本質的要素であり、その忠実な反映であるからこそサン=シモンの思想の多面性はむしろ評価されるべきなのだともいえるだろう。

言うまでもなく、この多面性が収斂するところに結実したのが〈産業社会〉あるいは〈産業体制〉の構想である。サン=シモンの関心は社会一般にではなく、時代が必要としている社会とはどのようなものか、そしてそれを可能にする条件とは何かという、歴史的かつす

---

[1] フランク・マニュエル『サン=シモンの新世界（上巻）』（森博訳、恒星社厚生閣、1975 年）、91-95, 108-109 頁参照。
[2] 同書、1-9 頁参照。
[3] 同書、94-95、および 297-298 頁参照。
[4] サン=シモンは若き日にカトリシスムを批判して「ニュートン教」なるものを構想した（『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』LHGC, t I, 11-60／(1) 39-74 参照）。晩年の宗教擁護論については、『新キリスト教』Nc, t III, 98-192／(5) 239-295 頁参照。
[5] マニュエル前掲書、8 および 247 頁。

ぐれて実践的な問いにあった。後にサン=シモンの著作が広く読まれるようになったのも、彼が〈産業化〉という人類が迎えた新局面を正面から受けとめる新しい社会哲学の祖とみなされたからであり、近年では、サン=シモン主義を公定イデオロギーに掲げて国土産業化を推進した第二帝政が、フランスを真の近代的な国民国家へと変貌させたことに大きな注目が集まっている。しかし、サン=シモンの思想のそのような歴史的意義が認識されていなかった当時は、〈産業社会〉の到来などまだ絵空事にすぎず、サン=シモンその人も、同時代人のバブーフやフーリエらとともに奇矯な予言者の一人とみなされざるを得なかったのである。

以下では、サン=シモンの〈産業社会〉あるいは〈産業体制〉の構想を詳述するにあたり、それが同時代のどのような思想を摂取し、またどのような政治的立場を仮想敵としていたのかに注目する。この作業を通じて明らかになるのは、いまもなお毀誉褒貶の渦中にあるサン=シモンの「新キリスト教」が、宗教的反動勢力を牽制しながら、革命後の道徳的真空状態を埋めて秩序を確保するためのプラグマティックな提言であったということである。サン=シモンの予言した〈産業社会〉あるいは〈産業体制〉の実現は、歴史の法則に従って必然的に帰結するのではなく、様々な政治的手段に訴えてはじめて可能になる。それをサン=シモンの後期著作群の解読によって確認することが本節の課題である。

１．フィジオクラシーの遺産

未だ十分な発達を見ない人間の理性を過信した革命期の啓蒙合理主義思想に対して、サン=シモンがアンビヴァレントな態度をとった経緯はすでに前章で見た通りである。とき同じくしてフランス社会にも啓蒙合理主義への不信が湧き起こり、革命期に反動的と謗られた一群の思想家たち、例えば宰相ネッケル(Jacques Necker, 1732-1804)の娘でフランスにおけるロマン主義の紹介者であったスタール夫人（Anne Louise Germaine de Staël, 1766-1817)、近年M・フーコーによって注目され復権著しい「観念学（イデオロジー）」の創始者デステュット・ド・トラシー(Antoine Louis Claude Destutt, comte de Tracy, 1754-1836)、「人間の科学」を唱えた医学者ジョルジュ・カバニス(Pierre Jean Georges Cabanis, 1757-1808)らの復権を促しつつあった。彼らもまた啓蒙主義の末裔であり、イギリス経験論の流れをくむ穏健な理性の信奉者であったが、その一方で、諸学は単一の抽象的な原理によって統合されるべきではな

く、再建されたアカデミー・フランセーズ(l'Académie française)の指導の下におかれなければならないと主張し、また一様にナポレオンを革命の混乱を終息させる新時代の指導者として歓迎した[6]。サン=シモンは『19 世紀の科学的研究序説』(*Introduction aux travaux scientifiques du dix-neuvième siècle*, 1807)において、彼らのポスト啓蒙主義を次のように要約している。

> 皇帝は政治的首長であるとともに、人間の科学的首長である。一方の手に彼は絶対に誤つことなき確実な羅針盤をもち、他方の手に知識の進歩の敵対者を根絶する剣をもっている。彼の王座のまわりには最も勇敢な名将たちとともに世界の最もすぐれた科学者たちが並ばなければならない。ナポレオンを長として戴く学士院(アカデミー)は、ナポレオンの指揮のもとに、彼の後継者となるいかなる人物によっても決して同等なものをつくることができぬような、広大にして壮麗な科学的大建造物を築き上げねばならない[7]。

マニュエルは、折しも人間に関する一般理論への志向が高まって生化学や有機体研究がもてはやされており、カバニスの「人間の科学」に顕著に見られる「自然の機関(オルガノン)」としての人体という考え方が、サン=シモンの夢見た諸理論を包括する一般理論のモデルになったと解釈している[8]。しかしサン=シモンは、この時すでに保守派イデオローグたちの思想に共鳴しつつも飽き足らないものを見ていたように思われる。結局彼らには、「人間」(カバニス)、「観念」(ド・トラシー)、「モラル」(スタール夫人)の成立をそもそも可能にする物質的な経済基盤への科学的洞察がなかった。サン=シモンはそれを求めて、前世紀のフィジオクラシー(physiocratie)の研究に没頭していく。

フィジオクラシーを奉じる思想家たちは当時「エコノミスト」と呼ばれ、後にケネー(François Quesnay、1694-1774)の著作の標題にちなんで「フィジオクラット(Physiocrates)」と呼ばれるようになった。フィジオクラシーといえば「重農主義」という訳語が定着して

---

[6] 以下を参照。マニュエル前掲書、111-116 頁。村松正隆「感覚性・共感・模倣――カバニスの人間学を巡って」、『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』創刊号(2003 年)、103-108 頁。泉利明「文学の過去と現在(二)――スタール夫人」、『言語文化論叢』第 10 号(2002 年)。

[7] 『19 世紀の科学的研究序説』ITS19S, t VI, 17-18/(1) 97 頁。

[8] マニュエル前掲書、205、226、317、327-328 頁参照。ただし、ナポレオンと最終的に訣別したイデオローグたちとは異なり、正統アカデミズムの外で生涯を過ごし権力の庇護を受けることができなかったサン=シモンは、終生ナポレオンに社会の真の統治者、したがって学知の統合者としてのイメージを抱きつづけた。マニュエル前掲書、237-238 頁参照。

いる経済学説だが、元来は、社会を自然有機体の一部とみなし、自然の事象すべての起動因である「自然の力（physeos kratesis）」を探求する一大形而上学体系である。その創始者となったケネーは、巨大帝国の永続的統治形態の規範を「天」に尋ねる古代中国思想に影響を受け、身分制、王権、カトリック教会のような既存制度をも自然の一部として前提しながら、その下でなおも人間の自由の領分を確保するという近世フランス的な課題に促されてフィジオクラシーを唱えるに至った。ケネーによれば、自然にかなった経済は、「自然法」に制約された生産のレベルで諸利益を均衡させることにより、秩序を維持しつつ発展する。したがって国家は、その隆盛のために、すべての経済の基盤となる農業生産を最重要視しなければならない[9]。フランス語で「エコノミー」という用語が狭義の「経済」を意味するにとどまらず、広く政治社会とその組織的管理の技術をも意味するようになったのは、ケネーのフィジオクラシーの思想が当時かなりの人気を博したことにもよる[10]

マニュエルもサン=シモン（あるいはカバニス、ド・トラシー、スタール夫人）へのフィジオクラシーの影響を認めているが、もっぱらそれをニュートン力学の 19 世紀的受容形態（シャルル・フーリエが社会的紐帯として働く力にあたえた「情念引力」という命名がその典型である）という自然科学的な側面に限定されたものと解釈している[11]。しかし、少なくともサン=シモンの場合、フィジオクラシーはそれに尽きるものではなく、むしろ経済思想を越えて政治思想的な発想の源にもなっている。特に彼に最も大きな感化を及ぼしたのは、能力制（メリトクラシー）社会の確立によって君主制を改革するというフィジオクラシーの思想であっ

---

[9] 久保田明光『重農学派経済学』（前野書店、1959 年）、横山正彦『重農主義分析』（1958 年、岩波書店）、および安藤裕介「18 世紀フランスにおける統治改革と中国情報――フィジオクラットからイデオローグまで」、『立教法学』第 98 号（2018 年）、1-19 頁参照。

[10] 倉方秀憲ほか編『プチ・ロワイヤル仏和辞典』（旺文社、1986 年）によれば、economie の意味には「経済（学）、節約、倹約、（複数形で）貯金」の他に「構成、構造；体系」があり、用例として economie du corps humain「人体の構造」／economie d'un roman「小説の結構」が挙げられる。ケネーの影響力の一端は、economie の近代的語義を説明したルソーの文章にも現れている。「エコノミー ECONOMIE または OECONOMIE（道徳的および政治的）という言葉は、家を意味するオイコス oikos と、法を意味するノモス nomos から来たもので、もともとは、家族全体の共同利益のための、賢明で法にかなった一家の統治を意味するものにすぎない。その後、この用語の意味は、国家という大家族の統治にまで拡張された。この二つの意味を区別するために、後者の場合を一般エコノミーまたは政治的エコノミーと呼び、前者の場合を家庭エコノミーまたは私的エコノミーと呼ぶ」。ルソー『政治経済論』（阪上孝訳『ルソー全集』第 5 巻、白水社、1979 年）、63 頁（ただし訳語を一部変えた）。なお「エコノミー」概念の多義性については、杉山吉弘「エコノミー概念の系譜学序説」、『札幌学院大学人文学会紀要』第 97 号（2015 年）も参照。

[11] マニュエル前掲書、205-206、317-318 頁参照。

た。

この思想は18世紀に「商業社会」という観念とともに育まれた。諸利益の相互依存性に着目してホッブズ的な「万人の万人による闘争」を防ぐという発想は、フランスではモンテスキューにまで遡る前史があり[12]、フィジオクラシーと同時代に展開されたスコットランド啓蒙運動も、「穏和な商業」にふさわしい秩序の統治原理を模索していた[13]。人間の利己心が商取引によって次第に馴致され、文明化されていく事実は、ケネーの場合にも重要視されている。農民は「自己の利益と能力、土地の性質に見合った生産物を自分の畑で自由に耕作する」とき「可能な限り最大の収穫[14]」をもたらす。所得がますます増加することは「商人や職人に訴えかけ、彼らの仕事に見返りを与える[15]」のであり、「兵士は十分な手当てを受け取ってこそ、よく命令を聞き、訓練を受け入れ、士気大いに盛んで勇猛果敢になることができる[16]」。これはすべて、人間の社会生活が基本的には分業および商取引という経済的条件の下に成立していることを意味する。「社会に生活する各人は、自分の労働だけで必要なものをすべて補うことはしない。そうではなくて、自分の労働が生産したものを販売することによって、自分が欠いていたものを手に入れるのである。したがって、あらゆるものは取引されうるものになり、人間相互の交換によって富となる[17]」。この思想は最終的に、身体・動産・土地の三つの所有権を行使する自由の擁護という原則に結晶化するが、ケネーはそれを「後見的権力」たる君主の統治原理とみなし、身分特権の政治を否定した。こうしてフィジオクラシーには、諸特権を活用して社会を統治する当時の社団国家フランスの現実に挑戦し、自然的秩序に基づく統治の科学を修得した官僚集団による中央集権的体制、すなわち「合法的専制」を正当化する思想という一面がある[18]。

---

[12] 安藤裕介「フィジオクラット」、『岩波講座政治哲学２――啓蒙・改革・革命』（犬塚元責任編集、岩波書店、2014年）、御崎加代子『フランス経済学史――ケネーからワルラスへ』（昭和堂、2006年）、アルバート・O・ハーシュマン『情念の政治経済学』（佐々木毅・旦祐介訳、法政大学出版局、1985年）、参照。モンテスキューはこう主張している。「商業の自然の効果は平和へと向かわせることである。一緒に商売をする二国民はたがいに相依り相助けるようになる。一方が買うことに利益をもてば、一方は売ることに利益をもつ。そしてすべての結合は相互の必要にもとづいている」（モンテスキュー『法の精神（中）』（野田良之ほか訳、岩波文庫、1989年）、202頁）。

[13] 村松茂美「フレッチャーにおける「国民的政治共同体」と国際世界」、『啓蒙と社会――文明観の変容』（佐々木武・田中秀夫編、京都大学学術出版会、2011年）、81頁参照。

[14] ケネー『経済表』（平田清明・井上靖夫訳、岩波文庫、2013年）、224頁。

[15] ケネー『「経済表」以前の諸論考』（坂田太郎訳、春秋社、1950年）、161-162頁。

[16] ケネー『経済表』、272頁。

[17] ケネー『「経済表」以前』、221頁。

[18] 安藤前掲論文、79-100頁参照。

さて、フィジオクラシーの影響は、サン=シモンの〈産業社会〉構想の最初の体系化の試みとなった『産業』(*L'Industrie,* 1816-17)に顕著に見られる。例えば、農業は「それ一つだけで、産業の他のすべての部門をひとまとめにしたよりも比較にならぬほどずっと重要[19]」なものとされ、農業の事業者向けの個別融資を行う銀行の設立や、農地の動産化を提案する一方、君主を諸産業従事者の「後見人」と位置づけるところは、ケネーの主張の受け売りとさえいいうる[20]。さらにサン=シモンは、所有権こそは「国民的」幸福の基礎であるがゆえに、それが法律によって保護されなければ社会は「暴君的に統治される」といい、自由と富は「社会全体の最大の福祉のために」不可欠のものであると主張する[21]。その一方、復古王制(1814-1830 年)の下で復活した身分制は「対立を生み出している誤りの源泉」とみなされる。「貴族層は改革以前に持っていた土地をほとんど失った。したがって貴族層は、大土地所有が彼らに与えていた社会的尊敬を失った。それゆえ貴族層は富の点で、政府の役に立ちうるような影響力を国民大衆に及ぼすことができない」。旧貴族に代わって富を生み出し、社会全体に分配するのは、身分特権によらず各自の職能に応じて商・工・農業の各産業に従事する人々自身、すなわち〈産業者〉である。

これらの主張がフィジオクラシーに起源を持つことは明らかだが[22]、サン=シモンは一貫してそこに、近代啓蒙合理主義から批判的に摂取した「百科全書」型の理性や「実証科学」の視点を持ち込んでおり、近世の身分制社会を前提としたフィジオクラットではない。事実それは、後のコントやスペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)らの科学的職能国家論の母型となったのである[23]。

２．実証主義と宗教のゆくえ

オーギュスト・コントが実証主義(positivism)の哲学および社会学をかつての師サン=シモ

---

[19]『産業』Indu. t II, 109-108／(3) 93 頁。

[20] 『産業』Indu. t II, 73-168／(3) 74-133 頁、および『産業者の教理問答』CS , t IV, 122-123／ (5) 77-78 頁。および坂本慶一『フランス産業革命思想の形成』(未来社、1961 年) 71−75 頁を参照。

[21] 『産業』Indu. t II, 83／(3) 78 頁。

[22] 御崎前掲書、26-28、30-39、46-50、54 頁を参照。

[23] 内田繁隆「近代的社会観と唯物史観の限界――マルクス主義を超えて」、『国士舘大学政経論叢』(1975 年)、および「国家と経済の関係の原理的考察」、『国士舘大学政経論叢』(1968 年)、「社会科学の特性と世界観の問題」、『国士舘大学政経論叢』(1964 年) を参照。

ンから学んだことはよく知られている[24]。物事の起源や本質の考察に神秘的なものや形而上学的なものを介在させず、経験的な証拠からいいうることに限定する態度を「実証的(positif)」と呼ぶのは、サン=シモンに限らず、理性を過信したフランス革命の失敗を受けて経験科学の領域で理性の復権を図ったカバニス、ド・トラシー、スタール夫人、あるいはラプラス（Pierre-Simon Laplace, 1749-1827）の著作にも共通して見られる[25]。サン=シモンの場合に特異なことは、実証的ということが必ずしも分析的であることを意味せず、むしろ諸科学の「有機的=組織的(organique)」な総合と両立する点である。事実サン=シモンは『新百科全書粗描』（*Introduction a la philosophie du dix-neuvième siècle*, 1810）において、ダランベールが『百科全書』で導入したベーコン流の科学の分類と専門化に社会を解体する知性の危険な力を見出している[26]。マニュエルもいうように、「サン=シモンの科学哲学では「有機的」なものの賛美は、18 世紀啓蒙哲学者への攻撃、わけても『百科全書』を分析的知識、すなわち社会に革命をもたらし分解に導いたものとしての批判を意味し」たのである[27]。

実証科学による諸学の「有機的=組織的」総合の理念を最初に明確に打ち出した『人間科学に関する覚書』(*Mémoire sur la science de l'homme,* 1813)で、サン=シモンはこう宣言している。

> 起ったすべてのこと、起るであろうすべてのことは、初頁が過去をなし最終項が未来をなす同一の系列を形づくっている。したがって、人間精神が今日までたどった歩みを研究すれば、この科学の道と幸福への道において精神になすべく残されている最も有効な歩みが明らかになるであろう[28]。

> すべての科学は、初めは推測的であった。事物の大いなる秩序は、科学がすべて実証的になるように定めた。天文学は占星術から始まった。化学はそもそも錬金術でしかなか

---

[24] 富永健一『思想としての社会学』（新曜社、2008 年）、32 頁。

[25] マニュエル前掲書、223 頁参照。

[26] 『新百科全書素描』nePDD, t I, 92／（1）207 頁。「18 世紀の哲学は批判的で革命的であった。19 世紀の哲学は発明的で組織化的であろう」（『ヨーロッパ社会の再組織について』RorgSE, t I, 158／（2）200 頁）。

[27] マニュエル前掲書、224-225 頁。マニュエルによれば、「有機体（organisme）」のほかに「有機的」という語の使用例がなかった当時、サン=シモンは実質的に「有機的」という語の用法を拡張したといってよい。

[28] 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 14-15／(2) 10 頁。

った。長い間いかさまに浸りきっていた生理学も、今日では観察され確証された諸事実に基礎をおいている。心理学は生理学を基礎にし始め、これまで依拠してきた宗教的偏見から脱却しだしている[29]。

サン=シモンによれば、諸科学は「推測的」（コントのいう「神学的」および「形而上学的」）段階から「実証的」な段階へと移行しつつある。この進化は、まず人間の精神・身体活動に関する生理学認識において始まり、それが物理的諸科学に、また道徳および政治学の領域に持ち込まれ、最終的に哲学に波及する。その帰結は何よりも宗教の「完成」となってあらわれるであろうとサン=シモンはいう。宗教の理論的部分をなす教義が合理化され、実践的部分をなす聖職者集団が再組織されるにつれて、いままで人間精神を全体として統括してきた宗教は次第に科学にとって替わられていく。「聖職者団の再組織は科学集団の再組織以外のものではありえない。けだし、聖職者団は科学集団たるべきものだからである。聖職者団は最も学識ある人々から構成されている間しか、また彼らに知られている諸原理が大衆にまだ知れていないうちにしか、有益でありえず、力をもちえない[30]」。

こうして人間精神の各領域を逐次合理化しつつ、「実証科学」を頂点に全体を組織化された思想体系として考察するのが、サン=シモンの実証主義哲学である。それは「実証的」であることと「有機的」であることとが両立するだけでなく、前章で見た「組織化」が科学と社会とに共通する実践的な課題であることも示している。

宗教、一般政治、道徳、公教育などの体系は、観念の体系の応用にほかならない……。あるいは、……異なった側面から考察された思想体系である……。……したがって、新しい科学体系の完成のあとには、宗教、一般政治、道徳、公教育の諸体系の再組織化がおこなわれ、その結果として聖職者集団が再組織されるであろうことは、明らかである[31]。

伝統的な精神的権威であった聖職者集団を科学者集団によって代替するという発想には、最初期の『ジュネーヴの一住民からの手紙』（*Lettres d'un habitant de Genève a ses*

---

29 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 25-26／(2) 17 頁。
30 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 31／(2) 20 頁。
31 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 18／(2) 12 頁。

contemporains, 1803）にまで遡る前史がある。その中でサン=シモンは、カトリック聖職者たちが現今陥った誤りを「実証科学」の神の口を借りて次のように説明する。

> 彼らはみな自分達の使命の最も重要な部分、つまり人間の知性が私の神的な先見の明に限りなく近づくための最短の道をたどれる施設をば設立するという使命をなおざりにしてしまった。彼らはすべて私の祭壇を司る聖職者たちに次のことを予め知らせておくのを忘れてしまった。すなわち、聖職者たちは彼らが指導する信徒たちよりも学識ある者でなくなった時は、また彼らが世俗的権力に支配されるがままになる時には、私の名において語る権能を私は彼らから取り上げるであろう、ということを[32]。

宗教の最も重要な機能は人間精神の社会統合であり、伝統的にキリスト教教会は救済に必要な知を独占することでその任を果たしてきた。しかし科学の時代における人類の精神的教導者は、もはやカトリック教会やローマ教皇ではなく、科学者でなければならない。「私がニュートン（Sir Isaac Newton, 1642-1727）を私の隣に座らせ、彼に知識の指導とすべての惑星の住民の指揮とをまかせたことを覚えておくがよい。また、知識の最大の敵たる態度を示した人間〔ロベスピエールを指す〕が闇の中に落とされたこと、そして彼が私の懲罰の執行者かつ受刑者として永遠にそこにとどまる運命にあるということを、覚えておくがよい[33]」。サン=シモンの構想する社会においては、こうして科学者集団が宗教に代わって地上の精神的権威を独占する[34]。カトリシスムが退場したのちに空位となった現世的な精神の指導原理の座を、科学が継承しなければならないのである。

だがナポレオン戦争の敗北が決定的になり、第一次復古王政が成立する前年に執筆された『人間科学に関する覚書』では、革命精神の後退を背景として論調がそれまでより保守

---

32 『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』LHGC, t I , 49／(1) 67 頁。

33 『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』LHGC, t I , 49／(1) 67-68 頁。

34 その組織図は聖書とベーコンの『ニュー・アトランティス』にならって描き出されている。「人類の 21 人の選良の集会は、ニュートン会議と呼ばれるであろう。ニュートン会議は地上で私の代理をするであろう。この会議は人類を四つの部に分けるであろう。これら四つの部は、イギリス部、フランス部、ドイツ部、イタリア部と名付けられるであろう。これらの各部は、最高会議と同じように構成された一つの会議をもつであろう。地球のいかなる部分に住んでいるにせよ、すべての人間は、これら四つの部のうちの一つに所属し、最高会議と自分の部の会議とのために寄付をしなければならない。この命令に従わない者はすべて、他の人々から動物とみなされ、動物として扱われるであろう。女性たちも寄付を許されるであろう。彼女たちも指名されることができるであろう」（『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』LHGC, t I , 49-50／(1) 68 頁）。

的になっているように見える。例えば、宗教はいまなお「主要な政治制度」であり、「ヨーロッパ社会を構成する様々な諸人民を強固に統一した」絆(lien)であり続けているとみなされている[35]。この時期に宗教の意義を強調したのはサン=シモンだけではなく、教皇権によるヨーロッパ統合を説いた『主権原論』(*Étude sur la souveraineté*, 1794)の著者ド・メーストルや、ロマン主義によってカトリシスムの欠落を補おうとしたスタール夫人とシャトーブリヤン（François-René de Chateaubriand, 1768-1848）など、枚挙にいとまがない[36]。彼ら保守派の知識人たちが宗教を擁護したのは、フランス革命による教会制度崩壊後の「精神の空虚」を懸念したためであった。彼らにとって人々を結びつける道徳の基盤は永遠に宗教であり、それはカトリシスム以外にはなかった。

しかしサン=シモンがこの時期に宗教を擁護したのは、まったく別の論拠からである。「獲得されたもろもろの知識にできる限り精通したのちに、私は次のように自問した。科学の進歩と人類の境遇の改善とに最も役立つ成果をもたらす仕事はなんであろうか[37]」。科学者たちは未だ科学の真の使命を自覚せず、むしろ自然諸科学の発達は非人間的な兵器の開発を促し、戦争を激越化させるばかりであった[38]。その一方で、大衆は未だ蒙昧で宗教の精神的権威に囚われたままであり、彼らが人類の導き手を科学に求めることなど到底期待できなかった。このような状況下では、

職業としての科学の開拓に従事する人々は、宇宙はただ一つの法則によって支配されて

---

35 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 158, 170／ (2) 95、103 頁。

36 この点でマニュエルは、サン=シモンだけがベーコンに忠実に近代科学による宗教の完全な代替を目指したとする。マニュエル前掲書、212、および 321 頁参照。

37 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 14／ (2) 10 頁。

38 「物理学者、微積分学者、代数学者、算術家たちよ、〔現在〕科学的前衛の地位を占めるいかなる権利が諸君にあるのか。人類はその存在をはじめて以来こうむった最も激烈な危機の一つに陥っている。この危機を終わらせるために諸君はいかなる努力をしているか。人類社会に秩序を再建するどんな手段を諸君はもっているか。全ヨーロッパが殺し合いをしている。この殺戮をやめさせるため諸君は何をしているか。――何もしていない。――いや、それどころか、破壊の諸手段を改善しているのは諸君なのだ。……人間についての知識こそ諸国民の諸利害を調停する諸手段の発見に導きうる唯一のものであるのに、諸君らはこの科学をぜんぜん研究していない。諸君がそこから得たものといえばただ一つ、権力者たちに媚びへつらえば彼らからの愛顧がえられ、彼らの施し物にありつける、という考察だけである。科学の仕事場の指揮をやめよ。諸君らの統轄下で凍らされてしまった科学的仕事場の心臓をわれわれの手で暖めさせよ。社会を再組織することによって全面的平和をとりもどしうる作業に、科学的仕事場の全注意を向けさせることをわれわれにさせよ。統括者の地位を去れ。われわれが諸君に代わってその地位につこう」(『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 39-40／ (2) 25 頁)。

いると信じなければならない。かれらはこの普遍的法則とこれから派生する副次的な諸法則とを、自分自身の幸福のために、科学者達の幸福のために、また社会秩序の維持のために、研究しなければならない。大衆は、宇宙が全能なる一存在によって統御されていること、この全能な存在たる神が人間をつくり、人間にとってだいじなことは知ることであると信徒たちにお告げになったということを信じなければならない[39]。

サン=シモンの宗教擁護論もまたきわめて状況依存的なものであり、同時代の保守主義者たちの神権政治論とは無縁であることがわかる。この宗教は、科学者と大衆に「実証科学」精神による平和の思想が十分に浸透するまでの間も、社会秩序を維持するために必要とされる「暫定道徳[40]」として解釈するべきものなのである。しかもこの点に関してサン=シモンは、断固として現実主義的なマキアヴェリストであった。「科学者たちは、自分たちの研究の成果として得た最良の科学的概要をいつも神の口を借りて語るというようにして、啓示の言葉に改めなければならない[41]」。社会が科学によって確実に教導されるようになるためにも、理性がまだ十分に発達していない大衆には、科学の声を神の声と錯認させる必要があるとさえいうのである。

宗教と科学を混同しているとエンゲルスが批判したサン=シモンの遺作『新キリスト教』も、宗教から科学へと精神的権威が移行する過渡期を生きる同時代人たちを読者として想定したものであることを忘れてはならない[42]。「人間の知力は、ごくわずかのものである。それをただ一つの目的に集中させ、同じ点に向けてこそ、大きな効果を生み出し、重要な成果を上げることができる[43]」。言うまでもなく、サン=シモンにとって万人の「ただ一つの目的」は科学的精神に導かれる〈産業社会〉の実現であった。だが、人々が未だ宗教に囚われている限り、この目的を実現するには彼らにも理解できるようなやり方を用いる必

---

39 『人間科学に関する覚書』アントロポ版未収録／ (2) 33 頁。

40 「暫定道徳(morale provisoire)」とは、次のようなデカルトの考え方に由来するある種の実践道徳である。「人がいま住んでいる家を建て直そうとする場合、あらかじめそれを取り壊して資材や建築家を手配したり、あるいは自分自身で建築術を習得し、そのうえで設計図を念入りに描いた、というだけでは十分ではない。建築の仕事をしている間にも快適に住める何か家を準備しなければならない」。ルネ・デカルト『方法序説』（山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2010 年）、43 頁。

41 『人間科学に関する覚書』アントロポ版未収録／ (2) 33 頁。「宗教は、学識ある人々が無知な人々を統治するための一般科学の応用である」（『19 世紀の科学的研究序説』ITS19S , t VI, 169／175 頁）。

42 元来『新キリスト教』は、『社会契約論』と題するコントとの共著の第 2 部として執筆されたもので、第 1 部はコントの手になる『社会再組織について必要な科学的作業のプラン』であった。

43 『新キリスト教』Nc, t III, 175／ (5) 285 頁。

要がある。すなわち「もっぱら説得と立証とによって[44]」彼らを啓蒙しなければならないのである。

サン=シモンはキリスト教が宗教本来の社会統合機能を果たさなくなってしまったことの説明から説き起こす。「キリスト教の創始から 15 世紀までは、人類は自分たちの一般的感情を一つに整合すること、唯一にして普遍的な原理を立てること、才能にもとづくアリストクラシーを出生にもとづくアリストクラシーの上におき、これによって特殊的利益を一般的利益に従属させることを目的とした、一般的制度を築き上げることに、主として努めた[45]」のであった。しかし宗教改革後のキリスト教は、カトリックもプロテスタントも俗人支配の権力の座をめぐる抗争に明け暮れ、この社会統合機能を自ら放棄してしまった。しかもそれにとって代わるべき真の道徳の科学はまだ産声を上げていない。

> 実証的で特殊的な諸科学において、われわれは確かに先人たちをしのいでいる。われわれが数学、物理学、化学、生理学の分野で大きな進歩をとげたのは、やっと 15 世紀になってからであり、とりわけ前世紀〔18 世紀〕の初めからである。しかし物理学的知識や数学的知識よりも社会にとってずっと重要な科学がある。それは、社会をつくり上げる科学、社会に基礎としての役を果たす科学、つまり道徳である。ところが、道徳は物理学的で数学的な諸科学の歩みとはまったく反対の歩みをたどってきた。道徳の根本原理が生み出されたのは 1800 年以上も昔であり、しかもその時期以来ずっと最大の天才たちがあらゆる探求をかさねたにもかかわらず、キリスト教の創始者がこの時期に与えた道徳原理よりも一般性と正確性の点でまさる原理はまったく発見されなかった。社会がこの原理を見失った時、……社会はカエサルの支配下に……物理力の支配下に再びたちまち陥った、とさえ私はいう[46]。

そのような状況下で必要とされるのが「新キリスト教」である。それがなおも新「キリスト教」でなければならない理由は、サン=シモンによれば、キリスト教が「人間は互いに兄弟として振る舞うべし[47]」を根本原理とした宗教であり、人間社会はつねにこの原理の

---

44 『新キリスト教』Nc, t III, 178／ (5) 287 頁。
45 『新キリスト教』Nc, t III, 182／ (5) 289 頁。
46 『新キリスト教』Nc, t III, 187／ (5) 292 頁。
47 『新キリスト教』Nc, t III, 108／ (5) 246 頁。「神はいった。／汝ら互いに愛し合い、助け合え、と」（『産業体制論』SI1, t III, 1／(4) 22 頁）。

実現に「最も都合がよいように組織されねばならない[48]」からである。それゆえに「キリスト教の根本原理は、これを諸集団にとって相互に義務的なものにさせ、かつまた諸個人にとって自分たちの個人的諸関係において義務的なものにさせるのにもっともふさわしい表現形式で書き表される[49]」必要がある。それこそが「新キリスト教」であり、これに導かれるようになれば、人々はそれまでよりも「ずっと満足な精神的・物質的生活を享受でき、富める人たちは貧しい人々の幸福を増大させることによって自分たち自身の生活をも向上させることになる」だろう、とサン=シモンはいうのである[50]。

人々を社会的に統合する装置という意味では、サン=シモンの「新キリスト教」とルソーの「市民宗教」のあいだに一定の類似が認められるが、二つの点で両者は決定的に異なる。第一に、「市民宗教」においては、市民は特定の教義内容を共同で信仰することにより一つに束ねられるが、サン=シモンの「新キリスト教」は、そのような実質を欠く純粋に祭礼宗教的な性格によって特徴づけられる。

> 社会が精神的にも物質的にも完全なものになっていけばいくほど、知的な労働と肉体的な労働とはますます細分化されていく。こうして生活習慣においては、芸術、科学、産業が進歩をとげるにつれて、人々の注意はますます特殊な関心対象に向けられる。／その結果、社会が進歩すればするほど、社会はますます祭式(ritual)を完全なものにすることが必要となる。なぜなら、祭式は安息日に定期的に教会にあつまる人々の注意を、社会の全成員に共通な利益に、人類の一般的利益に向けさえることを目的としているからである[51]。

儀式や典礼のような宗教祭祀は、それに参加する者の内面の信仰内容によってではなく、外面のふるまいの画一性によって参列者に共同体への帰属感覚を惹起する。「新キリスト教」はそれを活用して、人々に「公益」による絆を確保しようとするのである。

第二に、ルソーの「市民宗教」が市民の忠誠心を喚起する共和国の恒常的な政治制度で

---

48 『新キリスト教』Nc, t III, 173／(5) 284 頁。
49 『新キリスト教』Nc, t III, 174／(5) 285 頁。
50 『新キリスト教』Nc, t III, 121-123／(5) 253-255 頁参照。
51 『新キリスト教』Nc, t III, 159／ (5) 276 頁。サン=シモンの念頭にあるのはおそらく英国国教会である。『新キリスト教』Nc, t III, 180-181／ (5) 288 頁、および『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 158-159／ (2) 96 頁参照。

あったのに対して、サン=シモンの「新キリスト教」は徹底して過渡期的であり、またプラグマティックですらある。それは当面の秩序維持を目的として、人々が長らく馴染んできたキリスト教の道徳的な外見を装う。しかしそれは同時に、統治者の利益と大衆の利益とが「公益」として一致する〈産業社会〉の実現に向けて、彼らの精神を準備させるための暫定的な措置でもあった。

私がなすべき第一の仕事は、新しい教説の流布が貧民階級を富者や政府に対する暴力行為に走らせないようにするために必要なあらゆる予防策を講じることであった。／私は芸術家、科学者、産業的仕事の指導者たちに、彼らの利益は人民大衆の利益と本質的に同じものであること、彼らは労働者の自然的指導者であると同時に、労働者の階級に属していること、彼らが人民大衆になす奉仕に対する人民大衆の称賛こそ、彼らの名誉ある仕事にふさわしい唯一の報酬であるということを理解させなければならなかった。最も重要であるがゆえに、私はこの点を大いに強調しなければならなかった。なぜなら、これこそが、真に諸国民の信頼に価する指導者、国民の意見を導いていくことができ、最大多数者の利益にかなったり反したりするもろもろの政治的方策を国民に適切に判断できるようにさせる指導者を国民に与える唯一の方法だからである[52]。

サン=シモンが特に重視したのは、各国の政治的指導者たちである。ナポレオン戦争は1815年に終結し、その後のヨーロッパはロシア、オーストリア、プロイセンの三国君主間の盟約に基づいてウィーン体制を布くことになった。サン=シモンは、旧態依然たる権力の座に固執し続けて大衆の窮状に目を向けない君主たちに、「神聖同盟（Heilige Allianz）」を名乗る資格はないと確信していた。それでも、キリスト教徒を自称する各国の君主たちを説得するために、あえてキリスト教的なレトリックを駆使して次のように呼びかけるのである。

諸公よ

あなた方が行使している権力の性質、性格は、神ならびにキリスト教徒の目から見たならばどのようなものであろうか。／あなた方がつくり上げようと努めている社会組織

[52] 『新キリスト教』Nc, t III, 179-180／ (2) 287-288 頁。

の体制の基礎はいかなるものなのか。貧しい階級の精神的・物質的生活を改善するために、あなた方はどのような手段を講じたか。／あなた方は、みずからキリスト教徒と称しているけれども、今なおあなた方の権力は物理的に基礎づけられており、いぜんとしてシーザーの後継者であるに過ぎない[53]。

私の口を通してあなた方に語りかけている神の声を聴かれよ。再びよきキリスト教徒となり、有給軍人、貴族、異端的な僧侶、背徳的な裁判官たちをあなた方の主要な支えとみなすのをやめよ。キリスト教の名において団結し、キリスト教が権力者たちに課する一切の義務を果たすすべを心得られよ。キリスト教は権力者たちに、その一切の力を用いて貧しい人々の社会的幸福をできるだけ速やかに増進させるよう命じている、ということを思い出されよ[54]。

もちろん、現実の君主が一介の市井の思想家に説得されるはずもなく、この訴えは黙殺された。本研究の第 II 部で見るように、サン=シモンの呼びかけがそれに応じる声を見出すのは、かなり後になって、そして旧来の君主とは似ても似つかない「産業君主」ナポレオン三世の登場を待たなければならない。だが仮にこの説得が功を奏したら、どのような社会が実現するとサン=シモンはいうのであろうか。

３．〈産業社会〉とは何か

ドイツ国法学者ローレンツ・フォン・シュタインは『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』(*Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreiches*, 1842)で、革命後の目まぐるしい体制変転期を純粋な「政治の季節」と形容した。それは一方に「国民とその生活との内的統一への、国家と個人との相互制約への、一般意志と個人の服従への拒みえぬ欲求」があり、他方には「ほかの何ものも決定的には手を出せない完全な自己放任への、自由への努力」があって、その間に「どんな和解もない」状態である[55]。この隘路から脱出

---

[53] 『新キリスト教』Nc, t III, 188-189／ (5) 293 頁。
[54] 『新キリスト教』Nc, t III, 192／ (5) 295 頁。
[55] ローレンツ・フォン・シュタイン『平等原理と社会主義――今日のフランスにおける社会主義と

するシナリオには、当時二つの選択肢があった。一つは言うまでもなく社会主義の道であり、もう一つがサン=シモンの道である。しかし、19 世紀前半当時、現実に採用される可能性があったのは後者の〈産業社会〉論だけであったとシュタインはいう。なぜなら、そこでは「「他人を害さないかぎりすべてのことをなしうる」という決定的な原則」が、「各人に対してあくまでも、自分自身に、自分の手段に、自分の労働と自分の幸福へ向かうように指示」しており、「諸個人の孤立した並存が全面的に実現されている」からである[56]。

サン=シモンの〈産業社会〉論を、ある種の国家共同体主義と個人主義的自由主義の総合が模索されていた時代の産物とみるシュタインの解釈は、一部にやや恣意的な観点が紛れ込んでいるとはいえ[57]、それなりに説得的であるといえる。ただしサン=シモンは、そもそも「「他人を害さないかぎりすべてのことをなしうる」という決定的な原則」など持ち出したことはない。彼が自由について語ったのは、社会契約論を批判する次のような文脈においてであった。

> いかなる場合においても、個人的自由の維持は社会契約の目的とはなりえない。自由は正しい観点から考察すれば、文明の一結果であり、文明と同様に前進的なものであるが、しかし文明の目的とはなりえないであろう。人は自由であろうとするために協同することは決してない。未開人は狩りをするため、戦争するために協同するが、自由を手に入れるために協同することは確実にない。なぜなら自由を手に入れるためだったら、彼らは一人のままでいたほうがずっとよいだろうからである。繰り返していうが活動には目的が必要であり、自由は活動の目的とはなりえないであろう。なぜなら、自由は活動目的を前提とするからである。真の自由は、協同体（アソシアシオン）の中で何もしたくないから無為に過ごすということにあるのでは決してない。そのような傾向は、それが存在するところではどこでも厳しく抑圧しなければならない。自由とはそのようなものとは反対に、協同体にとって有用な世俗的または精神的能力を何の拘束も受けずに、できるだけ最大限に、

共産主義』（石川三義・柴田隆行・石塚正英訳、法政大学出版局、1990 年）、154 頁。

[56] 同書、155 頁。

[57] 例えば、「豪奢は、国民すべてがこれを享受するときには、有益で道徳的なものとなろう」（『組織者』Org, t II, 53 (3) 286 頁）というサン=シモンの主張について、シュタインはこう揶揄している。「享楽とその満足がすべての階級の最高目的であること、また占有が無節操と、非占有が国家と所有への目先のきかない憎悪と手に手を取って進むということは、ドイツ人にはなんと理解しがたいことだろう！」（シュタイン前掲書、146 頁）

発展させることにある[58]。

サン=シモンによれば、自由は活動の結果として得られるものではなく、活動の中に、活動することそのものの内に存在する。人間が協同生活を営む場合にも、自由は協同で活動した結果や協同で活動する目的ではなく、協同すること自体が自由な状態であらねばならない。その保証がなければ、たとえ社会契約を締結しても無駄なのだ。したがって、「すべての結合契約(tout contral d'union)の最も重要な点は、結合の目的を明確に規定し、これを協約の冒頭ではっきりのべることである[59]」。

『産業体制論』でサン=シモンは、自由と協同の一致を説く自分の思想を次のように説明している。「社会はネガティヴな観念によってではなく、ポジティヴな観念によって生きるものです。社会はこんにち極度の精神的無秩序にあり、エゴイズムが恐ろしいほど蔓延し、すべてが分散孤立に向かっています[60]」。ある観念が「ポジティヴ／ネガティヴ」であるとは、それが人間社会の秩序構築に資するかどうかで決まる。例えば快楽と苦痛を人間行動の基底においても、さほど「ポジティヴ」な思想にはなりえない。

> われわれが快と呼び、苦と呼ぶものは、生活のうちでごくわずかな部分を占めるにすぎない。発明すること、製作すること、指揮すること、追求すること、待つこと、反省すること、――これらのことに、われわれの時間の最大部分が費やされるのだ。運動こそ、それが目標としてめざす快楽よりもずっと重要である。無為は、それが避けようとする苦痛よりもずっと大きな現実的悪である。幸福であるということは、人間にとって、なによりもまず行為することであり、しかるのち享楽することである[61]。

運動ないし行為の中でも労働は、人々の協同が欠かせないがゆえに、それに基礎をおく思想は最も「ポジティヴ」であるといえる。サン=シモンは最初期の論考から一貫して伝統的なキリスト教的労働観――原罪の証――をしりぞけ、労働を社会性の基本形態とみなし人間の完成と結びつけて重視していた[62]。それはいまや、人間生活の物質的基盤の創造に

---

58 『産業体制論』SI1, t III, 15／ (4) 30 頁。
59 「続ブルボン家とスチュワート家」SbBS, t VI, 514-515／ (4) 369 頁。
60 『産業体制論』SI1, t III, 51／ (4) 188 頁。
61 『産業』Indu. t I ,120−121／『著作集』未収録。
62 「すべての人間が働くであろう。彼らはすべて自分たちを一つの仕事場に結びつけられた労働者

関わり、したがって人々が自由を享受し幸福を追求するための前提条件であるがゆえに、この労働が最高度に発達した科学によって組織的におこなわれるならば、理想的な協同社会が生まれることも夢ではないとされる。

> 人々が最も良い食事をとり、最も良い家に住み、最も良い服装をしている国、人々が最も楽々と旅行でき、ほとんどの必要物と生活の快適さとを手に入れることのできる国、このような国こそ、人々が物質的な点で最も幸せな国であるということを、あなた方は認めるであろう。／もし、この同じ国で、人々の知性が発達しており、人々が芸術を解しえ、自然現象を規制する諸法則と自然現象を変化させうる方法とを知っており、最後に、人々がお互いに対して親切であるならば、この国の幸せは、精神的な点で最大であるということを、あなた方は同様に認めるであろう[63]。

運動の結果として得られる快楽よりも運動そのものが重要であったように、この理想社会では、労働の結果である財産あるいはその所有者よりも、労働としての「生産」および「生産者」が尊敬される。「すべては産業によって、すべては産業のために(Tout par l'industrie, tout pour elle)[64]」こそが、新しい社会を統べる根本原則となるのである。

この〈産業体制〉においては、政治社会を構成するあらゆる事柄が産業的な観点から定められる。その具体的なあり方について、サン=シモンは様々な示唆を与えている。まず公教育を再編成して、「あらゆる階級の子どもたちが、自分たち自身にとっても社会にとってももっとも役に立つ知識をできるだけ短期間に身につけられるよう」にしなければならない。また、「国民生産物――とりわけ農業生産物――を増大させることを目的とし」て、「道路を通し、運河を開き、干拓をおこない、開墾をする方法の改善」が図られねばならないが、それもやはり、「無産者に仕事を保証し、こんにち国民の大多数を成しているこの階級の生活条件をあらゆる点で改善すること」を目的としている。さらには、そのような体制

とみなすであろう。その仕事場での仕事は、人間の知性を私の神的な先見の明に近づけることを目的とする」(『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』LHGC, t I, 55／ (1) 71 頁)。マニュエルもいうように、サン=シモンにとって「働くことは、聖書的な罰または重荷ではなく、自由な創造性の表現」であり、「今や生産的労働は快楽原理を超えた強烈な情熱」であって、「ルソーが商業的国民に結びつけたところの怠惰と放縦とに社会が堕落するのを救うものであった」(マニュエル前掲書、450 頁)。

63 「続ブルボン家とスチュワート家」SbBS, t 519／ (4) 373 頁。

64 『産業』Indu. t I, 17／ (2) 316 頁。

が「農業、製造業、商業に可能なあらゆる発展を遂げさせた時に、人口の急速な増大」をもたらす場合に備え、大規模な「殖民計画」を立てておかなければならない。そのような〈産業体制〉においては、「公行政が僧侶、貴族、司法官の手から離れて、農耕者、製造業者、商人の手に移る」のは必然である[65]。サン=シモンによれば、〈産業体制〉の確立は一国の課題にとどまるものではない。「一国内部に生み出されるすべての富と自由とは、その国を取り巻く国々にとっての利得である。自国を取り巻く周辺のほかの国々で生み出されるすべてのものは、自国にとっての利得である。市民は世界のために働き、世界は諸君のために働く[66]」。

ここでサン=シモンの後期思想の鍵を握る〈産業者〉の概念を明確にしておく必要があるだろう。1817 年の『産業』執筆時点では科学者も「理論の産業者」とみなされていたが[67]、1819 年の『組織者』では、人間の職能を「芸術家、学者、アルチザン」の三種に区分し、「アルチザン」を「農夫、製造者、商人、銀行家、および彼らに使用されているすべての労働者と事務員を、その富や身分の序列において占めている地位のいかんにかかわらず意味するもの[68]」と定義した。『産業体制論』に至ってようやく〈産業者〉の内容は「農耕者・製造業者・商人」に落ち着き、彼らこそがこの世を支配する「常識」の代弁者であり[69]、「管理」に最も習熟した人々であるがゆえに[70]、〈産業社会〉の統治を託されるべき者とみなすようになる。具体的には、〈産業体制〉国家の財政を担う大蔵大臣と治安および宗教を職掌する内務大臣に〈産業者〉を任用し、予算の決定にもあたらせよというのである[71]。

---

65 『産業体制論』SI1, t III, 162-163／ (4) 122-123 頁。

66 『産業』Indu. t I, 126.

67 これとは対照的に、直接生産者は「応用科学者」と称されている。『産業』Indu. t II, 60／ (3) 26 頁参照。

68 『組織者』Org, t II, 19／ (3) 264 頁。

69 「文明の進歩はついに常識の治世をもたらした。常識は暴力的でもなければ冗舌的でもない。それは軍人的なものでもなければ法律家的なものでもない。／常識（または共益）のおのずからの代弁者、唯一の真の代弁者は、産業者である。なぜなら農耕者・商人・製造業者は自分たち自身の特殊利益をはかると同時に、社会全体の一般的利益をはからざるをえないようにおのずとされているからである」（『産業体制論』SI1, t III, 63／ (4) 60 頁）。

70 「文明の現状において、第一の政治的能力は管理の能力である。――／一方で産業者は、すべてのフランス人のうちで管理に最も習熟した人たちである。なぜなら、かれらの資本は絶えず運用されているからであり、彼らが利用している資本は、彼らの信用しからしむるところにより、彼らが所有する資本の三倍にのぼっているので、彼らが管理上で犯す誤りは、公私のあらゆる面で普段自分の収入だけを運用しさえすればよい他の市民たちがよりも 60 倍も大きな差し障りをきたすからである」（『産業体制論』SI1, t III, 48／ (4) 50 頁）。

71 『産業体制論』SI1, t III, 105-125／ (4) 86-99 頁。

だが〈産業者〉の最も厳密な定義は『産業者の教理問答』でようやく与えられた。

> 産業者とは、社会の様々な成員たちの物質的欲求や趣好を満たさせる一つないしいくつかの物的手段を生産したり、それらを彼らの手に入れさせるために働いている人たちである。……産業者は農業者、製造業者、商人と呼ばれる三大部類をなしている[72]。

サン=シモンによれば、〈産業者〉は社会階級として「最高の地位を占めるべきである」。その理由は、「産業者階級は自力で、みずからの働きによって、生活を維持しているからである。ほかの階級は、産業者階級のために尽くさなければならない。なぜなら、ほかの階級は産業者階級のおかげをこうむって生活している階級だからであり、産業者階級はほかの諸階級の生活を維持しているからである。要するに、すべては産業によっておこなわれているのであるから、すべては産業のためにおこなわなければならない[73]」。すべての文明的な生活はその基盤を生産する〈産業者〉無くしてはあり得ないがゆえに、彼らは〈産業体制〉の政治においても重要な役割を果たさなければならない。

生産者階級を社会の統治に関与させるという発想は、自分の専売特許ではないことをサン=シモンは認めている。彼が先達として挙げるのは、アンリ 4 世（Henri IV, 1553-1610. 在位 1589-1610）に重用されユグノー戦争後の国家再建に尽力したシュリ（Maximilien de Béthune, duc de Sully, 1560-1641）であり、またその遺産を受け継いだテュルゴー(Anne-Robert-Jacques Turgot, Baron de Laune, 1727-81)、ラモワニョン・ド・マルゼルブ(Chrétien-Guillaume de Lamoignon de Malesherbes, 1721-94)、ネッケルら 18 世紀の開明的な知識人・実務家たちである[74]。しかし既存の身分制社会を前提に、主として大農地経営者を国家統治に取り込んだ彼らとは違い、労働者や農民を含む政治経験のない〈産業者〉を全面的に統治の任に就けようとするサン=シモンの場合には、体制転換に加えて、人心に革命を起こす道徳理論が必要であった。

〈産業者〉への権力移行を歴史の必然とみなすサン=シモンは、『産業者の教理問答』でその過程を次のように描いている。「最初期の人類はきわめて無知で、粗暴な感情に支配されていたので、最強者の法が最初の社会組織の基礎としての役を果たさざるをえず、諸国

---

72 『産業者の教理問答』CI, t IV, 3-4／ (5) 1 頁。
73 『産業者の教理問答』CI, t IV, 4／ (5) 2 頁。
74 『産業者の教理問答』CI, t IV, 175-176／ (5) 111 頁。

民は幾世紀ものあいだまったく軍事的な、つまり封建的な体制のもとで――無政府よりずっと害が少ないので、少数者の手に集中された専制的権力のもとで――暮らさなければならなかった」。しかるのちに、「人類は交易を通じて知的に啓発され、穏和になり、労働と生産を好むようになり、それゆえ自分たちの組織の基礎に共通利益を据えることになるように運命付けられていた[75]」。だが、宗教改革以来の「ネガティヴ」な、すなわち「本質的に批判的で革命的たらざるをえな」い思想が、人類史の必然的な帰結である〈産業社会〉の到来を阻んできたのであった。サン=シモンは自らの〈産業体制〉の理論によってこの歴史の論理を完遂させようとする。「平和的で組織的な党派の結成を告げるためにこそ、われわれは平穏で安定した秩序をつくり上げようと望む人に産業主義者(industrialiste)という名称を選ぶよう勧めるのである。なぜなら、この名称は目的と手段とを――大多数者の利益を社会組織の基礎にすえるという目的と、もっとも重要な産業者たちに公共財産の管理をゆだねることによってという手段とを――同時に示しているからである[76]」。復古王政期に書かれたサン=シモンの後期著作は、権力政治と宗教的反動に抗してこの「産業主義者」精神を社会に注入するためのマニュアルなのである

４．体制転換の政治学（ポリティーク）

サン=シモンの思想に共鳴し、その周囲に集まった弟子たちが師の没後に著した『サン=シモン教義解説』（*Doctrine de Saint- Simon, Exposition, Prèmiere année, 1828-1829,* 1830）は、彼の進歩史観を次のように要約している。

> サン=シモンははじめわれわれに家族対家族、都市対都市、国民対国民の最高度に高まった憎悪を示す。事実これらいっさいの反感、これらいっさいの暴力は、まず何よりもどんなにどんなに小さいものであろうと協同社会の範囲の外でとりわけて発揮されるものである。……寺院でありがたい神々にぬかずくのは血の滴る犠牲をささげてであり、武器を身につけずしては自分のすまいを離れはしない。……それにもかかわらず少しづつもっと野蛮でない感情が現れる。人間はもう捕虜を生贄にささげはしない。自分のた

---

75 『産業者の教理問答』CI, t IV, 197-198／ (5) 124-125 頁。
76 『産業者の教理問答』CI, t IV, 198-199／ (5) 125 頁。

めに働かせるのである。つまり捕虜を奴隷にする。もっともあとになると、きわめて厳しいこの征服者の掟も少しずつ和らぎ、やがて農奴制が古代社会の残骸の上に、そして人間的友愛を説く宗教の力強い援護の下に打ち立てられるとき、巨大な進歩がなしとげられる。……諸国民は完全にして終極的な連合を形成すべく準備をととのえ、人類が「普遍的協同社会」に引きよせられていくすばらしい情景をわれわれに示している[77]。

弟子たちの理解によれば、サン=シモンは人類史の進歩を感情のような人間本性が次第に陶冶されていく過程とみなしていたことになる。しかしマニュエルによれば、サン=シモンの偉大さは、「自己利益を表現する単位は、18 世紀のモラリストたちが主張したごとき自我（エゴ）ではなく人間同様の全特性をそなえたある種の団体または階級であった」こと、そして「過去および現在の階級行動を観察し研究することにより実証的なやり方でそれを発見した」点にこそ認められる[78]。マニュエルの議論を総括しておこう。サン=シモンの階級観は、身分制と政治的階級を一体とみなしてきたフランスの頑迷な政治的通念への挑戦であった。1791 年の国民公会におけるユダヤ人市民権の承認、ジャコバン政権による貴族と聖職者の粛清、第一帝政による新貴族の叙爵、復古王政における旧貴族と聖職者の復位など、革命以後に起こった出来事は、すでに支配階級の概念を相対化するのに役立っていた。この状況がサン=シモンの階級理論の後景をなす。歴史はいまや「効用性、生産、社会的に有用な知識の最大化、現世的幸福、人類愛、すべての人間の――とりわけ最も多数で最も貧しい人々の――、道徳的・物質的生活諸条件の改善」を追求している。労働はその基体であり、善き階級と悪しき階級を分かち、「人間の存在を正当化する唯一のもの」であるがゆえに、まさしく労働こそが「進歩の礎石」である[79]。

マニュエルが描く階級史観の発見者というサン=シモン像は、マルクス主義陣営が先駆者として評価するサン=シモン像と一致する。しかしここでもまた、マルクス主義を通じて人口に膾炙した通俗的サン=シモン像の悪しき影響を指摘しなければならない。少なくとも教条的なマルクス主義の見解に従えば、経済ないし生産という土台の変動が上部構造の変動を促し、虐げられてきた人々の階級意識を覚醒させ、革命による体制転換を必然化す

---

[77] B.-P. Enfintin, *Doctrine de Saint- Simon, Prèmiere Année, Exposition, 1829* (Paris : Au bureau de l'organisateur, 1830), pp. 45-47. バザールほか『サン=シモン主義宣言――『サン=シモンの学説・解義』第一年度 1828-1829』（野地洋行訳、木鐸社、1982 年）、38-39 頁。

[78] マニュエル前掲書、458、470 頁。

[79] マニュエル前掲書、470-472 頁参照。

るはずである。だがサン=シモンが終生問い続けたのは、革命により旧体制が崩壊しても貧困多数者の生活が改善されず、人心が荒廃する一方なのはなぜかという問題であった。歴史の必然性を素朴に前提する階級史観では、その答えは与えられないのである。

『産業体制論』と『産業者の教理問答』を読むかぎり、サン=シモンの体制転換論はむしろ、土台に対する上部構造の相対的「自律性」とマルクス主義者が呼ぶものに依拠していたと考えられる。『組織者』でサン=シモンはこう述べている。

> 人は社会組織の体系を創造しない。人はもろもろの観念と利害の間に発展した諸関係を知覚するのである。ある社会体制は実在しているものであるか、さもなければまったく存在していないものである。私がその基礎を説明したところの憲法計画を書き上げたのは、私ではない。それを書いたのは、過去８世紀にわたってそれをつくり上げるために働いた、ヨーロッパの大衆である。もし全世界がまだその存在に気づいていないとすれば、その理由は、今なお存立している古い社会的殿堂の外観の背後にそれが隠されているという事実にある[80]。

土台である経済構造の変動は、たしかに法や政治やイデオロギーを含む上部構造の変化の方向を規定はするが、機械的=必然的に決定するわけではない。この変動が全体として新しい体制の成立に結実するには、「ポジティヴ」な観念のはたらきかけによって人々の集合的な意識を導く必要がある。マニュエルの解釈はこの視点が抜け落ちているため、サン=シモンをマルクス主義の亜流にしてしまうおそれがあるといえるだろう。

しかし、「帝政期および復古王政初期の著述のなかでは、サン=シモンは、プロレタリアという語を「無知者」と同義的に用いた[81]」というマニュエルの指摘は重要である。それによれば、この大衆不信はジャコバン政権による経済統制（最高価格令）でパリ経済が完全に破綻したために民衆が暴徒化した記憶に由来しており、王侯貴族聖職者を失うよりも生産者を失う方がはるかに大きな社会的損失だと述べた『組織者』執筆時には、「プロレタリア=無知者」のイメージも払拭されていたということになる。だがサン=シモンは、たとえ「もっとも貧しい階級の精神的・物質的生活のもっとも速やかな改善[82]」を真摯に求めて

---

80 『組織者』Org. t II, 179-180／ (3) 369-370.

81 マニュエル前掲書、474 頁参照。

82 『新キリスト教』Nc, t III, 125-126／（5）256 頁。

も、そのときどきの支配的勢力に迎合し、プロパガンダに振り回されてしまう彼らプロレタリア大衆の知性への不信を生涯にわたって維持しつづけた[83]。生産に携わる彼らの協力なしに〈産業社会〉の成立はありえないのだとしたら、彼ら〈産業者〉予備軍を〈産業社会〉の成立に向けて動かすにはどうすればよいのだろうか？　「社会を確固とした平穏状態に導くべき大道徳運動を引き起こすためには、政治の面で、理論家の力と実際家の力との結合が必要[84]」である。サン=シモンの後期の著作はその方法についての考察に多くの紙幅を割いている。

革命後の道徳的真空状態の中にいる大衆に「新キリスト教」という「暫定道徳」を処方したサン=シモンは、次にその大衆を知的に啓発するための手段として芸術を活用しようとする[85]。初期の著作でも、人間の感情(sentiment)にはたらきかけて知性の発達を促す芸術の教育的な価値は高く評価されていたが[86]、〈産業体制〉の構想に本格的に着手した頃から、

---

[83] 「避けがたいものになった道徳的大運動がジャコバンの徒によって、あるいはボナパルティストらによって指導されるのならば疑いなく生じるであろう災難を避けるためには、再びへまをやらかす不祥事――世論の動向が軍人または法律家たちによって左右される場合には必然的に生じるであろうこと――を避けるためには、農業、商業、製造業の繁栄を確実にする方法についてのはっきりとした見解を国民に示さなければなりません。肉体労働者が唯一の生活手段である多数者階級に仕事を保証するための方策をとらねばなりません」（『産業体制論』SI1, t III, 123-124／（4）98 頁）。「僧侶は、富者や権勢家たちに対して神と道徳とが彼らに課している諸義務を説教した限りにおいて、社会の最下層のための重要な寄与をした。フェヌロン、マシヨン、フレシエ、ブルダルーが民衆の権利の熱心な、有益な擁護者であったことをあえて否定するものがいるであろうか。ボシュエはおそらく革命を最も効果的に準備した人物である。彼は、世間の注目をひきつけた雄弁でもって、人間は死後はみな平等なのだ、と繰り返し述べた。それは、現世において人間の間に存在しなければならぬ差異とはそもそも何なのか、ということの検討へと導いた」（『産業体制論』SI1, t III, 169／（4）127 頁）。

[84] 『産業者の教理問答』CI, t IV, 193／ (5) 121-122 頁。

[85] マニュエルはそれを、啓蒙合理主義の理性偏重に対して感情を重視するロマン主義運動の影響に帰している。「この時代にフランスではロマン主義的苦悶がその最盛期にあり、詩人の新しい世代が近代的預言者、神聖な受難者、人類の真の司祭として登場した。自分の身の内に文明の陣痛を感じとり、自己中心的時代において情熱を燃やし、深い絶望にとらわれ、崇高な熱狂に駆り立てられえた、ロマン主義運動の若き天才たちのうちに、サン=シモンは新しいモラリスト、自分の教説の選良なる伝道者を認めた。冷たい科学的合理主義者ではさらさらない芸術家は、人類に自分たちの運命に対する認知と理解とを目覚めさせることのできる感情の人であった」（マニュエル前掲書、481 頁）。

[86] 「日曜日に雄弁な話を聞くのは、諸君にとって魅力があります。よく書けた本を読んだり、美しい絵や美しい像をみたり、諸君の心を強くとらえる音楽を聴くことに、諸君は歓びを覚えるでしょう。諸君を楽しませるように話をしたり書いたりするためには、諸君を歓ばせるように絵をかき像をつくるためには、諸君をおもしろがらせる音楽を作曲するためには、大変な苦労を要します。諸君、あなた方の感覚の最も微妙な襞に働きかけることを通じてあなた方の知性を発達させるのに最も適した慰みであなた方の仕事の合間を満たしてくれる芸術家たちに、あなた方が報いるのは至極

サン=シモンは芸術家に特別の重要な役割を認めるようになる。

芸術を修めていて、人間の想像力に働きかけるすべを心得ている人々をして、社会を精神的ならびに物質的な点で一般的な福祉に熱中させるべく、奮起させ……、産業的仕事の指導者たちに、彼らが自分たちの個人的利益のために科学者や芸術家と日々協力し合っているのと同じように、彼らの全体的利益のために科学者と芸術家と提携するのが得策だということを悟らせなければならない[87]。

サン=シモンによれば、国民教育の二大目的は有用な知識の伝授と感情の陶冶であり、理性の未発達な子どものみならず、成人労働者にもその二つを施さなければならない。そのためにも、「芸術家たちと連帯した物理的・数学的諸科学の学者たちは、公教育の任務と、社会の成員の集団的・個人的知性の完全化を目的としたすべての仕事の任務とを負わされなければならない[88]」。それもすべて、革命後の度重なる権力の交代に翻弄される移ろいやすい大衆を歴史が示す正しい道へと導き、彼らに来たる〈産業社会〉の利益を認識させ、自らその一員となることを欲するようにさせるためである。それゆえ、「芸術家と科学者とに協力する産業的仕事の指導者たちは、彼らがもっているあらゆる影響力を駆使して、社会の大衆にこの企てを支持することが大衆自身の利益になるということをわからせなければならないであろう[89]」。それを具体化するのが、既存のアカデミー・フランセーズに換えて科学者のアカデミーと芸術家のアカデミーを併設するという提案であった。

もっとも有能な科学者たちは、二つの部類に分かれなければならない。つまり別個の二つのアカデミーをつくらなければならない。これらのアカデミーの一つは、利益の最良の法典をつくることを、その仕事の一般的目的としてめざさなければならず、もう一つのアカデミーは、有名なプラトンが諸原理を定め、教父たちによってその諸原理が応用され発展されたところの、感情の法典を完成することを、一般的目的としてみずからに課さなければならない。……感情を完全なものにする役目をもつアカデミーに音楽家、

当然ではないでしょうか」(『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』LHGC, t I, 44-45／(1) 64 頁)。

87 『産業体制論』SI3, t VI, 470／（4）388-389 頁。

88 『産業体制論』SI3, t VI, 472／（4）390 頁。

89 『産業体制論』SI3, t VI, 473-474／（4）392 頁。

画家、彫刻家がいても――今日、物理・数学アカデミーに眼鏡製造師、時計師、器具製造者がいても不思議でないのと同様に――不思議ではないであろう。理論の作成者たちは、主要な応用にすぐれた人々から決して切り離されてはならない[90]。

こうして人々を〈産業社会〉へと誘い込む様々な手立てを考案したサン=シモンであったが、その著作が期待された反響を呼ぶことはなかった。当初サン=シモンは、革命の反動から復古王政が自由主義的な経済政策を採ったことを見て、議会の立法措置により〈産業体制〉への速やかな移行が可能になると楽観視していたようである[91]。しかし、自由主義代議士兼法律家たちが相も変わらず自由についての思弁的な議論を弄び、大衆の窮状に無理解なままでいることに、サン=シモンは次第に焦燥感を募らせていった。

陛下の政府に与えられた立憲的君主制という名称は、フランスの現在の政治的状態がどんなものであるかをまことによく理解させてくれます。立憲的というおそろしく形而上学的なこの形容詞は、折衷的な社会組織の状態、多弁家や三文文士たちが第一階級をなしている社会組織の状態を言い表しているものでして、実際、哀れなフランス国民とその気の毒な王政は、18 世紀の全体を通じてこれらの連中に食い荒らされてきました。およそ 40 年このかた、駄弁と書きなぐりの真髄たる三百代言が王制と国民とを支配しております[92]。

革命を嫌悪し、議会主義にも幻滅した彼に残された体制転換の手段は、国王親政である。「すべての人民に煮た鶏肉をたべさせたい」と願った「このうえなくキリスト教徒的な王」アンリ 4 世を引き合いに出して、復古王政の君主に「産業的な王」となれと迫ったのである[93]。この一見敬虔にも無謀にも思える行動の背後には、やはりサン=シモン一流のマキアヴェリズムがあったことを見逃してはならない。

現状において王権が国民におこなえる最大の奉仕は、封建的で神学的な体制を根絶して

---

90 『産業者の教理問答』CI, t IV, 26-30／ (5) 149-151 頁。
91 サン=シモン自身は人民主権に懐疑的であり、「民の声=神の声」に耳を傾ける穏健な王制を終生よしとした。『産業体制論』SI1, t III, 121-122, et 209-211／ (4) 96、152 頁参照。
92 『産業者の教理問答』CI, t IV, 131-132／ (5) 82-83 頁。
93 『産業体制論』SI2, t III, 135, 228-235 et 137／ (4) 232, 268-273 頁参照。

産業的で科学的な体制を確立する任務をもった独裁者にみずからなるということである。一人の手中に全政治権力を一時的に集中することは、この移行を最も迅速に、また最も容易に、おこなわせることができる方策である。社会体制の変革は、暴動によってか独裁によってしかおこなえない。独裁が暴動よりずっと害が少ないことは明らかである。それに、この場合にあっては、無制限な権力の行使は諸君に様々な利益をもたらしこそすれ、少しも大きな不都合をもたらすはずがない。独裁者が社会に到達させなければならない目的ははっきり決定されているので、世論は彼がたどるべき道からはずれるのを許さないであろう[94]。

サン=シモンという思想家の歴史的評価が分かれるのは、まさしくこの点である。もちろんこの無節操な振る舞いは、革命後の混乱を収拾し、困窮する大衆を救済したいという切なる願いから出たものであるには違いない。しかし、たとえそのためとはいえ、そして一時的とはいえ啓蒙君主の独裁権力に期待をかけるというのは、「革命の子」を自認する思想家としては甚だしい矛盾である。結局この破綻は、サン=シモンが〈産業社会〉の実現を歴史の発展の必然的帰結と信じながら、それを自らの理論の説得力によって引き寄せざるを得なかったことに起因するとはいえないだろうか。そしてその悲劇は、少数の熱心なサン=シモン信者以外に、彼の呼びかけに耳を傾ける者が当時ほとんどいなかったということに尽きるのである。

おわりに

すべての人間に対して生活の物質的諸条件を満たしてやることは恒久的な平和と協同の不可欠の条件である。生涯にわたってそう信じ続けたサン=シモンは、〈産業体制〉の確立は一国単位の問題にとどまらず、全ヨーロッパを視野に入れて取り組むべき政治的課題であることを後期著作で再三主張している。

この大ヨーロッパ的結合の決定的重要性を悟らせるために、私は次のことを示そうと思

---

[94] 『産業体制論』SI2, t III, 253-254／ (4) 285 頁。

う。一、産業体制の完全な確立は、西欧の全人民が同時にこの仕事にたずさわるのでなければ、いずれの国民においても単独には不可能であろう。二、たとえ文明の進行が産業体制の創立を開始する独占的名誉をフランスにとっておいたということが真であるとしても、それにもかかわらず、ひとたび最初のはずみが与えられれば、この大事業のいくつかの部分は、たまたま最も進んだ状態にある他の西欧諸国民の産業家階級によっておのずから達成されるにちがいないことはたしかであり、フランスは共通の仕事のその部分に補助的作用を及ぼすにすぎない[95]。

この汎ヨーロッパ産業主義は、中世のキリスト教共同体(respublica Christiana)の理念のアナクロニスティックな再興でないのはもちろん、当時のウィーン体制下での主権国家間の勢力均衡とも無関係な、むしろそれらのオルタナティヴとして理解されるべきものである。サン=シモンのシナリオによれば、それは〈産業体制〉成立の歴史的諸条件をすでに満たした国、すなわち、革命によって旧体制――身分制秩序と宗教による社会統合の伝統――を解体したフランスから始まり、周辺各国に伝播・浸透していく。〈産業体制〉においては、労働は社会の必要に応じて科学的に組織化され、人間は〈産業者〉となり、各々の職能に応じて自らの生活の物質的基盤の生産に邁進する傍ら、体制を統治する任にあたる。この近代「国民国家」を同型単位(モジュール)とした[96]インターナショナルな〈産業体制〉こそ、サン=シモンのいう「大ヨーロッパ的結合」にほかならない。

しかし、肝心の祖国フランスにおいてすら彼の著作は黙殺された。ヨーロッパ大の〈産業体制〉を実現する目論みについても、当時の「神聖同盟」構成諸国の指導者たちを説得するというやり方が功を奏しなかったことは、先に見た通りである。サン=シモンの思想の「ユートピア的」な性格がこの点で裏目に出たことは確かであった。マルクス主義の革命理論が唯物史観の歴史法則によって支えられていたのとは対照的に、「科学的」な裏付けを欠いた彼の理想社会論は、政治的にも経済的にも混迷を極める革命後の状況下で、国内においては復古王政を正当化する保守派の正統カトリシスムを相手に、国外においては「神聖同盟」のレアルポリティーク論を相手に、それぞれ人々の支持を獲得するべく思想のへ

---

95 『産業体制論』SI1, t III, 23-24／ (4) 170-171 頁。

96 モジュールとしての「国民国家」についてはベネディクト・アンダーソンの議論をみよ。Cf. Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Revised Edition (London and New York: Verso, 2006), p. 4.『(増補) 想像の共同体』(白石さや・白石隆訳、NTT 出版、1997 年)、22 頁参照。

ゲモニー闘争を余儀なくされることになったからである。サン=シモンが〈産業体制〉そのものを論じるのに劣らず、道徳・文化・教育による体制転換の可能性を探ることに情熱を傾けたのはそのためであった。にもかかわらず彼の著作が注目を集めなかったことは、貧困労働者大衆はもとより、特権貴族に代わって当時勃興しつつあった産業資本階級でさえ、自分たちをサン=シモン的な意味での〈産業者〉たる「国民」とみなすにはほど遠い状態にあったことを物語っている。サン=シモンは早過ぎた予言者であった。

小　結

E・ホブズボームもいうように、フランス革命を画期として始まった後期近代は、国家と呼ばれる地理的空間内に居住するすべての人間を、その性別・民族・出自・階級の違いにかかわらず、法の下に平等な権利を保障された「国民」にするナショナリズムによって特徴づけられる。もし宇宙人が核戦争後の地球文明の廃墟におりたち、公文書館や図書館の遺構を調査したら、「地球という惑星の過去二世紀の人類の歴史が、「国民」という言葉とそれから派生する語彙をある程度理解していなければとらえがたいものと結論づけるであろう[1]」。しかしフランス革命は、身分制議会であった「三部会」を「国民議会」に変えたとはいえ、そこに代表者を送り込むことができる「国民」は、「人間および市民の権利(Droits de l'Homme et du Citoyen)」の名において一定の財産を保有する上層ブルジョワジーに限られており、当時「第四身分」と呼ばれた無産者（および女性）はいまだ「国民」として姿をあらわすことを許されなかった。フランス革命は確かにナショナリズムの起点ではあったが、終着点ではなかったのである。「共和国」から排除されざるを得なかった人々にも財産と職業を、それゆえ幸福追求の基本的前提となる物質的な生活基盤を提供すること、つまり真の意味での〈国民〉の創造が、〈産業化〉無くしてはありえないことに最初に気づいた思想家こそ、サン=シモンであった。政治革命として始まったフランス革命は、まさしく産業革命をもって完遂されるのである。

サン=シモンは自分の思想が世に受け入れられるのを見ずに 1825 年に没したが、少数とはいえ熱烈な信奉者に恵まれたことは不幸中の幸いであった。彼はアフリカとアジアを終生蔑視し続けた典型的なヨーロッパ中心主義者であった反面、男女両性をまったく平等に扱う（当時としては）型破りな、しかし敬服に値する人物でもあった。師の没後にサン=シモン主義正統派を自認し、「サン=シモン教」を創設して最高教父に就任したアンファンタン(Barthlemy Prosper Enfantin, 1796-1864)は、自分の後継者の性別を問わず、また自由恋愛を説いて自ら実践するなど、フランス・ロマン主義に重要なエピソードを提供した人物でもあったが、それもおそらくは師の人格的感化によるものであろう。サン=シモン主義の実践家であり、第二帝政下の政府系投資銀行の責任者として活躍して金融資本主義の租となったペレール兄弟(Jacob Émile Péreire, 1800-75; Isaac Péreire, 1806-80)も、終生敬愛したサン=シ

[1] E・J・ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』（浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳、大月書店、2001 年）、1 頁。

モンの墓を永久保存するための基金を設立し、また師の著作集を刊行するために奔走した。だから『サン=シモンの学説解義』を編纂した高弟たちが、師サン=シモンが遺した言葉の中から特に愛他主義精神溢れるヒューマンで敬虔な部分を抜き出して強調したのも不思議はない。

> それ〔エゴイズム〕は諸国民においても個人においてもわがもの顔に支配している。中世においては諸国民の間の憎しみにもかかわらず、宗教的絆のおかげでヨーロッパ諸民族が共通の目的に向かって進むべく一致して立ち上がるのが一度ならず見られた[2]。

> 人間はつねに外界を「愛し」、ますます外界を知り、さらにまたより完全に外界をわがものとしなければならないだろう。科学の領域と産業の領域は日毎により豊かな収穫で覆われるだろうし、またそれらはかれの「愛」をさらに豊かに表現する新しい手段を人間に提供するだろう。人間はたえずその知性の拡がりと肉体的な力の拡がりとその「共感」の拡がりを拡張するだろう。なぜならその進歩の道は無限だからである。だが人間の「道徳的」「知的」「肉体的」発展にもっともよく役立ち、そこでは各個人が生まれがどうだろうとその働きにしたがって――つまり民衆の「道徳的」「知的」「肉体的生活」にしたがって、彼自身の生活を改善するためのかれの努力にしたがって――「愛され」、名誉を与えられ、報われる……[3]。

しかし弟子たちのその後の言動を見れば、やはりサン=シモンの教えの理論的説得力と先見性が彼らに最大の影響を及ぼしていたことがわかる。彼らは鉄道業・鉄鋼業・金融業などの各方面で実業家や技師として辣腕をふるい、革命とナポレオン戦争によって荒廃した祖国の復興につとめ、〈産業者〉の地位確立に貢献することになったからである。その努力は第二帝政期（1852-70 年）に至ってようやく陽の目を見る。ナポレオンの甥であり、獄中で出会ったサン=シモンの著作に感銘を受けたシャルル・ルイ=ナポレオン・ボナパルト(Charles Louis-Napoléon Bonaparte, 1808-73)が、1848 年の二月革命により成立した第二共和

---

[2] B.-P. Enfintin, *Doctrine de Saint- Simon, Prèmiere Année, Exposition, 1829* (Paris : Au bureau de l'organisateur, 1830), p. 38. バザールほか『サン=シモン主義宣言――サン=シモンの学説・解義、第一年度 1828-1829』（野地洋行訳、木鐸社、1982 年)、29 頁。

[3] *Ibid*., pp. 90-91. 同書、80-81 頁。

政の大統領に選出され、さらに皇帝の座についてナポレオン三世（Napoléon III, 在位 1852-70）を名乗る頃から、サン=シモン主義者たちを帝国政府の要職に積極的に登用するようになったのである。皇帝経済顧問となりのちに上院議員も務めたシュヴァリエ(Michel Chevalier, 1806-79)はその代表格であり、アンファンタンやペレール兄弟らとともに全国的な鉄道網の敷設に尽力し、また自由貿易を推進するべく英仏通商条約を締結させた。またイポリット・カルノー(Hippolyte Carnot, 1801-88)――「カルノー・サイクル」を考案して熱力学第二法則の定式化に貢献したあのカルノーの弟――は、教育大臣として無償義務教育制度の導入に尽力した。サン=シモンの思想は、「馬上のサン=シモン」の異名をとったフランス最後の君主ナポレオン三世を得て具体的実現への道を開かれ、産業革命の推進力となっていくのである。

こうしてサン=シモンの思想はサン=シモン主義者たちの実践と切り離しては理解できない。ナポレオン三世の第二帝政が「権威帝政」から「自由帝政」に転じ、一時的にパリで成立した労働者政権（パリ・コミューン）を挟んで第三共和政になるなど、狭義の政治体制はその後も目まぐるしく変遷していった。それでも国民国家フランスが揺らぎもしなかったのは、ナポレオン三世の治世下で〈産業体制〉ほぼ確立を見ていたため、それゆえサン=シモン主義的な意味での〈産業〉革命の賜物なのである。その舞台となった第二帝政期について、次に見ていくことにしよう。

第Ⅱ部　第二帝政とサン=シモン主義

第４章　サン=シモン教からサン=シモン主義へ

はじめに

サン=シモン主義は、晩年のサン=シモンの周囲に集った人々を中核とし、後にエコール・ポリテクニーク[1]を主たる発信源として展開された。サン=シモン主義者と目される人物は様々であるが、なかでも重要なのはアンファンタン、シュヴァリエ、ペレール兄弟、そしてルイ=ナポレオン・ボナパルト、のちのナポレオン三世である[2]。アンファンタンはサン=シモン協会を創設してみずからを運動の最高教父と位置づけた。ミシェル・シュヴァリエはアンファンタンと提携し、機関紙『プロデュクトゥール』および後継紙『グローブ』の編集長を務め、後にはサン=シモンの思想を精緻な経済理論へと深化させた。ペレール兄弟は、ユダヤ人でありながら事業家・金融資本家として成功し、政商的存在としてサン=シモンの構想した〈産業社会〉をフランスに実現する実動部隊となった。そして「サン=シモンの鉄の夢」とも形容される万国博覧会をパリに招致・定期化した第二帝政における皇帝ナポレオン三世は、強力な政治的指導力によってサン=シモン主義を実践した事により近年注目を集めている没後弟子である[3]。

従来サン=シモン主義が社会主義史における初期実験と解釈されがちであった理由のひとつは、もちろん〈産業社会〉の実現に捧げられたサン=シモンの思想と師の思想を継受した弟子たちの実践の中に、後年の社会主義思想運動との親縁性があったためである。しかし弟子たちの行状を仔細にみるだけでも、この解釈の不備は明らかになるだろう[4]。そもそ

---

[1] フランス独自の高度専門職養成機関グラン・ゼコール（大学校）のひとつで、理工系部門を担う。

[2] そのほかにも、例えばサン=シモンの思想と共和主義との関連を強調するバザール(Sain–Amand Bazard, 1791-1832)、復古王政によって進路を閉ざされた秀才のユダヤ人青年でバザールとともに師の思想を理論化し伝播に努めた金融家のロドリーグ(Benjamin Olinde Rodrigues,1795-1851)、サン=シモンの思想を「社会生理学」として理解し社会主義へ架橋し、サン=シモンの葬儀で弔辞を読んだ医師バイイ(Étienne-Marin Bailly , 1796-1837)などもサン=シモン主義者に数えられる。バイイの『社会制度の改善に応用された生理学』はアントロポ版『サン=シモン著作集』に無署名で収録されたため、長らくサン=シモンのものと誤解されてきた。森博「サン=シモンの生涯と著作（5）」、『サン=シモン著作集』（森博編訳、恒星社厚生閣、1988）、437-481 頁、および沢崎浩平・小杉隆芳「人名解説」、セバスティアン・シャルレティ『サン=シモン主義の歴史――1825-1864』（沢崎浩平・小杉隆芳訳、法政大学出版局、1986 年）、478 頁も参照。

[3] 鹿島茂『絶景パリ万博――サン=シモンの鉄の夢』（小学館、2000 年）、また谷川稔「近代国民国家への道」、福井憲彦編『（新版世界各国史 12）フランス史』（山川出版社、2001 年）を参照。

[4] 阪上孝『フランス社会主義』（新評論、1981 年）を参照。

もサン=シモン主義は社会主義としてはもちろん、一思想運動としてさえ整合的であったようには見えない。修道院にも比される集団生活により師の思想に基づく精神修養の必要を説いてサン=シモン主義「正統」と謳われたアンファンタンとその一派は、その内閉的組織運営と急進的な男女平等思想が災いして風紀紊乱の罪で検挙され、カトリックからも、また後年の社会主義者からも異様な宗教的カルトも同然とみなされた[5]。サン=シモン主義運動を理論的に支えたシュヴァリエは、はじめこそアンファンタンの下で機関紙編集長として健筆を振るうものの、サン=シモン協会摘発の際に逮捕された獄中でアンファンタンと決別する。そして経済学者として成功し、エコール・ド・フランス経済学教授と帝政下の上院議員にまで昇り詰め、ナポレオン三世のブレーンとなるが、それが「正統」派からは権力迎合、背教者ないし転向者と罵られた。サン=シモン主義を社会主義史に位置づけようとする解釈にとって最も都合が悪いのは、金融資本家として時代の寵児となったペレール兄弟や皇帝ナポレオン三世の存在である。彼らはむしろ資本主義の権化であって社会主義になじまないにもかかわらず、サン=シモンに終生忠実な、ある意味では古典的ともいえるまぎれもない弟子なのである。

それでもなお社会主義陣営がサン=シモン主義を自らの前段階と位置づけるのは、それが国家を超える「普遍的協同体(association universelle)」、すなわちヨーロッパ大の共同社会への志向においてマルクス主義をはじめとする正統社会主義に先駆けていたから、という点に尽きるように思われる[6]。しかしサン=シモン主義にとって来たるべき統合ヨーロッパは、身分の相違なく生産と労働によって結ばれた人々と彼らのための国家という〈産業社会〉を擁する国民国家をモジュールとしなければならないのであった。社会主義がサン=シモン主義を自らの一変種と錯認したのは、この国民国家の成立に不可欠な中央政府への権力の集約と全国規模の資本主義経済化という行程が、政治と経済を組織してゆく〈産業体制〉の下でこそ可能になる――身分制さえ漸次解体されれば国制の如何は問わない――というサン=シモンの中核思想を、プロレタリア革命により清算されるべきブルジョワ的残

---

[5] サン=シモン協会に対するカトリック教徒の強い反発が描かれたものに、ジュリアン・バーンズ『海峡を越えて』（中野康司訳、白水社、1998 年）がある。ウィリアム・モリスもサン=シモン協会を讒訴していた。ウィリアム・モリス, E・B・バックス『社会主義』（大内秀明監修・川端康雄訳、晶文社、2014 年）、159 頁参照。

[6] 阪上前掲書、41-42 頁、また佐藤茂行「サン=シモン教について：サン=シモン主義と宗教的社会主義」、北海道大学経済学会編『経済学研究』第 35 巻 4 号（1986 年）を参照。佐藤の研究から窺えるのは、神学を通じて普遍的統合を語れなくなった時代において社会主義が宗教化するサン=シモン主義を取り込むことで普遍主義的性質あるいはエクソテリックな性格を得たことである。

滓と考えてしまったからだといってよい。

サン=シモンの中核思想が唯一の目的を設定する一方で手段に個性を認めるがゆえに、サン=シモンの産業による普遍的協同という理念は、サン=シモン主義者たちそれぞれの環境と適性、そして能力に応じた受け取られ方をしていた。アンファンタンは師の思想の精神的・道徳的側面を強調してしばしばサン=シモン主義「正統」と呼ばれるが[7]、サン=シモン自身は人間の共同性や友愛を観念上の徳としてではなく、労働とその利益を介して生じるものという唯物論的な視点に立っていたことに鑑みれば、シュヴァリエやペレール兄弟の世俗的な〈産業者〉倫理の方にむしろサン=シモン主義「正統」を名乗る権利があったともいえる。アンファンタンの精神（モラル）とシュヴァリエの経済（エコノミー）とは、サン=シモンの夢見た〈産業社会〉を実現させる両輪なのであり、それがサン=シモン主義の分裂と見えるのは、実は師の思想が弟子たちの実践を通じてプリズムのように分光した結果にすぎないのである。

１．分光する思想

かつてエンゲルスは、社会主義への弾圧を帝政ローマに台頭したキリスト教への弾圧になぞらえ、次のように述べたことがある。

> さていまから約 1600 年前のこと、ローマ帝国にも同じように、危険な一つの転覆党が活動していた。この党は宗教と国家のあらゆる土台を掘りくずした。……キリスト教徒という名で知られていたこの転覆党は、軍隊のなかにも大勢の信者をもち、全部がキリスト教徒になっていた軍団もあった。……皇帝ディオクレティアヌスは、彼の軍隊の秩序や服従や規律が掘りくずされるのを、もうこれ以上平気で見ていることはできなかった。まだ手おくれにならないうちに、彼は猛烈な干渉をした。彼は社会主義者取締り――いや失礼――キリスト教徒取締法を発布した。転覆者の集会は禁止され、彼らの集会場は閉鎖され、それどころかぶちこわされたりもした。十字架などのキリスト教の記章は、ザクセンで赤いハンカチーフが禁止されたように、禁止された[8]。

---

[7] Cf. Sébastien Charléty, *Histoire Du Saint-simonisme(1825-1864)*....(Paris: Librairie Hachette Et C, 1896), pp.1-6. シャルレティ前掲書、5-10 頁参照。

[8] エンゲルス「序文」、マルクス『フランスの階級闘争』（中原稔夫訳、大月書店、1960 年）、28-29

たしかに 19 世紀は「社会主義」とその弾圧の時代であった。ドイツにはフリードリッヒ・リスト（Friedrich List, 1789-1846）からヴェルナー・ゾンバルト（Werner Sombart, 1863-1941）へと展開していくドイツ国民社会主義の伝統がマルクス主義と覇権を争い、イギリスにもウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）のギルド社会主義があった。もちろんフランスにも、近代共産主義の祖バブーフとプルードン（Pierre Joseph Proudhon, 1809-1865）から、キリスト教に基づく社会主義を説いたラムネー（Félicité-Robert de Lamennais, 1782-1854）までの多様な「フランス社会主義」があり、サン=シモン主義はしばしばその系譜の中に位置づけられてきた[9]。しかし、すでに第 I 部で確認したように、貧困労働者大衆を〈産業者〉として政治社会の正当な構成員たらしめようとするサン=シモン主義は、既存国家を否定するがゆえに弾圧されたそれらの社会主義とは明らかに思想の政治的志向性が異なっている。オーウェンの「ニュー・ハーモニー」構想やフーリエの「ファーランジュ」計画を見るまでもなく、19 世紀社会主義の主流は現実による反証から逃避した疑似宗教的観念性――まさしく「ユートピア的社会主義」――によって際立っていた。マルクスの場合は逆である。つまり彼は、「富がどのように生産・配分・消費されるかを教える」政治経済学だけが「政治学のすべてとなる[10]」とサン=シモンがいったことを鵜呑みにし、すべてを経済で説明しようとしてしまったのである[11]。むしろ前社会主義期のマルクスが、ユダヤ人問題は普遍的人権が確立されたフランス革命後においてなお未解決であると述べたとき、彼は自分でも気づかないままサン=シモンの後裔を自称していたのだというべきなのである[12]。

ところで、サン=シモン主義者が「社会主義」者を自称した背景には、コント派の「社会学(sociologie)」との思想的ヘゲモニー闘争が大きくかかわっている。オーギュスト・コント

頁。

[9] 以下を参照。阪上、前掲書。関嘉彦『（金鶏叢書 6）社会主義の歴史 1――フランス革命から 19 世紀末へ』（力富書房、1984 年）。アンドレ・リシュタンベルジェ『18 世紀社会主義』（野沢協訳、法政大学出版局、1981 年）。例えばマルクスは、プルードンを嘲りつつその主張を「サン=シモンの教義のなかで最も悪い部分をいっぷう変わった独創性という仮面をもって仮装しようとした」と形容している。「フランスのクレディ・モビリエ〔第二論説〕」（大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集 12』大月書店、1964 年）、26 頁。

[10] 『産業』Indu, t I, 183／（2）344 頁。

[11] 『産業』Indu, t I, 185-186／（2）346 頁。およびマルクス「階級闘争」、3 頁。

[12] 横張誠『芸術と策謀のパリ』（講談社、1999 年）、111-117, 186-195 頁参照。

はサン=シモンの高弟の一人だったが、二人の共著となるはずだった『社会契約論』をめぐって師と袂を分かち――サン=シモンは自らコントに執筆を依頼した『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』（*Prospectus des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société*, 1822）を理論に偏していると批判した[13]――、やがて自らを「社会学(sociologie)」の祖と称するようになった。1825 年にサン=シモンが没すると、アンファンタンをはじめとするサン=シモンの正統後継者を自任する人々はコント派とのイデオロギー闘争を開始したものの、自らの思想の呼称を定めあぐねていた。その渦中の 1827 年に、オーウェンの継承者が発行する『コーポラティヴ・マガジン』紙上に「社会主義者(socialist)」の語がはじめて現れ、それがサン=シモン協会の機関紙『グローブ』において「社会主義(le socialism)」として輸入されたのである[14]。

サン=シモン主義を少なくとも同時代の社会主義から区別するもっとも枢要な特徴は、ブルジョワジーと政治的エリートを単純に抑圧の要因として揚棄すべきものとは捉えず、むしろ来る〈産業社会〉のなかで彼らが占めるべき場所と果たすべき機能とを明確に定めたことである。それを師から学んだサン=シモン主義者たちは、自ら積極的にその任に就いた。アンファンタン、ロドリーグ(Benjamin Olinde Rodrigues, 1795-1851)、ペレール兄弟らサン=シモン主義の普及に主導的な役割を果たした人々は、いずれ劣らず実業家および金融家として成功した人物であり、ナポレオン三世は言うに及ばず、そのブレーンとして第二帝政期に国会議員として活躍したシュヴァリエは、パリ万国博覧会役員、北米視察団団長、各国サン=シモン主義講演会講師などを精力的にこなした。この「産業主義」布教活動[15]に着目するなら、キリスト教的な志向の強いアンファンタン一派をサン=シモン主義「正統」派とみなし、「実践」派と区別して重要視するシャルレティの古典的解釈は、少々恣意的であるようにみえる。むしろサン=シモンの思想を精緻な経済学に仕上げたシュヴァリエこそが、サン=シモン主義の求心点であったという解釈も成り立つだろう。

彼らのようなサン=シモン主義経済派によれば、師の原問題意識は、フランス革命以降の

---

[13] フランク・マニュエル『サン=シモンの新世界（下巻）』（森博訳、恒星社厚生閣、1975 年）、591 頁参照。

[14] サン=シモン主義者たちが「社会主義」をコントの「社会学」に対置したのは、バブーフ主義との連続性をアピールすることで全ヨーロッパ的支持を得ようとしたため、という解釈もある。サンフォード・A・ラコフ「社会主義――古代からマルクスまで」二階堂達郎訳、『財と社会のダイナミクス――［叢書］ヒストリー・オブ・アイディアズ 24』（二階堂達郎ほか訳、平凡社、1987 年）、96-100 頁、また R・N・バーキー『社会主義』（淺沼和典訳、早稲田大学出版部、1985 年）6 頁を参照。

[15] 阪上前掲書、35-40 頁参照。

寸断された社会関係資本を回復し、秩序を再構築することにあった。サン=シモンは、革命とは「一国民の成員間に現存するあらゆる関係が不安定になり、あらゆる災厄のうち最大のものであるアナーキーが抑制しえない力をふるい、その結果、ついには、全国民が陥った悲惨な状態」であり、それゆえに人々は「その成員中もっとも無知な者たちでさえ、秩序の恢復を希求[16]」していたと述べ、フランス革命が政治体制の革命のみに終わり、社会形成の問題と経済問題が残存したことを指摘する。二つの問題を同時に解決するためにいま求められている新秩序は〈産業社会〉である。そう信じた弟子たちは、フランスにそれを実現するべく自ら〈産業者〉の先陣となって金融資本と労働資本を集約し分配する各種の制度機構の整備に乗り出した。彼らが最も重視したのは銀行と鉄道である。銀行は資本を集約して地方の〈産業〉へ投資をおこない、資本の国内還流と再生産を実現し、社会成員のなかに中間層を形成する装置であり[17]、鉄道は、移動の自由を保障し、労働者を地方の各共同体から都市に供給するとともに、工業製品を各地に輸送する装置であって、両者は一体となって物流市場、労働市場、金融市場を「有機的（organique）」な「結合体（association）」へ昇華する[18]。シャルレティは、『プロデュクトゥール』からの引用を交えながら、サン=シモン主義者にとっての鉄道の重要性を次のように説明している。

多くの人が着るものも食べるものもないというときに、商品の保有者の困惑が生産過剰

---

[16] 『ジュネーヴの一住人からの手紙』LHGC , t I, 32-33／（1）55-56 頁。

[17] Cf. B.-P. Enfintin, *Doctrine de Saint- Simon, Prèmiere Année, Exposition, 1829* (Paris : Au bureau de l'organisateur, 1830), pp. 127-136. バザールほか『サン=シモン主義宣言』（野地洋行訳、木鐸社、1982 年）、115-121 頁参照。シャルレティは彼らの教えを次のように要約する。「「銀行」は、信頼に基づく社会秩序のあらゆる産業的要素を含んでいるように思われる。「銀行」は産業者の受容と資本家の供給を繋ぐ現実的な機関ではなかろうか。そして、二つの社会階級、すなわち、労働者と有閑人との関係は銀行によって決められるのである。信用の強力な組織は、貸し付け条件を緩和し、資本を労働者の自由にゆだね、能力に応じて配分するだろう。「銀行」は、情報を集中して、労働を秩序立て、監督する手段となるだろう」（Cf. Charléty, *op.cit*., pp. 45-50. シャルレティ前掲書、44 頁）。だからこそ銀行は「労働手段を必要とする労働者と、それを使う術をしらない、あるいは使うことを欲しないこれら労働手段の所有者のあいだに立つ」のであり、それは未来の社会制度を暗示する。すなわち「すべての富を預る中央銀行が、需要に応じて、その富を各産業の専門銀行に分配する。中央銀行に要求が集中し、そこからすべての力が放射される。この組織は、おそらく所有権が蒙る、平和的・継続的変化における必要な一過程であろう」（*ibid.*, pp. 66-68. 同書、58-59 頁）。

[18] Cf. Schivelbusch, Wolfgang, *Railway Journey: The Industrialization of Time and Space in the 19th Century* (Berkeley: University of California Press, 1986), pp.70-73. ヴォルフガング・シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史――19 世紀における空間と時間の工業化』（加藤二郎訳、法政大学出版局、1982 年）、89-93 頁参照。および中川洋一郎『暴力なき社会主義？――フランス第二帝政下のクレディ・モビリエ』（学文社、2004 年）、63-75 頁参照。

から来ると考えるのはよほど近視眼的でなければならない。それは配分のまずさによって起るのだ。まず商業道路を完全にすること、これが第一の治療薬になるだろう。どうして「鉄道」をつくろうとしないのか。「このような移動能力が人間生活に導入されれば、社会状態に大きな革命をもたらさざるをえない。これほど容易で、敏速な交通手段があれば、一帝国の地方都市は首都の街と同じになってしまうだろう。……工業製品、発明、発見、世論は、かつてなかったような速さで伝えられるだろう。そして、なによりも、人間と人間、地方と地方、国と国の関係が驚くほど密接になるだろう」。労働を通じて諸国家を近づけよう、労働を通じて人々を結びつけよう。協同（アソシアシオン）、これが『プロデュクトゥール』がすでに好んで用いた語である[19]。

サン=シモン主義者たちは、銀行制度と鉄道網を全国規模で整備するにあたり、国家権力が仲介者ないし調停者として主導的な役割を果たすことを求めた。各〈産業者〉と国家は生産という目的を共有しているがゆえに、諸産業は〈産業者〉を介して間接的に国家の所有に帰するという師サン=シモンの理論に忠実であったからである[20]。古代のローマが街道と交易によって帝国の基盤を形成したように、鉄道を新たな街道、銀行制度を新たな交易の道具としてフランスに〈産業社会〉を建設しようとしたのである。このような〈産業社会〉への志向は、すでにそれを達成したイギリスをモデルにしている。当時のヨーロッパ諸国は、大塚久雄に倣っていえば、自由放任の伝統に支えられた産業革命を経て高度な「商品経済」社会を築き上げたイギリス[21]への対応という国際的課題に直面していた。国際覇権構造という観点から言えば、フランスとヨーロッパの〈産業社会〉化を構想するサン=シモン主義者たちは、国家主導の産業化を通じてフランス国内市場を近代化すると同時にヨーロッパ経済におけるヘゲモニーの確立を狙ったといいえる。一方でその普遍主義志向を取り上げるなら、庶民相互の国内的／国際的コミュニケーションの物理的条件を整えたことは、経済的な公共圏の重層的形成――その後のフランス社会の世論形成と政治力の基礎を築いたもの――として評価されるべきだろう。

言うまでもなく、これをサン=シモン主義の経済理論として展開したのがシュヴァリエ

---

[19] Cf. Charléty, *op.cit*., pp. 43-45. シャルレティ前掲書、41-43 頁。

[20] Cf. *ibid*., pp. 367-375. 同書、298-305 頁 ; B.-P. Enfantin, *op.cit*., pp. 112-139. バザールほか前掲書、103-127 頁参照。

[21] 大塚久雄『国民経済――その歴史的考察』（講談社、1994 年）、29-34 頁参照。

であり、その実働部隊となったのがペレール兄弟であって、国家権力の頂点の座からこれを主導したのがナポレオン三世である。だがアンファンタンはやはり初期のサン=シモン主義運動になくてはならない人物であった。物質的・経済的要素と倫理的・精神的要素とが初期のサン=シモン主義運動において等分に重視された理由は、シャルレティによるとサン=シモンの次のような思想にあった。

> 精神的権力の組織は産業労働の組織に不可欠の条件であった。真に有益な行為であろうとすれば、集団的でなければならず、個人的であってはならない。指導されなければならず、自由であってはならない。……各人の自発性を当てにすることは反科学的な方法を用いることであり、重大な力の損失と危険な過誤とを伴う。……社会の進歩は、権威の組織と分かちがたく結びついている[22]。

サン=シモンの思想は近代市民革命後のフランスの体制をトータルに構想する政治・社会思想であり、サン=シモン主義者たちはこの思想的多面体の各面からそれぞれに発せられた分光として理解することができる。すなわち、シュヴァリエがサン=シモン主義の経済を代表する理論家であり、ナポレオン三世がその政治を象徴する存在であったとすれば、アンファンタンはその倫理を体現する人物なのである。

２．「感情の科学」とその実践――アンファンタン

アンファンタンをサン=シモン主義「正統」派の領袖と位置づけ、シュヴァリエやペレール兄弟を「実践派」と形容したのは、いまやサン=シモン主義研究の古典というべき S・シャルレティの『サン=シモン主義の歴史』（*Histoire Du Saint-Simonisme(1825-1864)….*, 1896）である。アンファンタンは 1796 年パリで、銀行を家業とする家に生まれた。1813 年に理工科学校へ入学したが、父親が学費を払えなくなり退学した。その後アルプス軍を指揮していた遠戚のサン=シール・ニューグ将軍（Saint-Cyr Nugues, 1774-1842）の下で軍務に就いたが、ワーテルローの戦い以後は放浪生活に身を落した。ようやく銀行業をこころざし、

[22] Charléty, *op.cit*., pp. 49-50. シャルレティ前掲書、45 頁。

ロシアに渡ってサンクト・ペテルブルグで銀行代理業者マルタン・ダンドレ（Martin d'André, 生没年不詳）の店に入る。このロシア生活時代に政治経済問題への関心を強め、理工科学校時代の仲間と当時流行した観念学や生理学の議論に興じたという。この時期のアンファンタンの書簡に見られる経済学や社会研究への没頭には、19 世紀初頭の技術エリートの精神的渇望感が認められるとシャルレティは指摘している。パリに戻ったアンファンタンは、理工科学校の元数学復習教師で当時は不動産担保銀行理事にしてサン=シモンの最後の弟子でもあったロドリーグによってサン=シモンに引き合わされ、その『産業者の教理問答』に彼は望んでいたものを見出した。1825 年サン=シモンが没すると、葬儀の翌日にサン=シモンのグループに加わり機関紙発行会社の発起人に名を連ねた。そしてその真面目さと優雅さで派内に信頼を築き、サン=シモン教布教伝導に旅立って支部や弟子を増やす一方、素描に過ぎなかったサン=シモンの教義の彫琢に心血を注いだ[23]。

かたや、サン=シモンの葬儀後しばらくしてからサン=シモンのグループに参加したのがバザール(Sain–Amand Bazard, 1791-1832)だった。バザールは 1791 年パリ生まれで当時 34 歳。王政復古期に過激化した自由派の青年の一人で、原則を貫き大胆で堅牢な推論を好む一方、真面目で精力的な性格の持ち主であったという。1814 年のサン=タントワーヌ街の戦いでレジオン・ドヌール勲章を受けた後、ナポリの過激共和主義者カルボナリと関係を持ち、当時の友人と組んで「フランス・カルボナリ」を結成し、各地で陰謀事件を首謀してきた。しかし次第に謀略の実効性に疑問を持つようになり、新秩序の構想が欠落していることを痛感した時、彼はサン=シモンの思想に触れ、その追求に身を投じる[24]。

後世に残る仕事をしたという意味でアンファンタンとバザールの二人が最初期からサン=シモン主義運動に関わっていた価値は大きいが、その考え方は水と油といってもいいほど隔たりがあった。アンファンタンが信頼と親密さをサン=シモンのグループに導入する一方で、バザールは「知的、倫理的価値と、かつてのカルボナリをやがて使徒にするような、真摯な話ぶりとをサン=シモン主義の組織のなかに導入[25]」した。アンファンタンが感情を重視したとすれば、バザールは理論偏重の気味があった[26]。それでも両者が等しく初期のサン=シモン主義運動に貢献したと認知されていたことは、二人が同時に教団の最高

[23] Cf. *ibid*., pp. 32-35. 同書、33-35 頁参照。
[24] Cf. *ibid*., pp. 35-37. 同書、35-37 頁参照。
[25] *Ibid*., p. 37. 同書、37 頁。
[26] Cf. *ibid*., pp. 57-62. 同書、51-55 頁参照。

教父の地位に就いたことが物語っていた。しかしサン=シモン主義の教義化が進むにつれ、アンファンタン率いる「正統」派とバザールの共和主義を支持する「抗議」派との対立が表面化するようになった。公会議を模した論争中にバザールが急逝して分裂劇は幕を下ろし、以後はひとりアンファンタンがサン=シモン主義運動を精神的に主導することになる[27]。

サン=シモンは旧体制的有閑人と〈産業者〉の関係を「モンスズメ蜂」（ブルボン家、ならびに新旧貴族・聖書職者層）と「蜜蜂」（勤労・繁栄・ヒエラルヒーを象徴し、ナポレオン家の家紋の一部となっている）の比喩を用いて表現し[28]、「蜜蜂」の社会における原則を「最大多数者に最も有益でありうるように社会を組織しなければなら」ず、「最も貧しい階級にその精神的・物質的生活の最も速やかな最も完全な改善を保障する」ことに求めた[29]。シャルレティによれば、サン=シモン主義者に共通するのは、師が唱えたこの社会改良主義的原則に「能力に応じて各人へ、仕事に応じて能力へ」というある種のメリトクラシーに基づく平等主義を付加する点にある[30]。これはまさしくアンファンタンにこそ当てはまるといえる。彼の主張のなかには、女性を男性とともに生産を担いうる人間とみなし、この平等主義を女性参政権にまで拡大したり、また人種混淆を是として最高教母の有資格者を黒人女性とするなど、ジェンダー・バイアスの根絶を求める今日のフェミニズムに通じるものがある[31]。だが、それがすべて将来の〈産業社会〉を構成する人間=労働者像から引き出されてくるところが、アンファンタンのサン=シモン主義者たる所以であった。

アンファンタンの指導下のこの運動で特筆すべきは、キリスト教との相似が際立たされることにより、サン=シモン主義が「サン=シモン教」とでも称し得る実践的宗教運動の様

---

[27] 前田祝一「サン=シモン主義の分裂（全３シリーズ）」、駒澤大学外国語部編『駒澤大学外国語部論集』第 28・29・32 号（1988・89・90 年）を参照。

[28] 『政治家』Pol-af, t II, 222-227／（3）233-236 頁。

[29] 『新キリスト教』Nc, t III, 109／（5）246 頁。

[30] Charléty, *op.cit*., pp 66-67. シャルレティ前掲書、58 頁。

[31] ユダヤ人さえも取りこむサン=シモンの『新キリスト教』は、アンファンタンの急進的女性観と雑婚的結婚観をも容れるものであり、カトリックによってスティグマを捺されたあらゆる社会的少数者の受け皿となりえた。実際シャルレティはその可能性について次のように触れている。「人々は多くの幻想を抱いていた。改宗の大部分は脆いもので、奇妙な動機にもとづいていた。新たに入信した労働者の大部分は、就職口をみつけるためだったり、間近い社会変革によって安楽な生活がつかめると期待して、サン=シモン主義者のところにやってきたのだ。もっと高尚な動機で改宗したものも、カトリックに対するかなり激しい敵意からでしかなかったし、サン=シモン主義者を聖職者党の敵としかみていなかった。かれらの共感をえるには、それで十分だったのだ」（*ibid*., pp.118-119,シャルレティ前掲書、99-100 頁）。

相を呈し、ロシアを含む西欧全体のエリートに受け入れられたことである[32]。シャルレティもいうように、結局この「正統」派は風紀紊乱の廉で権力の弾圧を受け、運動拠点を解体されて以後は斜陽となり、アンファンタンが死去する 1864 年以降は継承者にも恵まれず、ついに復活することはなかった[33]。にもかかわらずシャルレティがそれをサン=シモン主義「正統」と呼び、マルクス=エンゲルスに先立つ社会主義「正統」ともみなすのは、19 世紀末当時の科学的社会主義の隆盛という状況に直面し、それとは異なる倫理的・精神的な社会主義思想をオーソライズしようとしていたシャルレティ自身のイデオロギー的志向を雄弁に物語っている[34]。

サン=シモン主義の倫理性を強調するシャルレティの解釈は、サン=シモンの遺作『新キリスト教』の意義を社会主義思想史の中できわめて高く評価するマニュエルの解釈に通じるものがある。それによれば「新キリスト教」は、民衆の間でカトリシスムが権威を失墜し、知的エリート層においても理神論、近代自然法、ルソー主義ですらが失効してしまったフランス革命後の「精神の空虚」を埋める真摯な試みであった。革命後の階級分化とエリート層内部での果てしないイデオロギー闘争への処方として、サン=シモンはキリスト教の精神から純化された「愛」という和合の感情により国民の結束を求めたというのである[35]。この解釈は、「新キリスト教」が〈産業社会〉成立までのプラグマティックで過渡期的な措置であることを無視している点ですでに妥当性を失っているが、アンファンタンの思想と行動を理解する上では役に立つ。すなわち彼は、師のこの思想を真に受けたからこそ、真摯にその「布教」に努めたともいいうるからである。当初こそ師のこの教えを好まなかったとされるアンファンタンであるが、サン=シモンの教えを絶対と確信するにいたり、次第にみずから進んでこの教えの実践に身をまかせるようになった[36]。それはド・メー

---

[32] 沢崎浩平「訳者あとがき」、同書、489 頁、および今井義夫「ハリコフの最初の消費組合（一八六六年－七一年）とニコラーイ・バールリン――南ロシア（ウクライナ）の初期協同組合運動史から」、『一橋論叢』第 89 巻 1 号（日本評論社、1983 年）を参照。

[33] Cf. Charléty, *op.cit*., pp. 31-62, 444 -447, 477. シャルレティ前掲書、31-55 頁、357-359 頁、384 頁参照。

[34] Cf. *ibid*., pp. 1-6, 461-471. 同書、5-10 頁、372-377 頁参照。サン=シモン主義正統に換わって台頭するのは「新キリスト教」というイマジネーションに魅了されたエンゲルス（「序文」、マルクス『フランスの階級闘争』（中原稔夫訳、大月書店、1960 年）、28-29 頁を参照）とエンゲルスの衣鉢を継ぐカウツキー（栗原佑訳『キリスト教の起源』（法政大学出版局、1975 年）、490-504 頁を参照）のマルクス主義である。

[35] マニュエル前掲書、上巻 211-212、下巻 615-640 頁参照。

[36] Cf. Charléty, *op.cit*., p. 81. シャルレティ前掲書、71 頁参照。

ストルのような伝統主義者からカトリック信者を引き剥がす手段でもあったが、同時に、バザールをはじめ当初ほぼすべてのサン=シモン主義者たちが奉じた共和主義に対抗するのみならず、サン=シモン主義から離反した弟子たちが身を寄せた他の学派・宗派――経済学者コンスタンタン・ペクール（Constantin Pecqueur, 1801-1887）の所属したフーリエ主義[37]、シュヴァリエらが一時所属したテンプル騎士団、サン=シモンと決別したコントの社会学など――とのイデオロギー闘争を有利に展開するための手段でもあった[38]。

アンファンタンが人間の「感情」を重視したのも、〈産業社会〉の到来を待望する精神を養うために「感情の科学」が不可欠だとした師の教えに忠実であったためである。サン=シモンは、産業世界の入口に立った「思想家がめざしうる唯一の目的は、道徳体系、宗教体系、政治体系、要するに、どのような面から考察するにせよ、観念の体系の再組織に努めることである」と説き、「新しい科学的体系が完成されれば、宗教、一般政治、道徳、公教育の諸体系の再組織化がおこなわれ、したがって聖職者集団が再組織される」と述べた[39]。サン=シモンが暗示する精神の秩序は、政治・宗教・教育の最高責任者の座を同一人ないし同一集団が占めることをかならずしも意味していたわけではないが[40]、アンファンタンにとっては、感情を涵養する者こそが人々の間で当然に首座を占めなければならない。「現在の戦争は、明らかに聖職者団の消滅に起因する[41]」という師の言葉を真正面から受け取ることによって、アンファンタン主義は成立したのである。

アンファンタンへの心情的共鳴を包み隠すことをしないシャルレティは、統治者と民衆の、資本家と労働者の、また教導者と信者の相互の「愛」を説く点で、弟子がすでに師を凌駕していたと解釈している。すなわち、サン=シモンがキリスト教を唯一の真理としたのは、「神は一つ」こそがすべての根源でなければならないからであった[42]。アンファンタンにとっても「神は存在するすべて」であり、「神は無限」であり、「精神として、また物質

---

[37] 岩本吉弘「ペクール・ノート：国家社会主義構想の成立過程」、『一橋大学科学古典資料センター Study Series』No. 30（1993 年）を参照。

[38] Cf. Charléty, *op.cit.*, pp. 59-62, 105-106, 114, 119-123, 213. シャルレティ前掲書、53-54、90、97、100-103、173 頁参照。

[39] 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 11, 18, 35／（2）8、12、23 頁。

[40] 「諸権力間の均衡こそ、一国民の自由にとっての唯一の保障である。政治的権力を大きく分ければ、精神的権力と世俗的権力になる。これらの二つの力は、別個に切り離されていなければならず、両方ともども実際に存在しなければならず、かつまた釣り合いが取れていなければならない」（「百科全書の計画――第二趣意書」PE, t VI, 295／（1）244 頁）。

[41] 『人間科学に関する覚書』MsSH, t V, 35／（2）23 頁。

[42] 『新キリスト教』Nc, t III, 108／（5）246 頁。

として、知性として、また力として、知恵として、また美として現れる無限の愛である[43]」。したがって「宗教、政治、道徳は同じ事象の異なる名称にすぎ」ないのであって、「新しい道徳状態であり新しい政治状態である」ところの「未来の宗教」状態は、「人類の集団的思考の表現、そのすべての概念の綜合、そのすべての行為の尺度でなければならない[44]」。「知ることのすべて、行動のすべて、あるいはそれらを求めること、さらに理論のすべてもまた実践のすべても　愛から生じ愛に戻っていく[45]」。アンファンタンにおいてすべては愛の表現なのだ。どんな行為も「神を愛する、神を知る、神に奉仕する」行為へ還元され、それぞれ聖職者、神学者、〈産業者〉に対応し、宗教・科学・産業の「三位一体」をなすことになる[46]。したがって宗教・科学・産業はすべて愛へ至るための祭祀として神聖さと崇高さを帯びており、職分が割当られることはすなわち「真の塗油であり、真の聖別」を意味する[47]。この位階制の頂点には「他の誰よりも大きく、高く、永遠の秩序を解釈しえる者がいる[48]」。それが「啓示者」でありアンファンタンが体現する「生ける法」である[49]。シャルレティの要約によれば、この教義は次のような神的秩序の構想の一端をなすものなのである。

> 人類は街路の秩序もろくに守れない警察の規則によって生きるのではなく、神の隣人である指導者によって指示された摂理の秩序にみずからの歩みを合わせるよう定められている。代々、生命と愛の言葉を語り継ぎ、人類の旅を幸福へと向けるのが指導者の務めなのだ[50]。

こうしてサン=シモンはいまや「キリスト教に対するソクラテス」にすぎなくなり[51]、自ら派の「父」を称し、信徒を「息子」と呼んで人々を真の共同体に凝集させたアンファンタンこそが「神の隣人」となる。アンファンタン主義においては個人が愛の秩序の中に融

---

[43] B.-P. Enfantin, H. Carnot, H. Fournel et Ch. Duveyrier, *Doctrine saint-simonienne : exposition*(Paris: Librarie Nouvelle, 1854), p. 410.
[44] B.-P. Enfantin, *op.cit*., pp. 314-315. バザールほか前掲書、300-301 頁。
[45] B.-P. Enfantin, *op.cit*., p.433.
[46] Cf. *ibid*., p.434 et Charléty, *op.cit*., p.74-75. 142-143. シャルレティ前掲書、64、118 頁を参照。
[47] Cf. *ibid*., p. 478, 481; Charléty, *ibid*., p. 75. 同書、64-65 頁。
[48] Charléty, *ibid*., p. 75-76. 同書、65 頁。
[49] B.-P. Enfantin, *op.cit*., p. 476.
[50] Charléty, *op.cit*., p 76. シャルレティ前掲書、65 頁。
[51] *Ibid*., p. 76, 83. 同書、65 および 73 頁参照。

解してしまう危険があることは、シャルレティも承知している[52]。それでも彼は、カトリック教会を模したサン=シモン主義の秘蹟授受の場面を『グローブ』の記事から引用するのである。

> ある日特権階級の一人、ボーフォール氏がテトブーの講堂に現れ、その場の光景に打たれ、サン=シモン主義に帰依したいと申し出た。《私はあなたにとってなんでしょうか》と、「父」オランド（ロドリーグ）は尋ねた。《今は友人です。やがて私の「父」になるだろうと思います》。ボーは熱狂して《特権階級》の男に接吻した。喜びは限りなく、多くの人々の目から涙が流れた。友愛の陶酔が彼らに浸透した[53]。

シャルレティは、「このように快く、このように素朴な希望を抱いて、このように親密に結びつくことは、何かしら感動的なものである[54]」と述べている。秘蹟を受けた老人は授けた若者を「父」と呼んだ。彼らは秘蹟を授受することにより、生理的関係でも伝統的関係でもない、理性的な人間同士が信仰を通じて結びうる唯一の関係へと超出し、そこにサン=シモン主義の勝利を感じとって聴衆を含めた彼らは涙する。

だが、そのような過度に精神的な共同性志向を社会主義の本質的要素とみなすシャルレティの解釈は留保せざるを得ない[55]。アンファンタン主義が当時危険視されたのは、公然と体制のイデオロギーに叛旗を翻したことに加えて、その共同性のパトスがいかなる既存の社会関係をも凌駕するほど強かったからにほかならない。女性の扱いをめぐる議論には

---

[52] Cf. *ibid*., pp. 84-86, 88-90, 139-140, 156-157. 同書、74-75、77-78、116、128-129 頁参照。
[53] *Ibid*., p. 118. 同書、99 頁。
[54] *Ibid*., pp. 117-118. 同書、99 頁。
[55] アンファンタン主義が不動産の相続権を否定したことをシャルレティは次のように説明している。「全員が労働し、全員が役人である。所有とは職分である。それはもはや土地や工場ではない。人はもはや農業や産業における任務の所有者でしかない。この所有には各人が価する位階に与えられる俸給という収入がある。活動的な職分を終えたあとは、それは退職年金となる」。所有できるのは職能と俸給であって、土地ではない。彼らがこのように考えた理由のひとつは、財産相続が世襲という身分制と不可分の関係にあったからである。たしかに「父親は息子の幸福が自分の労働の代償であることを知っている」。しかしその現実は、「家庭は金持ちの特権」という結論を引き出してしまう。それでは階級分化と階級対立を是認してしまうのだ。「所有はもはや個人的なものではなくなるだろう。社会的なものとなるだろう。サン=シモンによって、土地はすべて労働の道具として考えられるようになった。国家だけがその道具の所有者であり、それは、その生産物が、国家によって各人の仕事に応じて各人に配分されるよう、各人の能力に応じて各人に配分されるのである」（*ibid*., pp. 126-129. 同書、106−107 頁）。

それが顕著にあらわれている。アンファンタンは、本能的な「移り気」が男性にだけ許され、家庭の「徳」が妻にだけ負わされる伝統的家族観を打破しようと考えていた。このような形で正当化される両性の平等観は雑婚の奨励を帰結することになり、ひとびとの考えは「結婚という品位に達する」ことであり家庭を持つ自由は有閑人の特権になっていると主張するバザールや最古参メンバーであるロドリーグの離教を招いた[56]。サン=シモン主義の共同性のパトスは、アンファンタン主義のもとで、すでに思想運動という組織形態を桎梏とみなすまでに強まっていたのである。

度重なる訴訟と讒言の嵐のなか、アンファンタンはメニルモンタン街に本部を移した。修道院生活に似た位階制を徹底させ、俗世間から孤立した共同体生活をあくまで堅持することで組織の引き締めを図ったのである。その経験は熱烈なアンファンタン信者たちに集合的神秘体験をすら強いることとなったが、運動組織のイデオロギー闘争としては負け戦にほかならず、信徒は歯が抜けるように離散し、資金も枯渇していった[57]。当時を回顧したアンファンタンの文章は、彼がサン=シモン主義の名で理解していたものがなんであったかを如実に表している。

> 大革命末期に、人々は、皆、恐怖政治と無政府状態とを終結させることのできる人間をもとめていた。政治においては、そうだった。その人がやってきた。倫理においては、売淫の恥辱と姦通による無秩序とを終結させるために、なぜ女性の到来を求めないのだろうか。……社会はどのようになるとわれわれは考えるのか。それについては、問わないで貰いたい……。この点に関するわれわれの考えはさして重要ではない。人間は男性達によって作られた社会組織に飽き飽きしているはずだ。それはこの 40 年来、雹のように害をもたらしている[58]。

運動の最末期に風紀紊乱の廉で告発・逮捕されたアンファンタンは、獄中で信徒たちに「手引きの紐は断たれた。子どもたちはつよいのだから自分自身で「父」から離れて、なすべきことの霊感を見出さなければならない」といい、「子どもたち」は泣く泣く「父」の

---

[56] シャルレティは、こうしたアンファンタンの女性観についてフーリエの影響を指摘している。(Cf. *ibid*., pp. 163-164, 169-170, 173. シャルレティ前掲書、134、139、142 頁参照)。
[57] Cf. *ibid*., pp. 197-218. 同書、160-177 頁参照。
[58] *Ibid*., pp. 255-256. 同書、208 頁。

言にしたがったという。シャルレティが紹介するアンファンタンの最後の告白は、彼が終生自分の信念に忠実な信仰者であったことを伝えている。「男性の王権は滅びた。大譲位をなしとげるのはこの私だ」。

古い心は崩れ去る。神よ、私はあなたが定められる新しい姿で、あなたをお迎えする用意ができております。今わたしの心は空虚です[59]。

ここに「感情の科学」とその実践を中核として初期のサン=シモン主義運動を牽引した「正統」派の活動は終焉を迎える。軍内部でのサン=シモン主義の布教を取り締まるべく通達を出した陸軍大臣スールト（Nicolas-Jean de Dieu Soult, 1769-1851）は、「宗教的見地から見れば、〔サン=シモン主義者の〕教理は素朴な人心を眩惑し、陰謀者の瞞着に乗ぜられやすくせんとする奇怪なる神秘主義の様相を呈している[60]」と述べた。バザールやコントが反発したのも、アンファンタンの路線に沿って強調されたサン=シモンの思想のこの精神主義的な側面である。だが当時アンファンタンと行動をともにしていたシュヴァリエは、運動から離反したコントを批判して次のように述べている。「孤立した人間に喜びはない。苦い思い出だけだ。彼にとっては、すべてがうつろだ。宇宙は広大な空虚である。彼を満たしている傲慢が彼を圧迫し、窒息させる[61]」。この「空虚」を「愛」で埋め尽くそうとしたアンファンタンが、その過激な精神主義により挫折したのなら、それに代わる世俗的な倫理をサン=シモン主義者は探究しなければならない。言うまでもなくシュヴァリエは、〈産業社会〉の経済学の中にそれを見出していったのである。

３．サン=シモン主義の経済学（エコノミー）——シュヴァリエ

シュヴァリエは華々しい経歴の持ち主である。アンファンタンの直弟子であり参謀役として初期のサン=シモン主義運動を牽引した一人でありながら、七月王政と第二共和制のブルジョワ政権期には官僚に舞い戻って鉄道政策を推進し、つづく第二帝政の経済顧問と

[59] *Ibid.*, p. 264. 同書、215 頁。
[60] *Ibid.*, p. 147. 同書、121-122 頁。
[61] *Ibid.*, p. 150. 同書、123-124 頁。

して通貨政策・通商外交・産業振興・国土開発に携わる一方、アカデミー・フランセーズ会員、万国博覧会評議会議長、英仏通商条約交渉におけるフランス代表、上院における勅任議員などの要職に就いて権勢をほしいままにした。

ミシェル・シュヴァリエは、磁器産業で知られるフランス中部の都市リモージュで 1806 年に商人の子として生まれた。1817 年から 23 年にかけて全額給費生として王立高等学校で過ごしたのち、グラン・ゼコールのひとつ理工科大学校へ、さらに専門研究のために同校に併設されている鉱業学校へも進んだ。1828 年に卒業すると直ちに鉱山技師として鉱業局に就職し、順風満帆の出世コースを歩むかに見えたが、この時期のエリートに特有の「精神の空虚」を内に抱えた彼は、テンプル騎士団をはじめ様々な精神的サークルを巡り、最終的にアンファンタン率いるサン=シモン教団へとたどり着くのである。当初から権力に迎合的で如才のないシュヴァリエの性格は、仲間内ではどこかうさん臭いものと目されていたようである。しかしアンファンタンにその資質を買われて、運動発展の源として瞬く間に頭角をあらわし、やがてアンファンタンの懐刀として「正統」派のスポークスマン役を果たすようになった。獄中でアンファンタンと決別したのちも、彼は陰に陽にアンファンタンを助け、結局はそれが彼をサン=シモン主義運動の再起の立役者に押し上げていくことになる。

たしかにアンファンタンが初期の教団の精神的支柱として君臨したのは、シュヴァリエが望んでも得られなかったその人格的カリスマ性のためであったが[62]、シュヴァリエにはアンファンタンにはない傑出した理論的かつ実務的な能力があった。このシュヴァリエの能力がアンファンタン失脚後に解体の危機に瀕したサン=シモン主義運動を再起させ、ひいては第二帝政の公定イデオロギーの地位にまで引き上げる原動力になったのだといえる。上野喬もいうように、シュヴァリエの業績も失敗も徹底して「技術官僚」としての力量という観点から理解することができるのである[63]。上野の『ミシェル・シュヴァリエ研究』は本邦で唯一のモノグラフであるとともに、シュヴァリエの理論を同時期の経済学者フリードリッヒ・リストや後のウェーバーと比較しながらその特色と限界を詳細に明らかにしており、シュヴァリエの能力を再評価するにあたって不可欠の論考である。本節でシュヴァリエの業績を検討しその作品から引用するにあたっても、この記念碑的業績に大きく依拠していることをここでお断りしておく。

---

[62] Cf. *ibid.*, p. 251. 同書、205 頁参照。
[63] 上野喬『ミシェル・シュヴァリエ研究』（木鐸社、1995 年）、3-5、177 頁参照。

サン=シモン主義者シュヴァリエの思想は、機関紙『グローブ』紙に発表された最初期の論説『地中海圏構想』（*Système de la Méditerranée,* 1832）に、先進〈産業社会〉イギリスを中核とする地中海沿岸諸国の〈産業化〉による平和を構想しつつ、そのなかでフランスの経済発展の契機を模索するという形ですでに明瞭に現れていた。これは、イギリス経済を地中海へと延長する足がかりして、フランス国内にパリと各地方を結ぶ鉄道網を張り巡らせてドーバー海峡と地中海を繋ぎ、イタリア・ドイツの各都市を鉄道で結びつけながら欧州国際河川と接続させ、地中海・エーゲ海・黒海・カスピ海を経てロシアやトルコ、またスエズ運河により紅海沿岸のアフリカ大陸諸国との接続まで遠望する気宇壮大な構想である。シュヴァリエは鉄道を含む巨大なインフラの整備にかかる費用と労働資源の調達法まで周到に講じているが、その基底にあるのは、当時ヨーロッパ各国で膨れ上がっていた軍隊および軍事予算をそのまま平和目的のために転用するという発想であった。すなわち、よく訓練された軍隊は優れた労働力としても活用できるし[64]、地中海沿岸各国の軍事予算をこの事業に転用すれば約 12 年で償却されるというのである[65]。

鉄道がかくも注目されるのは、そこにイギリスの〈産業化〉が集約されていたからである。イギリスでは毛織物業を按護するように関連の必需工業生産が発達を見ることにより、当時の政治経済的優位を築いた[66]。シヴェルブシュによれば、そこにほぼ無尽蔵ともいえる石炭鉱床を野放図に利用できるという好条件が重なって蒸気機関が発明され、動力源の機械化が進んだ[67]。たとえフランスが毛織物業でイギリスを追い抜く見込みは無いとしても、交通体系の整備・拡張は社会的分業の確立と相まって〈産業社会〉の成立にとっての

---

[64] 「軍服、音楽、軍旗への畏敬心をもった連隊は、勤労者が名誉心と時間厳守の習慣という、貴重な基礎を会得する工芸の最高学府になるだろう。軍隊組織は産業の百科全書である。また当面、創造的労働には、理工科大学の科学研究に軍事教練を欠かせないように、軍事演習を欠くことはできない」。Michel Chevalier, “Notre politique en présence des partis et en particuliers des légitimistis”, *Religion Saint Simonienne : Politique Industrielle et Systèm Méditerranée* (Paris : Imprimerie D’éverat, 1832), p.24. 上野前掲書、71 頁参照。

[65] Cf. Michel Chevalier, “Le choléra morbus”, *Religion Saint Simonienne*, pp.51-56. 上野前掲書、70-73 頁参照。

[66] 大塚久雄によれば、スペイン継承戦争の終結を目指した 1713 年のユトレヒト条約締結には英仏の住み分けを意図する通商条約が付帯していたが、イギリス重商主義者は国外市場の拡大を求めてこれに猛烈に反対しイギリス政府の姿勢を転換させた。新たな通商条約によりイギリスは広大な国外市場を得て毛織物製品が販路を拡大、イギリスは一挙に高度経済成長を遂げたという（大塚前掲書、29-34 頁参照）。

[67] Cf. Schivelbusch, *op.cit*., p 6. シュヴェルブシュ前掲書、10-11 頁参照。

必然的要請なのであり[68]、鉄鋼業（レール・機関車）、鉱山業（石炭）、林業（枕木）などが刺激されると同時に消費市場が開拓され、必需工業生産の育成環境が整うことが期待できるのである。

だがサン=シモン主義者シュヴァリエには、鉄道をはじめとする交通体系の整備を単に殖産興業の手段として考えていたわけではなかった。1841 年のミュールーズでの鉄道開通祝賀会に賓客として招かれたシュヴァリエは、乾杯の辞で次のようにのべている。

> 今日ヨーロッパを造っております文明の人々は、お互いに知らぬことはなくなりましたために敵でもなければ妬みももっておりません。……皆様これが全てではありません。ヨーロッパ鉄道網はさらに、宗教的進歩の動因ともなるのです。皆様は、ここで私が鉄道に関わらせて、宗教の聖なる名前をのべることを許して頂けると存じます。……さて私は深い信念と感激とをもって尊敬すべき〔ラエス〕猊下の言葉をのべさせて頂くことができると存じます。ヨーロッパ鉄道幹線の計画はほとんど宗教的性格をもつこと、地上の全てのものは個人や国家の反感と憎悪を消すことになり、国民や個人を考える全てのものは、互いに愛し合うようになる。すべてこれらは宗教のまったき領域なのであると。鉄道がもたらすヨーロッパ各地のそして人々の兄弟愛ほど、宗教的なものはほかにありますでしょうか……[69]。

かつてサン=シモンは、「ローマ人の水道と大道路は、エジプト人のピラミッドやギリシア人の柱廊よりも、はるかに大きな効用があった[70]」とのべた。水道と荷車は都市生活に必須であるのみならず、その施設建築には集団指導と技能伝授が欠かせない。シュヴァリエにとっては鉄道こそが古代ローマ帝国の街道にも比すべき〈産業社会〉の普遍的結合の伝導管であった。かつて「ルテティア」（パリの古名）が街道の末端にローマ風都市として建設されたように、いまやパリが地中海世界の中心に置かれ、ローマ、ブリュッセル、ベルリン、果てはモスクワを各国交通の要衝にする。各国国境を前提にしながら、物資の交流がおなじキリスト教圏国家相互の精神的紐帯の表徴となるような、キリスト教〈産業社会〉

---

[68] ヴェルナー・ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』（金森誠也訳、講談社、2000 年）、340-346 頁参照。

[69] Michel Chevalier, *Lettres sur l'inauguration du chemin de fer de Strasbourg à Bâle* (Paris : Librarie de Charles Gosselin, 1841), pp.104-106. 上野前掲書、84-85 頁参照。

[70] 『19 世紀の科学的研究序説』ITS19S, t VI, 138／（1）152 頁。

圏の中核としてパリが構想されるのである[71]。

もちろんこのような宏大な構想の現実化には莫大な資金が求められる。その錬金術こそがシュヴァリエをサン=シモン主義の経済学者たらしめたのだともいえるが、それを理解するためにも、当時のヨーロッパの経済・金融状況の推移をここで確認しておこう。

産業革命により爆発的に増大する生産量に対応して、一定の比率で決済手段も増大しなければならないが、19 世紀ヨーロッパの重商主義的金融制度――その思想体系の初期段階には重金主義を胚胎する――が障害となる。今日では通貨・金融政策は国家の事実上の統制下にあって国家の経済目標にしたがって決定される（管理通貨制度）。しかし 19 世紀は一般に貴金属貨幣を標準とし、イギリスは大型決済を可能にする金本位制を、フランスは小型決済に向く銀貨を強制通用力をもつ法貨とし、金貨との交換比率を定めた複本位制を公にしつつ事実上の銀本位制をとっていた。保険･証券といった金融事業が高度に発達し、手形決済も進んでいたイギリスとは異なり、フランスは王室御用達の銀行家のほかには目立った銀行もなく、産業革命を完遂するための決済手段が絶対的に不足していた[72]一方で、銀鉱に依存して無闇に増やすこともできなかった。「悪化は良貨を駆逐する」ということばがあるように、貴金属貨幣には三つの危険がある。第一は蓄蔵という動機に基づいて物々交換へ堕落する危険、第二は貴金属それ自体の価値によって地域外に散逸する危険、そして第三は金銀の法定比価と市場比価の乖離から流通通貨の偏りが生じ物流が滞る危険がある。イギリスの場合は高度な産業機械と遍く植民地に支えられた不動の政治経済的覇権、さらに島国という条件が貨幣価値を担保し手形決済を発達させ物々交換化と散逸の圧力をはねのけられたが、産業化の未熟な大陸国家フランスにおいて貴金属貨幣は蓄蔵の危険と国外流出の危険に常にさらされていた[73]。18 世紀フランスには、経済的ヘゲモニーを保持

---

[71] シャルレティによれば、「商品経済」網がフランスを導き手として欧州大陸から各大陸にまで平和の象徴として伝播するという文明観は、アンファンタンによって完成されたサン=シモン主義の女性観の応用である。アンファンタンは、男性優位社会であるヨーロッパ社会は、平和と生産を基軸とする女性的な組織とならねばならないと主張した。それは最小単位社会として男女がつくる家庭にはじまり、都市、国家へと順次拡大され、最終的には文明と文明との関係にまでいたる（Cf. Charléty, *op.cit*., pp. 163-172, 173-145, 188-189, 190-194. シャルレティ前掲書、134-141、143-145、153-154、155-158 頁参照）。その際サン=シモンが蔑視したアジア・アフリカ・ロシアが、オリエンタリズム的な憧憬の対象にまで昇華される。すなわち、「東洋は神の一側面」であり、「地中海は東洋と西洋との婚姻の床」となり、ロシアは「東洋に覚醒を促す」調停者とみなされる（Cf. *ibid*., pp.195-196. 同書、158-159 頁参照）。

[72] 上野前掲書、224-225 頁参照。

[73] モンテスキュー『法の精神』中巻（野田良之ほか訳、岩波書店、1989 年）、298-328 頁参照。

しようとするイギリスの介入をできる限り避けると同時に換骨奪胎して受け入れなければならないという政治的事情があり、金貨銀貨を併用する複本位制を公にしつつ、結果として大英帝国の産業的威光に圧倒されて銀本位制に甘んじざるを得なかった。フィジオクラシーの農業国フランスという構想や「穏和な商業」という国際秩序はこの重商主義を体現する貴金属貨幣制度に支えられて成り立ったものだったのである。

19 世紀初頭のフランスは、ジャコバン政権での地代の受け取り証書であったアシニャ債権を紙幣として導入することと最高価格令の失敗から、極端なインフレを招いた。第一帝政でフラン・ジェルミナル金貨を定め法貨銀貨との比率を定めることでアシニャ紙幣を決済手段から追放し経済状況を復調させるが、革命戦争を通じて銀を産出する植民地を失っているにも関わらず保護貿易主義に移行したためフラン決済の利点を失ってしまう。復古王制下で植民地を返還され植民地帝国の地位を取り戻しても、国際通貨制度の観点からは事実上の銀本位制への再固定化を甘受したにすぎなかった。そこには、フランスをブリテン島経済の調整弁にし、大型決済をポンド金貨立てで、小型決済をフラン銀貨立てで棲み分けさせ、フランスを経済二流国に固定しようとするイギリスの強かな計算もはたらいた。

さて、シュヴァリエの錬金術的な手腕は、国際為替を利用した国富増産と金融機構の整備による国内でのその分配の二面で発揮された。

本来銀本位制を信奉していたシュヴァリエが金本位制へと主張を転換し、紙幣の複数発券制を支持したことは、しばしばその経済学にまで遡って批判されるが[74]、複合的財政政策としてじつは整合的である。例えばマルクスは『経済学批判』（*Kritik der Politischen Ökonomie,* 1859）において、「ミシェル・シュヴァリエはアリストテレスを読んだことがないのか読んでもわからなかったのか」と問い、貴金属貨幣の市場比価を強調するシュヴァリエの貨幣論では強制流通力を有する法貨の観念が希薄であることを指摘した[75]。だがマルクスは『フランスのクレディ・モビリエ』(*The French Credit Mobilier*, 1856)において、シュヴァリエの変節は、イギリスという巨人に対抗して経済的覇権に食い込もうとするフランスの統治術の一環としてみるなら、きわめて整合的であるとも主張している[76]。産業革命は英仏関係での金高銀安によって推進されたが、産業化が進展すれば銀フラン価値は上

---

[74] 上野前掲書、233-234、226-229、211 頁参照。
[75] マルクス『経済学批判』（武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳、岩波書店、1956 年）、150-151 頁。
[76] マルクス「クレディ・モビリエ」、26 頁参照。

昇してしまう。フランスは産業革命の完遂まではヨーロッパ大陸内部で決済手段としての銀をフランス市場に閉じ込めねばならず、対後発国為替市場では銀高金安を演出しなければならなかった。メキシコ銀へのアクセスを保障して銀デフレを暗示することで銀安誘導を図る 1861 年のメキシコ出兵[77]と、加盟国の通貨価値をフランにあわせフラン流通圏を後発地域にまで拡大することで相対的にフラン銀価値を低くする 1865 年のラテン通貨同盟がこれに対応する[78]。さらに 1848 年頃からはじまるアメリカのゴールドラッシュの幸運が、金価値を引き下げると同時に金融制度を強固にする。貴金属貨幣の貴金属価値を貶め、単なる通貨にすることに成功するのである。交通制度論から貨幣論・貿易論までも包括するシュヴァリエの理論はフランスの〈産業社会〉化のための事実上の管理通貨制度を実現するものであり、その具体的な資本調達の方法を地中海世界における国際為替市場に見いだしたのである。

その一方でシュヴァリエは、フランスの〈産業社会〉化に向けた国富の適正分配の方法を公共投資に見出している。当時のフランス銀行はロートシルト（英名ロスチャイルド）家を筆頭に私利を追及する同族支配のオートバンク（hautebanque. 国債を一手に引き受ける資力をもった個人の上位為替業者）が主流で、複本位制のフランス銀行と歩調を合わせてフランスにおける金融市場を独占していた。しかし産業革命を完遂するために要求されていたのは、王の銀行家ではなく庶民が行う事業に将来性を認め資金を提供する銀行、すなわち信用制度の構築であり、またそのための信用債権／紙幣への一足飛びの転換であった。集産主義の伝統が息づくフランスにおいてサン=シモン主義者の求める〈産業社会〉の実現には、その手始めとして各種〈産業〉の育成に必要な株式投資を公共の手で行うことが不可欠なのである[79]。ペレール兄弟の創設した投資銀行「クレディ・モビリエ(Crédit Mobilier)」に対して、第二共和制末期にナポレオン大統領が公共事業債権の引き受け先となる特権を与えたのは、まさしくそのような意図からであった。

株式会社への投資を通じて産業を育成する「クレディ・モビリエ」の巧妙なやり方は、

---

[77] 上野前掲書、173 頁参照。

[78] メキシコ銀への意欲は、潤沢な銀準備を示唆し金融制度を安定化する効果があった。ラテン通貨同盟においては、フランスをのぞくベルギー、イタリア、スイスの通貨はフランス産業革命の熱気に圧されてフランスに集中し、銀を無価値にする一方で物々交換化の圧力を相対化して、銀貨を法貨の地位に固定し、フランスを除く加盟国通貨制度は跳行し事実上の金本位制となることが見込まれた。アンドレ・ヌリス『フランの歴史』（上杉聰彦訳、白水社、1971 年）、72-74 頁参照。

[79] 横張前掲書、208-209 頁参照。

マルクスをも驚嘆させた。債権によって成立する株式会社は信用経済を前提とする管理通貨制度と一体の関係にある。一方「クレディ・モビリエ」は、「その定款によれば、匿名会社、すなわち有限責任の株式会社として運営されるような産業会社だけを後援することができ」、したがって「この種の会社をできるだけ数多く設立し、さらに、すべての産業会社をこのような会社形態にするという傾向」を生じせしめる。

> 産業への株式会社の適用が現代諸国民の経済生活に新しい時代を画していることを、否定することはできない。この株式会社の適用は、一方では、それ以前には予想もされなかった結合という生産力を明るみに出し、個々の資本家の努力によってはとうてい達成しえないような規模で産業企業の創業をもたらした[80]。

シュヴァリエはサン=シモンを引いて「安上がりの政府にこしたことはないが、最も経済的な政府とは最小に使うのではなく最良につかう政府[81]」であるとし、これを「クレディ・モビリエ」の経営に適用した。実際の株式投資銀行「クレディ・モビリエ」は、社内のディーリングルームをフランスの株式市場よろしくし、特許状のもとで子会社を設立しては連結決算で「クレディ・モビリエ」の自社価値を増し、6000 万フランの資本金をその何倍にも膨らませて見せたのである。マルクスにいわせれば、それは南海バブルに便乗したローが用いた手法にほかならない。

> クレディ・モビリエは政府の保護を受けた特権会社であり、巨額の資本と信用とを自由にしているので、クレディ・モビリエによって設立された企業であればどんな新しい企業でも、その株式は最初に発行されたときから市場でプレミアがつくことは確実である。こうして、クレディ・モビリエは、自分の株主たちに、彼らが持っている母会社の株式の数に比例して新しい〔企業の〕株式を額面価格で割り当てるという方法を、ローから学んだ。このようにして株主に保証された利潤は、まず第一にクレディ・モビリエ自体

---

[80] マルクス「クレディ・モビリエ」、34 頁。

[81] Michel Chevalier, “Aux hommes politiques”, *Religion Saint Simonienne*, pp. 90-91. 上野前掲書、66 頁参照。サン=シモンの言葉では封建体制から職能国家への転換という意味で次のように語られた一節がある。「要するに、私が提案している再組織の方法は、あらゆる政治的利益のうちで最大なもの――最も少なく、最も安上がりに、統治されるという利益――をフランス人に与えるであろう」(SbBS, t VI, 521／（4）375 頁)。

の株価に影響をおよぼし、他方では第二に、クレディ・モビリエの株式のこの高い相場が、発行されるべき新しい株式の高値を保証する。このような方法によって、クレディ・モビリエは産業企業への投資にあてられる貸付資本の大部分に対する支配を手に入れたのである[82]。

だが 1720 年のミシシッピ・バブルで発揮されたローの「錬金術」が植民地開発の実体を伴わない単なる額面価値の暴騰であったのとは異なり、「クレディ・モビリエ」は無数の工場、銀行、鉄道網という実物資産を作り出した。それは庶民層の生活や経済条件を健全化し、中間層の充実と政治経済的能力の涵養を目指した第二帝政のニーズに完全にかなうものであったのである。

シュヴァリエのシナリオでは、フランス「産業社会」の完成後に保護主義貿易政策を緩和させ、自由貿易体制の旗振り役として欧州大陸の表舞台に復活することになっていた。実際にもコブデン・シュヴァリエ条約（1860 年の英仏通商条約）が成立すると、「クレディ・モビリエ」という特権会社に対抗する必要に迫られたオートバンクは金融連合――1864 年に「ソシエテ・ジェネラル(Société Générale)」に発展――を組織し、両者がヨーロッパを舞台に金融ヘゲモニーを争うようになった。関税が引き下げられると脆弱な企業は淘汰され、フランス国内の有力企業は一気に近代化を遂げて大企業へと躍進し、大企業を按護する形で消費市場と必需工業製品生産は拡大した。フランス「産業社会」の完成は 1866 年のメキシコ撤兵、1867 年のパリ万国博博覧会の開催と、公共投資銀行「クレディ・モビリエ」が歴史的な役割を終えて清算されることによって証明されるのである。

ここまでのシュヴァリエがもっぱら経済学者であるとすると、1867 年開催のパリ万国博覧会の報告書冒頭におかれた『序説』（*Introduction, Exposition Universelle 1867: Rapports du Jury international,* 1868）は、サン=シモン主義者としての彼の別の一面、すなわち平和の価値を説く倫理学者としての顔がのぞく点で興味ぶかい。『報告書』本編は全 13 巻 8375 頁にも及ぶが、これを総括して「産業社会の百科全書」と銘打った『序論』自体も数百頁の大著であり、当時上院議員に任じられていたシュヴァリエがサン=シモン主義者としての使命を果たすべく、フランスの置かれた歴史的状況の分析と課題を提示した作品とみなされる。だがいま注目すべきは、シュヴァリエが「喜捨」という宗教上の行為を例にとり、

[82] マルクス「クレディ・モビリエ」、32 頁。

その「対抗概念」として「労働」を倫理の基礎として高く評価していることである。「自由な労働の保護、科学の助け、絶えず増加する資本の協力により、社会は強く望むならば、各自の労働および各自の協力によって、人類全体の家族の全成員を、物質的福祉（le bien-être）が獲得できる地点に導くことができる[83]」。コブデン・シュヴァリエ条約が皇帝大権によって締結され自由貿易体制へ入ると、フランスは低価格競争に突入し、格差問題の解消と生産性向上のための専門的人材資源の確保という二つの課題を同時に遂行する必要に迫られた。シュヴァリエによれば、労働が自由化されるにしたがって組合結成は必然となるが、社会的分業こそが労使双方に生産性向上の倫理と道徳を付与するという観点から、排他的・対決型の組合ではなく利益分与型の組合が望ましく、また高い生産性を可能にするための専門教育の充実、すなわち人間への再投資は、富者の倫理とみなされねばならない。こうして労使協調に基づいて十分な商品が低価格で庶民に提供されることが、いま求められている「物質的福祉」なのである。『序論』の結論部分では、分業と〈産業化〉と福祉の世界大での展開にとってもっとも大きな障害となる戦争の絶滅が説かれる[84]。

『序論』の根底にある思想は、かつて師のサン=シモンも説いた組織化の時代における新しい「百科全書」の精神である。その刻印は、「協調の思想は、……相互の権利を尊重しながら、文明を重視する偉大な原理の勝利の中で、諸国民の友好をはかろうと努め、全体の福祉の中に、各自の満足を求めんとするものである[85]」と主張する結論冒頭に如実にあらわれている。しかるに現状はこの組織化と協調の精神に基づく進歩への希望をいかに裏切っていることか。「ヨーロッパは人類のもっとも高等な段階を代表していると考えている」にもかかわらず、「不安の群発からこんなにも武力を組織し、こんなにも武器を氾濫させていること」は歴史上かつてなかった。「ヨーロッパ的秩序と諸国民の協調、一言で言えば、平和の党派が、現在の強国の内閣において……優勢であると……みなすことはかなり軽率だろう」。「ついには進歩の大義が勝つだろう。しかしこれは試練を経たあとでこそいえるのだ。……暴力の天才は少なからず活躍するだろうし、また同じく荒廃と流血にふけるだ

---

[83] Michel Chevalier, *Introduction*, *Rapports Du July International* (Paris : Imprimerie Administrative de Paul Dupon, 1868), p. 346. 上野前掲書、279 頁参照。

[84] フランスで労働者のストライキ権が認められたのは 1864 年、労働組合の結成が合法化されたのは 1868 年のことである。1870 年に対普軍事法案が上院で審議・採決された際、シュヴァリエは一人反対演説をおこない、反対票を投じた。Cf. *ibid*., pp. 430, 437, 442-453. 上野前掲書、280-281 頁参照。

[85] *Ibid.*, p.511. 上野前掲書、283 頁参照。

ろう」。〈産業社会〉を実現し、相互依存と経済的分業という進歩と卓越を達成してなお拭えぬ嫉妬や傲慢からなる「敵意」が居残り、いまや進歩と卓越は「新世界に移るべく、西・中部ヨーロッパから離れようとしている」。

> およそ 30 年にして、アメリカ合衆国は一億の人口を擁し、フランスの 15 ないし 16 倍の広さの地域に、もっとも強い資源をもち、もっとも賞賛に値する性格を持つようになるのは明らかだろう。今後彼らは、自然的に決して有利ではないが、ヨーロッパの東方辺境にあり、今世紀の終わりには、彼らと同様の思想をもち、一億の人間を擁するようになる広大な〔ロシア〕帝国と、偉大な運命を共有するという予感により、たやすく同盟を結ぶことになろう[86]

シュヴァリエはアメリカとロシアの台頭を鋭く予見しつつ、フランスを含む中・西部ヨーロッパ諸国が近い将来とるべき戦略については「彼らの利益、望み、義務は、和解することにあり、彼らの間を強い連帯で堅め、そして同盟をつくり上げることこそ肝要なのだ[87]」といい、あくまで〈産業社会〉の繁栄とヨーロッパ世界の平和とが不則不離の関係にあるという主張を堅持する。シュヴァリエの娘婿にしてコレージュ・ド・フランス経済学教授職の後任となったポール・ルロワーボーリュー（Paul Leroy-Beaulieu, 1843-1916）は、これを「この時代に書かれた最高傑作のひとつ」と評している[88]。後年アレクサンドル・コジェーヴ（Alexandre Kojève, 1902-1968）は、やはりアメリカとロシアが覇権を争うなかでヨーロッパ諸国がフランスを中心に結束する「ラテン帝国」を構想し、欧州統合論に原初的なイメージを提供した。だが EU の真の父なる称号は、その一世紀前にすでに「地中海圏」を構想していたシュヴァリエにこそふさわしいのである

---

[86] *Ibid*., p.515. 上野前掲書、283 頁参照。
[87] *Ibid*., p. 516. 上野前掲書、283-284 頁参照。
[88] 「かくも百科全書的な著作をものにするためには、シュヴァリエの才能の多様さこそ必要だった。技術者の知識、経済学者の科学性、著述家の巧妙さは一体となり、人類の産業そして同じく 19 世紀後半の全文明の状態を、明晰なかたちで数百ページにまとめて大衆に提供されたのである」。Paul Leroy-Beaulieu, “Chevalier (Michel)”, L. Say, *Nouveau Dictionnaire d’Economie Politique*, Tome 1, A-H (Paris : Guillaumin et Cie, editeurs, 1893), p. 413. 上野前掲書、244 頁参照。

４．「ナポレオン的観念」――ルイ=ナポレオン・ボナパルト

ルイ=ナポレオンの世評はあまり芳しいものではない。その理由は、のちにイタリア戦争やメキシコ戦争での無残な敗退に続き、普仏戦争で体制を崩壊させたあげくイギリスへ亡命するなど、為政者として醜態を晒したナポレオン三世の記憶が生々しいためでもあるが、また第二帝政の新興成金的体質を告発したマルクスの影響にも帰することができる。だがマルクスがこの体制を「皇帝社会主義」と呼んである程度評価していたことはあまり注目されない[89]。彼はそこでバブーフからマルクス自身までを一連の思想的発展段階に位置づけながら、ナポレオン三世をもその系譜に属することを次のように認めているのである。

> 他の一人〔ナポレオン三世〕は、フランス国内では、その中ではじめて自由競争が発展し、分割地土地所有が活用され、解き放たれた国民の工業的生産力が利用されることが可能になる諸条件を創り出し、フランス国境の彼方では、フランスの市民社会にふさわしい時代に即した環境をヨーロッパ大陸に作り出すために必要なかぎりで、いたるところで封建的な諸形態を一掃した[90]。

最終的にマルクスが下した「皇帝社会主義」の評価は、最終的に「科学的社会主義」段階にいたるための一過程、すなわち資本主義における政治経済的集産化の歴史的表現というものである。日本での研究もそれに便乗したものとなっており、分裂したサン=シモン主義者それぞれの運動、ヨーロッパにおけるフランスの自己同一性の回復という社会的ニーズ、さらにルイ=ナポレオンの自らの立身という野心が、産業立国という点で一致したと解釈されることが多い[91]。しかしマルクスですら認めざるをえなかったナポレオン三世の功績、すなわち〈産業化〉によって封建的旧弊諸制度が一掃されたことは、第二帝政がむし

---

[89] マルクス「クレディ・モビリエ」、20-36 頁参照。一方でマルクスと同時代人の歴史学者トライチュケ（Heinrich Gotthard von Treitschke, 1834-96）は、フランス第二帝政を「君主制社会主義」と評して警戒した（エーゴン・フリーデル『近代文化史 3――ヨーロッパ精神の危機／黒死病から第一次世界大戦まで』（宮下啓三訳、みすず書房、1988 年）、140 頁参照）。

[90] マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』（植村邦彦訳・柄谷行人付論、平凡社、2008 年）、17 頁。

[91] 阪上前掲書、226-228 頁、鹿島前掲書、254-255 頁、横張前掲書、193-195 頁、谷川前掲書、324-327 頁、また河野健二編『フランスブルジョワ社会の成立――第二帝政期の研究』（岩波書店、1977 年）を参照。

ろヴォルテールの待望した啓蒙君主政のもっとも純粋な実現形態であったことを、そしてそれがサン=シモンの「産業的君主制」のシナリオに沿ってはじめて可能になったことを証している。

ルイ=ナポレオンは自らの政治姿勢を説明する論考やパンフレットを多数著してきた。ナポレオン一世の政治手腕を新しいフランスの経済的大成に結びつける『ナポレオン的観念』（*L'idée napoléonienne,* 1840）[92]、ヨーロッパ産テンサイ糖と植民地産サトウキビ糖の貿易問題からフランスにおける農業生産性の改善策を説いた『砂糖問題の分析』（*Analyse de la question des sucres*, 1842）、農地開拓団を組織することにより貧困問題の解決を訴えた『貧困の克服』（*L'Extinction du paupérisme*, 1844）はその一端である。一連の論考を通じて、ルイ=ナポレオンは労働と生産を有機的に組織し、勤労者の統治機構の確立をめざしたサン=シモンの思想から決定的な影響を受けており、またそれを通じてフランスを産業革命後進国から脱皮させる方法に多大な関心を寄せるようになり、それをフィジオクラシーに見出したことがわかる。

サン=シモンの影は『ナポレオン的観念』の冒頭からすでに明らかにされていた。ルイ=ナポレオンは、一方で復活した 1815 年以降の王政を「屍骸」と唾棄しつつ、「〔1830 年の七月〕革命は、われわれのあいだに一層多くの混乱と無秩序の要因をばら撒いただけだった。今日では混乱した諸理論、卑小な利害、下品な情熱しか存在しない[93]」と評して、復古王政の過剰な秩序と革命の過剰な自由をともに退けるところに「ナポレオン的観念」が成立すると主張する。しかし、自由とは「権力が全人民にもとづくこと、その利害が人民のそれに一致し、そして支配者と被支配者のあいだに完全な信頼があること[94]」であるとすれば、第一帝政の軍事的君主ナポレオン一世を単純に賛美することはできない。いまフランスが求めている「ナポレオン的観念」は、「ボナパルティズム」とは異なるのだ。マニュエルもいうように、ルイ=ナポレオンは、ラディカルなフランス革命と身分制に依拠する復古王政をともに否定し、新しい秩序が成立するまでの過渡期を生きて思索したサン=シモンの「危機の哲学者」というあり方に深く共鳴していた[95]。『ナポレオン的観念』は、まさ

---

[92] 『ナポレオン的観念』（*L'idée napoléonienne,* 1840）は、前年に出版された『ナポレオン的諸観念について』（*Des idées napoléoniennes,* 1839）の縮約版で、後年『ナポレオン的諸観念について』に総序の位置づけで収録された。

[93] Napoléon-Louis Bonaparte, *Des idées napoléoniennes* (Paris : Amyot et Henri Plon, 1860), pp. 3-4.

[94] *Ibid*., p. 148.

[95] マニュエル『サン=シモンの新世界（下巻）』、422-423、425、437 頁参照。

しくそれに重ねるようにして新しいフランス社会をつくりだす事業に身を捧げるという自らの「過渡期の意識[96]」を表現した著作なのである。

一方フィジオクラシーの影は、「農業は不変の利益にもとづいており、健全で活気に満ち道徳的な農民を生み出すから、国の繁栄の第一の要素である[97]」と言う主張によく現れている。ルイ=ナポレオンの活躍した 19 世紀中頃で、フランスの就業人口における部門比率は、工業部門の 26 パーセントに対して農業は約 50 パーセントを占め（1906 年時点でさえ農業人口 42.7 パーセントに対して工業人口は 29.2 パーセントに過ぎない）、しかもその大半はナポレオン一世の作り出した 1000 万ともいわれる分割地農民であった。したがってルイ=ナポレオンにとってはもちろん、フランスの政治体制にとって農業人口の支持が依然として正統性の基盤であり、農業の近代化は工業の振興と並んでフランスの最大の課題でありつづけていた[98]。だがフィジオクラシーへの関心そのものは、サン=シモンの思想に感化された可能性がある。フィジオクラシーは必ずしも「重農主義」政策に限定されず、むしろすべてが王の財産となった「家産国家経済（オイコノミー）」のフランス的表現である。絶対王政の下で最大限の安定的利益を供給する農業を体制の基礎とし、穏和な商業社会の実現を目指すその「合法的専制」――身分制を抑制して能力制を最大化する――思想に、サン=シモンは来たる〈産業社会〉の政治経済学の基盤となるもの――身分制なき社会の能力による運営――を見ていた[99]。ところでルイ=ナポレオンによれば、19 世紀初頭の国際経済状況は、18 世紀フィジオクラットたちの理解したような「穏和な商業」などではない。いち早く産業革命を達成したイギリス社会においては、すでに階級分化が先鋭化しはじめており、これに触発されるようにヨーロッパ諸国でも労使の階級対立が激化しつつあった。しかし、フランスでは零細農民がいまだ社会の主体を成しており、それがイギリスのような〈産業社会〉を成立させる最大の支障となっていた反面、階級対立による国家分裂の危険を免れ

---

96 阪上孝「第二帝政と国民経済観の二類型」、河野前掲書、149 頁参照。

97 Napoléon-Louis Bonaparte, *Analyse de la question des sucres* (Paris : L'Administration de librarie, 1843), p. 43.

98 Cf. Alain Baltran et Pascal Griset, *La Croissance économique de la France 1815-1914*(Paris : Armand Colin, 1988), p. 47. 柴田三千雄ほか編『世界歴史体系フランス史 3――19 世紀なかば～現在』（山川出版社、1995 年）、178-179 頁参照。

99 本論文第 I 部第 3 章を参照。また以下を参照。F・H・ナイト「経済学の観念学」、『〔叢書〕ヒストリー・オブ・アイディアズ――経済学のメソドロジー』（上山隆大ほか訳、平凡社、1988 年）、14-17 頁。ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』（細貝貞夫・山田正行、未来社、1973 年）、31-32 頁。

させていたのである[100]。フランスでは農村人口が過剰になる一方で、都市の工業化は遅れていた。第二帝政期に農村人口は総人口の 70 パーセントを占め、1911 年時点まで下ってさえ都市と農村の人口比は 44.2 対 55.8 であった[101]。この人口偏在は産業構成と重なっており、19 世紀中盤におけるフランス労働者の実態は、農閑期に都市部の工場に出稼ぎにいく半農半工の零細農民だったのである。

ルイ=ナポレオンの分析によれば、工業への完全な依存はフランスをイギリス同様の経済的危機に陥れる可能性があるがゆえに、回避されねばならないが[102]、半農半工を純然たる農業者と純然たる労働者へと明確に職能分化させる以外に近代フランス社会の誕生はない。そこで彼は、ナポレオン一世の定めた農民の分割地所有制こそがフランス農業の零細化の元凶とみなし、これを「賞賛と褒章が、よりよい生産成績を有する農民に与えられ」る制度に改め、農業従事者の専業化を促す重農主義的政策を計画する[103]。さらにそれは、公共事業を通じた工業振興および市場開拓と有機的に結合され、農村の余剰人口を組織された産業に適正配分することにより、すでにヨーロッパ大の〈産業体制〉の基盤づくりをも展望するものであった。

> ナポレオン的観念は異なる段階にある人間の技術のどんな部門にも分け与えられる。農業を活気付け、新しい生産技術を考え出し、この観念に役立ちこの観念を有する革新を諸外国から取りいれる。ナポレオン的観念は山を切り拓き、大河を渡り、交通（コミュニカシオン）を容易にし、諸国民に手段を与えねばならない[104]。

> 農業は、帝国の基礎であり魂である。
> 工業は、住民の福祉（くつろぎ）であり幸福である。
> 貿易は、これら二つのものの余剰であり善用である[105]。

実際には、ルイ=ナポレオンの農業健全化の施策は耕地開発に投資する「クレディ・フォ

---

[100] 谷川稔「「産業帝政」下における労働運動の再生」、河野編前掲書、176 頁参照。
[101] Cf, Alain Baltran et Pascal Griset, *op.cit*., p. 44.
[102] マルクス「階級闘争」、12、37 頁、谷川「労働運動の再生」、176 頁参照。
[103] Cf. Napoléon-Louis Bonaparte, *Des idées napoléoniennes,* p.69.
[104] *Ibid*., pp.8-9.
[105] *Ibid*., p.68.

ンシエ(Crédit foncier)」の創設程度に終わり、後年の第二帝政期はむしろ投資銀行「クレディ・モビリエ」の創設や鉄道・港湾開発をはじめとする大型公共事業中心の政治になる。だがそれが結局は、いままで販路を見出せず地域性に沈んでいた農村に巨大なフランス経済圏とヨーロッパ経済圏への流通経路を与え、僻地に開発を呼び込んだ。むしろここで見て取れるのは、工業振興によって農村余剰人口と零細農家が脱農して工業に吸収される一方、人手不足に陥った農村で生産性の改善要求が生まれ、農業産品の市場価格の上昇とともに実質賃金が向上するということである[106]。いずれにせよそうして実現する好景気が、ルイ=ナポレオンを統治者として待望する大衆を後押しすることになったのである。

ルイ=ナポレオンの農業国フランスの課題認識および19世紀国際関係の診断の当否はともかく、それらがフィジオクラシーの基本理念を〈産業体制〉構想に接合させたサン=シモンの思想に沿ったものであったことは確かである。ルイ=ナポレオンを評したマルクスのことばには、プロレタリア革命を阻止する政敵への憎悪と交錯するようにして、大衆を籠絡するその政治的離れ業への畏怖が見え隠れしている。

> 「ナポレオン的観念」のすべては未発達の若々しい分割地の観念であり、……悪趣味な舞台衣装に転じた気の利いた衣装にすぎない。しかしフランス国民の大衆を伝統の重圧から解放し、国家権力と社会との対立を純粋に際立たせるためには、帝政のパロディは必要不可欠だった。……フランスの農民は、彼の分割地への信仰と離縁し、この分割地の上に築き上げられた国家建造物全体が倒壊し、プロレタリア革命は合唱隊を受け取る。そしてこの合唱隊なしには、あらゆる農民諸国民の中でのプロレタリア革命の独唱は、葬送の歌となるであろう[107]。

マルクスによれば、オルレアン家の七月王制（1830-1848年）と続く第二共和制の議会は国民代表機能をすでに喪失しており、ナポレオン三世はその正当性の空隙を縫って登場し事態の収束に成功した。ブルジョワジー代表である第一党の秩序党は、ブルボン王党派とオルレアン王党派に分派しているのみならず、さらにその内部で旧地主と新地主、聖職者と新興資本家といった多様な勢力に細分化し、それぞれの瑣末な利益は相反し、妥協点は

---

[106] Cf. Direction de Gerorges Duby et Armand Wallon, *Histoire de la Frence rurale* (Paris : Seuil, 1976), t 3, pp. 167-170 et 180.
[107] マルクス「ブリュメール18日」、187-188頁。

共和制しかなかった。しかし七月王制下でも第二共和制下でもフランス政治社会の巨大な基層は、選挙権を持たなかった――沈黙させられた――分割土地所有農民である。ルイ・ナポレオンは議会が饒舌に反して空転するのをよそに沈黙することでナポレオン一世の私有権解放の功績を拠り所とすることを体現することができ、彼らの利益代表者となったのである[108]。旧来の王権が事実上その権能を停止し、制限選挙制議会が膠着してもはや機能しなくなったとすれば、打ち続く暴力的な権力闘争に倦んだ民衆は「ナポレオン的観念」を、「産業的君主」の支配を、すなわち新しい平和なフランス社会を――将来のナポレオン三世曰く、「ナポレオン的観念はけっして戦争の理念ではなく、社会的、産業的、商業的、人道主義的理念である[109]」――要請するであろう。

〈産業化〉による秩序確立こそがナポレオン三世の終生変わらぬ施政方針であったのなら、それが保護貿易主義によるか、それとも自由貿易主義によるかは二次的な問題となる。阪上孝もいうように、「ナポレオン的観念」の政治は、「その力と持続性を人民の一体性に負うているから、……経済的な安定と繁栄を追及しなければならない[110]」。内政的には金融・信用機関の整備、工業の振興、道路・運河・鉄道などの交易インフラの整備、これらを通じた農業経営の補完と補助を積極果断に行い、対外的にはフランスの対英独立性あるいは協調性を模索しつつ、保護貿易主義を原則として国内産業化の進展に応じて規制を緩和する（その姿勢は 1860 年のコブデン=シュヴァリエ条約にあらわれている）。産業後進国に典型的に見られる職能国家型の統治スタイルに近いこの柔軟な方針も[111]、基本的には〈産業〉によって自由と秩序を統合するサン=シモン主義的理念をモデルとしたものである。第二帝政を「産業帝政」と呼んだプルードンと、サン=シモン協会に出入りしていた経歴をもってナポレオン三世を「馬上のサン=シモン」と評したサント・ブーヴ（Charles Augustin Sainte-Beuve, 1804-1869）は正しかった。要するに「ナポレオン的観念」とは、サン=シモン主義によって馴致されたナポレオンの政治なのである。

サン=シモンおよびサン=シモン主義を社会主義の先達と見るマルクスであるが[112]、別の箇所で彼はサン=シモン主義とナポレオン三世の関係に言及している。しかもそれは社会

---

108 同書、134-160、176-179 頁参照。
109 Napoléon-Louis Bonaparte, *Des idées napoléoniennes*, p. 162.
110 阪上「第二帝政」、149 頁。
111 内田繁隆「近代的社会観と唯物史観の限界――マルクス主義を超えて」、『国士舘大学政経論叢』（1975 年）を参照。
112 マルクス「階級闘争」、28-29 頁参照。

主義ではなくナポレオン一世との関連で論じられるだけに、この文脈で引用する価値があるだろう。

> 1848-1851 年には、老人バイイに扮した洒落者の共和主義者マラストから、ナポレオンのデスマスクの鉄仮面の下に平凡だが不快な顔立ちを隠したイカサマ師〔ルイ・ナポレオン〕にいたるまで、昔の革命の幽霊が出没した……。彼らは昔のナポレオンの戯画を手に入れただけではなく、昔のナポレオン自身を戯画にしてしまった。／19 世紀の社会革命は、その詩情を過去から得ることはできず、未来から手に入れる以外にはない[113]。

「共和主義者マラスト」とは、第二共和制下でパリ市長を勤め、穏健共和派の牙城となった『ナショナル』紙を率いた政治家マラスト（Armand Marie François Pascal Marrast, 1801-1852）を指す。また「老人バイイ」とは、フランス革命期の天文学者にしてパリ市長のバイイ（Jean Sylvain Bailly, 1762-1812）ともとれるが、実はサン=シモンの臨終に立ち会い師の思想を後年の社会主義思潮へと架橋した弟子のバイイ（Étienne-Marin Bailly, 1796-1837）である。その根拠となるのは、引用文後半の「19 世紀の社会革命は、その詩情を過去から得ることはできず、未来から手に入れる以外にはない」という一節が、サン=シモン主義の機関紙『プロデュクトゥール』のタイトルに添えられた「盲目的な言い伝えが今日まで過去にあるとしてきた黄金時代は、われわれの前方にある[114]」というサン=シモンが好んだ銘句を下敷きにしていることである[115]。もちろんマルクスはそれを、サン=シモン主義の「ユートピア」性とナポレオン三世の野合を揶揄するために、またサン=シモン主義の斜陽をあてこんで引いているにすぎない。しかし、そのような牽強付会をあえてしてまでマルクスがサン=シモン主義を貶めようとするところには、むしろ、道は違えど体制の一新を目指したサン=シモンという先達への対抗心が、そしてナポレオン三世という当代きっての民衆的権威の後ろ盾を獲得しえたサン=シモン主義への激しい嫉妬までが透かし見える。マルクスが「ここがロードス島だ、ここで跳べ！」――一切の伝統や旧弊なものと断絶せよ、すべてを揚棄し圧し潰していく歴史の冷厳な論理に身を任せよ――と呼びかけるのは、い

---

113 マルクス「ブリュメール 18 日」、19-20 頁。
114 森前掲書「生涯と著作 5」、479 頁参照。
115 この文章が掲載された『ナシオナル』紙の編集者には、バザールの「フランス・カルボナリ」に感化されてサン=シモン主義に染まった者が多かったという。Cf. Charléty, *op.cit.*, pp. 37-38. シャルレティ前掲書、37 頁注 5 および 387 頁参照。

わばその裏返しであった。

> 19 世紀の革命であるプロレタリア革命は、たえず自分自身を批判し、自分で進みながら絶え間なく中断し、成就されたと見えるものに立ち戻って改めてやり直し、最初の試みの中途半端さ、弱さ、みすぼらしさを情け容赦なく徹底的に嘲笑するのであり、ただ敵が新しい力を大地から吸い上げて、前よりも巨大になって再び立ち上がって向かってくるようにするためにだけ、敵を投げ倒すに過ぎないように見えるし、自分自身の目的の漠然とした途方もなさに改めて尻込みするのだが、それも、引き返すことがいっさい不可能になる状況が創り出され、諸関係自体がこう叫ぶまでのことである。
>
> ここがロードス島だ、ここで跳べ！
> ここにバラがある、ここで踊れ！

しかし歴史を統べる経済法則に従うだけで体制の巨大な転換がもたらされると信じてよいのだろうか。いくらマルクスが第二帝政を物質主義と拝金主義の制覇の時代と攻撃しても[116]、その彼がナポレオン三世について語ることばにはどこまでも妬気がこもる。「市民社会のくずが、最後に秩序の聖なる密集方陣を形成し、そして英雄クラピュリンスキが「社会の救い主」としてテュイルリ宮殿に入居する[117]」と。「君主」や「皇帝」の持つ権威のイメージは、〈産業化〉の号令一下、マルクス主義が求めても得られなかった広範な大衆の支持調達と動員を、つまりは上部構造におけるヘゲモニーの掌握を可能にしたのであった。実にマルクスは、ナポレオン三世こそがサン=シモン主義のまさしく政治を体現することを狂おしいほどに承知していたのである。

---

[116] マルクスは、第二帝政を歓呼したフランス国民の心情について、彼らは「革命の危険から後戻りしてエジプトの肉鍋を恋しがったのであり、1851 年 12 月 2 日〔ルイ=ナポレオンのクーデタ〕がその答えだった」と評している（『ブリュメール 18 日』、20、205 頁）。「肉鍋」は旧約聖書「出エジプト記」からとられており、物質的豊穣さにあずかれるなら隷属も厭わない大衆の心性をさす（『聖書――新協同訳』（協同訳聖書実行委員会編訳、日本聖書協会、1987 年）旧約 60 頁、またウォルター・デ・ラ・メア『旧約聖書物語』上巻（阿部知二訳、岩波書店、2012 年）306-307 頁参照）。

[117] マルクス『ブリュメール 18 日』、32 頁。クラピュリンスキとは、ハイネ（Christian Johann Heinrich Heine, 1797-1856）の詩『擲弾兵』（*Die Grenadiere*, 1820）に登場する放蕩貴族である。ハイネがサン=シモン主義の強い影響下にあったことについては、高池久隆「ハインリヒ・ハイネの *Verschiedence*」、『岡山理科大学紀要 B, 人文・社会科学第 27 巻』（1991 年）を参照。

おわりに

フランス革命は、公共空間を広く民衆に開放しながら民衆の生活の物質的状況の改善にまでは届かない偏頗な出来損ないの革命(révolution manquée)であった。それゆえにサン=シモンは、自らの思想的課題をフランス革命の完遂に、それがやり残した経済革命に見たのである。サン=シモンの夢見た〈産業社会〉に向けた体制転換がナポレオン三世というまぎれもない君主の手で「上から」主導されたという点に、マルクスは第二帝政の矛盾を見た。しかしそれは、ブルジョワ支配と資本主義経済体制の矛盾を一掃するべく政治革命と経済革命の不可分・同時進行性を強調するマルクスおよびエンゲルスに特有の、また彼らの社会主義理論が置かれた政治経済的環境と歴史的位相の観点からのみ言いうることである。第二帝政の成功は、もちろんナポレオン三世の政治のみによって可能になったわけではなく、アンファンタンの道徳とペレール兄弟やシュヴァリエらの経済なくしてはあり得なかった。マルクスが嫉妬交じりに「皇帝社会主義」と評した第二帝政期は、その意味で道徳・経済・政治の三者協働による巨大な体制転換が生じた時代となったのである。

体制の転換が、政治のみならず、人々の物質的生活基盤の創造に関わる経済と、人々の共同生活の精神的基盤を確保する道徳の転換を伴うというサン=シモンのメッセージは、すべてのサン=シモン主義者たちの行動に受け継がれている。ペレール兄弟のクレディ・モビリエでさえその例外ではなかった。その信託銀行としての活動は、国富の集約とその適切な配分という経済的効果をもたらすにとどまらず、投資行為を介して国富増産とインフラの整備・保全という恒常的利益が約束されるという確信をフランスの民衆に階級横断的に植えつけることによって、革命後の政治的にも経済的にも荒廃したフランス社会に新しい平和のイメージをもたらした。それはアンファンタンの過激な純粋精神主義の道徳運動が頓挫した後に、サン=シモン主義者が見出した新社会の倫理であった。破壊を求める神々たる民衆の渇き(アナトール・フランス)は、〈産業社会〉において最低限の生活資源を確保され、「競走精神(スポーツマンシップ)」(ナイト)という名の新たな社会性へと転化したのである[118]。

[118] ナイト前掲書、8-91 頁参照。

ここで、ナポレオン一世もまたフランス革命の完遂を意図してヨーロッパ大陸の法文化の統一化を図り、それが結果として各国政治文化の特殊性と固有性を浮き彫りにさせ、いわゆるナショナリズムを勃興させたことを想起しよう。しかし、その挙句に確立した19世紀ヨーロッパの国際政治体制は、依然としてフランス革命の余波のうちにある不安定な「ヨーロッパ公法秩序」にすぎず、主権国家同士の戦争が絶え間なかった。それを考えるとき、各国の〈産業社会〉化による「地中海圏」協同秩序というシュヴァリエの、そして師サン=シモンにまで遡る遠大な構想は、単にヨーロッパの中でフランスの経済的ヘゲモニーを確保することにはとどまらず、まさしく主権国家から成る「公法秩序」という政治に偏頗した歴史的現実への、経済の側から企てられたアンチテーゼの様相をすら呈する。第二帝政下のサン=シモン主義者たちの活動は、ヨーロッパ大の経済秩序を視野に入れながら、まず祖国フランスの〈産業社会〉化に着手したのであった。

第５章　サン=シモン主義者の人工庭園

はじめに

19 世紀はじめ、打ちやまぬ革命と反動の断続的発作に襲われる欧州大陸の病根は大衆の貧困にあると診断したサン=シモンは、処方箋として〈産業社会〉の確立による大衆の物質的、精神的、制度的福祉の充実を説いた。その教示は弟子たちによって体系化されていく。師の遺著『新キリスト教』に提示された人類愛の精神に比重を置いて開始されたサン=シモン主義運動は、それを主導したアンファンタンの一統がイデオロギー闘争に敗北した後は、サン=シモンの没後弟子ナポレオン三世の「ナポレオン的観念」を旗印に、その経済顧問となったミシェル・シュヴァリエと金融家ペレール兄弟が連携して、産業における相互利益の実現を目指す世俗的な政治運動へと変貌していった。

〈産業社会〉の実現に向かってフランスが歩み出した第二帝政期には、つねにアンビヴァレンスがつきまとってきた。「競走精神（スポーツマンシップ）」（ナイト）による金融資本主義に慣らされた後世の目には、それが来たる「商品経済」社会の輝かしい胚胎期と見えるが[1]、同時代人の中には、神の恩寵を忘れて低劣な欲望を満たすことに狂奔しはじめた利己主義の制覇の時代と見る者も多かった。例えばボードレール（Charles-Pierre Baudelaire, 1821-1867）は『パリの憂愁』（*Le Spleen de Paris,* 1869）において、物質的欲望に溺れる当時のブルジョワ文化を「父なる神が激怒のうちに地上の楽園から追放した者たち〔人間〕の養父よ、嗚呼、サタンよ、長きに渡る我が悲惨を憐れみたまえ」という祈りで揶揄している[2]。サン=シモン主義者のプロジェクトが近代政治経済史に占める位置を捉え難くしているのも、この〈産業社会〉倫理のアンビヴァレンスがいまだ解消されないからにほかならない。しかしそれが近代という時代の指し示す歴史の必然的な趨勢に沿うものであったことだけは確かなのである。

フランス革命によって荒廃した祖国、とりわけ貧困にあえぐ大衆の物質的・精神的境遇を〈産業社会〉化によって救済するというサン=シモン主義運動の意図の精神史的な意味

---

[1] 大塚久雄『国民経済――その歴史的考察』（講談社、1994 年）、25-26 頁参照。

[2] 19 世紀においてサタンはプロメテウスとして、すなわち「人間の解放者、ないしは科学と進歩の推進者として把握されている」（ジョルジュ・ミノワ『悪魔の文化史』（平野隆文訳、白水社、2004 年）、136-147 頁参照）。〈産業社会〉化と男女同権を説いて新道徳を打ち出すサン=シモン主義は、カトリック陣営から「エピクロス主義」あるいは「悪魔主義（サタニスム）」とみなされていた。

は、理想の「庭園(jardin)」造りというメタファーを用いて明らかにすることができる。むろんこの「庭園」とは「エデンの園」ではなく、いわゆる「エピクロスの園」のことである。ヘレニズム期ギリシアの哲学者エピクロス（Épicure, BC341-BC270）といえば快楽主義で知られるが、エピクロスが説いた本来の快楽主義とは単に肉体的快楽の享受を指すのではなく、哲学を通じて魂の平静を獲得しようとするきわめて知的かつ極私的な倫理学説である。そして「エピクロスの園」とは、俗世の安易かつ猥雑な快楽から隔てられ、真の快楽がもたらす安息と学びと交流の場を意味し、「庭を耕す(cultiver le jardin)」とは自らの内面を練成する哲学的活動の暗示であった。こうして本来は政治的含意をもたないはずのエピクロスの快楽主義が、トマス・モアの『ユートピア』を嚆矢として政治化されていく経緯はつとに指摘されてきた。哲学的エリートのモットーであった「庭を耕す」（内面の陶冶）が「庭を造る(faire le jardin)」に、すなわち万人の快楽享受を可能にする社会大の「エピクロスの園」の建設への呼びかけに読み替えられることにより、近代政治思想は政治的エピクロス主義として誕生したとも考えられるのである[3]。

巨大社会の欲望を満たすという課題を負って登場した近代の政治思想には一様にこの政治化したエピクロス主義の性格が色濃くみとめられるが、サン=シモンとその弟子たちの思想と行動もその例外ではない。サン=シモンはつねづね人間の生、社会、文芸を「果樹園(jardin fruitier) 」に喩え、それをよく世話することに思想の役割を見いだしていた。

> 冬の初めには、果樹園はいくつかの木々が心地よく眺められる光景をふたたび提供してくれる。そこには、まだいくつかの果実がみられる。それらの果実は、幾多の経験を積み、その諸成果をよく観察した後で、自分の仕事を熱心に、冷静かつ明確に説明できるだけのたくましさを保っている老人たちである。それらは、発明的哲学者である。

臨終に際して「梨は熟した。あなた方はこれを摘み取れます／摘み取らなければならない[4]」と語ったサン=シモンもまた、ひとりの近代エピクロス主義者として自らが理想とする社会の実現を願っていた。そして「盲目的な言い伝えが今日まで過去にあるとしてきた

---

[3] 中金聡「庭園をつくる――エピクロス主義の〈逸れ〉について」、政治哲学研究会『政治哲学』第23号（2017年）、17-20頁参照。

[4] 森博「サン=シモンの生涯と著作（5）」、『サン=シモン著作集5』（森博訳、恒星社厚生閣、1988）、472-473頁。「摘み取れます／摘み取らなければならない」という表現の違いは、看取ったロドリーグの証言とユバールによるその聞き書きが異なることによる。

黄金時代は、われわれの前方にある[5]」という師のことばを福音と受けとったサン=シモン主義者たちは、このユートピアをフランスで現実のものとするべくキリストの使徒さながらの行動を展開しはじめる。

ところで、国家を社会大の「エピクロスの園」にしようとする近代政治思想の内部にも、望ましい国家像をめぐって様々なヴァリエーションがありうるだろう。この点で重要な視点を提供しているのは、近代イギリスの庭園観・造園観の変遷を辿りながら、そこに近代政治思想の社会・国家観の変遷を重ねて見た安西信一の研究である。それによれば、ピューリタン革命期イングランドの共和政派には、国土を平坦かつ豊かな理想の農地にする「造園」を農業政策の重要な一環に含める思想があった。教育改革者にして農業思想家、そしてユートピア文学者のハートリブ（Samuel Hartlib, 1600-62）の主張はその典型とみなされる。ハートリブの思想の根幹は、「なによりも公共善への奉仕、そして単なる思弁的な観想的生活ではない実践的な知識・改良を重んずる、ベーコンにも通ずる活動主義[6]」によって特徴づけられる千年王国論的シヴィック・ヒューマニズムである。「シヴィック・ヒューマニズム」とは「広義の共和主義を主張する政治=道徳的言説」であり、「共同体（都市・国家）の独立・自立した成員が封建的・専制的な権威におもねることなく、公共善に奉仕すべくおこなう活動的生活、ないし公民的徳の実践を最優先する[7]」。このシヴィック・ヒューマニズムと政治的エピクロス主義とが、プロテスタント共和国という当時の政治的環境に促された「復楽園」のプロジェクトとして結合を見るところに、ハートリブの実践的ユートピア思想が成立した。「マカリア」と呼ばれるこの理想国家の基幹をなすのは、「造園」を含む「普遍農業」である。「農業は、共和国に属する勤勉(industrie)のうち、最も高貴で必要な部分をなす。農業は交易を支える第一の基盤、あらゆる秩序だった社会における富の源泉である」。ハートリブはこの農業共和国像を詳細に描き、「なぜイギリスの全住民は一丸となってこの国をマカリアのようにしないのか。マカリアは多くの人民を持ち財宝と軍備が豊かなので、征服されることはないというのに」と述べるのである。

共和政が頓挫して王政が復古すると、「平坦な土地」は革命時の最左翼であった水平派（レヴェラーズ）を想起させるという理由で王立協会により否定され、自然の荒地や地形の凹凸を再評価する

---

[5] 森前掲書、479 頁。
[6] 安西信一『イギリス風景式庭園の美学――〈開かれた庭〉のパラドックス』（東京大学出版会、2000 年）、42 頁。
[7] 同書、42 頁。

庭園論が登場した。それが 18 世紀末になると、平等を掲げるフランス革命への批判と相俟って、作為を退け自然の樹形を称揚し、そのあいだを逍遥・周遊できるようにしたものが、後にイギリス特有の「風景式庭園(landscape garden)」と呼ばれるようになる。その生成と発展の過程は国土の「囲い込み（エンクロージャー）」にはじまる近代イギリス〈産業社会〉の歴史と歩調をあわせており、まさしく「庭園」はその時々の政治情勢を一望の下に映し出しているというのが安西の主張である[8]。

ところで、同じ観点からフランスを眺めると、「庭を造る」――理想の生活環境を構築する――ことにもイギリスとはやや異なる伝統があることがわかる。自然を装うイギリス造園術とは対照的に、ヴェルサイユ宮殿の庭園に代表されるフランス造園術が徹底した人工美を追求してきたことはよく知られている。ただし正確を期すなら、そもそも自然そのものが幾何学的=合理的な形象に満ちているというデカルト的な自然認識を前提として、人為はそれを模倣せねばならない――「樹木は、その全体においても、おなじ比例関係を示しており、葉はどちらの側も同じ形であり、花はひとつあるいは複数の部分がじつによく調和しているため、われわれはこの巨匠に負けまいとする以上のことはできない[9]」――と考えられていたのである。M・ニーダーマイヤーはそこにフランスの絶対王政を投影してみせる。それによれば、ヴェルサイユ宮殿の巨大なシンメトリーの庭は、「合理的な理性と感性的な感情表現とのあいだに緊張に満ち活力溢れる統一を達成」せんとした「おおいなる哲学体系の時代であるバロック」の産物であり、その「造園術はなによりも、自然をその普遍性において把握し、宇宙の似姿を提供するという使命」を王の絶対的な権力と共有していた[10]。「バロック庭園の樹木の極端な剪定の仕方は、自然に対してもおよんだ絶対主義の権力意識の現れであるだけでなく、むしろその好都合な副作用だった」。シンメトリーは自然と人工の一致を可視的に表現するがゆえに、ヴェルサイユの庭園を歩む者は「庭園の幾何学的な形の合理性のなかに、ほかならぬ合理主義の証明を見る」ことによって、同時に王権的政治秩序の正統性を実感することができるのである[11]。もちろんフランス庭園に溢れかえるシンメトリーは、現実社会の身分制や経済格差のようなアシンメトリー構造を覆い隠し、あるいは忘却させる効果があり、それゆえにこそ均整美を誇ったヴェルサイ

---

[8] 同書、46-60 頁。
[9] Clemens Alexander Wimmer, *Geschichte der Gartentheorie* (Darmstadt: Wiss. Buchges, 1989), S.108.
[10] ミヒャエル・ニーダーマイヤー『エロスの庭――愛の園の文化史』（濱中春・森貴史訳、三元社、2013 年）、199-200 頁。
[11] 同書、200-201 頁。

ユの庭園は、来たる革命において虐げられた民衆によって真っ先に踏み荒らされる定めにあった。

さて、自然の風景を重視するイギリス流造園術が、理想の政治社会をその構成要素たる人間の自然的本質、すなわち人間本性（ヒューマン・ネイチャー）との一致という観点から着想する政治思想と軌を一にしていたように、フランスでは人工性を重んじる造園術の伝統が、理想の政治社会を「人工庭園」としてイメージする思想傾向にあらわれるといえるだろう。フランス革命然り、復古王政然り、そしてサン=シモン主義もまた然りである。「庭を造る」とは、特にサン=シモン主義においては、〈産業社会〉という人間の生活環境のインフラ整備を意味するだけではなかった。この造園術は、同時にこの望ましい社会環境の中に生きる人間、すなわちサン=シモンが〈産業者〉と呼んだ新しい人間階級を創造するためのある種の教育を、それゆえ人間本性そのものの改造をも展望に収めていた。そしてそれが、近代エピクロス主義の系譜のなかでサン=シモン主義運動を特異なものとするその種差的特徴なのである。

サン=シモンの思想はサン=シモン主義者たちの実践運動とナポレオン三世のボナパルティズムを得て、この三者連合（トリパルティスム）により第二帝政期のフランスを〈産業社会〉という理想の「庭園」に造りかえていく。この観点から、以下ではかれらが心血を注いだ諸施策のうち、〈産業社会〉の中枢部となる首都パリの改造、全国的な鉄道網の敷設、そして〈産業社会〉のミクロコスモスというべきパリ万国博覧会を取りあげることにしたい。

１．物質（マテリー）の血脈——鉄道と銀行

フランスの産業革命は七月王政期にはじまるが、それをサン=シモン主義的な〈産業社会〉の実現へと明確に方向付けたのは、「平和的ボナパルティズム」を掲げて第二共和制大統領に当選したルイ=ナポレオンが、さらに独裁へ、また帝政へと歩を進めた第二帝政期であった。皇帝の座に就いたナポレオン三世は、メキシコ銀への権益獲得で通貨の安定化に努め、さらに殖産興業により労農の一層の分離を促進した。〈産業社会〉の確立を目指すこれらの諸施策のうち、規模の大きさで特に目立つのが全国的な鉄道網の敷設と銀行の近代化である。

19 世紀産業革命が大規模な鉄道開発を伴って進行したのは、機械化による生産力の飛躍的な増大と旺盛な購買力を有する「消費都市(Konsumentenstadt)」とを結びつける大規模流

通網を確立する必要があったからである[12]。イギリスでは、国民的産業である毛織物業がイングランド北部・中部に集中しており、ロンドンを中心とする南部の人口密集地に鉄道で織物工業産品を運ぶことで、生産と消費の両拠点の周囲に必需工業生産を群生させた。そこには輸送需要の増大が交通の機械化を招請し、交通体系の機械化が生産能力を増大させるという循環が生まれた。つまり、「消費都市」の存在と効率的な鉄道網が重なるときに、はじめて産業革命が現実のものとなったのである。

フランスの鉄道網計画もイギリスの先例に倣ったものである。七月王政期までのフランスでは、長い歴史的な経緯を経てきわめて錯綜した商慣習と経営形態が出来上がっており、それが産業構造の不均衡と分断をもたらしていた。農業生産から工業生産にいたるまで近代化され商業的にもっとも成功していたのは、ドーバー海峡でイギリスと接し、オランダにも抜けられるパリからベルギーにかけての北部であり、沿岸に連なる西部がこれに準じていた。鉄鉱石鉱床が国内に広く分布しているフランスでは製鉄業が伝統的産業の一つで、ベリー地方とブルゴーニュを含む東部がつとに知られ、南東のストラスブールにかけてのドイツ工業地帯と接する範囲は産業的かつ軍事的要衝にもなっていた。その一方で、パリから南西のスペインにかけては一大穀倉地帯を形成しており、マルセイユはシャンパンの生産地域として、またブルターニュはワイン生産として知られていた。こうした 19 世紀初頭の産業分布を前提に、当時の産業政策上の課題とされていたのは、南部においては温存された領主・小作関係の廃絶と農業の近代化、東部においては熟練労働者の確保、北部・西部においては資本力の他領域への開放と、様々であった[13]。このような産業構造の領域的非対称性と分断は各地域の経済ポテンシャルを地域内に逼塞させてしまう危険性があり、領域間での有機的な分業体制の確立が必要とされていたのである[14]。

サン=シモン主義者たちは、鉄道敷設による交流の促進こそが、局所的インフレとデフレの解消やヒト・モノ・カネの国内適正配分のような問題を抜本的に解決することにいち早く気づいていた。

---

[12] ゾンバルトは、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（*Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, 1904-1905）を批判して、資本主義が生産（およびプロテスタンティズム）ではなくむしろ消費（およびブルジョワ・カトリシスム）を軸に誕生したとして、巨大な購買力を有する「消費都市」こそが近代経済の機関部をなすと主張した。ヴェルナー・ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』（金森誠也訳、講談社、2000 年）、59-86 頁参照。

[13] 原輝史編『フランス経営史』（有斐閣、1980 年）、参照。

[14] 大塚、前掲書、31-32 頁参照。

この〔鉄道の〕ような移動能力が人間生活に導入されれば、社会状態に大きな革命をもたらさざるをえない。これほど容易で、敏速な交通手段があれば、一帝国の地方都市は首都の街と同じになってしまうだろう。……工業製品、発明、発見、世論は、かつてなかったような速さで伝えられるだろう。そして、なによりも、人間と人間、地方と地方、国と国の関係が驚くほど密接になるだろう[15]。

なかでもヨーロッパの〈産業社会〉化を交通圏化という観点から考察したシュヴァリエの『地中海圏構想』（1832 年）は、今日の開発経済学を予感させるその先見性によって注目に値するといえよう。そこにおいては、フランスの鉄道がイギリスの産業力を地中海世界および中・東欧へと媒介するものとして位置づけられ、スペイン、ドイツ、オリエントにまで至る鉄道網が計画された。この構想の背後には、各国制度別に産業を育成し、それを支える銀行と鉄道が物資と社会を結ぶ紐帯となることによって、個別の社会を産業によって結ばれた諸国民の普遍的協同体にする〈産業社会〉圏という考え方があった。しかしこの気宇壮大なインターナショナリズム思想が陽の目を見るには時期尚早であり、当時の政府の目に留まることはなかった[16]。

フランスの〈産業社会〉化に向けた第一の課題は、政治のみならず経済をも覆い尽くしていた闘争気質を一掃し、組織的融和の精神によって置き換えることである。特に産業革命黎明期においては、封建的家業の枠組みにとどまって国家の御用聞き争いに明け暮れる銀行家たちを、一般経済の牽引役として近代銀行制度の中に編入する必要があった[17]。1833 年に正統派の最高教父アンファンタンと幹部シュヴァリエの逮捕に及んで公式活動を停止したサン=シモン主義者たちであったが、それぞれにサン=シモン主義を追求することになった彼らは、いずれも金融界の再編に向けて独自の活動を展開しはじめる。早々に官吏に

---

[15] Cf. Sébastien Charléty, *Histoire Du Saint-simonisme(1825-1864)*....(Paris: Librairie Hachette Et C, 1896), p. 45. セバスティアン・シャルレティ『サン=シモン主義の歴史――1825-1864』（沢崎浩平・小杉隆芳訳、法政大学出版局、1986 年）、42-41 頁。

[16] 以下を参照。上野喬『ミシェル・シュヴァリエ研究』（木鐸社、1995 年）、61-91 頁。中川洋一郎『暴力なき社会主義？――フランス第二帝政下のクレディ・モビリエ』（学文社、2004 年）、63-73 頁。*Ibid,*. pp.190-197. シャルレティ前掲書、155-160 頁。

[17] Cf. Georg G. Iggers, *The Cult of Authority: The Political Philosophy of the Saint-Simonians* (Heiderberg: Springer, 2012), p.146. 田中友義「ロスチャイルド」、原「経営史」、61-66 頁、および原輝史「フランス国有鉄道」、同書、124-126 頁参照。

復職したシュヴァリエは、七月王政下の王党派政治家を代表するチエール（Marie Joseph Louis Adolphe Thiers, 1797-1877）に近づいて「地中海圏構想」を基に鉄道の効用を訴え、ペレール兄弟はフランス古参のユダヤ系個人資本の傘下で金融家として活動しはじめ、アンファンタンも事業家として殖産興業に勤しんだ。その成果は瞬く間にあらわれた。1837 年、ペレール兄弟とアンファンタンが手を結び、パリで最初の鉄道路線となるパリ=サンジェルマン・アン・レー線を敷設したのである。それを契機として、シュヴァリエの「地中海圏構想」に呼応したかのようにフランス全土で短距離の民営鉄道建設計画が湧き上がり、1838 年には理工科大学校（エコール・ポリテクニーク）卒の技術者にして政府高官ルグラン（Alexis Legrand, 1791-1848）が、パリを中心として国土全体に放射状の幹線鉄道を整備する「ルグラン計画」を取りまとめ、議会に諮られることとなった[18]。

ルグランの提案は否決されたものの、1842 年に七月王政政府は、鉄道の軍事的側面と産業的要請を等分に重視し、鉄道営業距離を短距離に制限し、営業を期限付きの許可制とするという条件で、「ルグランの星型（étoile de Legrand）」と当時呼ばれた幹線計画を骨子とする国家先導色の強い「鉄道法（loi relative à l'établissement des grandes lignes de chemin de fer）」の制定にこぎつけた。同法案制定を契機として、パリから北西の河港町ルーアンまでの路線と、歴史的に戦略上の要衝でもあった南のオルレアンまでの路線が敷設される。この動きに同調するように、ペレール兄弟はフランスを代表する銀行であり同族経営の銀行ロートシルトを当時率いていたジャム・ド・ロートシルト（James de Rothschild, Le baron, 1792-1868）に働きかけ、国内でもっとも富裕な地域である北部への鉄道敷設に乗りだしていく。こうして北部鉄道が短距離路線を繋ぎ合わせるかたちで 1845 年に開業し、翌 46 年にはパリに到達した。シュヴァリエの「地中海圏構想」の観点から見ても、北海沿岸の産業化地域を地中海へ接続する北部鉄道の開業は、フランスの産業革命にとって不可欠な要素であった。サン=シモン主義者たちは、短距離路線・短期間営業を規定した「鉄道法」に対応して、鉄道会社の合従連衡および運行メカニズムの統一を図る。「地中海圏構想」の要ともなるローヌ渓谷では、サン=シモン主義者ポーラン・タラボ（Paulin Talabot, 1799-1885）とその兄弟が製鉄業を営んでおり、これを核とする鉄道統合が計画され、最終的にパリ=リヨン線、リヨン=アヴィニョン線、アヴィニョン=マルセイユ線を個別に経営する三社を統合し、

[18] Cf. Charléty, *op.cit.*, pp. 367-369. シャルレティ前掲書、299-300 頁。および以下を参照。鹿島茂『怪帝ナポレオン三世――第二帝政全史』（講談社、2004 年）、206-212 頁。小池滋・青木栄一・和久田康夫編『鉄道の世界史』（悠書館、2010 年）、102 頁。

アンファンタンが理事の座に就いた[19]。

しかし、こうして官民挙げて順風満帆と見えたフランスの鉄道事業は、すぐに頓挫せざるをえなくなった。1847 年、イギリスで貴金属の不足と農作物の不作が重なる一方、貿易取引量が増大するという不整合を制度的に処理できなかったために恐慌が発生し、それがフランスに波及して 1848 年に勃発する二月革命の遠因となった。第二共和制の発足後も不況は長引いて深刻化し、近代的銀行業へ脱皮しつつあったロートシルトはじめとするオートバンクは、破綻を恐れて鉄道事業から次々に撤退した。各地の鉄道工事は中断を余儀なくされ、タラボとアンファンタンを中心とした南部での鉄道統合も破談の瀬戸際にまで追い込まれた。19 世紀中葉のフランスで鉄道事業が難航したのは、不動産取得のむずかしさに起因するとも指摘されるが、議会で第一党を占めた王党二派のいずれもブルジョワからなる秩序党が派内の権益拡大を抑制しあい、結果として〈産業化〉が遅滞したことも考慮されねばならない[20]。

有象無象のブルジョワ勢力のあやうい均衡の上に成り立っていた第二共和制が代表機能を喪失しつつあった 1848 年、ルイ=ナポレオンが普通選挙により大統領に当選した。議会内に与党をもたなかった大統領は、4 年後の 1851 年、議会の機能不全を理由にクーデターによって全権掌握を果たす。このナポレオンの末裔にして自称サン=シモン主義者が権力を掌握したのを機に、頓挫しかけたフランスの鉄道事業は劇的に甦ることになった。独裁大統領に就任したルイ=ナポレオンはただちに七月王政の「鉄道法」を見直す大統領令を発し、鉄道会社の開発利権の貸借期間を最高 99 年まで延長した。さらに間髪おかずパリ環状鉄道計画を発表し、ペレール兄弟を同計画の支配人に登用した。シュヴァリエが独裁大統領体制の経済顧問に就任するなど、サン=シモン主義者とそのシンパはつぎつぎに大統領の政策ブレーンに加わっていった。政治家ルイ=ナポレオンの登場はサン=シモン主義が理

---

[19] Cf. Christian Wolmar, *Blood, Iron & Gold: How the Railways Transformed the World* (London: Atlantic Books, 2010), pp. 100-104. クリスティアン・ウォルマー『世界鉄道史――血と鉄と金の世界変革』(安原和見・須川綾子訳、河出書房新社、2012 年)、162-166 頁。Cf. Charléty, *op.cit.*, pp. 369-370. シャルレティ前掲書、300-301 頁。さらに以下を参照。鹿島前掲書、214 頁。原前掲書、18、127 頁。小池ほか編前掲書、103 頁。

[20] 以下を参照。岡田裕之「研究ノート（書評論文）1847 年恐慌と 2007-09 年世界金融・実物恐慌：川上忠雄『1847 年恐慌』御茶ノ水書房、2013 年、に寄せて」、『経営志林』51 巻 1 号（法政大学経営学会編、2014 年）、51-65 頁。鹿島前掲書、206-208 頁。カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』(植村邦彦訳、平凡社、2008 年)、133-136 頁。

論の域から歴史的実践の段階へと踏みだしていく突破口となったのである[21]。

サン=シモン主義者たちの念願であったフランス金融界の再編事業もこれで拍車がかかった。1852 年秋にルイ=ナポレオンは大統領令を発し、不動産信用銀行の「クレディ・フォンシエ(Crédit foncier)」を設立してパリの不動産取引をこの銀行に一元化すると同時に、ペレール兄弟が既に設立していた動産銀行の「クレディ・モビリエ」は公共事業債権を引き受ける特権銀行とした。「クレディ・モビリエ」は社債発行権を有するとされ、株式引き受け先となることで各種産業を株式支配するオムニウム持株会社の性格を付されたことになる。「ボナパルティズム」の記憶はいまだ危機の時代に人心の不安を鎮める効果があった。「ボナパルトの政府」の保証によって事業計画や信用を担保として資金を貸し出す銀行、世界初の政府系投資銀行が設立されたのである[22]。ロートシルトをはじめとするオートバンクは「クレディ・モビリエ」の誕生を危惧し、同じく新産業を主たる投資先とする金融連合（後の「ソシエテ・ジェネラル」）を発足させた。これ以降、銀行設立熱がフランスで高まっていく[23]。

1852 年の冬、国民投票によって大統領ルイ=ナポレオンはナポレオン三世となり、第二共和制は第二帝政へ移行する。フランス全土は空前の好景気に浴し、大鉄道時代へと突入していった。アンファンタンによるパリから南部へと伸びる鉄道統一の試みもナポレオン三世の諸政策の波に乗って再開され、ローヌ渓谷の鉄道企業統一はタラボが運営する PLM(Paris, lyon, Méditerranée)鉄道として実現した。PLM 鉄道は、その後北部鉄道に次ぐ巨額の利益を生み出し、地中海を越えてアルジェリア植民地での鉄道網を構築していくことになる。その後の鉄道政策の展開は、フランスが一個の〈産業社会〉として確立したことを証明している。1860 年に第二帝政は鉄道会社の官製統合へと舵を切るが、その結果として 1852 年以後に敷設された鉄道は 6 大鉄道として再編されることになった。1865 年には、6 大鉄道を軸に国土全体に鉄道を敷設する目的で助成金を給付する建設助成法が議会を通過した。1860 年初頭における個別の小規模鉄道路線は全 21 社総延長 1600 キロメートルで

---

[21] 以下を参照。藤田その子「ミシェル・シュヴァリエ小論――フランス産業革命期における『実践的サン=シモン主義の意義』」、『西洋史学』（日本西洋史学会編、1976 年）、40-55 頁、および鹿島前掲書、215 頁参照。

[22] ペレール兄弟らによる銀行改革の評価については以下を参照。Franck Yonnet, “La banque saint-simonienne: le projet des sociétés mutuelles de crédit de 1853 des frères Pereire,” *Revue française d’économie*, 13 (1998).

[23] 以下を参照。中川前掲書、16-17、53-54 頁。横張誠『芸術と策謀のパリ――ナポレオン三世時代の怪しい男たち』（講談社、1999 年）、195-219 頁。鹿島前掲書、222-224 頁。

あったが、建設助成法の制定後は 35 社 4400 キロメートルにまで拡大する[24]。こうしたさらなる鉄道路線の拡充は、パリにおいて二度目となる 1867 年の万国博覧会開催をすでに睨んでのものであった。

鉄道業の隆盛にともない、銀行業も官民競って活況を呈した。南部鉄道を手に入れた「クレディ・モビリエ」と北部鉄道を基幹とする「ソシエテ・ジェネラル」は、第二帝政期を通じてヨーロッパ各国の銀行設立、鉄道敷設、汽船開通、植民地開拓に競って投資し、次々に有望な企業を傘下に組み入れ、ヨーロッパを遍く〈産業社会〉圏化する原動力となっていく。かつて宮廷銀行家にすぎなかったロートシルトはじめユダヤ資本は、いまや「フランス化」され、国土開発の国家的使命を負った近代銀行業へと転進した。また「クレディ・モビリエ」の投資銀行としての国際的な成功は、ワーテルローでの雪辱を果たさんとしたナポレオン三世をして「帝国、それは平和である」と言わしめるほどに、フランスの経済覇権の回復に貢献したのである。

本節の最後に、一連の鉄道開発の流れを図示しておこう。1837 年時点でフランスに鉄道は皆無であり、わずかにパリから王侯貴族の保養地であるサン=ジェルマン・アン・レーに伸びる路線とリヨンからローヌへ伸びる炭鉱線があるばかりであった（図 1）。ところがその後の十数年で鉄道事業の大きな拡充があり、1851 年にはパリを中心とした放射状の鉄道網が北域に出来上がっている（図 2）。これはフランス北域を北海〈産業社会〉圏に取りこむ過程として理解できる。さらにその後十年とたたない 1860 年には全国的鉄道網がほぼ完成し、国内の主要港湾都市および隣接諸国の鉄道と接続する展望が開けている（図 3）。この展開は、フランス全土に〈産業社会〉を確立し、地中海世界およびヨーロッパ大に拡長された〈産業社会〉圏の成立を見据えてそのセンターに位置づけるものだったといえるだろう。鉄道ターミナルとなる首都パリの大改造（1853 年）と一回目のパリ万国博覧会開催（1855 年）はこの間の出来事であった。

[24] Cf. Wolmar, *op. cit*., pp. 100-104. 小池ほか編前掲書、103-104 頁参照。

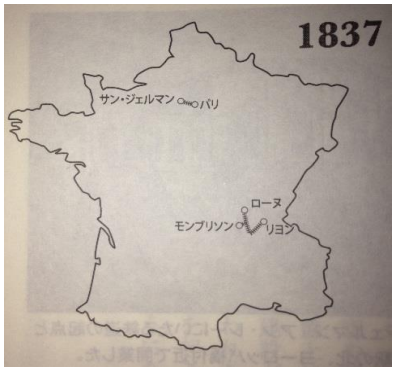

図 1：七月王政期、1837 年の鉄道路線。

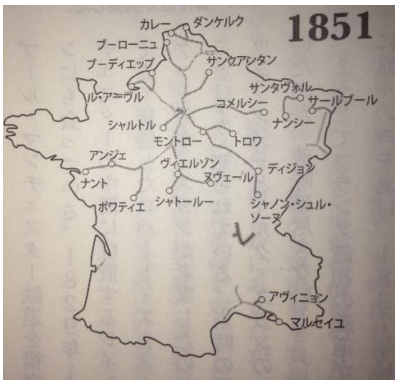

図 2：第二共和政最末期、1851 年の鉄道網。

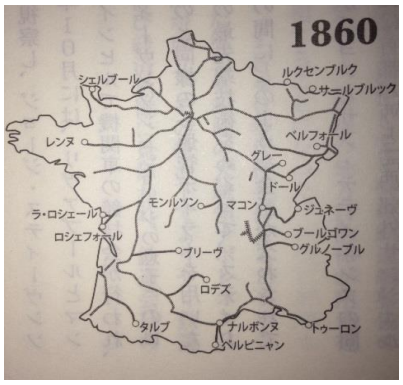

図 3：第二帝政中期、1860 年の鉄道路線網。

〔三葉の出典：菅建彦「フランス鉄道史」、小池滋ほか編『鉄道の世界史』（悠書館 2010 年）、101 頁〕

２．「消費都市」――パリ大改造

18 世紀のパリはいまだ中世城塞都市の特徴を濃厚にまとい、籠城戦を想定して市域が城壁で狭く囲まれていたため人口が密集し、木造建築は高層化して、街路は日中でも暗かった。当時のパリのきわめて劣悪な衛生環境について、ルソーの弟子であり第三身分出身の作家 L・S・メルシエ（Louis-Sébastien Mercier, 1740-1814）は、『タブロー・ド・パリ』(*Tableau de Paris*, 1788)で次のように記している。

> 建築家は、家の敷地の狭さに困って、行き当たりばったりに配管をとりつけてきた。便所が階段桟敷のように互いに積み重ねられ、階段に接続し、ドアと並び、台所のすぐそばでこの上もない悪臭を八方に発散している光景ほど、外国人を驚かせるものはまたとあるまい。／あまりにも細すぎる管は、すぐつまってしまうが、それを通すことをしないので、糞便が円柱状に堆積し、便座の近くまで来ている。つまりすぎた配管は割れ、汚物が家中にあふれ、悪臭がひろがる[25]。
>
> 便所の穴は、たいてい造りが悪くて、近所の井戸に中身がもれてゆくようになっている。ふつう井戸水を使うことにしているパン屋も。だからといって井戸の使用をやめたりはしない。それで主食には、必然的に有毒有害なものがしみこんでいるわけである。／汲

[25] メルシエ『タブロー・ド・パリ（上）』（原宏訳、岩波書店、1989 年）、136-137 頁。

み取り人はまた、糞便を市外に運んでいく面倒を省くために、明け方近くになると、それを下水や側溝にながす。その恐るべき沈殿物は、道路沿いにセーヌ川のほうに向かってゆっくり流れ、やがてその岸辺を汚染するのだが、そこでは水売りが朝バケツに水を汲み、その水を知らぬが仏のパリっ子が飲むはめになるのだ[26]。

中世的な社会構造が色濃く残る近世フランスを象徴するところにパリの魅力もあったともいえるが[27]、その頂点に開花したサロン文化の華やかさの背後には常に「世界一不潔な都会[28]」パリがあり、その劣悪な生活環境が貧困にあえぐ大衆の間に革命熱を蔓延させていたのである。

人口増加率にして毎年 50 パーセントにも迫る勢いで拡大しつつあった 19 世紀のパリにとって[29]、城壁や屈曲した狭隘街路のようなかつての城塞都市の名残は、身分のような封建遺制とともに人口動態への明確な障害となりつつあった。ルイ=ナポレオンがかつてのナポレオン一世の事績の記憶に訴えながら語るサン=シモン主義的な国土開発事業の展望は、人と人、人ともの、階級と階級、中央と地方の間の交流を妨げるあらゆる城壁=障壁の撤去が最終目標であることを高らかに宣言している。

皇帝〔ナポレオン一世〕がかくも大きな規模で行わせた公共事業は、たんに国内の繁栄の主要な原因となったばかりか、大きな社会的進歩をもたらした。すなわち、こうした公共事業は、人とものとのコミュニケーションを促すという点で、三つの大きな利点を持つ。その第一は、職のない人々を雇い入れることにより、貧困階級の救いにつながる。第二は、新しい道路や運河を開通させて土地の価値を増やし、あらゆる物品の流通を促すことで、農業や鉱工業や商業を振興させる。第三は、地方的な考え方を破壊し、地方相互あるいは国家相互を隔てている障壁(barrière)を崩す。……ナポレオンのシステムとは、国家の指導によって数多くの工事を行うようにすることである。そして、ひとたび

---

[26] 同書、129 頁。
[27] 北山晴一『おしゃれと権力』（三省堂、1985 年）、23 頁参照。
[28] メルシエ前掲書、116 頁。
[29] 辰馬信男「ボン・マルシェ」、原「経営史」、101-103 頁参照。1831 年時点でのパリ人口が 77 万 4 千人であったのに対して、1846 年には市域で 105 万 3 千人、郊外も含めると 122 万 6 千 980 人に達していた。同じ頃のベルリンとウィーンはようやく 40 万人、またフランス国内で人口 10 万人以上の都市はリヨン、マルセイユ、ボルドーだけだった。ルイス・ネイミア『1848 年革命――ヨーロッパナショナリズムの幕開け』（都築忠七・飯倉彰訳、平凡社、1998 年）、217-218 頁参照。

工事が完成すれば、それを売却し、その売却利益によってさらなる工事に取りかかることができるのである[30]。

『貧困の根絶』を掲げてフランス政治の表舞台に登場したルイ=ナポレオン、すなわち後のナポレオン三世にとって、パリ中心部の貧民街を一掃し、民衆街区の衛生状態を劇的に改善することは最重要課題であった。新時代にふさわしい総中流社会の雛形となるためにも、首都パリは美しい目抜き通りと、衛生的な上下水道と、明るい街灯を備え、健康で煌びやかな近代的「消費都市」として再編されることが望ましい。かくしてルイ=ナポレオンは 1850 年 12 月 10 日の大統領令でパリの大改造を発する。ローマにかわる「19 世紀の首都」（ベンヤミン）パリの誕生である。

パリはフランスの心臓であります。……この偉大な都市を美化することにわれわれの全力を注ごうではありませんか。新しい通りを開き、空気と日光を欠いている人口密集地区を清潔な界隈に変え、健康な光がわれわれの建物の至るところに入り込むようにしようではありませんか[31]。

パリの大改造は、ナポレオン三世腹心の内務官僚ジョルジュ・オスマン(Georges -Eugène Haussmann, 1809-1891. セーヌ県知事在職期間は 1853-1870 年)が 1851 年のクーデター直後にセーヌ県知事に抜擢されてはじまり、ほぼ現在のパリをかたちづくったことから「オスマン化(Haussmannisation)」の異名でも知られる。したがってそれは、ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）もいうように「オスマンの仕事と、ボナパルト独裁」があってはじめて可能になったといえるが[32]、その「真の目的は内乱に対してこの都市を守ることであった[33]」というのはマルクス主義者ベンヤミンの穿ちすぎた見方である。近世都市の構造を色濃く残した昔日のパリは、文化的にはそれなりに爛熟していたものの、近代的な産業的秩序に必要な労働の組織化とブルジョワ的な物質的繁栄の享受とを促進する都市空間とは

---

[30] Napoléon-Louis Bonaparte, *Des idées napoléoniennes* (Paris : Amyot et Henri Plon, 1860) p. 74.
[31] Napoléon-Louis Bonaparte, *Discours et Messages de Louis-Napoléon Bonaparte* (Paris: Plon, 1853), pp.137-138.
[32] ヴァルター・ベンヤミン「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」、『ボードレール（他五編）』（野村修編訳、岩波書店、1994 年）、135 頁
[33] ヴァルター・ベンヤミン「パリ――19 世紀の首都〔ドイツ語草稿〕」、『パサージュ論第 1 巻』（今村仁司・三島憲一ほか編訳、岩波書店、2003 年）、27 頁。

到底いいがたい状況にあった。その点からいえば、大改造を経て近代化されたパリの、遊歩道（パサージュ）が張りめぐらされ遊民（フラヌール）の行き交う都市空間に19世紀的秩序の「パノラマ」化を見たベンヤミンの鑑定眼のほうにむしろリアリティがある[34]。遊歩道はまさしくゾンバルトのいう「消費都市」の象徴であった。

> マドレーヌ教会広場からサン=ドニ門まで、陳列された商品の大いなる歌が色とりどりの詩句を謳っている。パサージュは、贅沢品商売の中心地である。パサージュを飾り立てるために、芸術は商人に奉仕する。同時代の人々は飽きもせずパサージュを褒め称える。今後も久しい間、パサージュは旅行者を魅きつけてやまないだろう。……産業による贅沢の生んだ新しい発明であるこれらのパサージュは、いくつもの建物をぬってできている通路であり、ガラス屋根に覆われ、壁には大理石がはられている。建物の所有者たちが、このような大冒険をやってみようと協同したのだ。光を天井から受けているこうした通路の両側には、華麗な店がいくつも並んでおり、このようなパサージュは一つの都市、いやそれどころか縮図化された一つの世界とさえなっている[35]。

パリ大改造の目的は、パリに産業的秩序の中核地の任を新たに負わせること、フランス中の物と人をパリに集約させるとともに、フランス全体へ向けた産業精神のモードの発信地としてパリを再編することにあった。オスマンに課せられたのは、それを現実のものとするための巨大な公共事業であり、市街のゾーニングの大胆な改変を含むインフラの整備と、手狭になった中央部を拡張する新市街地の建設に加え、オペラ座、エトワール広場、パリ北駅、中央市場（現存せず）のような今日もパリの記念碑として機能している歴史的建造物の竣工が含まれていた[36]。

オスマンの功績の象徴としてしばしば挙げられるものに、リヴォリ通りの開削とエトワール広場（凱旋門広場）の整備がある。「オスマン化」以前のパリの狭い街路は交通渋滞を招き、治安を悪化させ、歩行者にも辻馬車の通行にも危険であった[37]。オスマンがそこに大通りを開削すると（その下を下水道、ガス管、地下鉄までも通すことが計画されていた）、

---

[34] ベンヤミン「ボードレール」、171-174頁参照。
[35] ベンヤミン「パサージュ論1」、37頁。
[36] 同書、14-17頁参照。また松井道昭『フランス第二帝政下のパリ都市改造』（日本経済評論社、1997年）、95-103頁参照。
[37] ベンヤミン「ボードレール」、173頁。

これがバイパス手術のように交通と流通を促進しただけでなく、同時に衛生問題や治安問題をも一挙に解決した。ベンヤミンもいうように、「長く一直線に伸びる道路による遠近法的な展望」を市内に作ることは、すなわち「天啓（イリュミナシオン）／照明」を創造することに通じるのである[38]。オスマンは開削される新道が常に直線で貫通され、交差点が常に六差路を形成することに執着した。第二帝政に入って以降もほぼ野原だった凱旋門周辺に円形広場を設け、この広場から放射状の道路を敷いて、同心円状の区画に環状道路を整備した[39]。このような記念碑と広場と交差路とが織りなす「放射状／星型」の都市の意匠にも、ベンヤミンは例によって政治的な次元を見いだしている。

> これは、技術上の必要事項を芸術上の目標設定によって箔をつけようとする 19 世紀に再三認められる傾向と対応するものである。市民階級による世俗的・宗教的支配のための諸機関を、街並みの枠組みに取り入れて、自らの賛歌を歌わせようとしたのであった。街並みは完成前には幕布で覆われ、完成の暁には記念碑のように除幕式が行われた。――オスマンの活躍は、ナポレオン三世の帝国主義に呼応するものであった[40]。

しかし、ナポレオン三世によるパリの大改造計画は、交通網整備を中核とするサン=シモン主義的な国土開発のグランド・デザインと密接にリンクしていたことを忘れてはなるまい。都市のインフラ整備の一環としてのコミュニケーションと交通手段、なかでも鉄道の戦略的重要性を、当時のどの政治的陣営よりも理解していたのはサン=シモン主義者たちであった[41]。地域産業の枠組み内部に留まっていた地方の工場は[42]、鉄道によって都市へと販路を拡げることにより、フランス〈産業体制〉の中に組み込まれた。工作機械の導入により大量に生産される工業製品が都市に押し寄せると、都市の消費物資販売の規模は巨大化し、これが消費文化の揺籃となって、ふたたび鉄道を通じてフランス全土へと伝播・拡

---

38 ベンヤミン「パサージュ論 1」、1、26、34-35 頁参照。

39 松井前掲書、172-176、181-220 頁参照。

40 ベンヤミン「パサージュ論 1」、26、148-157 頁参照。住民の政治的精神を町並みづくりに反映させたこのバロック的な都市構造の起源は、16 世紀の対抗宗教改革期のローマである。本田昌昭「バロック建築」、西田雅嗣『ヨーロッパ建築史』（昭和堂、1998）、164-167 頁参照。

41 Cf. Antoine Picon, *Les Saint-Simoniens: Raison, imaginaire et utopie* (Paris: Editions Belin, 2002), pp.233-234.

42 服部春彦・谷川稔編著『フランス近代史』（ミネルヴァ書房、1993 年）、132 頁、および古賀和史『近代フランス産業の史的分析』（学文社、1983 年）、35 頁参照。

散する。こうして鉄道網が中央と地方を繋ぐ〈産業社会〉の大血脈であるとすれば、同心円状の都市区画の間に張りめぐらされる放射状および環状の通路網は、〈産業社会〉の魂たるパリという「消費都市」の毛細血管にほかならないといえるだろう。パリはサン=ジェルマン駅、オルレアン駅、リヨン駅、レンヌ駅を通じて各地方に向かって開かれ、それらの駅はリヴォリ通り、セバストポール通り、さらにブールヴァールによって接続し、その間に結節したエトワール広場、シャトー・ドー広場（現レピュブリック広場）、ナシオン広場、ヨーロッパ広場、オペラ座広場のようなロータリー空間で人々は出会い、語り合い、消費に興じる。サン=シモン主義の機関誌『グローブ』は、まさしくそのような「消費都市」にして鉄道網のターミナルであるパリを新しいイェルサレムとして謳いあげている。

> お前の王たちの宮殿はその額になるだろう。花咲く花壇はその顔となるだろう。この頭の先から、使い古され、穴のあいた古いキリスト教の寺院とそのぼろをまとった修道院を掃き捨てよう。私の都は歩こうとする人の姿をしている。足は青銅ででき、石と鉄の二重の道に支えられている……。その胸には歌と音楽が毎晩響いている。その上に、生命の中心、巨人の太陽神経叢である僧院がある[43]。

パリのインフラを改造するオスマンの手は、民間住宅に厳格な建築規制を適用し、建物の外観に注文をつけるところにまで及んだ[44]。これは市街地地価を上昇させ、公有土地家屋の売却益から公共事業費を捻出する錬金術の一環であるが、その一方で職住分離政策を正当化し、労働者住居をパリ郊外に押し出すと同時に中間層を市街地に結集させる効果もあった。都市計画にメリトクラシーの要素を組み込むサン=シモン主義の都市理論は、20世紀の E・ハワード（Ebenezer Howard, 1850-1928）が提唱した「田園都市運動(garden-city movement)」や、高層建築を多用するパリ中央部の現代都市（シテ・コンテンポレーヌ）化を提言したル・コルビュジェ（Le Corbusier, 1887-1965）の「ヴォワザン計画 (Plan Voisin)」にさえ多大な影響を及ぼすことになったのである[45]。

---

[43] Charléty, *op.cit*. pp. 246-247. シャルレティ前掲書、200-201 頁。

[44] 街路幅員に応じて軒高を 11.7 メートル、14.6 メートル、17.55 メートル、20 メートルの 4 種類に制限した。松井前掲書、172-174 頁参照。

[45] Cf. Robert Fishman, *L'utopie urbaine au XXe siècle: Ebenezer Howard, Frank Lloyd Wright, Le Corbusier* (Bruxelles: Editions Mardaga, 1979), p. 25 et 161; Manfredo Tafuri and Francesco Dal Co, *Modern Architecture*, translated by Robert Erich Wolf (New York: H. N. Abrams, 1979), p. 54.

３．物神（フェティッシュ）の祭礼(1)――1855 年パリ万国博覧会

フランスの宿願であった万国博覧会は第二帝政期に二度パリで開かれた。一回目の「農業・産業および芸術製品のパリ万国博覧会」(Exposition Universelle des Produits de l'Agriculture, de l'Indusrie et des Beaus-Arts de Paris)は帝政発足から 3 年後の 1855 年、簡潔に「パリ万国博覧会」(Exposition Universelle de Paris)と銘打った二回目はその 12 年後の 1867 年のことである。その間の僅か十余年でフランス鉄道網の骨格が構築され、またパリの大改造が断行されたことからして、二つの万博はフランスにおける〈産業化〉のそれぞれ起点および終点に位置づけることもできるだろう。

1855 年のパリ万博にあたり、ナポレオン三世は 1851 年ロンドン万博（The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations）の目玉となった「水晶宮(The Crystal Palace)」を模して「産業宮(Palais de l'Industrie)」と呼ばれる巨大パビリオンを建設させた。「水晶宮」へのナポレオン三世の並々ならぬ関心は、大統領就任時にまで遡って確認することができる。1851 年に老朽化したパリ中央市場の再建話が持ち上がり、建築家バルタール（Victor Baltard, 1805-1874）の設計・監督の下に 52 年に第一期工事が完了するが、「水晶宮」のような鉄とガラスを素材とする建築物を望んでいた当時のルイ=ナポレオンはこれを自分の意図に反するとして取り壊させ、最終的にオスマンが仲裁に入ってコンペティションをやり直し、「水晶宮」に似た新様式の中央市場を建設することが決定したのである[46]。「水晶宮」へのルイ=ナポレオンの憧れは、パリでの万博開催への意気込みを示した 1852 年 3 月 8 日の大統領令にも率直にあらわれていた。

> パリには目下、国民的感情の要求に応えるような、言い換えれば芸術の壮麗さと産業の発展をふたつながらに満たすような博覧会を開催したくとも、それにふさわしい建物が存在しない。これまで博覧会の会場にあてられてきた建物は、いずれも臨時の用を満たすだけの仮設建築で、フランスの偉大さを表すにはいかにもそぐわないものであった。……以上の事実に鑑みて、内国博覧会を開催できると同時に、公共の式典、および民間

[46] Cf. Sigfried Giedion, *Space, Time and Architecture: The Growth of a New Tradition, Fifth revised and enlarged edition* (London: Harvard University Press, 2008), pp. 230-231.

の祭典や軍事祭典にも使用可能な建物を、ロンドンの水晶宮にならってシャン=ゼリゼの大広場に建設することを決定する[47]。

独裁大統領の命令一下、「万国博覧会」として挙行されることが 53 年に決まったパリ博覧会の組織委員に任命されたのは、シュヴァリエ、フレデリック・ル・プレー（Pierre Guillaume Frédéric Le Play, 1806-82）、エミール・ペレール、アルレス=デュフール（François Barthélemy Arlès-Dufour, 1797-1872）らのサン=シモン主義者であり、特にロンドン万博を実地で見学したシュヴァリエと社会学者のル・プレーが実務面で陣頭指揮を執った。またパリ万博の看板ともいうべき「産業宮」は、フランス版「水晶宮」となることを目指して、アンファンタンの忠実な弟子であったエミール・バロー（Émile Barrault, 1799-1869）の弟アレクシス・バロー（Alexis Barrault, 1812-1865）により設計されている。55 年パリ万博は、こうしてサン=シモン主義の教義と理想の全容をヨーロッパ公衆の眼前に示す絶好の機会となったのである[48]。

大統領の肝煎りで建造された幅 108 メートル、長さ 250 メートルの「産業宮」は、「水晶宮」（幅 125 メートル、長さ 563 メートル）には劣るとはいえ、ノートルダム大聖堂（幅 40 メートル、長さ 127 メートル）と比べても、人工物としてのスケールにおいて十分に画期的であったといえる。壁面を石造りで支え、天井を鉄骨とガラスで作られた梁間 48 メートルの丸屋根で覆う構造になっており、フランス建築史において革命的な採光性を実現してみせた[49]。名前に反して「産業宮」は産業機械の展示には手狭であったため美術品展示会場に転用されてしまい、産業機械の展示用には別にやはり鉄とガラスで作られた全長 1,200 メートルに及ぶ機械別館が作られた[50]。

ロンドン万国博覧会のメイン会場となった「水晶宮」は、イギリス人の造園家・建築家ジョセフ・パクストン（Sir Joseph Paxton, 1803-1865）によって設計された。近世ヨーロッパの王宮や庭園の温室建築を租型にしているのは、万博が期間限定の祭典であり、その跡地利用のため容易に破却できると同時に、建材の再利用までが簡便であることを考慮した

---

[47] *Bulletin des lois de la République Française, X: 1851-1852* (Paris: Imprimerie Impériale), p. 942; cf. *Rapport sur l'Exposition Universelle de 1855 présenté a l'Empereur par S. A. I. le Prince Napoléon président de la commission* (Paris: Imprimerie Impériale, 1857), pp. 163-64.

[48] Cf. Pieter van Wesemael, *Architecture of Instruction and Delight: A Socio-historical Analysis of World Exhibitions as a Didactic Phenomenon (1798-1851-1970)* (Rotterdam: 010 Publishers, 2001), pp. 90-91.

[49] 吉見俊哉『博覧会の政治学』（中央公論社、1992 年）、66-70 頁参照。

[50] Cf. Giedion, *op.cit*., p. 256.

からである。しばしば「水晶宮」が建築史上、近代に特徴的なプレハブ建築のさきがけと称せられるゆえんである[51]。しかし「水晶宮」の真の意義は、むしろその素材の革新性にこそあった。「水晶宮」へのナポレオン三世のこだわりもまた、それがガラスと鉄を素材とするがゆえに、近代という時代を象徴する構築物として万国博覧会の核心になると考えたためであった。

ここでヨーロッパ建築史を簡単に振り返って鉄・ガラス建材の史的位相を確認しておこう。ヨーロッパにおける伝統的建築資材は木と石である。木と漆喰はゲルマン民族に固有の文化的建材であり、石はラテン系民族に特徴的な文明的建材としての歴史を有する[52]。木と漆喰の建築物は増改築が容易であり、建材が調達しやすい半面、木の性質に左右されやすく、建物に微妙な歪みが生じ、火災や風雨にもきわめて弱い。つまり地域性と風化を象徴する建材である。他方、恒久性を有する石は城壁、あるいは聖堂や修道院の建材としての長い歴史を有し、転じてヨーロッパ文明の普遍性を象徴するものとして用いられる[53]。しかし石の建築物の欠点は、堅牢重厚である反面、重量があり、広い空間や窓が取り難いことである。湿度と室温の調整には暖炉が必須になり、油と蝋燭が貴重品であった時代には、光と新鮮な空気を取り込むために細長く廊状の構造にするか、中庭や吹き抜けを設ける必要があった。

木と石にかわってガラスと鉄が建材化されたことは、堅牢さの問題と採光の問題を同時に解決する建築史上の革命的な出来事だった。産業革命を経て生産技術が向上した結果、丈夫で長い鋼材が作れるようになり、溶鉱温度が上がり不純物の除去技術が向上して高品質のガラスが生産されるようになったこと、さらに鉄道輸送によって工場から都市へと運搬可能になったことが、革命的建材利用への道を拓いたのである。シュヴァリエもいうように、建材としての鉄の特徴は、石に比べて丈夫で耐久性があると同時に可塑性にもすぐれている点にあり、石では不可能な広い梁間を作れるようになることにある[54]。さらに透

---

[51] 中嶋節子「産業革命と建築――工業化時代の建築と技術」、石田潤一郎・中川理編著『近代建築史』（昭和堂、1998 年）、10 頁参照。

[52] 後藤久『西洋住居史――石の文化と木の文化』（彰国社、2005 年）、12-15 頁参照。

[53] 西田前掲書、87-92、110-114、136 頁参照。

[54] かつてシュヴァリエは師アンファンタンとの会話のなかで、それゆえに聖なる神殿こそは鉄で作られるべきだと主張した。Cf. Michel Chevalier, “Conversations avec le Peré,” *Le livre Nouveau des Saint-Simoniens, Manuscrits d’Emile Barrault, Michel Chevalier, Charles Duveyrier, Prosper Enfantin, Charles Lambert, Leon Simon et Thomas-Ismayl Urbain (1832-1833),* introduction et notes par Philippe Regnier (Tusson: Charemte, Du Lerot, 1991), p. 180.

明のガラスを側壁や天窓に多用して採光を確保すれば、旧来の中庭は巨大な内部空間として転用可能になる。例えば各種の議事堂や、オペラ座、そしてターミナルステーション、百貨店のような扇形あるいは円形の建物、または四角形でも工場のような巨大ホールが造れるようになった[55]。こうしてシヴェルブシュもいうように、視覚と空間の「工業化」を可能にした近代生産様式の恩恵を最大限に活かしたのが、ロンドン万博の「水晶宮」にほかならない。鉄とガラスで出来た「水晶宮」は、遠近感の指標となる陰影を消失させるほど、それまでのヨーロッパ建材では不可能であった燦然とした明るい、そして広大な空間を作りだしたのである[56]。

しかしガラスと鉄は、単に建築資材としての質料的観点から近代的であっただけではない。それらがもたらす光と空間には、近代という時代の精神に対応する形相的なものがあったのである。

フランスの 19 世紀は、われわれ現代人からすればまだ暗い時代であった。アーク灯の発明は 1808 年であるが、電灯の普及には、消耗する炭素棒、送電と蓄電のような難題を解決する技術が確立されるまで一世紀近く待たねばならない。19 世紀に広まったのはガス灯である。機関車の灯火も信号照明もガス灯だった。しかしガスの光源転用には高熱化や中毒死、また機械の製作操作に未熟なこの時代には貯蔵タンクの爆発などの危険があった。さらにガス灯の室内利用は床面と天井の間に著しい温度差を作り、熱は内装調度品を修復不能なほどに傷めた[57]。光源が燃焼であることは、危険に加えて光の揺らぎという明度の問題をもたらした。ガス灯の明かりは蝋燭ほど頼りなげではないし危険でもないが、電灯より――明度も安全性も――暗いのである。

ロマネスク様式の修道院の陰鬱さと、ノートルダム大聖堂のゴシック様式が過度に強調する「まことの光」のコントラストは、陰影がヨーロッパ中世を特徴付ける身分制秩序の象徴であることを雄弁に物語っている[58]。事物がまとったこの翳りを「アウラ(aura)」と呼び、近代をその消失によって特徴づけたのはベンヤミンであった。「アウラ」とは歴史的に

---

[55] 中嶋前掲書、6-12 頁参照。

[56] Cf. Wolfgang Schivelbusch, *Railway Journey: The Industrialization of Time and Space in the 19th Century* (Berkeley : University of California Press, 1986.), pp.45-48. ヴォルフガング・シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史――19 世紀における空間と時間の工業化』（加藤二郎訳、法政大学出版局、1982 年）、61-66 頁参照。

[57] ヴォルフガング・シヴェルブシュ『闇をひらく光』（小川さくえ訳、法政大学出版局、1988 年）、21-68 頁参照。

[58] 西田前掲書、110-113 頁参照。Cf. Giedion, *op. cit*., p.268.

育まれた血と土の「桎梏」、世代を超えて共同体に暮らす人々に受け継がれてきたしがらみを意味する[59]。この点で鉄とガラスのような新建材が可能にする革命的な明るさは、そこに集まってきた人間たちからあらゆる陰影を追い払い、身体的特徴として受け継がれてきた刻印すらも相対化してしまう。透明なガラスの光学的効果は身分制に代表される中世由来の旧時代の翳りを霧消させ、最先端製鉄技術が可能にした大空間はそのなかを行き来する人間たちのふるまいを均質な運動に変えた。ターミナル、百貨店、ホテル、万博会場といった匿名性と群集性で成り立つ近代空間は、個人の歴史的陰影を光の中でみすぼらしくとるにたらない瑣末なもの、たんなる汚れやゆがみに転化するのである[60]。

ロンドン万国博の「水晶宮」が実現した広大で驚くほど明るい空間は、まさしく近代社会を象徴するものであり、「アウラ」の無い新世界の到来を人々に実感させる装置であった。ナポレオン三世が「産業宮」に期待したのもそれである。「水晶宮」と違っていたのは、石造りのファサードを備えていたことであった。ゴシック建築の発祥の地、「まことの光」で大聖堂内部に神の国を再現する文化を有するフランスでは、新しい文明の光もガラスでむき出しにされるのではなく、覆われる必要があったからである。

パリ万博の開会式には、ナポレオン三世夫妻臨席のもと、イギリス女王であり東インド皇帝であるヴィクトリア女王が来賓として加わった。当時の様子をベンヤミンはA・S・ドンクール（A. S. Doncourt, 生没年不詳）『万国博覧会』（*Les expositions universelles*, 1889）から引用した一節をもって説明している。

> パリ万博、1855年。「四台の機関車が機械別館の玄関を守っていた。それらは、かのニネヴェの巨大な牝牛たちや、寺院の入り口に見られるエジプトのあの大きなスフィンクスたちのようだった。別館は、鉄と火と水の国だった。騒音が耳を聾し、目がくらんだ。……すべてが動いていた。羊毛を梳いたり、羅紗を縒ったり、亜麻布を剪毛したり、穀物を脱穀したり、石炭を採掘したり、チョコレートを製造したりするありさまが見られた。動力と蒸気は、差別無く皆に行き渡った。英国の出品者しか火と水を使用させてもらえなかった1851年のロンドン万博とは大違いだった[61]。

---

[59] 三島由紀夫『若きサムライのために』（文藝春秋、1996年）、73-79頁参照。

[60] Cf. Schivelbusch, *op. cit.*, p.45. シヴェルブシュ前掲書、61頁参照。またジュディス・ウェクスラー「人間喜劇――19世紀パリの観相術とカリカチュア」（高山宏訳）、今橋映子編『都市と郊外――比較文化論への通路』（NTT出版、2004年）、59-98頁参照。

[61] ベンヤミン「パサージュ論1」、432頁。

ベンヤミンにとって「アウラ」の消失はアンビヴァレントである。それはたしかに前近代的なヒエラルキーの象徴であるが、同時に人間と事物との神秘的で有機的な交流を可能にするものでもあったがゆえに、その消失は世界の機械論的表象化が不可逆に進行したことをも意味した。いまや「鉄の機能性が建築における構成原理の支配を開始させ」、「国家の機能性が市民階級による支配の手段」となり、芸術はこれに追従するようになったというのである[62]。

しかし万博を目当てにパリ詣でをした当時の人びとは、ノートルダム大聖堂が甦らせる「アウラ」とは違ったものを体験したはずである。1855 年パリ万博の来場者数は約 520 万人、当時のフランス人口が推定 3,500 万人であるから、総人口の約 7 分の 1 を動員したことになる[63]。彼らは敷設間もない鉄道に揺られてフランス全土からパリに集まり、首都の整然とした町並みに感嘆しただろう。万博会場に足を踏み入れた彼らは、「産業宮」や機械別館の壮麗さに心打たれ、そこに展示された――人間の労働から苦痛と困難を取り除いてしまう――様々な産業機械を眺めては、その奇跡のような力が約束する新世界のまぶしいイメージに圧倒されただろう。その経験を記憶に刻み付けた彼らは、また鉄道に揺られて故郷に帰り、自分の感動をだれかにつたえようとするだろう。素材と物量で見せる物質（マテリー）の祭典であった 1855 年万博は、産業の恩恵をフランス全体に理解させ実感させる巨大な啓蒙装置としても機能したのであり、その成功の意味を誰よりも強く感じとっていたのは主催者ナポレオン三世であった。

４．物神（フェティッシュ）の祭礼(2)――1867 年パリ万国博覧会

ロンドン万博での展示は鉱工業産品に限定され、「鉱物および化学原料」「機械」「工業製品」「ガラス等の工芸品」「家具およびその他の建築資材」「絵画を除く美術品」の 6 分野に分類されていたが、55 年パリ万博の展示は医学・軍事・繊維・家具・産業デザイン等を加

[62] 同書、5-6 頁参照。それは鉄道の普及とも対応している。「線路こそは組み立て〔モンタージュ〕可能な最初の鉄材であり、鉄桁の前身となった」（同書、7 頁）。
[63] 吉見前掲書、67 頁参照。

えて 7 分野 30 種別に拡大・細分化された[64]。しかし偏執的な蝟集分類熱が災いして別館を設けねばならなくなり、教育的・啓蒙的な効果ではロンドン万博とさほどの差はなかったようである。『1855 年万国博覧会報告書』(*Rapport sur l'Exposition Universelle de 1855 présenté a l'Empereur par S. A. I. le Prince Napoléon président de la commission*, 1857)には、その点が包み隠さず記されている。

> 今後、会場は、展示が分類法と密接な関連を持つように設営されなければならないだろう。これまでは、製品の展示に関しては、見学者が見やすいようにとしか考慮されていなかった。つまり展示品を整理し分類するのに、せいぜいのところ国別、地方別という順序に従ってきたに過ぎない。その結果、展示品を比較検討しようとすると大変な労力を要する仕事になってしまった。……この点ではロンドン万博のほうがパリ万博よりもましだったほどである[65]。

この反省に基づいて報告書の執筆者が語る理想の万博会場施設の条件は、そのまま二度目のパリ万博に活かされることになる。

> 私が考えているのは、横断面に進むと国別の展示品が見物でき、縦断面に進むと性質別の展示品が見物できるような会場である。性質別の展示品は三部門に大別される。まず片方の側廊には第一部門として一次原料が展示される。そしてもう片方の側廊には第二部門として機械類が展示される。そして第三部門として、中廊には文明勝利の記念品たる加工品および二次加工品がおかれる。こうした配置法には様々な利点がある。まずひとつの国のあらゆる産業を研究したいのであれば、ひとつのポイントでギャラリーを横に移動するだけで、すべてを見学することができる。逆に、あるグループなりクラスなりの製品を見学したいのであれば、こんどは縦に動けば、様々な国の製品を比較検討することができる[66]。

ここで『1855 年万国博覧会報告書』の執筆者と目されるフレデリック・ル・プレーとい

---

[64] 展示品数の増大は、自由貿易の効果を示したいというシュヴァリエの意向のあらわれであった。Cf. van Wesemael, *op.cit*., p.242.
[65] *Rapport sur l'Exposition Universelle de 1855*, p.140.
[66] *Ibid.*, pp.140-41.

う人物をあらためて紹介しておこう。ル・プレーはシュヴァリエの刎頸の友であり、エコール・ポリテクニックでともに学んだ上に、後には姻戚関係で結ばれている。鉱山技師として出立したが、社会学者としてはコントに近く、社会調査を重視して職場や家庭を対象に定量分析をおこなうル・プレー学派を創始したことでも名高い。晩年は無神論からカトリックに転じた。〈産業社会〉化に伴うコミュニティの喪失に着目した研究で知られ、社会主義革命の有効性を疑問視する立場から、第二帝政期になってサン=シモン主義に接近し、ついにはシュヴァリエとともに運動を理論面で牽引するまでになった。

1867 年のパリ万博は、55 年万博の組織委員であったル・プレーとシュヴァリエが企画・運営の核となり、二人をそれぞれ組織委員長と国際審査委員会議長に迎えて開催された。二度目の万博は前回からさらに規模を増し、146,000 平方メートルものシャン・ド・マルス公園を中心にパリ市域全体を使用する宏壮な祭典となった。膨大な展示品は、当然のように鉄とガラスの建築で囲われ、それらはかつての「産業宮」と同様に「コロセウムのような[67]」ローマ風の装飾が施された。中央部の温室庭園のみならず、それを取り囲む展示スペースもすべて鉄骨で支えられた同心円状のガラス屋根で覆われ、最後の一円の外側だけが赤いレンガで彩られた。しかし 1867 年万博が画期的であったのはその規模ではなく、展示法に採用されたル・プレー考案の独自の工夫である。パレに設営された主会場は長径 490 メートル、短径 386 メートルの楕円形となり[68]、この空前絶後の広大な人工空間に全展示物が均等なスペースをとって各々過不足無く説明されるようにしたのである。これが前回万博の反省に基づいたものであることは確実だが、その起源はシュヴァリエとル・プレーが師と仰ぐサン=シモンがかつて語った「善い百科全書」の理想にまで遡る。

> 善い百科全書は、読者が等しい感覚の諸階段によって、最も一般的な科学的概念から最も特殊的な観念にまでおりていけるような、またその逆ができるような順序に配列されたもろもろの人間知識の完全な収録であろう。……／19 世紀の百科全書を作成する場

---

[67] ベンヤミン「パサージュ論 1」、434 頁。

[68] Cf. Giedion, *op. cit*., p.260. 会場の形態にもル・プレーの意向が反映されていた。「こうした建物は往々にして長方形である場合が多いのだが、パレは楕円形であるおかげで、角も袋小路もないという大きな利点を持っている。その結果、見物客は、来た道を引き返すということがなくて済む。こうした例外的な便利さに加えて、庭園と中央広場の利点もあるので、最も人手の多い日でも、人の流れは決して滞ることはない」。Commission impériale, *Rapport sur L'Exposition universelle de 1867, à Paris* (Paris: Impimerie Impériale, 1869), p.32.

合に従わなければならぬ原則は、科学はその全体においてもその部分においても観察に基礎をおかねばならない、という原理である。それゆえ、百科全書に基礎を与える役を果たさなければならないのは、進歩の分析である。科学のこの大著の区分は、この分析によって与えられなければならない[69]。

サン=シモンが「百科全書」論考において暗示した視聴覚教育の原則は、万物を一地点へ空間的に集積すると同時に、万物をその起源（素材）・発展（変形）・完成（実用）の各相において歴史的に一望できるようにするということである[70]。この「善い百科全書」的展示のイメージを具象化し、来場者に文明を総覧してみせる壮大な啓蒙装置を作り上げることこそ、サン=シモン主義者ル・プレーがもっとも傾注した点であった。

この万国博覧会プロジェクトの根幹をなす組織プランは、方法論的分類法(classification méthodique)をその出発点とし、展示品の性質と国籍による二重のグループ化を基礎としていた。こうした条件は二つの分類システムをもった円形の配置法によって実現された。第一の分類システムは、同心円状のゾーンによって構成されている。これはあらゆる国の同系列のグループの製品を展示するためのゾーンである。第二のシステムは、放射状のセクターからなり、それぞれセクターが別々の国にふり当てられている。この配置法だと、同心円状の通路はそれぞれのゾーンの中間線にあたり、ここを歩けば、同じグループの製品を比較検討することができる。一方、それぞれのセクターを区切っている放射状の道をたどると、同一の国の様々なグループの製品を次々に眺めることができる[71]。

この国際的大製品コンクールの主たる目的は、人間の必要を満たすために産業が想像しうるあらゆる手段方法を展示することにある。したがって、全産業の完璧な見取り図を真実かつ印象的な形態のもとに提示するには、それぞれの必要に応じた製品を相対的にグループ化する以外に手はない。／ところで必要というものはあらゆる民族に共通であ

---

[69]「百科全書についての覚書」t I, 147-149／ (1) 214-215 頁。

[70] 『百科全書』の成立の背後に森羅万象への好奇心をもって世界を一望する「観測者（スペクテーター）」の観念があることが指摘されてる（高山宏『近代文化史入門――超英文学講義』（講談社、2007 年）、120-121 頁）。高山によれば、19 世紀以降の学知は「視覚の専制」によって特徴づけられる（高山宏『世紀末異貌』（三省堂、1990 年）、21 頁）。

[71] *Rapport sur L'Exposition universelle de 1867*, pp.5-6.

り、絶えず、いたるところで見出されるものであるが、これを定義するとなれば、肉体的必要から知的な必要へと上っていく性質を持っているということができる。すなわち、まず食、衣、住の必要。ついで一次原料とその加工方法、つまり労働という語の最も広い意味での必要。そして知性と肉体の力を倍化させる文芸教養。最後に美術である[72]。

具体的な展示風景は次のようなものとなった。会場中央部には温室庭園が設けられ、そこから放射状に通路が延びており、全体の半分がフランスの展示に、もう半分が世界各国の展示に当てられた。放射状の通路は、フランス・スペースでは「プロヴァンス通り」、「ローレンヌ通り」、「パリ通り」、「フランドル通り」などフランスの各地にちなんで命名され、各国スペースも同様に「イギリス通り」、「インド通り」、「アフリカ通り」、「ロシア通り」と命名された。また中央の温室を取り囲むように同心円状に 8 つの展示スペースが設けられ、7 つの環状回廊がめぐらされている。展示スペース全体はバロックの都市計画のように完全にシンメトリカルに作られ、各部の展示はやはり同心円状に「芸術分野」、「教養分野」、「家具調度品」、「服飾」、「採掘産業製品」、「機械一般」、「食料品」に分類されていた[73]。この分類に従って各国の展示品は、半円の中心から外に向かって筋状や線状に、あるいは扇状にスペースが割り当てられた。従って観客は、中心から外へ歩いていけばその国の状況を芸術、文化、生活、産業の順序で観覧することができ、また環状回廊に従って歩けば、各国の芸術や服飾といった各テーマだけを比較観覧することができた[74]。まさしく百科事典ないし博物学の構成を模した空間構造であり、また展示法である。しかしそれでもル・プレーは満足しなかった。彼は『1867 年万国博覧会報告書』においてロンドンとパリで過去２回ずつ開催された万博を比較し、出品者数でも会場面積でもパリが上回ったにもかかわらず、展示空間も開会期間も資金も、自分が思い描く理想の「博物館(musées généraux)」を実現するにはほど遠いと嘆いている[75]。

展示品の見せ方への執拗なまでのこだわりは、ル・プレーの万国博覧会構想が「オスマ

---

[72] *Ibid.*, pp.16-17.

[73] さらに別会場で「農業・牧畜」（ビヤンクール島）、「園芸・果樹栽培」（シャン・ド・マルスの庭園）、「民衆の肉体的・精神的生活条件を改善するための製品」（シャン・ド・マルスの庭園）の展示もあった。鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会――サン・シモンの鉄の夢』（小学館、2000 年）、257 頁参照。

[74] ベンヤミン「パサージュ論 1」、434 頁、および吉見前掲書、68-71 頁参照。

[75] Cf. *Rapport sur L'Exposition universelle de 1867,* pp.267-278; cf. van Wesemael, *op.cit*., chap.4.

ン型のパノプティコン都市と共通のコンセプト」や「新しいパリの縮小都市のモデル」には矮小化できず、またひいては、現実のパリ万博そのものも「ナポレオン帝政の巨大な祭典」には収まらないことの確かな証左となるように思われる[76]。ベンヤミンは「万国博覧会という考えを採用したのは、地球全体の工業化を計画していたサン=シモン主義者たちであった」といい、またそれは「商品という物神の巡礼場」として機能したと主張しているが[77]、この診断は正しい。1867 年パリ万博において公衆の前に示された文明の過去・現在・未来は、サン=シモン主義者たちが作り上げた〈産業社会〉の歴史図の投影にほかならないからである。フランスのみならずヨーロッパ各地から万博会場に押し寄せる来場者たちは、周到に意図された順序で展示品を眺めることにより、〈産業社会〉の由来を知り、その正統性を確信し、またその完成に至るまでの確実な道筋を示され、自らこの新世界の住人、すなわち〈産業者〉たらんとする意志をもつようになるだろう。〈産業社会〉の実現には君主ともども民衆の自発的参加が欠かせないとするナポレオン三世のボナパルティズムにとっても、万国博覧会はその最も効果的な手段であり教育装置となったのである。

世界の産業製品を一堂に集め、体系的に配置することによって各国が文明度を競う様をみせた 1867 年パリ万博は、産業博覧会という万国博覧会の本旨に戻っただけのようにも見える。また近代ヨーロッパが〈産業社会〉化する歴史的過程を縮約して体感させることで、この過程を牽引し、ヨーロッパ文明の頂点に位置する産業国家フランスを諸国に強く印象づける意図も、少なくともナポレオン三世にはあっただろう。しかし産業革命が軌道に乗りかけたこの時期のフランスは、万国博覧会の絶大なる教育的効果を必要としていたのである。

おわりに

ベンヤミンは万国博覧会に沸き立つ人びとで溢れる「19 世紀の首都」パリの軽佻浮薄さへの侮蔑をこめながら、パレ=ロワイヤルでの演目『青銅王ルイとサン=シモン主義者』（*Louis-Bronze et le Saint-Simonien*, 27 février 1832）から次の台詞を引用した。

---

[76] 鹿島「パリ万博」、252-255、263 頁、および吉見前掲書、67 頁参照。
[77] ベンヤミン「パサージュ論 1」、14-15 頁。

そうです、神聖なるサン=シモンよ、あなたの教理に、
パリから中国まで全世界がしたがうとき
黄金時代は輝かしく蘇ることでしょう、
河川には紅茶とココアが流れ、
平野にはすっかり焼きあがった羊が跳びはねて、
セーヌ川には、クールブイヨン煮のカワマスが泳ぐでしょう。
ほうれん草は砕いた揚げクルトンをまわりに
あしらい、調理した姿で世にあらわれる、
果樹にはコンポート煮の林檎が実り、
幅の広い外套やブーツを収穫するようになる。
葡萄酒が雪となり、鶏が雨となって降ってくる
天から、かぶらの添えものの上に鴨が落ちてくるでしょう[78]。

ベンヤミンにとっては、フーリエのユートピアの住人が集団生活を営む「ファランステール(phalanstère)」と呼ばれる居住施設も「人間を道徳の不要な状態に引き戻そう」とするものでしかなかった。その精巧な組織は様々な情念が絡み合う集団心理を材料にしたひとつの機械のようなものであり、「人間からなるこの機械装置が作り出すのは労働なき楽土(Schlaraffenland)である[79]」。おそらくこのマルクス主義者の眼にはサン=シモン主義者たちの思い描く理想の社会も、飽くなき物質的欲望に突き動かされ、それを機械的に満足させることだけを追い求める愚者達の壮大な楽園としか映らなかったのであろう。

19 世紀に革命の夢が潰えたのち、かつて近代市民革命を鼓舞したエピクロス主義はふたたび非政治化しつつ、二極化していったように見える。ひとつは少数の知識人ないし「文人」向けの高尚なタイプであり、俗世に背を向けて極私的な快楽に耽溺する本来のエピクロス主義へのいわば先祖帰りである。これにも大麻、アヘン、モルヒネのような嗜好品に溺れるものと、高雅な芸術・学問に拠り所を見いだすタイプとがありうるが、いずれにしても大衆文化に浸食された 19 世紀の過酷な現実に対する「代償作用」を求めた結果でしかない[80]。もうひとつはまさしくその大衆向けのエピクロス主義であり、万人が快楽を享受

[78] 同書、13-14 頁、および 42 頁。
[79] 同書、9 頁。
[80] ボードレールは『人工楽園』（*Les Paradis artificiels*, 1860）において近代的快楽に対する伝統的快

するという平等主義がかえって快楽そのものの質的低下を招き、あらゆるものが大衆的な欲望の鋳型で焼き直されて粗悪化、矮小化、陳腐化してしまう。ベンヤミンはそれを楽園とみなす思想をサン=シモン主義の中に見て唾棄したわけである。

だがサン=シモン主義には、エピクロス主義の二つの 19 世紀的形態のいずれとも異なるラディカルな政治的エピクロス主義の遺産が息づいている。科学技術の実践的な効能を象徴する鉄道も、首都の街並みの整然としたありさまも、万国博覧会の壮麗な施設や膨大な展示品の数々も、単に大衆を籠絡するための娯楽やこけおどしなどではなかった。それらはいずれも産業文明の恩恵を実感させることで、「アウラ」に代表される過去とその記憶を温床としていまなお人間を呪縛するすべての力から人間を解放し、近代という新世界へと旅立たせる意図を持つものであった。それが人間の感性、とりわけ視覚への訴えを重視した点については、たしかに宗教的祭祀との類縁性を指摘することができるかもしれない。だがサン=シモン主義者たちがなぜ 19 世紀に「新キリスト教」の必要を憚ることなく説いたのかを想起しよう。

> 宗教的夢想の尊大な軽蔑者たちよ、もし君にできるなら君たちの信仰箇条あるいはむしろ無信仰箇条、君たちの道徳理論、エゴイストの教理問答を起草してみたまえ。たった百人の人間でもそれを暗記し、毎日喜んで朗読し注釈することに同意するかどうかをみたまえ。もう一つ努力して「われら汝自由を讃えまつる」を歌いたまえ。だが君の調べが反響を呼んだかどうか細心に注意したまえ[81]。

〈産業社会〉はいまだ実在しないユートピアである。だからといって、産業を育成し、その産品を運ぶ交通網やそれを消費する都市をいくら整備しても、この新世界の住人となるべき新しい人間階級が存在しなければユートピアが福音にとどまることを、サン=シモ

楽の代表として国立音楽院教授バルブローのことばを紹介し、両者の頽廃を際立たせる。曰く「熱情と意志とさえあれば、超自然的な生活にまで登れるのに、なぜ理性をそなえ霊性を持った人間が、人為的な手段を用いて詩的福楽に到達しようとするのか、私には判らない。偉大な詩人、哲人、予言者たちは、その意志を純粋にまた自由に働かせて、自らが同時に原因でもあり結果でもあり、主体でもあり客体でもあり、催眠術師でもあり夢遊病者でもあるような状態に、到達しているのである」（シャルル・ボードレール『人工楽園』（渡辺一夫訳、角川書店、1955 年）、41 頁）。

[81] Enfintin, Barthelemy-Prosper, *Doctrine de Saint- Simon, Prèmiere Année, Exposition, 1829* (Paris : Au bureau de l'organisateur, 1830). pp. 298-299. バザールほか『サン=シモン主義宣言――『サン=シモンの学説・解義』第一年度、1828-1829』（野地洋行訳、木鐸社、1982 年）、284-285 頁。

ンという思想家は誰よりもよく承知していた。この人間本性そのものの改造は、既成のいかなる宗教にも、またあらゆる宗教を迷妄と批判するだけの啓蒙主義にもできず、ただ合理的に体系化されたプログラムに基づいて意識変革に至る疑似宗教的な体験だけが、これを成し遂げることができるのである。

こうしてサン=シモン主義者たちがフランスに築き上げようとした〈産業社会〉という「人工庭園」は、逆説的にも、自然の造化をそぞろ歩きながら楽しむイギリスの「風景式庭園(jardin paysager)」に似てくる。人びとは〈産業社会〉化されつつある国土を鉄道に乗って周遊し、その縮図たる首都パリを遊歩(パサージュ)し、万国博覧会の展示物を観覧しながら来たるべき〈産業社会〉のイメージを確認する。すべてが愛でるべき風景(ペイサージュ)なのである。しかしその体験を通じて人々は〈産業者〉になるという意味では、この「人工庭園」巡りは同時に中世の巡礼にも比すべきもの、サン=シモン主義的秩序を聖化・正統化する祭礼でもあったといえるだろう。

この「人工庭園」の外延はどこまで及ぶのだろうか。フランスを〈産業社会〉化する必要については合意していたサン=シモン主義者たちとそのシンパの中にも、その最終目標をめぐって若干の対立があったことを G・G・イガースは指摘している。特に鉄道事業の展望にかんしては、アンファンタンやシュヴァリエのインターナショナリズムと『グローブ』主流派のナショナリズムとの矛盾が顕著であったという[82]。しかし同様の緊張は鉄道政策にかぎらず、銀行改革や万国博覧会のようなサン=シモン主義者主導のすべての施策に共通して見いだされるだろう。ナポレオン三世ですら、フランスの威信を世界に示すためにだけパリ大改造を命じたわけでも、国威発揚のみを意図して万国博覧会を二度にわたってパリに誘致したわけでもなかったことは、すでに見たとおりである。インターナショナリズムとナショナリズムの矛盾と見えるものは、遡れば各国の〈産業社会〉化を通じて地中海世界ないしヨーロッパ全体の〈産業社会〉化を目指したサン=シモンの普遍協同社会(*association universelle*)の理念に起源がある。それを説明したサン=シモン自身の言葉をここでいまいちど引用しよう。

> この大ヨーロッパ的結合の決定的重要性を悟らせるために、私は次のことを示そうと思う。一、産業体制の完全な確立は、西欧の全人民が同時にこの仕事にたずさわるのでな

[82] Cf. Iggers, *op.cit.,* chap.V.

ければ、いずれの国民においても単独には不可能であろう。二、たとえ文明の進行が産業体制の創立を開始する独占的名誉をフランスにとっておいたということが真であるとしても、それにもかかわらず、ひとたび最初のはずみが与えられれば、この大事業のいくつかの部分は、たまたま最も進んだ状態にある他の西欧諸国民の産業家階級によっておのずから達成されるにちがいないことはたしかであり、フランスは共通の仕事のその部分に補助的作用を及ぼすにすぎない[83]。

サン=シモン主義者たちの活動は、全体として見れば師の思想にきわめて忠実であった。全国規模の鉄道網敷設もユダヤ系資本のフランス化も、あるいは「19 世紀の首都」パリ大改造でさえ、地中海世界ないしヨーロッパ大の〈産業体制〉を確立するための布石であり、フランスはその先陣を務めるにすぎない。だがそれはフランスに単なる「名誉」以上のもの、またナポレオン三世にとってのワーテルローの雪辱よりも実質的なものをもたらすことになるだろう。単一の産業世界のなかでの共生、均一に〈産業化〉された生活構造のなかに収まり、同じ風景を眺め、同じ速度で移動し、同じ未来を心に抱くことにより、出自や身分を異にしていた人々が平等な〈国民〉となる。革命の惨禍とその後の社会の荒廃をいやというほど経験したフランスだからこそ、19 世紀を通じて「仲のよい仇敵（スイート・エネミーズ）」の関係にあったイギリスに先駆けて、〈国民〉創成というこの第二の政治革命の果実を摘むことができる。クーデンホーフ（Heinrich Coudenhove-Kalergi, 1859-1906）とクーベルタン（Pierre de Coubertin, 1863-1937）の平和と博愛の理想を乗せてオリエント急行がヨーロッパを駆け抜けていく。諸国民を一つに縫い合わせるその鉄路は、サン=シモンの夢から始まったのである。

---

[83] 『産業体制論第一部』 t III, 23-24／ (4) 170-171 頁。フランク・マニュエル『サン=シモンの新世界（下巻）』（森博訳、恒星社厚生閣、1975 年）、511 頁参照。

第６章　第二帝政期における〈国民〉の誕生
――ゾラの小説を中心に

はじめに

ボードレールは 1864 年から 2 年間ブリュッセルに滞在した。ナポレオンによってフランスの版図に加えられ、のちに独立したベルギー王国の首府が置かれたブリュッセルは、確かにパリを思わせる活気と華やかさを維持していたが、それでもボードレールはパリを懐かしんだ。その様子をベンヤミンはこう記している。

> 呪わしいブリュッセル滞在のおりのボードレールには、いろいろと不足したものがあったが、彼にとりわけこたえたのは、次のことだった。「飾り窓がひとつもない。想像力を持つ人々が愛する遊歩は、ブリュッセルではできない。見るものが何よりもないし、街灯は使いものにならぬ」。ボードレールは孤独を愛したが、彼が望んだのは群集のなかの孤独だった[1]。

ボードレールの記憶の中にあるパリは、「アウラ」の翳りに満ちた近世都市ではなく、1850 年代初頭に始まった「オスマン化」により近代都市への道を踏み出した直後のパリであった。そのパリに寄せる彼の郷愁はアンビヴァレントである。それはすでに、彼が唾棄する大衆のために設えられた〈産業化〉された空間と化しつつあった。しかしその空間はまた、詩人が必要とする孤独と自由を可能にしてくれるものでもあった。ボードレールは俗物根性を批判することにより自らのスタイルを確立したが、それも実はナポレオンの第一帝政下で上院議長を務めた裕福な父の遺産の恩恵に与ってこそ成り立っていたのである。パリに戻ったボードレールが目にしたのは、第二帝政がその〈産業化〉政策を通じて生み出したナポレオン三世その人をも含む成金たちであり、彼らがオッフェンバック（Jacques Offenbach, 1819-1880）の調べに乗って高級娼婦を伴い遊歩するブールヴァールである。しかしこの拝金主義にまみれた悪趣味でけばけばしい「19 世紀の首都」（ベンヤミン）こそが自分を『悪の華』(*Les Fleurs du mal,* 1857)の詩人にしたことをボードレールは自覚するに

---

[1] ヴァルター・ベンヤミン「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」、『ボードレール他 5 編』（野村修編訳、岩波書店、1998 年）、193 頁。

いたる。芸術は俗物主義と物質主義に寄生せざるを得ない本質的にデカダンなものなのだ。

サン=シモンの夢見た〈産業社会〉は、フランスの産業大国化を目指すナポレオン三世の許に馳せ参じたサン=シモンの門弟たちの手でまがりなりにも実現した。彼らが手がけた産業主義的諸政策、すなわち金融再編と殖産興業、パリの大改造、鉄道網の敷設等のインフラ整備、そして万国博覧会開催のような文化事業は、決定的に不可逆な歴史的変容をフランスにもたらすことになった。だがそれは、単に人々が見るフランスの風景が変わったということには終わらない。ボードレールの逸話を待つまでもなく、この風景の変容は何よりもそれを経験する人間の精神に、人々の知覚の構造や欲望する対象に、大いなる不可逆的変化をもたらしたのである。本章ではそのあらましを、「〔『人間喜劇』で〕バルザックがルイ=フィリップの治世に関して行なったことを、より体系的に第二帝政期に関して行なうべく[2]」エミール・ゾラ(Émile Zola, 1840-1902)が書き上げた全 20 巻の浩瀚な『ルーゴン=マッカール叢書』(*Les Rougon-Macquart*)で確認することにしたい。

１．「精神の空虚」をめぐって――ユイスマンスとゾラ

第三共和政期の作家ユイスマンス(Joris-Karl Huysmans, 1848-1907)は、当初こそゾラに私淑して自然主義的な小説を発表していたが、やがて〈産業社会〉の現実に幻滅し、ボードレールの感化で耽美的でデカダンな作風へと転身した。その間に作家の内面で起こったことは、のちにデカダンスの聖書と呼びならわされるようになる代表作『さかしま』(*À rebours*, 1884)の内容からかなりの程度まで正確に推測できる。

『さかしま』の主人公である貴族の末裔にして耽美主義者のデ・ゼッサントは、内面に抱えた「空虚(vide)」から放蕩と懶惰を繰り返し、それにも疲れるとパリ郊外のフォントネーに家を購い、芸術と骨董に囲まれた隠遁生活を開始する。しかしこのエピクロス主義的快楽主義者の独居――「洗練された隠遁の地、心地よき無人の境、人間的愚かしさの絶えざる氾濫を遠く逃れた、びくとも動かぬ、なまぬるい方舟[3]」――は、はじめから蹉跌を運

---

[2] ミシェル・セール『火、そして霧の中の信号――ゾラ』(寺田光徳訳、法政大学出版局、1988 年)、54 頁。また朝比奈弘治「訳者解説」、エミール・ゾラ『パリの胃袋』(朝比奈弘治訳・解説、藤原書店、2003 年)、444-446 頁参照。

[3] J・K・ユイスマンス『さかしま』(澁澤龍彦訳、河出書房新社、2002 年)、16 頁。

命づけられていた。彼が抱える「空虚」は、その中でかえって深まるばかりであったからである。デ・ゼッサントの生涯は聖書に記されたあの放蕩息子の物語を髣髴とさせるが、反キリスト教的な作品群で名声を博したのちに修道院の扉を叩いたユイスマンス自身の生の経歴と重ね合わせて読むこともできるだろう。だがその人物造型は明らかにボードレールの人となりをモデルにしている。デ・ゼッサントが引きこもる家は、彼が自ら理想とする古代中世世界を模したものだが、物質で埋め尽くされ想像力で欠落を補う瞞着手段をもってはじめて可能になったという意味では、ボードレール的な「人工楽園」の趣が濃厚である。

引きこもりの発端をユイスマンスは次のように説明している。

> 鼻持ちならぬ下司野郎どもの唾棄すべき時代を逃れて暮らしたいという望みが切実になっていくにつれて、彼には、パリの殺風景な家々であくせくはたらく人間どもや、金儲けのために街街をうろつく人間どもの肖像を描いた絵画などは、もう二度と見たくもないという気持ちがいよいよ強くなった。現代生活に対する興味をすっかり失ってしまうと、彼は自分の居室に、嫌悪や恨みの亡霊をみちびき入れないようにしようと決心した。だから彼は、現代や現代の風俗から遠く隔たり、昔の夢や古代の頽廃のなかに浸った、巧緻な繊細な絵画を求めていたのである。精神の快楽と眼の歓びのために、彼はなにか、暗示的な作品を求めていた。つまり、おのれをある未知の世界に投げ込んでくれるような、新しい臆説の跡をあばいて見せてくれるような、また学匠的なヒステリイと、入り組んだ複雑な悪夢と、無頓着な残忍な幻影とによって、神経組織に激動を与えてくれるような、そんな作品を求めていたのである[4]。

整然と並ぶ規格化された住宅街、そこに住まう労働者たち、ビジネスマンが闊歩する街路――要するにあまりに即物的で拝金主義の横行する近代化された都市の風景が、この耽美主義者をいたたまれなくしたのである。一方、デ・ゼッサントが芸術品の数々で作り出した模造の前近代は、聖なるものの痕跡に彼の鋭敏な感受性が深く共鳴すればこそ成立したものであった。しかしこの現世内超越ないし一種の文化的亡命も、彼の「空虚」を埋め合わせ慰めるどころかむしろ強調し、物質的現代への絶望をより深くさせ、彼自身の健康

[4] 同書、75 頁。

を著しく脅かすことにすらなった。

生活を一変しなければならなくなった現在、彼は、できることなら一つの確固たる信仰をつかみ、これを自分の身内にふかく蔵し、魂の内部に鎹でしっかりと止め、これをぐらつかせ抜き取ろうとするすべての観念から、安全に保護するような処置を無理にでも講じておきたいものだと考えた。けれども、彼がそのような信仰を望めば望むほど、精神の空虚はいよいよ大きく拡がり、キリストの訪れはいよいよ遠ざかった[5]。

デ・ゼッサントは苦悶の果てに生と健康を、すなわち官能を渇望しながら、医者の勧めに従ってフォントネーの「人工楽園」を清算し、還俗する。彼の「空虚」を埋めるもの、彼が「信仰」になぞらえて希求した救済は、幻想の美的生活によってはついに与えられなかった。

ユイスマンスの功績が、近代の世俗的生活に反発や嫌悪感をおぼえる人々のための修道院を、現実世界では実現不可能なるがゆえに文学的想像世界の中に建立した点にあることは確かであろう。だがこの作品の『さかしま』というタイトルには、近代における快楽主義の帰趨のような問題には還元できない、それより遥かに長い射程を持った問題が潜んでいる。ユイスマンスをはじめ、同時代人のニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsch, 1844-1900）、ウォルター・ペイター(Walter Horatio Pater, 1839-1894)、オスカー・ワイルド(Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde, 1854-1900)、ピエール・ルイス（Pierre Louÿs, 1870-1925）らの世紀末的・耽美的傾向を持った作家・思想家は、いずれも古代ギリシアの文物を愛好するヘレニストであり、人間に質的な優劣があるのは自然の理であるとする古代人の立場から、より高尚な少数者とより低劣な大衆の差異を人間本性に根ざしたものと信じていた[6]。この前近代的な「自然(ナチュール)=本質」に適った社会がもはや存在しえないこと、近代の迷妄にすぎない人間の平等が「自然=本質」とみなされ、この自然に基づいて社会が構築されるようになったことが、「さかしま」（英訳書では"Against Nature")というタイトルの由来である。つまりそれは、「自然」そのものが原理的に転倒(ア・ルブール)してしまっていることと、その転倒した「自然」をもう一度転倒(ア・ルブール)させることの両方を意味しているのである[7]。それをもってユイスマンスを

[5] 同書、298 頁。
[6] ニーチェ『善悪の彼岸』（木場深定訳、岩波書店、1970 年）、276-279 頁参照。
[7] 同書、284 頁参照。

「反動的」と呼ぶのは皮相な見方であろう。むしろ『さかしま』の著者は、ニーチェが自負を込めていう意味において「反時代的(unzeitgemäß)」であったというべきなのである。

そのニーチェがデモクラシーを、そしてワイルドが小市民生活を軽蔑したように、デ・ゼッサント=ユイスマンスは商業の中に身分の区別も聖俗の違いもなくなって平準化した近代社会の愚劣さを見て取った。「貴族階級は愚行と醜行のうちに解体し、その子々孫々にあらわれる智力減退のうちに滅び去」るか、さもなければ「裁判の泥沼のなかを転げまわり、他の階級と全く異らない醜態をさらけ出し」て「下司ないかさま師」同然となっていた。聖職者階級でさえもが修道院を「薬剤師と酒醸造業者の工場に変」えてしまい、いまや「シトオ教団がチョコレエトや、僧院酒や、小麦粉や、アルニカ酒精浸剤などを」、「マリア会修道士が薬用重燐石酸石灰や、薬用植物のアルコオル浸剤などを、ドミニコ教団の修道士が卒中の特効薬」を販売する有様であった[8]。こうして、

> 家柄の貴族が滅び去って、現在では蓄財の貴族が幅をきかせているのであった。銀行の教王(カリフ)、サンティエ街の専制主義、それに、金銭ずくの偏狭な観念と虚栄心の強い狡猾な本能とに支えられた、商業という圧制が幅をきかせているのであった[9]。

1884 年に発表された『さかしま』はおそらく第二帝政時代を舞台背景としたものであり、その社会風俗の描写は、言うまでもなくサン=シモン主義によって〈産業化〉された当時のフランス社会に対するユイスマンス自身の厳しい審判を伴っている。だが同じ時代を取り上げても、ゾラが『ボヌール・デ・ダム百貨店』(*Au Bonheur des Dames*, 1883)に描いたフランス社会とその風俗は異なる評価を受けている。例えば次の一節を見てみよう。

> それから後は、バッグから果てしなく品物が出てきた。彼女は喜びで顔を赤らめ、新しい品物を取り出すたびに服を脱いでゆくような女の恥じらいを見せて、魅力的で困惑した様子になった。次は三十フランのスペイン産のブロンドレースの婦人用ネクタイ……。シャンティ・レースのヴェール……。
>
> 「それでこれは？」とド・ボーヴ夫人がギピュール・レースの端切れを調べながら尋ねた。

---

[8] ユイスマンス前掲書、296 頁参照。
[9] 同書、301 頁。

「それは布のあいだに挟む細長いレースですのよ……」彼女は答えた「二十六メートルありますわ。メートルあたり一フランなのよ」

「まあ」とブルドレ夫人が驚いて言った。「それをどうなさるおつもりなの」

「わからないわ……でも模様がとても面白かったのよ。」

この瞬間、彼女が目をあげると、目の前に恐怖におののいた夫の姿があった。夫は前よりもさらに青ざめており、その身体全体が、あれほど苦労して稼いだ給料がとめどなく氷解するのに立ち会っている哀れな男の、あきらめきった苦悶をあらわしていた。……。／しかし婦人たちは、レースを手離さなかった。彼女たちはそれに酔っていた。品物は広げられ、手から手へと行きつ戻りつし、彼女たちをその軽やかな糸で結びながら、さらに近づけていった[10]。

物欲に駆られて用もない品物を買い漁る妻と、それを「あきらめきった苦悶」とともに受け入れる夫の様子を描くゾラの筆に、過酷な糾弾の色合いは微塵もない。確かにそれは、真の自然的欲求ではなく、むしろヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）のいう意味での人間的な――「他者の欲望を欲望する」――欲望に発したものであり、百貨店の小ぎれいな店内装飾、気の効いた大量生産の商品を並べた陳列棚、その間をわれ先にひしめき合う客の群れのような、つまりは商業主義と消費主義が醸し出す幻想の豊かさに鼓舞されたものでしかないのであろう。しかしゾラは、〈産業化〉の恩恵である豊かさが庶民生活にもたらした変化がすでに所与の現実となった近代世界を描き出す。百貨店に陳列され人々の購買意欲を煽り立てる品々は、『さかしま』の主人公が高雅な趣味で収集した美的価値の高い芸術・工芸品とは異なり、出所も意匠も多様でおよそ統一性がなく、見てくれだけ豪華な成金趣味のものからプチ・ブル向けの実用的な消耗品まで種々雑多である。

ガイヨン広場の真ん中からこのオリエンタル・サロンが見えたが、それはボーイ達がムーレの指示に従って並べた絨毯と壁布だけで作られていた。まず天井には、赤地に複雑な模様が浮き出しているスミルナの絨毯が張り巡らされている。そして四方からは壁布がぶら下げられているが、そこには緑と黄色と朱色の縞のカラマニアとシリアの壁布や、もっと粗野で手触りが粗く、羊飼いのマントのようなディアルベキールの壁布がある。

---

[10] エミール・ゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店――デパートの誕生』(吉田典子訳・解説、藤原書店、2004 年)、130-131 頁。

それから壁掛けとして使うことのできる絨毯もある。イスパハンやテヘランやケルマンチャの長い絨毯や、シューマカやマドラスのもっと大きな絨毯には、芥子とシュロの奇妙な花が咲き乱れ、夢の庭園の中に解き放たれたファンタジーそのものだ。床にも絨毯が敷き詰められ、分厚い羊毛の山をなしている。中央にはアグラの絨毯が一枚置かれているが、それは白地に薄い青の幅広い縁取りがされた一品で、紫がかった色の、えもいわれぬ想像力のあふれた装飾模様が織り込まれている。それからビロードの光沢を帯びたメッカの絨毯や象徴的な先端部を持つダゲスタンの祈祷用絨毯、花々の咲き乱れたクルディスタンの絨毯と言った素晴らしい品々が、いたるところに拡げられている。そして片隅には、お買い得品の山があり、グルデスやクーラやキルシェールの絨毯が積み上げられて、十五フランから売られている。この豪華なパシャの天幕には肘掛け椅子や長椅子が置かれているが、それらの椅子はラクダ用の袋で作られており、様々な色合いの菱形模様で飾られたものもあれば、素朴な薔薇の花が配されたものもある。トルコ、アラビア、ペルシャ、インドがそこにあった。……この野蛮な芸術の豪華さの下には、オリエントの幻影が漂っていた[11]。

この節操もない多様性、それを求めて自己増殖する旺盛な欲望、活力に溢れる経済活動のすべてが、高踏派ユイスマンスの虚弱な精神には耐えられず、かつて文学の師と仰いだゾラの自然主義から彼を離反せしめた。しかし自分が滅びゆく種族の一員であることはユイスマンス自身も重々承知の上であった。彼が『さかしま』で明らかにしたのは、世に生きるほとんどの人々の「精神の空虚」が第二帝政の基本原理となったサン=シモン主義のもたらす物質的福祉をもって埋め合わされる歴史的現実であったからである。

２．『ルーゴン=マッカール叢書』の自然主義

『ボヌール・デ・ダム百貨店』もまた『ルーゴン=マッカール叢書』の一部をなす作品である。「第二帝政下における一家族の自然的・社会的歴史(*histoire naturelle et sociale d'une famille sous le Second Empire*)」と副題を付したこの長編連作小説は、ある神経症の女が夫ル

[11] 同書、136-137 頁。

ーゴンと間男マッカールとのあいだにそれぞれもうけた子どもと子孫の物語を通じて、第二帝政下のフランス社会を階級横断的に総体として描き出そうとする野心的な文学的実験の試みであった。ゾラの作家としての地位をフランス文壇に確立した自然主義文学の絶頂であるとともに、後年の「全体小説」(野間宏)の嚆矢となったことでも知られている。

文学史上の自然主義は、この世の悪や矛盾を赤裸々に暴き出すというだけでなく、人間理性を信頼せずに、動物的な欲望の支配を擁護し高唱する不道徳なものと理解されがちであり、ゾラ自身も、叢書の一角をなす『居酒屋』(*L'assommoir*, 1877)、『ナナ』(*Nana*, 1879)、『ジェルミナール』(*Germinal*, 1885)に代表される下層階級の生活を描いた作品ではそのような非難を招いている。だが小説に人間の道徳的完成への貢献を期待する文学的理想主義の立場から寄せられる自然主義批判は、人間の精神的諸能力のうち理性に過度の信頼を寄せ、感覚や欲望をもっぱら人間の間に対立をもたらす利己心と結びつけて理解する道徳形而上学的傾向が認められる。理性と感性とを二者択一的な対立関係で捉えようとするかぎり、例えば感覚および知覚に基礎を置きながらも本質的に社会的な性質を有する常識(コモン・センス)や良識(ボン・サンス)のような精神的能力を考慮する余地がないことは、特に解釈学の伝統に棹差す哲学者や文化人類学者が指摘している。「コモン・センス」とは本来、視覚や聴覚のようないわゆる五感を統括する「共通感覚」の意味であり、そこから転じて、ある社会集団の中で明示的に言説化される以前に共有されている理解や判断の体系、すなわち今日の「常識」をあらわすようになった[12]。人間の原初的な感覚と欲望を重視する自然主義文学は、この「コモン・センス」が「常識」となるいわば系統発生的過程をしばしば作品で個体発生的に反復している。ゾラの小説はその代表であり、原初的な感覚と欲望の発露の中に、しばしば種を異にする多様な知覚が交錯し合う「共通感覚」的な要素が覗く。物質と人体の官能的

[12] 哲学的解釈学者のH・G・ガダマーは、「常識ないし良識」は「形而上学という〈夢遊病〉の治療薬」であるだけではなく、「社会の営みに真にふさわしい道徳哲学の基盤」を提供するものだと主張して、次のようにいう。「〔ベルクソンは〕作られた観念を排除し、たえず自己自身から自己をとりもどす知性の内的エネルギーの重視を激しく訴えているが、こうした訴えをフランスでは良識の名においてなしえたのである。たしかにこの概念の内容には当然のことながら感覚との関係がふくまれている。しかし良識が感覚とは別に社会的環境(milieu social)にもかかわっていることも、ベルクソンにとって明らかに疑問の余地のないことであった。他の感覚〔五感〕がわれわれを事物と結びつけるのに対して、ボン・サンスはわれわれがもつ人間相互の関係に関わる。良識は一種の実生活上の才能であるが、天分というよりむしろたえず変化する状況のたえざる新たな調整という意味での、ひとつの恒常的な課題である。つまり、普遍的な諸原理を現実に適用する仕事であり、それによって、正義を実現することである」。H・G・ガダマー『真理と方法Ⅰ』(轡田収ほか訳、法政大学出版局、1986年)、36-37頁。

な交歓(コミュニカシオン)=交換可能性を示唆する次のような箇所を見てみよう。

狭い店のなかには果物が積み重なっていた。……。前の陳列台には、籠のなかに手際よく飾った美しい果物が並び、葉っぱのカーテンの陰になかば隠れたきれいな子どもの顔のように、頬に似た丸みをそれぞれ少しづつ覗かせている。とりわけ見事なのはモモで、赤くなったモントルイユ種は北国の娘のように繊細で明るい肌、南国のモモはプロヴァンス地方の娘のように黄色く日焼けした肌を思わせる。琥珀色の苔のうえに寝かせたアプリコットは、ブルネットの女の首筋の巻き毛のあたりを照らす夕日のような熱気を帯び、一方ひとつひとつ丁寧に並べられたサクランボは、笑みを浮かべた中国女のひどく小さな唇に似ていたが、モンモランシー種は太った女の厚い唇、アングレース種はもっと長くて重々しい唇、ギーニュ種は接吻にやつれて黒ずんだ普通の女の唇、白とバラ色の斑点のあるビガロー種は嬉しさと怒りをこもごも浮かべて笑っている唇を連想させる。……。／
ラ・サリエットはこうした果物に取り囲まれて、あたかも果樹園のなかにいるように、香りに酔いながら暮らしていた。安物の商品は紙を敷いた平籠に積んで目の前においてあったが、そこでは傷のついたサクランボやプラムやイチゴの果汁が台を汚し、熱気のなかに強烈な汁の匂いを立ちのぼらせている。7 月の燃えるような午後などは、まわりに置いたメロンから強い麝香のような蒸気が発散して、頭がくらくらしてくることもあった。そのようなとき、酔っぱらったように肩掛けの下から肌を出し、熟しかけたばかりでまだ春のように新鮮な彼女の身体は思わずかぶりつきたくなるほどで、盗んで口をつけたいという欲望をそそった。ここにある果物に恋の生命や、女体のきめ細かいぬくもりを与えているのは、実は彼女の腕であり、首であり、彼女自身であったのだ[13]。

物質的人体への執拗な関心から生まれたこのエロティックな描写が、単に扇情的でも不道徳でも、また単に「非常識」でもないのは、物質的欲望の秩序がすでに確立された世界を前提としているからにほかならない。つまりゾラは、それが集合的共感覚、すなわち「常識」と化している第二帝政下の社会的現実を忠実に記述しているだけなのである[14]。

ゾラの作品は科学的なイメージが溢れているが、それが〈産業化〉を促進した 19 世紀後

[13] ゾラ「パリの胃袋」、326-328 頁。
[14] ニーチェ前掲書、285-286 頁、また朝比奈前掲書、440-441 頁参照。

半の物理化学の最新の成果の反映であることにミシェル・セールは着目する。それによれば、ゾラの自然主義（ナチュラリスム）は特に熱力学分野での物理学の発展と実証主義的な認識論にもとづく物理学主義とでもいうべきものになっており、自然界における物質の循環過程――エネルギーの保存と形態変化、それに伴うエントロピーの不可逆的増大――を第二帝政期のフランス社会とそこに住まう人びとの生活に重ねることによって、かえって物語に神話的・聖書的な装いを与えることに成功している。

> 分割されていない多義的なこの操作的な語りは、エネルギーとその交換、すなわち征服することを（『プラッサンの征服』）、打ちのめすことを（『居酒屋』）、そして壊滅に至るまでを（『壊滅』）語る。それは金とその流通、すなわち財産（『ルーゴン家の幸運』）、金銭（『金』）を、分捕り競走を（『獲物の分け前』）語る。それは肉体とその健康、すなわち腹（『パリの胃袋』）、野獣性（『獣人』）、発生（『ジェルミナール』）、生きる喜びを（『生きる喜び』）語る。それはあるページの上で（『愛の一ページ』）、あるいは作品の中で（『作品』）、語り方そのものを語る。それはよく見かける集団の組織化（『ボヌール・デ・ダム百貨店』）、エロス（『ナナ』）、夢（『夢』）、を語る。それにこれは医者の科学だ。すべてが混合、すなわち「ごった煮」に、あるいはパスカルという再生へ（『パスカル博士』）と進む[15]。

この指摘は、ゾラが多用する極めて即物的なメタファーと当時の科学および工業の発展との密接不可分な関係を明らかにして興味深い。実際セールもいうように、ゾラの小説には「モーター」や「光」が機械化された産業文明の基調イメージとして頻出し、人間関係と生活そのものがこれらのイメージで構成された空間上で展開されるゲーム、物質の法則による生の組織化の様相を呈している。物欲の殿堂たる百貨店を巨大な「石炭釜」になぞらえた『ボヌール・デ・ダム百貨店』(*Au Bonheur des Dame,* 1883)の次の描写は、その典型であろう。

---

[15] セール前掲書、107 頁。科学性と神話性の共存は、ゾラ作品タイトルにも現れている。例えば「ジェルミナール germinal」とは共和暦で第 7 の月、春の最初の月を表す「芽月」（現行暦で 3 月 21 ないし 22 日から 4 月 19 ないし 20 日）を意味し、その語源となった動詞「germer」は「芽を出す」「発芽する」を意味する（倉方秀憲ほか編著『プチ・ロワイヤル仏和辞典第 4 版』（旺文社、1986 年）、731-732 頁参照）。また「パスカル pascal, pascale」はフランス語の人名を意味する名詞のほか、形容詞で「「paques」（キリスト教の復活祭）の」または「（ユダヤ教の）過越祭の」を意味する（同書、1121 頁参照）。

そのときドゥニーズには、デパートが高圧で作動している機械のように感じられた。その振動は陳列された商品にまで達しているようだ。それはもはや、朝の冷たいショーウィンドーではない。今や、内部の振動によって、熱くなり、震えているように見える。たくさんの人々がウィンドーを眺め、立ち止まった女たちはガラスの前で押し合っている。羨望のために粗暴になった群集である。そして布地類は、この歩道の欲情に感応して、まるで生きているかのようだ。レースたちは身震いして下に落ちかかり、秘密めかした悩ましげなそぶりで、店の奥を隠している。分厚く角張ったラシャ布たちでさえ、息をつき、誘惑するような吐息を吐き出している。一方パルトーは、魂を持ったマネキンの上でますます腰をそらし、ビロードの大きなコートは、生身の肉体の肩にかけられたかのように、胸の鼓動と腰の震えをともなって、柔らかく、なま暖かく膨らんでいる。しかし工場のように燃え上がるデパートの熱気はとりわけ売り場での販売からきており、カウンターの混雑ぶりは壁を隔てていても感じられた。そこでは作動中の機械が絶え間なくごうごうとうなり声を上げ、婦人客たちがかまどの中に押し込まれていた。彼女たちは売り場の前に積み重ねられ、商品の山の下でぼうっとなり、ついでレジに投げやられた。しかもそれは、機械的な正確さで統御され、組織されており、無数の女たちが歯車装置の力と論理の中を通過していくのだった[16]。

また、パリ中央市場に集積された食品とそこに群がる人々の様子をルポルタージュの手法で活写した『パリの胃袋』(*Le Ventre de Paris*, 1873)では、人間と物資とが同じ物理学的基本法則に支配される一つの系(システム)として描かれる。すなわち、「白い縁なし帽や、黒いカラコや、青い作業着の群れが、野菜の山のあいだの狭い通り道にあふれ出していた。まるでそこに田畑が出現して、うなりをあげているかのよう」であり、「小売の八百屋や、屋台の野菜売りや、果物屋などが、買い物をしては急ぎ足に歩いていく」。「キャベツの山のまわりには軍隊の炊事係や修道女が群がり、学校のコックは掘り出し物を求めて」歩き回り、「積み荷はあいかわらず到着しつづけ、野菜がまるで石の山のように荷車から地面に落とされて、多くの波にまた一つの波を付け加え」るのだが、その物資と人の波は「反対側の歩道にまで打ち寄せ」、オスマン化によって整備された「ポン=ヌフ通りの奥からは、荷車の列

[16] ゾラ「ボヌール百貨店」、30-31 頁。

が果てしもなく現れてくる[17]」。ある閉鎖系の中で個々に不規則な運動をしている気体分子が、それでも統計的には速度分布関数にしたがって平均的な運動量を持つと仮定されるように、人間の行動と物資の移動はそれぞれの個物性を失って同一の法則に支配された運動として記述される。社会そのものがよく〈組織〉された力学的な系とみなされているのである。

彼の耳に、今では中央市場から出てゆこうとする車の音が長く響いていた。パリがその200万の住民のために、食物を噛み砕いてやっているのだ。まるで中央にある大きな心臓が激しく脈動して、あらゆる血管に生命の血液を注ぎ込んでいるかのようだった。それぞれの地区の市場へと向かう仲買人の鞭の音から、サラダ菜を籠に入れて一軒一軒売り歩く貧しい女の引きずるような古靴の音にいたるまで、仕入れの喧騒が織りなす轟音は、まさに巨大な顎の音であった[18]。

産業文明のメルクマールが機械化にあるのだとすれば、蒸気機関で駆動し大量の人間と物資を運ぶ鉄道はまさしく文明の勝利を象徴する存在であり、ゾラも怠りなく目配りしている。『獣人』(*La Bête Humaine*, 1890)では、第二帝政期を代表する風景に選ばれた鉄道が「巨大な身体」あるいは「巨人の身体」に擬せられている。

列車はル・アーヴル行きで、超満員だった。……スピードがでていたにもかかわらず、明るく照らされた昇降口のガラス窓からは、満員の車室の様子が見て取れた。乗客がひしめきあって、それぞれの横顔を見せ、……それが次々と現れては、消えていった。なんという人の群れだろう。車両の走る音、機関車の汽笛、電信のカチカチという響き、鐘のカンカン鳴る音を浴びながら、無数の人、また人が通っていく！　それは巨大な身体のようだ。大地に斜めに横たわる巨人の身体だ。頭をパリに、幹線を背骨にし、四肢を支線に広げ、手と足はル・アーヴルや他の終着地に置いている[19]。

身体を精巧な機械と区別せず、人間および人間社会を一個の力学系と見るだけならば、

---

[17] ゾラ「パリの胃袋」、42頁。
[18] 同書、46頁。
[19] エミール・ゾラ『獣人』（寺田光徳訳・解説、藤原書店、2004年）、66頁。

ゾラを待つまでもなく、デカルトから 18 世紀のラ・メトリ（Julien Offray de La Mettrie, 1709-1751）の『人間機械論』(*L'homme machine*, 1747)やドルバック（Paul-Henri Thiry, baron d'Holbach, 1723-1789）の『自然の体系』(*Systeme de la nature*, 1770)に継受されたフランス唯物論の連綿たる系譜があるだろう。自然主義の小説家ゾラにしてはじめてなし得たのは、気体という巨視的な系の時間発展を気体分子の運動という微視的な観点から記述しようとした同時代の物理学者たちのように、〈産業社会〉の成立という前代未聞の歴史的状況をその中で生を送る人々の知覚・欲望・心情から描き切ることである。そこで以下では、ゾラの『ルーゴン=マッカール叢書』の中から『獣人』、『パリの胃袋』、『ボヌール・デ・ダム百貨店』を題材にして、第二帝政期のフランスで何が生じていたのかを確認しよう。

３．鉄道と時間の変容

20 世紀人ベンヤミンにとっての鉄道風景、機関車や鉄路や駅舎はすでにノスタルジアの色に染められており、パリの遊歩道に寄せるボードレールの思いと本質的には同じ性質のものであるが、時の隔たりの大きさゆえにアナクロニズムの影さえ漂う。

> サン=ラザール駅は、さながら汽笛を鳴らし蒸気を吐く公爵夫人、時計はそのまなざし。「現代人にとって駅はまさしく夢の工場である」とジャック・ド・ラクルテル[20]はいう……。確かにその通りである。自動車と飛行機の今の時代では、黒いホールの下にいまも憩っているのは、静かな先祖返りの恐怖だけであり、寝台車を背景にして演じられる別離と再開というお馴染みの喜劇が、プラットフォームを田舎芝居の舞台にしている。古代ギリシアのメロドラマがもう一度われわれの前で演じられているわけである。駅頭でのオルフェウスにエウリュディケー、そしてヘルメス。車掌のヘルメスが信号円盤をかざして、オルフェウスの潤んだまなざしを探しながら、出発の合図をすると、トランクの山の麓にいるエリュディケーはアーチ型の岩の通路を通って地下墓地ならぬ車中へ消えていく。別離の傷痕、それはギリシアの壷に描かれた神々の体の上を走るひび割れの

[20] ジャック・ド・ラクルテル（Jacques de Lacretelle, 1888-1985）はフランスの小説家、アカデミー・フランセーズ会員。邦訳著作に『紅いカシミヤ』、『孤愁：マリ・ボニファの生涯／孤独な女』、『反逆児』などがある。

ように疼く。

だがノスタルジアに曇らされないベンヤミンの鉄道評は、陳腐であるがそれだけに信憑性は高い。鉄道は「各地に散らばった人々を結びつけ[21]」、パリから「心情と想像力の豊かさを撒き散らし」、「すべての人によき言葉をあたえ」、「労働者を激励し、無学な人々を、轍から引き出し」、「旅行者」を地方へと送り出す[22]。「鉄道の発展は、乗客たちを客車内で同胞的関係に導くと同時に、人々の生産活動を過剰に効用させる。……鉄道が歴史上に残した刻印は、それが最初の――そして外洋行路に使われた大きな蒸気船を除いてはおそらく最終的な――大衆をまとめて運ぶ交通機関であるということである。郵便馬車も、自動車も、飛行機も小さなグループの旅行者を運ぶに過ぎない[23]」。大勢の人間が狭いコンパートメント（個室）に詰め込まれ、一時とはいえ人生行路を圧倒的な高速で共にする。そのこと自体が当時の人々にとって目くるめく驚愕の経験であったことは、ベンヤミンが引用する歴史家ガスティノー(Benjamin Gastineau, 1823-1904)の『鉄道の生活』(*La vie en chemin de fer,* 1861)が鮮やかに伝えている。

> 突然乱暴なやりかたで、太陽の上に、美の上に、あなたの思考と心情が通りすがりに楽しんできた自然と生活の無数のタブローの上に、幕が降りる。それは夜であり、死であり、墓場であり、専制政治であり、トンネルである。だが、この暗闇から出ないで、自由と真理の純白の翼を二度と見ようとしない人々のなんと多いことか！……とはいえ、漆黒の円天井に進入するときには、列車の乗客たちが男も女も嫌悪と恐怖の叫びをあげ、トンネルを出るときには歓喜の叫びを発するのを聞くと、……人間という生き物は光と自由に向かうようにできていない、などとあえて主張するものは一人もいなくなる[24]。

旅する人々の感覚に鉄道がもたらした変化を確認するために、旧体制後期のルソーおよび七月革命期のスタンダール（Stendhal, 1783-1842）の作品に描かれた旅の場面と比較しよう。まずルソー『告白』(*Confessions*, 1782-89)の一節にはこうある。

---

[21] ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論 4 巻』（今村仁司・三島憲一ほか編訳、岩波書店、2003 年）、70 頁。
[22] 同書、45 頁。
[23] 同書、80-81 頁。
[24] 同書、46 頁。

わたしは信心家ぶる案内者と、その快活な細君とともに、陽気に旅をつづけた。……。もはや自分のことで心配することは何もない。……そういう重荷をおろして気軽に歩いていった。……。目に見えるものはみな、わたしの未来の幸福を保証してくれるように思われた。家の中には、田舎風の小宴がはられている様子がしのばれ、牧場ではふざけ遊び、川のほとりでは水浴、散歩、釣り、梢にはうまい果実、木陰には逢引の逸楽、山の上には乳やクリームの入った桶、また楽しい閑暇、平和、単純な生活、あてなしにさまよう喜び、そういったものを心に描いた、つまり何を見ても心に何かの楽しい魅力としてうったえないものはない。眺める景色の壮大さ、変化、まことの美しさが、こうした魅力をもっともなものと思わせるのだ。しかも、虚栄心さえそこにはまじっていた[25]。

孤児同然の少年時代のルソーが後に庇護を得ることになるヴァランス夫人を訪ねる旅の途上では、「楽に一日で行けるところだが、急がないで三日をついやし」、別荘を見つけるたびにその窓の下で歌を謳い、庇護者になってくれるかもしれない家人の気をひこうと努めたことが記されている[26]。こうした風景と心理とが呼応しあう徒歩旅行の伝統は、1830年代までは健在だった。以下はスタンダールの『赤と黒』(*Le Rouge et le Noir*, 1830)で、失恋した主人公ジュリアン・ソレルがブザンソンへ向かう様子である。

ジュリアンは、この生きた屍の生気の通っていないような接吻をうけて、いいようもない気持ちにうたれてしまった。数里をゆくあいだ、ほかのことは考えられなかった。彼の心は悲しかった。そうして、山を越えてしまうまで、ヴェリエールの寺の鐘楼が見えるかぎりは、いくたびも後ろをふりかえって見た[27]。

これに対してゾラの描く旅行体験はにべもなく即物的である。『ボヌール・デ・ダム百貨店』の冒頭で、主人公は父母の亡くなった郷里の家を整理し、パリの親類を頼って二人の弟を伴い上京する。

---

[25] ルソー『告白(上)』(桑原武夫訳、岩波書店、1965年)、84-85頁。
[26] 同書、70頁。
[27] スタンダール『赤と黒』(桑原武夫・生島遼一訳、岩波書店、1958年)、268頁。

ドゥニーズはサン=ラザール駅から歩いてきた。二人の弟を連れて、シェルブール発の汽車に乗り、三等車の固いシートで一夜を過ごした後、このパリの駅に到着したのだ。三人とも長旅に疲れ果て、だだっ広いパリの真ん中で、西も東もわからずに茫然として、立ち並ぶ家々を見上げ、四つ辻にくるたびに、若い娘は驚きのあまり棒立ちになった[28]。

シェルブールは英仏海峡に面したコタンタン半島の先端にある都市で、パリから直線距離にして約 300 キロ離れている。だがその距離は「三等車の固いシートで一夜」を過ごした「疲れ」によって表現される。そこにもはや心理を投影するべきルソーやスタンダールの時代の旅程はなく、ニュートン古典力学において３次元位相空間の粒子の運動がその座標と速度から決定論的に説明されるように、あるいは、労働が投下された時間で評定され相応する賃金に換算されるように、疲労度によって均質的かつ定量的に測定される物体の場所的移動（ローカル・モーション）だけがある。だからゾラの文学的技巧は、もっぱらその速度の体感描写に注ぎ込まれるのだ。再び『獣人』を見てみよう。作家は鉄路が幾何学的に張り巡らされた空間の視覚的描写から始めている。

ヨーロッパ橋の下から出てきた三組の複線がちょうど窓の下で広々とした空間を占拠しながら分岐し扇情に展開して、またさらにその鉄の枝が繰り返し無数に分かれてホームのガラス屋根の下へと消える。ホームのアーチ型の屋根の前にある三つの転轍所にはそれぞれ小さな何もない庭が設けられている。レール上にひしめく機関車と車両が重なり合ってぼんやり姿を消していく中で、赤い大きな信号がひとつ、薄日のなかにぽつんとしみをつけていた[29]。

だが物語が佳境に差し掛かると、描写は次第に視覚から聴覚へと重心を移し、より体感性を増していく。「雷」は映像的効果（稲光）と音響的効果（雷鳴）を併せ持つゾラお気に入りの共感覚的メタファーである。

それはパリ発 6 時 30 分発ル・アーヴル行き急行で、そこを 9 時 25 分に通過していく。それは彼が二日ごとに運転する列車でもあった。ジャックは最初トンネルの暗い口が、

[28] ゾラ「ボヌール百貨店」、11 頁。
[29] ゾラ「獣人」、6 頁。

薪が燃えているかまどのように明るくなるのを見た。ついでそこから機関車が大音響に包まれて飛び出てきた。ヘッドライトの丸い大きな目玉がまぶしく光り、その赤い光のせいで野原は切り裂かれ、レールは炎の二重線をとおくまできらめかせた。しかしそれは雷のように一瞬のことで、その後すぐに車両が次々と続いた[30]。

そしてずっと車輪の音がとどろいていた。それはわたしがこれまで聞いたことのないような音で、怒り狂って、咆哮している、ひどく騒がしい声のようだったし、死に際に遠吠えをしている獣たちの悲痛な嘆きのようにも聞こえた。列車は全速力で走り続けた……突然いくつかの明かりが見え、列車の音が駅の建物のあいだに反響した。マロンムだった。すでにルーアンから 10 キロはしってきたのね。……。……列車は走り続け、ディエップ方面への分岐点を通り過ぎた。転轍手がたっているのが見えた。そばに丘がいくつかあって、何人かの男たちがそこから腕を高くあげて、わたしたちを罵っているのがはっきり見えたような気がした。……、あの鉄のきしる音、かな床にハンマーを連打してるようだし、……、わたしそれを雷鳴のとどろきと取り違えそうになったくらいよ[31]。

列車の走行風景の客観的な描写と乗車体験の主観的な描写の違いはあっても、この二つの引用はともに「雷(鳴)のような」という形容を用いることで、かつての徒歩旅行体験では得られるはずもなかった速度感覚を表現することに成功している。そして言うまでもなく、乗客と傍観者とが聴覚体験として共有する鉄道の速度感覚は、鉄道が存在する社会に生きる人々の時間観念そのものを忠実に表現しているのだと考えられる。距離はもはや単なる物理量、すなわち速度と時間の単純積でしかなくなり、文学的関心の対象ではなかった。ゾラが鉄道の速度を体感という主観的なもので表現する技巧に傾注できたのは、客観的な時間の観念が既にこの頃に成立しつつあったからである。

標準時の導入はごく最近のことで、1884 年の国際子午線会議でイギリスのグリニッジ天文台を通る子午線を本初子午線と定めたことにはじまる[32]。それ以前の時間は各地域でそ

---

[30] 同書、83 頁。
[31] 同書、313 頁
[32] Cf. Wolfgang Schivelbusch, *Railway Journey: The Industrialization of Time and Space in the 19th Century* (Berkeley : University of California Press, 1986), pp. 43-44. ヴォルフガング・シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史――19 世紀における空間と時間の工業化』(加藤二郎訳、法政大学出版局、1982 年)、57-59 頁参照。

れぞれが基点とする場所と太陽との距離によって決められていたのであり[33]、国家規模の共時的時間概念すら存在せず、領域国家の中にあっても時間は地域や都市単位で分立していたのである。鉄道の速達性はこの近世的な多元的時間を打ち破った。鉄道は、長距離路線であればあるほど、定時運行、追い越し、複線区間での列車のすれ違い、そして追突・衝突防止のために、統一時間に基づくダイヤグラムを不可避的に求める[34]。標準時間制定以前には、例えば産業封建制の一角を築いた各地の鉄道会社が二つの都市を鉄道で接続しようと考えたとき、どちらの都市の時計が優先されるのかという問題が頻発した[35]。1800年代初頭のイギリスでは、「ロンドンに比べてレディングの時間は4分、ブリッジウォーターの時間は14分早く[36]」、プリマスはロンドンより「20分遅れていた[37]」。1840年に設立された鉄道中央機関が鉄道各社を合併し、そのイニシアチブで時間はグリニッジ標準時に統一されていく。その後1880年にグリニッジ標準時は生活の時間となり、「イギリスの」時間となった[38]。これに比べてフランスにおける時間は第三共和制期でもまだ混乱していた。国際子午線会議でフランスはパリに事実上の本初子午線を置くことを主張したが、賛同が得られなかったためにグリニッジ標準時の採用投票を棄権し、いずれもグリニッジ標準時とはズレた四つの地方時間が共存したままだったのである。フランスの鉄道時間は1891年の法律でパリ公式時間とすることが定められたが[39]、それですらグリニッジ時間から9分21秒早く、しかも乗客に余裕を与えるべく実際の運行はこれより5分遅れでなされ、駅構内の時計はこの列車の時計より5分進められていたという[40]。だがいずれにせよ地方の鉄道利用者は常にパリ時間を意識するよう馴致されていたのであり、『獣人』の舞台となった列車もまた、まがりなりにも実在するこの客観的な時間にもとづいて疾駆していたと考えられる。

シヴェルブシュによれば、19世紀の書物においては鉄道の効用がもっぱら空間の収縮に

---

[33] 桜井邦朋『新版天文学史』（筑摩書房、2007年）、146頁参照。
[34] Cf. Schivelbusch, *op. cit*., pp. 39-41. シュヴェルブシュ前掲書、41-41頁参照。
[35] 角山栄『時計の社会史』（中央公論社、1984年）、200-204頁参照。
[36] Schivelbusch, *op. cit*., p. 43. シュヴェルブシュ前掲書、57頁。
[37] Christian Wolmar, *Blood, Iron & Gold: How The Railways Transformed The World* (London: Atlantic Books, 2010), p.231. クリスティアン・ウォルマー『世界鉄道史――血と鉄と金の世界変革』安原和見・須川綾子訳、河出書房新社、2012年）、341頁。
[38] Cf. Schivelbusch, *op. cit*., p. 44. シュヴェルブシュ前掲書、59頁参照。
[39] 角山前掲書、203頁参照。
[40] スティーヴン・カーン『時間の文化史――時間と空間の文化：1880-1918年（上巻）』（浅野敏夫訳、法政大学出版局、1993年）、16-17頁参照。

求められているが、1839 年の『クォータリ・レヴュ』誌におけるコンスタンチン・ペクールの論説を見ると、鉄道の速度が実は空間の収縮および拡大という二重の現象をもたらしたことがわかるという。鉄道による高速移動は、城壁に象徴される都市の輪郭を消失させ、郊外へとなだらかに連続する生活空間を現出させるとともに、国土全体を首都の郊外へと圧縮する効果があったからである[41]。疾走する鉄道の車窓から見える風景を描写したゾラの文章はそれを証言している。

> セヴリーヌは陰気でない彼の姿を見られることがうれしかったし、自分からも旅行を楽しんで、旅の途中にあるどんな小さな丘やささいな茂みまでわかるようになった。ル・アーヴルからモットヴィルまでは牧草地や平らな畑の連なりで、生け垣で区切られたり、リンゴの木が植えられたりしている。その後ルーアンまでは凹凸の激しい、人気のない地域が続く。ルーアンを過ぎると、セーヌ川の流れを望める。ソットヴィル、オルセル、ポンド=ラ=ロシュで、列車は何度かセーヌ河を渡る。それからセーヌ河はたえず見え隠れしながら、広大な平原を突っ切って広々と流れる。ガイヨンから列車は左手を流れるセーヌからもう離れることはないので、ポプラや柳の植えられた低い河岸にはさまれてゆったりと流れる水をのぞける。列車はなだらかな丘の斜面を走り抜けると、ボニエールでセーヌに別れを告げるが、またロールボワーズ・トンネルを出たロニーで不意に再会する。セーヌ河は愛すべき旅の同伴者のようだ。またさらに三度、到着するまでに列車はセーヌを横切る。マントでは木立に囲まれた教会があり、トリエルでは石膏採掘場が白く点在する。それからポワシーでは町の真ん中を列車が横断する。やがてサン=ジェルマンの緑なす森の壁を縫って、リラの花の溢れ返るコロンブの斜面を抜けると、とうとうパリ郊外だ[42]。

ここにはまさしく近代フランスの原風景があると言ってよい。この描写を読んでありきたりな風景の描出という印象をいだくとしたら、それは読者が既に「視角の工業化」（シュヴェルブシュ）という近代的現象の只中にいるからなのである。国土を経巡る鉄道の旅は、そのまま前近代的な農本社会から近代的な〈産業社会〉へと変わりゆく祖国の発展過程を一望する経験となっていた。それではなぜゾラはその鉄道の「客車」を『獣人』で殺人の

---

[41] Cf. Schivelbusch, *op. cit*., pp. 33-35. シュヴェルブシュ前掲書、49-52 頁参照。
[42] ゾラ「獣人」、357 頁。

現場に選んだのであろうか。

４．客車の経験——見知らぬ同乗者たちの世界

鉄道の旅とそれ以前の徒歩や馬車の旅の相違は、移動速度以外にもある。鉄道が登場する以前の旅は、本質的に旅客の行動の自由が保証されていた。旅人は歩きながら、あるいは馬車に揺られながら、同行者と語り合うもよし、風景に眺め入るもよし、旅の途中で気に入った町々に滞在するのも随意であった[43]。しかし機関車で牽引される鉄道の旅行客には、そのような行動の自己制御の自由や随意性はない。彼らは車窓に次から次へと映し出される風景を見る以外にはなく、機関車の轟音に抗して叫び合うか沈黙を強いられながら、目的地まで否応無く運ばれていくのである。移動中の居住空間の性質も異なる。機関部と「客車」が分離された構造のため、馬車の時代には意思の疎通ができた御者（運転士）と直接のコミュニケーションはもはやできなくなる。現在の鉄道車両は 20 メートル程度の長さがあるが、創成期の鉄道客車は馬車から転用されたごく短いもので、しかも個室形式であった[44]。特に中流・上流の階層にあっては馬車という個人交通の歴史が長かったこともあり、彼ら向けの上等の客車は個人馬車のような贅沢な相対席の個室だった。そうした客車には通路が無く、車掌の往来も、乗客同士の車両間の往来も、列車の走行中は不可能だった。つまり当時の鉄道の個室型客車は、いわば速度によって鍵を掛けられたに等しい孤絶空間だったのである[45]。そのような密室で各地からたまたま乗り合わせた相互にまったく見ず知らずの個人たちがひと時を共にする鉄道旅行は、同時にそれまで人々が経験したことのない匿名性の空間を出現させることになった[46]。

密室的な設えと使いまわしの擬似公共空間という性格とが相まって、鉄道の客車はしばしば犯罪の舞台となった。ポワンソ事件はその典型的な事例である。1860 年の暮れ、ミュ

---

[43] ヘルマン・ヘッセ（Hermann Karl Hesse, 1877-1962）の『クヌルプ』（*Knulp*, 1915）は、こうした旅行の最も伝統的な形態を基礎に組み立てられた小説である。

[44] Cf. Schivelbusch, *op. cit*., pp.99-102. シュヴェルブシュ前掲書、126-130 頁参照。1830 年代のロンドン=バーミンガム線の 1 等車で、幅 6 フィート 6 インチ（1 メートル 98.1 センチ）、長さ 5 フィート 6 インチ（1 メートル 67.6 センチ）、高さ 6 フィート（1 メートル 82.9 センチ）であった。

[45] Cf. *ibid*., p.67, pp. 82-83. シュヴェルブシュ前掲書、93-103 頁参照。Cf. Wolmar, *op. cit*., pp.243-245. ウォルマー前掲書、357-358 頁参照。

[46] 川北稔『イギリス近代史講義』（講談社、2010 年）、39-49、21-23 頁参照。

ールハウゼン発の列車が終着駅のパリに到着した。客車の扉が一つ閉じられたままになっていることを不審に思った駅員が扉を開け、フランス人裁判官ポワンソ氏の血まみれの射殺体を発見した。同様の殺人事件はイギリスでも 1864 年に起こっているが(ブリッグ事件)、いずれも匿名性が際立っている。すなわち、犯人が不明であるだけではなく、被害者も死体を見ただけでは特定できなかったのである。それがポワンソ氏だと判明したのは、遺留品その他の長期にわたる綿密な調査の結果であった[47]。これらの事件は、鉄道を利用する習慣が出来つつあった当時の人々の想像力を様々に刺激したであろう。このポワンソ事件を再現してみせたのがゾラの『獣人』なのである。

『獣人』のあらすじを確認しよう。駅助役のルボーは年若い妻セヴリーヌを迎えて充実した日々を送っていたが、セヴリーヌが養父のグランモラン裁判長の愛人であったことを知って逆上し、妻を共犯に裁判長を殺害する。犯行後のルボーは罪の意識から仕事もままならない憂鬱な日々を送り、酒と賭博に溺れていく。一方、セヴリーヌは犯行が露見する恐怖や不安で心身を消耗し、機関士ジャックとの不倫に憂き身をやつすようになる。しかし、若いジャックは幼いころから女性に対する殺人衝動を持っていた。セヴリーヌを愛することでこの衝動が治まるかに見えたが、セヴリーヌがかつての殺人を告白し、夫ルボーを殺害して駆け落ちする計画を持ちかけると、ジャックの眠っていた殺人衝動が目覚めてしまう（ゾラの『ルーゴン=マッカール叢書』構想の中で、ジャックは計算高いマッカール家の血筋に連なり、彼の殺人衝動はマッカールの娘が結婚した男のアルコール中毒が遺伝し殺人の狂気に転化したものとされている)。

ゾラは作品中に客車という密室空間と近代社会のアナロジーを暗示する多くのエピソードを散りばめている。その一つに冒頭近くの描写がある。セヴリーヌは首尾よく裁判長を誘い出してパリ発ル・アーヴル行きの列車の特別車両に乗り込ませ、夫のルボーは 1 等車に乗った。

> 1 分後には 6 時半を知らせる時計が鳴る。新聞売りが夕刊を売ろうと執拗に呼びかけ、旅客が何人かタバコを吸い終えてしまうためにプラットフォームをまだぶらついていた。やがて全員が列車に乗った。列車の両端から旅客係が次々と扉を閉めていく音が聞こえてきた。ルボーは不愉快になった。空だと思った車室の一角に、多分服喪中だと思われ

[47] Cf. Schivelbusch, *op. cit*., pp. 83-88. シュヴェルブシュ前掲書、103-113 頁参照。

る無言で動かない女の黒い影があったからだ。そこへ車室の扉が開いて、旅客係が　そろって太った男女を送り込んできた。彼らは座席にへたり込んで息を切らせてた。それを見てルボーは実際に怒りの声を上げずには居られないほどだった。まもなく出発だ[48]。

ここでは見知らぬ誰かが居る個室へ入るときに人が感じる戸惑いや不安のような心理的混乱がことさらに強調されているように見えるが、犯罪小説のお膳立てとわかっていても読者は違和感を覚えない。その感覚は、共有されたモードによって人間を同定する共同体生活を失い、見知らぬ人々と踵を接して過ごす機会の多い近代人にお馴染みのものだからである。セヴリーヌはその時の気持ちを愛人のジャックにこう説明する。

わたし車室の片隅で震えてた。それに正面の席に黒い服を着た女が乗っていてすこしも口をきかなかったから、わたしはぞっとした。わたし彼女をまともに見ることすらできなくて、その女がはっきりとわたしたちの頭のなかを読みとってる、わたしたちがこれからどんなことをしようとしているのかを明らかに知り尽くしている、と想像してた……こんなふうにしてパリからルーアンまでの二時間が過ぎたの。わたしはひとこともしゃべらなかったし、眠っているふりをしようと眼をつむってじっとしてたわ。わたしのそばであの人もじっと動かずにいるのが感じられた。わたしはこわかったわ。どんなことをやろうと決めたのか正確にはわからなかったけど、あの人が頭のなかでどんなに恐ろしいことを考えているかしってたから……ああ、なんという旅だったのかしら！様々な思いが渦巻いて溢れ出てくるし、それに入り交じって汽笛の音や車輪の揺れと轟音が響いてきたし！[49]

押し黙った喪服の女性は、見知らぬ他人同士に特有のコミュニケーションのあり方を象徴する。その本質は沈黙と推量である。他人同士はお互いの心の内を「読みとり」合い、お互いの想像の中で形成された人格同士として向き合いながら、それを自ら演じることしかできない。これもまた狭い客車の中でしか起こらない特殊な経験ではなく、近代人が沈潜する日常のモードであるからこそ、客車を舞台にした『獣人』という作品は読者の大きな共感を得たのだともいえる。

---

[48] ゾラ「獣人」、49 頁。
[49] 同書、309-310 頁。

ゾラの考察は殺人者の内面にも及んでいる。殺人妄想が高じて無差別に対象を追って客車に乗り込んだジャックは、同乗者の存在によってあえなく殺人を諦める。殺人対象に選ばれた若く美しい女性は、たまたま乗り込んだ客車で縁故と思しき老婦人と歓談をはじめ、夫とのむつまじい様子や生まれたばかりの赤ん坊について幸福感に包まれながら語り、単なる相席者のジャックにも笑顔を振りまいた。それでもジャックの殺意はまだ失せない。「ジャックの指がナイフの柄をぎゅっと握りしめた。彼は不退転の決心を固めた。「あそこだ、あの場所に行ったら、突き刺してやろう。そら、もうすぐだ。パッシーに行く前のトンネルのなかだ」」。ところが途中駅でジャックの同僚が乗り込んできて、最近起った石炭横流し事件の話題で気勢を削いでしまう。

> そしてこのときから彼のなかですべてが混乱してきて、後になって実際に自分がどうしたのか正確な事実を思い出すことができなかった。笑い声が続き、幸せそうな表情が輝いていたので、彼はそれに浸されて、気力も萎えてしまったようだった。おそらくオトゥーユまで二人の女たちと一緒に行ったのだろう。ただ彼女たちがそこで降りたのかどうか彼には覚えがなかった。最終的に彼自身はセーヌの河岸に立っていた。しかしどこをどうして行ったかわからなかった。それからひどくはっきりとその感覚を覚えていることがある。それは袖のなかで握りしめていたナイフを土手の高いところから放り投げたことだった[50]。

ジャックに殺人を思いとどまらせたのは、道徳的良心の発露でも他者の説得を受け入れる理性でも、またもちろん神の声でもない[51]。それは単なる偶然(hasard)であり、たまたま耳に入った女性の話が幸せそうだったから、あるいはたまたま知り合いに出くわしてしまったからでしかなかった。ジャックの潜在的殺人者という性格付けには確かに遺伝学を典型とする決定論的「科学」が応用されているが、偶然が重要な役割を果たすこの場面で援用されているのは、19 世紀に急速な発展を見た統計学的科学である[52]。巨視的にはエント

---

[50] 同書、331 頁。

[51] H・ミットランによれば、ゾラは「科学者ないし予審判事の論理」で書く作家である。Cf. Henri Mitterand, *Zola et le naturalisme*, Que sais-je ? (Paris : Presses universitaires de France, 2002), p.65. しかし『獣人』でゾラはもっぱら「科学者」の視点に立っており、客車内の殺人事件を審く意図をそもそも持っていない。

[52] セール前掲書、14、408 頁参照。

ロピー最大に向かう系の中で、個々に不規則に運動している気体分子の速度が理論上は速度分布関数によって平均化できても、例外的な分子の衝突は実在し、それがごく僅かな確率で安定した非平衡状態を形成したり、稀に系全体のエントロピーを減少させたりすることもある。誤差・偏差として統計上処理されてしまう極小の偶然からこの宇宙の中に生命が生じた可能性が統計物理学者のボルツマン(Ludwig Eduard Boltzmann, 1844-1906)によって指摘され、ポアンカレ(Jules-Henri Poincaré, 1854-1912)やデュルケム(Émile Durkheim, 1858-1917)らに多大な影響を与えている[53]。ゾラはこれら同時代の科学思想の知見を積極的に自然主義小説に活用した。『獣人』の舞台となる鉄道の客車が当時の社会に重ねて描かれているという解釈が正しいとすれば、ゾラは第二帝政下で緒に就いたフランス〈産業社会〉を決定論的法則に支配された単純な力学=機械論系としてではなく、偶然性を取り込んだ複雑系として見ていたとも言えることになるだろう。

推理小説や一般に犯罪をテーマとした文学作品が誕生する経緯についても様々な考え方がありうるが、近代社会の到来が機縁となって発生した諸問題が作家の興味を惹いたとする点で、おおよその合意があるだろう[54]。例えばアーサー・コナン・ドイル(Sir Arthur Conan Doyle, 1859-1930)が生み出したシャーロック・ホームズは、資本主義の高度な発展に伴い階級分化した 19 世紀末の現実を反映した犯罪を暴くが、諮問探偵というホームズの職業もまた〈産業社会〉の所産であり、新聞と鉄道と電信によって成り立っている。だがゾラの『獣人』との関連を示して興味深いのは、『青列車の秘密』(*The Mystery of the Blue Train,* 1928)、『オリエント急行殺人事件』(*Murder on the Orient Express,* 1934)、『雲をつかむ死』(*Death in the Clouds,* 1935)、『パディントン発 4 時 50 分』(*4.50 from Paddington,* 1957)等の多くの作品で客車という空間を犯罪の舞台に設定したアガサ・クリスティ(Dame Agatha Mary Clarissa Christie, 1890-1976)である。老婦人マープルを探偵役に据えた一連の作品群の舞台は農村だが、その農村は定住した住民だけからなる地縁・血縁で結びついたかつての共同体ではもはやなく、近代化の波に洗われつつある。

---

[53] 伊藤邦武『フランス認識論における非決定論の研究』(晃洋書房、2018 年)、参照。

[54] ベンヤミンの解釈も例外ではない。「室内は単に私人の宇宙であるばかりでなく、またその保護ケースでもある。住むということは、痕跡を留めることである。室内ではその痕跡が強調される。覆いやカバー類、容器やケース類がふんだんに考案され、そこに日常ありきたりの実用品の痕跡が残る。居住者の痕跡も室内に残る。この痕跡を追跡する推理小説も生まれてくる。『家具の哲学』と幾編もの推理短編でポーは室内の最初の観相家であることを実証している。最初の推理小説の犯人は、上流紳士でもなければ無頼漢でもなく、市民層の私人である」(ヴァルター・ベンヤミン「パリ――19 世紀の首都〔ドイツ語草稿〕」、『パサージュ論 1』、20-21 頁)。

15 年も前だったら、誰だって住んでいる人をよく知っていましたわ。大邸宅に住んでいたバントリイ家、それにハートネル家、プライス・リドレイ家、それからウェザビイ家――これらの家の人たちの父母や祖父母、もしくは叔父叔母は……以前からからここに住んでいたのですよ。かりに誰かが、そこに住むために新しく移ってくるのだったら、紹介状を持ってくるか、その土地の人と同じ連隊や船にいたという人ばかりでした。もし誰かが新しく――ほんとに見ず知らずで――縁もゆかりもなく移ってきたならば、追いだされてしまいますわ――土地の人はみんな、怪しんでその人のことをあれこれ知りたがるでしょうし、よく知るまでは安心しなかったものですよ。／だけど、もうそんなわけにはまいりません。村という村、小さな地方の町という町は、移ってきたばかりの人や、なんの縁故もなしにやって来て、住みついた人たちでいっぱいですからね[55]。

先祖伝来の役割分担のような「アウラ」に包まれた関係性のない暮らしは、言葉すなわち「騙り」のみを手がかりとしてお互いをその都度同定し合う生活である。「住んでいる人たちときたら移ってきた人たちばかりで――この人たちについてわたしたちが知っていること」は、「その当人自身でいっていることばかり」なのである。

ほんとにわからないのだ。人々の外見と人柄は、配給手帳と身分証――写真も指紋もついていない、ただナンバーが付されていて要領よく記入されている身分証によって裏付けられているにすぎないのだ。骨を折りさえしたら誰だって、適当な身分証明書ぐらいは手に入れることができるのだ。そのためもあって、これまでイギリスの田園生活をつないでいた微妙なつながりがばらばらになってしまったのだ。町に住んでいる人たちは誰一人、近所の人のことを知ろうとは思わない。田舎でさえ近所の人を知ろうとは思わなくなっているのだ――知ろうと思えばできないこともないのだが[56]。

人間がその「語り=騙り」で額面通りに受け取られ、その背後にあるはずの本人性が不問とされる状態、人々がその記号性ゆえに匿名化した状態、それがクリスティによれば近代

---

[55] Agatha Christie, *A Murder is Announced*, (paperback edition, London : HarperCollins, 2016), pp. 132-133. アガサ・クリスティ『予告殺人』田村隆一訳、早川書房、2003 年）211 頁。
[56] *Ibid*., pp. 133-134. 同書、212-213 頁。

社会の実相であり、すなわち犯罪小説を生み出す土壌なのである。そして鉄道は、人々を共同体世界の「アウラ」を纏った諸関係から切り離し、記号として――〈産業社会〉の中で規定され期待される役割を果たす交換可能な、むしろ等しく無価値な労働力商品として――振舞うことを強制する都市へと運び去ると同時に、そのような新しい生のモードを身につけた人間を運び込むことによって、伝統的世界を内部から解体する。ゾラの小説で鉄道が近代生活の縮図として描かれたのもそのためである。

しかし、失われつつある伝統的共同体へのノスタルジアなどゾラには無縁であった。鉄道が人々を連れて行く先には、固い絆も、各自の自明の存在理由も、「アウラ」を放つ居心地の良い暗がりもなく、ただ過酷な労働と、顔のない記号の群れと、相互の無関心が待ち受けているだけであるのかもしれない。だがそこには何よりも活力が、停滞した共同体にはないエネルギーの奔流があるのだ。気体中の分子はそれぞれに勝手な振る舞いをしながら、それでも物理系としては一定の秩序を保っている。百貨店は客の欲望で「石炭窯」のように赤熱している。中央市場は「胃袋」のように人々と物資を飲み込んでは吐き出している。そして社会はまるで機関車に引かれた客車のように、内部で時に悲惨な殺人事件が起こっているのも知らぬげに驀進し続けているのである。

５．〈産業化〉としての国民化

列車内で起こる陰惨な殺人事件を描いた『獣人』は全体として暗鬱なトーンで貫かれているが、その中にゾラはときおり穏やかで明るく微笑ましいシーンを挿入している。次の場面はその典型として記憶に残るものであろう。

> それから彼女はサーディンにかぶりついて、むさぼるように食べた。マントでロールパンをたべたけど、はるか昔のことのようだわ！　パリにいよいよ着くと思ったら、陶然としてしまった。街を買い物して歩く幸せで、身震いがした。それからボン・マルシェで買い物をしたけど、その熱気がまだおさまらない。毎年春になると、彼女は一度に冬の間の貯金を使い果たして、パリですべてを買いたがった。彼女の言い分では、それで旅費を節約しているのだそうだ。それから彼女は食べ続けるかたわら、話をやめることはなかった。最後に、すこし恐縮気味に顔を赤らめながら、彼女は使ってしまった合計額

を白状した。300 フラン以上だと。

……。

彼は笑うことにした。それほど彼女は喜びに包まれ、当惑して哀願するような様子を見せて、かわいかったからだ。それに、部屋の奥で急ごしらえの食事をすることはすばらしい魅力だった。ここなら二人きりだし、レストランよりもずっと快適だ。彼女はふだんは水しか飲まないのに、つられて白ワインのグラスを知らずに空けている[57]。

明るく豊かなパリを夢見ながら、旺盛な食欲と消費欲が満たされるささやかな幸福に酔う彼らは、以前貴族であったわけでもないし、また産業ブルジョワに成り上がったわけでもない、紛れもないただの庶民である。第二帝政下の〈産業社会〉は、革命の惨禍とそれに続く政治的騒乱、あるいはそれに伴うインフレーションのような経済的混迷から人々を解放し、庶民がまっとうな生活を送り、職業的矜持を維持し、愛を囁きあうことができるような社会を実現していた。その安定と豊かさは、ラディカルな政治的変革を一途に求めてきた者ですらも籠絡するほど魅力的であったようである。『パリの胃袋』の主人公で、精肉店を営む弟夫妻のもとに貧困と飢餓の流刑地から逃亡して身を寄せる共和主義者フロランは、義妹のリザ(あのマッカール家の出と設定されている)に中央市場での魚の検査官の仕事を斡旋される。彼は逡巡したが、体制への憎悪も庶民的な幸せの前に懐柔され、この仕事を引き受けることになる。

〔フロランは〕河岸に沿って長い散歩をした。しかし昼食のときにふたたびリザの溶けるような甘さにつかまってしまった。彼女はまた魚の検査官の仕事をした……。彼は山盛りの皿をまえにして、食堂の敬虔なまでの清潔さにわれしらず心を奪われながら、話を聞いていた。床に置いた敷物が足に柔らかく、銅の吊り証明の光沢といい、壁紙や白オーク材の家具の柔らかな黄色といい、安楽な暮らしのまっとうさという感情を彼に送り込んでくるようで、そのために彼の真偽の観念は曖昧になった。……、こういう場所で片意地な恨みをあけすけに述べたてるのが、なんだか悪趣味に思えて仕方なかった。リザは怒らなかった。それどころか例の美しい微笑みを浮かべたので、フロランは昨日むっとした顔を見せられたときよりも、もっと居心地が悪かった。夕食のときにはもっ

[57] ゾラ「獣人」、14-15 頁。

ぱら、店の全員が総出で働く冬の大調理の話題ばかりだった[58]。

1894 年のドレフュス事件に際し、知識人たちの先頭に立ってフランス自由主義を擁護したゾラを知る後代の読者にとっては、もちろんこの場面も、安寧に耽る第二帝政下のフランス社会への糾弾以外のなにものも表さないのであろう。そして確かにゾラ自身も、〈産業社会〉の恩恵に与ることなく、むしろそれが胚胎する矛盾を体現するかのような社会の最底辺に生きる人々の悲惨な境遇を『ジェルミナール』その他の作品で告発した[59]。しかしそれだけにゾラの小説は、この時代の政治と経済についての最も信頼に足る――少なくともマルクスの考察よりは正確な――歴史的証言になるのである。特に 1858 年から 59 年に時代を設定した『パリの胃袋』には、第二帝政とその〈産業化〉政策をめぐる当時の人々の偽らざる心情が忠実に記録されていると考えられる。ある登場人物の次のような台詞はその好例である。

それはね、まっとうな人間の政治論ですよ……、商売が上手くいって、静かにご飯が食べられて、鉄砲の音で目を覚まされずに眠れるなら、わたしは政府をありがたいと思います……48 年のときは、ひどいものだったでしょ？　あの立派なグラデル叔父さんが、あのときの帳簿を見せてくれたじゃないの。6,000 フラン以上も損したのよ……今は帝国になったけれど、なにもかもうまくいって、物もよく売れてるわ。そうじゃないとは言わせませんよ……それなのに、なにをしたいっていうの？　みんなを撃ち殺したら、なにかもっといいことでもあるの？
……。
一文無しの人を喜ばせようと思ったら、自分が食べられなくなるわ……たしかにわたしたちにはいいご時世よ。商売を繁盛させてくれる政府を支持するのは当然でしょ[60]。

これをブルジョワ的利己主義やプチ・ブル的日和見主義と断じるのはたやすいことである。だが、ブランキ（Louis Auguste Blanqui, 1805-1881）、プルードン、ルイ・ブラン（Louis Blanc, 1811-1882）らが主導してブルジョワ階級からプロレタリア階級へと主体を転じ、マ

[58] ゾラ「パリの胃袋」、119 頁。
[59] Cf. André Marc Vial, *Germinal et le* “*Socialisme*” *de Zola* (Paris : Éditions sociales, 1975).
[60] ゾラ「パリの胃袋」、230-231 頁。

ルクスに社会主義革命の前哨と評された 1848 年の二月革命は、フランス全土に極度の経済的混乱をもたらした。その騒擾への不安と恐怖の記憶も生々しい人々には、混乱に乗じて権力を掌握したルイ・ナポレオンと、混乱を収拾したその産業化政策の提供する物質的福祉は救い以外のなにものでもなく、それ自体が革命と思えるほどだったのである。救い主が「君主」や「皇帝」を名乗る人物であったことは歴史の皮肉のようにも見えるが、革命における政治的変革と経済的変革の同時性・不可分性を強調するマルクス主義の視点をここに持ち込むのは不適切であろう。サン=シモン主義的な観点からすれば、権力を絶対君主から人民の手に奪い返す政治革命は 1789 年の革命により原則としてすでに完遂されていたのであり、政治的変革に経済的変革が伴わなかったフランス革命の偏頗性こそが、階級間および地方間の貧富格差、労働者の生活の劣悪な衛生状態、無知と犯罪のような 19 世紀前半のフランス社会に蔓延した病弊の元凶なのである。その一掃に尽くした「産業君主」ナポレオン三世率いる政府の偉業を称える庶民の保身の術と見えるものですら、善政には恭順して批判を慎む健全な政治的無関心に近いものがある。

時代の波に飲み込まれ体制に順応してしまった共和主義者の主人公には、過酷な審判が待っていた。1851 年のクーデターに加わって捕らえられ脱獄した前科があるフロランは、過去を暴かれ、義妹の手で警察に反逆者として密告されるのである。高潔な知識人フロランの理想主義も、リザが体現する母性や女性性という自然、したたかで動物的な生命力の前に屈していく。これが『パリの胃袋』の末尾である。

> 右手には美人のラ・ノルマンドが、今では美人のルビーグル夫人と呼ばれるようになって、自分の店の戸口に立っていた。夫のルビーグル氏は、政府への多大な貢献のおかげで、居酒屋にタバコ屋を付け加えるという長年あたためてきた夢をついに実現していた。絹の服を着て髪を縮らせ、これからカウンターに就こうとしている美人のルビーグル夫人は、彼の目から見ても惚れ惚れとする姿だった。
>
> ……。
>
> 左手には美人のリザが、シャルキュトリの店先に立って、扉の幅いっぱいを占めていた。彼女の前掛けがこれほど白かったことはなく、その安定した肉、そのバラ色の顔が、これほど滑らかに撫でつけた髪で縁取られていたこともなかった。……。それは……、完璧な幸福であった。……。ぽってりした両手は前掛けのしたに埋もれ、幸福が向こうからやってくるのを確信するあまり、一日の幸福を掴み取ろうと差し出されることさえ

ないのだ。……。シャルキュトリはまたかつての健康を、脂ぎった健康を汗のようにしみ出させていた。ちらりと見える脂身の帯も、大理石の壁際にぶら下がっている豚の半身も、腹のように丸々として、腹の大勝利を物語り、一方でリザは堂々とした身体つきでじっと動かず、大食漢の大きな目で中央市場に朝の挨拶を投げかけていた。

それからふたりの女は互いに身体をかがめた。美人のルビーグル夫人と、美人のクニュ夫人〔リザ〕は、親しげな挨拶を交わした。

そして昨日もきっと夕食を食いはぐれたに違いないクロードは、こんなにも健康そうで、こんなにも申し分なく、太い胸元を見せているふたりの女を見てかっとなり、ベルトをきゅっと締め上げると、腹立ちまぎれの声で唸った。

「まっとうな奴らというのは、なんて悪党なんだ！[61]」

クロードの呪詛に、政治を忘れて経済に狂奔するプチ・ブルジョワ的メンタリティへの作家の批判が託されているのは確かだろう[62]。しかし『パリの胃袋』を時代の証言として読む者には、それも「本物の上流階級でないかわりに、上流階級が苦しんでいた古い、わずらわしい、封建的桎梏をも、完全に免れ[63]」て物質的な幸福を謳歌する庶民生活のルポルタージュに見える。そもそもゾラが文学史上はじめて庶民生活を中心とした作品群を書くことができたのは、第二帝政がサン=シモン主義に導かれながら実現した〈産業社会〉により庶民という新しい階層が生み出されたから、そしてその庶民が一切の旧特権層――封建的貴族身分のみならず、ユイスマンスその人をも含む自然的優秀者を自称する少数者たち――をその記憶もろとも圧倒して、いまやフランスという国家の屋台骨を支える基体にして主体、その内燃機関（エンジン）にして推進力（プロペラ）、すなわち〈国民〉となったからに他ならない。流行品を物色する彼らでごった返す百貨店、彼らがそぞろ歩き馬車を走らせるパリの新道、彼らが商いの声を張り上げる中央市場、彼らが真っ黒になって働く工場と鉱山、そして彼らを詰め込み国土を縦横無尽に駆け巡る鉄道……。第二帝政下の庶民の生活を限なく即物的に記録したゾラの自然主義作品は、まさしくフランスにおける〈国民〉の誕生を告げる「国民文学」となったのである。

---

[61] 同書、432-433 頁。

[62] ゾラは第二帝政末期の 1869 年頃から急進的左翼主義への傾斜を深めていったという。Cf. Henri Mitterand, *Zola journaliste: De l'Affaire Manet à l'Affaire Dreyfus* (Paris: A. Colin, 1962), p.115.

[63] 三島前掲書、79 頁。

おわりに

ベンヤミンは、サン=シモン主義者の新聞『オルガニザトゥール』からミシェル・シュヴァリエのものとされる一節を共感をこめて引用した。

> 詩人たちよ！　諸君は目をもちながら、見ていない。耳をもちながら聞いていない。あの偉大な事柄が諸君の目の前で起っているのに、諸君がわれわれに提供するのは戦争の歌なのだ！……この血の讃歌、残虐な呪いが表しているのは、祖国の危機ではなくて、リベラルな詩の無力さである。戦争や闘争あるいは嘆きのほかにはインスピレーションを得られない詩だ[64]。

シュヴァリエがいいたいのは、革命歌「ラ・マルセイエーズ」のように血まみれの旗や妻子の喉を掻き切る残虐な敵のイメージで闘争気分を煽り、人々に武器をとらせるばかりが芸術の存在理由ではないということである。すべての人が基本的ニーズを満たされ、平和と安全を確保され、ささやかながらも幸福を享受できるようになったということ、つまりいま眼前に進行中の〈国民〉の創生という偉業を寿ぐ歌を、詩人はいまや歌うべきなのだ。そしてボードレールもこの意見に条件付きで賛同したのであった。そもそも革命の最中に詩は存在することすら許されず、そのつぶやきは高揚した民衆の怒号にかき消されてしまうだろう。だが国民生活の喧騒、俗物性、低俗性、画一性は、それを侮蔑し、それに背を向ける芸術家に孤独と自由を与えた。国民生活こそがデカダンな詩人の生息環境となるという逆説はここでも当てはまる。

もちろん、サン=シモン主義の基本理念に導かれた第二帝政の〈産業社会〉化政策は、利己心に凝り固まったプチ・ブル的精神を涵養しただけではなかった。それは伝統的共同体の解体により居所を失った人間に〈産業社会〉の中で果たすべき各人の職能を与え、人々が貴賤の別なく平等に享受できる均質的な快楽と、安価で手に入るささやかな幸福とを提供した。性急な政治革命の熱狂の陰で置き去りにされた近代国家の責務、すなわち生存の

---

[64] ベンヤミン「パサージュ論 4 巻」、33 頁。

ための基本的ニーズを満たすという課題を、「産業君主」の手で遂行した。フランスにおける「国民国家状況」という意味でのナショナリズムは、まさしくサン=シモン主義に教導された第二帝政に産声を上げたのである。

もちろんサン=シモン主義の与り知らない事柄もあった。ゾラは『獣人』の末尾に 1870 年の普仏戦争で出征する兵士たちが列車に乗り込む様子を描いている。

> 6 時ごろ出発する予定だった列車は遅れた。家畜用車両の羊のように兵士を乗せたときには、すでに夜のとばりが降りていた。ベンチ代わりに板を打ち付けただけで、兵士たちは分隊ごとにそのなかに詰め込まれ、車両は想像を超えたすし詰め状態だった。そのため彼らは互いの上に座ったり、何人かは立ったままで、腕を動かせないほど体を寄せ合っていた。……。彼らはすでに出発の狼狽でぐったり疲れていた。しかしブランデーが配られたり、大半が近所の酒屋に駆け込んだりしたから、顔を真っ赤にし、目をむき出して、ほてりと粗暴さを陽気に発散させていた。やがて列車が揺れて駅を出ると、彼らは歌いはじめた。／
> ……。／
> 給水のために指定された地点をのぞいて、どこにも停車せずに一気にパリまで突っ走る予定だ。家畜のような人の群れをあふれるほど積み込んだ 18 両の貨物が、巨大なかたまりとなって、たえずうなり声を上げながら、暗い野原を横断していった。そして大量虐殺へと運ばれていくこれらの人間たちは声を限りに歌って、歌いまくった。そのどよめきは高く響きわたり、車輪の音をしのぐほどだった[65]。

軍用臨時列車の車窓に映っているはずの近代化された祖国の風景を、兵士たちはもはや見ていない。彼らはすし詰めの貨車で出征する憂さ晴らしに酒に酔い、ドンちゃん騒ぎをしている。運転手と機関士は取っ組み合いのけんかの末に、二人とも転落して死んでしまう。運転士を欠いたまま兵士と貨物を満載して暴走する列車が、いずれ悲惨な衝突事故を起こすことを予期させて小説は幕を降ろす。

ここでゾラは、揺籃期の国民国家の一エピソードを語りながら、自分でも気づかないうちにその不穏な未来までも予見していたのだとも言える。彼ら出征兵士もまたフランス革

---

[65] ゾラ「獣人」、504-506 頁。

命期に創設された常備軍のために徴兵された〈国民〉であり、それが〈産業社会〉の申し子たる鉄道に詰め込まれ、目的地がどこだかもわからず運び去られていく。酩酊した兵士たちは、物質的に満たされた〈産業社会〉の安寧の中でまどろむ〈国民〉の象徴でもあるだろう。車窓に発展する祖国の姿をパノラマ化して見せ、庶民の夢を乗せて華やかな首都を目指した鉄道は、同時に、誰のものとも知れない号令一下、転轍機や信号の操作ひとつで人々をどこにでも自由自在に送り込み、「祖国のために死ぬこと」(カントロヴィッチ)をすら可能にしたのである。

結　論

国民国家はどのようにして成立したのか？　本研究を貫くのは、東西両陣営の国際覇権をめぐる争いに翻弄されたナショナリズム研究が自明視することによって実は無視してきたこの問いである。フランス革命が起源となったことは動かしようのない歴史的事実である。だがヨーロッパの近代市民革命は「共和国」の理念に燃えさかったはずなのに、なぜその灰の中から「国民国家」が現れたのであろうか？　この謎を解く鍵を握っているのはサン=シモン主義であるという仮定に立ち、本研究は次のように論じてきた。

われわれは現代のナショナリズム言説の中でも〈国民〉を本質的に人工物と見る立場に着目することから始めた。フランス革命とともに産声をあげた〈国民〉は近代国家の「民主化」という歴史的課題を達成したかに見えたが、近代社会が抱える巨大な人口を扶養するという使命は「産業化」を待ってはじめて果たされる。各国の〈産業社会〉化を通じて全ヨーロッパ規模の普遍的協同社会を構想した「ユートピア社会主義者」サン=シモンが、ナショナリズムの文脈において今日再評価されるべき理由はそこにある(第Ⅰ部第１章)。

サン=シモンはフランス革命を社会契約論に遡って批判的に検討し、人々の物質的境遇を改善することなしに公共空間を開放した偏頗な革命が、その後に続くフランス社会の暴力的な状況を現出させたと診断した。政治革命の影で置き去りにされた経済革命によりフランス革命を完遂するという思想史的課題自体はマルクス主義と共通するものだが、マルクス主義の「科学的社会主義」が「階級なき社会」の実現を目指したのとは異なり、サン=シモン主義はフランスの集産主義の伝統と啓蒙合理主義とを糾合することによって、諸階級間の協調に基づく〈産業社会〉こそが歴史の中で実現可能なユートピアであると主張する(第Ⅰ部第２章)。

サン=シモンの構想する〈産業社会〉とは、人間生活の物質的基盤の生産と労働の組織化にかかわる狭義の経済から、道徳や精神のようなモラルの領域までを包摂した広義の「エコノミー」である。それは人間を因習的な身分制秩序から解き放って〈産業者〉を構成する社会階級として再組織し、科学者・商工業者・労働者にそれぞれの職能を発揮させる政治・経済体制にほかならない。そして今日のわれわれが「国民国家」と呼び習わしているのは、まさしくサン=シモンがヨーロッパ普遍的協同社会の同型単位(モジュール)と位置づけたこの体

制である（第Ⅰ部第３章および小結）。

サン=シモンの夢見たユートピアは、師の思想の多様な側面をそれぞれに受け継ぐアンファンタン、シュヴァリエ、ペレール兄弟らサン=シモン主義者たちがナポレオン三世に登用されることにより実現に向かった。第二帝政期のフランスは、思想が地上の統治者に庇護者を見いだし現実化される稀有な時代となったのである。それがナポレオン三世という紛れもない君主の後ろ盾があってはじめて可能になったという事実も、フランスの近代化=〈産業社会〉化にサン=シモン主義が果たした役割の歴史的意義を減じるものではない（第Ⅱ部第４章）。

万人が生存に必要な資源を確保される〈産業社会〉の実現に向け、サン=シモン主義者たちは第二帝政下で金融界の近代的再編成、全国規模の鉄道網の整備、首都パリの大改造などの産業化政策を推進した。ナポレオン三世の肝煎で二度にわたり開催されたパリ万国博覧会も、〈産業者〉階級を創造するために人間本性そのものを改造する装置であり、フランスに〈産業社会〉を建設する工程の最終段階に位置づけられるものであったといえる（第Ⅱ部第５章）。

ゾラの自然主義文学が描く第二帝政下の生活は、サン=シモン主義運動により「国民国家状況」が出現したことを証している。そこに活写された庶民の生命力に溢れる活動は、産業化政策がもたらした物質的福祉が人間と物質の交歓（コミュニカシオン）=交換を可能ならしめ、近代社会に伴う生の無意味化や疎外感を十分に贖いうるものですらあったことを示している（第Ⅱ部第６章）。

サン=シモン主義とナショナリズムの関連が主題的に論じられにくいのは、サン=シモン主義の思想と実践が〈国民〉および国民国家をいわば意図せざる結果として創出したからである。サン=シモンの著作にも、その薫陶を受けた弟子たちの著作にも、「国民国家」なる名辞は出てこない。サン=シモンが自らの思想的課題と定めたのは、政治革命が先行して経済革命が同道しなかったフランス革命の偏頗性（ヨーロッパ各地で 1848 年に起こったプロト・プロレタリア革命運動はそれを証拠立てている）を正し、いまだ貧困に喘ぐ民衆に将来の共和国の住民たるにふさわしい生活環境を与えることであった。サン=シモンの著作においてこの〈産業社会〉の構想が近代社会契約論の批判と同時に現れることは、彼が革命の成否をはかる基準として、自由と公共空間の創設（ハンナ・アーレント）のみならず、

その空間において万人が自由を実際に享受するために必要な生活の物質的条件の確立という点にも見ていた確かな証左である。その実現に向けてサン=シモンが動員したリソースは集産主義の政治的伝統やフィジオロジーの思想的遺産など実に多岐にわたるが、いずれも直接にナショナリズムとかかわるものではなかった。またそれらの総合からヨーロッパ大の普遍的協同社会を夢想したサン=シモンはもとより、師の夢を「地中海圏構想」によって具体化しようとしたシュヴァリエにとっても、国民国家の形成はおろかフランスの〈産業社会〉化ですら通過点でしかなかったといっても過言ではない。それでも、その一里塚にすぎない各国の〈産業社会〉化が、フランスを国民国家に向けて確実に一歩踏み出させたのである。

この意図せざる結果としての国民国家という視点は、ナショナリズムを〈国民〉ありきの思想運動として目的論的に理解する現代の研究傾向、特に「想像の共同体」としての〈国民〉というB・アンダーソンの主張への有効な解毒剤となる可能性がある。アンダーソン・テーゼは、民族自決や反植民地運動などの「下から」の突き上げとして従来理解されてきたナショナリズムを、〈国民〉という観念の実在構成効果に依拠した「上から」の国民国家形成のロジックとして再解釈することにより、〈国民〉の本質的な人工性を白日のもとに晒した。国民化とは、〈国民〉という集合的自己の表象(意味するもの(シニフィアン))が、それに対応する実在(意味される(シニフィエ)もの)を創造する記号論的メカニズムの問題であるとされるのである。アンダーソン自身はそれをあくまでも第三世界を舞台に論じたが、このナショナリズム解釈の枠組みが西洋にも原則として適用可能であることはすでに多くの論者によって指摘されている[1]。しかし、アンダーソン・テーゼが図らずも明らかにしている近代の〈国民〉の病理性も無視することはできない。

〈国民〉はローカルな伝統的共同体の中で培われた土着(ヴァナキュラー)のアイデンティティに単純にとって代わっただけでない。旧来のアイデンティティを支えていた人生の価値や習慣が一掃された後に生じた精神的・文化的空虚を埋めるべく、〈国民〉という「想像の共同体」は人々に残された唯一の帰属の対象として聖化され、それ自体がある種の宗教的権威を帯びざるを得なかった。個々の人生に意味を与えるのも〈国民〉の観念なら、「祖国のために死ぬ(*Pro Patria Mori*)」ことを正当化するのもやはり同じ〈国民〉の観念なのである。だがアンダーソンにとっては、祖国防衛に馳せ参じて斃れた「無名戦士」の墓列も、全国共通の暦、全

[1] Cf. Jim MacLaughlin, *Reimagining the Nation-State: The Contested Terrains of Nation-Building* (London: Pluto Press, 2001).

国新聞、公定国語、建国神話や正史、「国民文学」と並んで、〈国民〉の生成と維持に必要な時間・記憶・経験の共通性を確保するためのソフトな手段以上のものではない。国民化がそのような精神的・文化的な手段を総動員してはじめて可能になったことを暴露し、ナショナリズム研究の地平を拡大した点はアンダーソンの功とすべきだが、それは同時に、各人の生命の保全のための合理的な手段として創造した近代国家のために〈国民〉を従容として死地に赴かせる国民国家のパラドクスを追認することに終わっている。そしてこの限界は、実在を「代補(supplément)」する表象の（本来であれば負の）政治的機能を拡大解釈して、人々の心の中にしかない〈国民〉によって不在の国民が創造されるとしたアンダーソンの観念論的前提の中にすでに胚胎していたのである。

この観念論的転倒を唯物論的に再転倒すること――サン=シモンの思想とサン=シモン主義を国民国家の生成現場に置き戻して理解する意味はそこにある。ナポレオン戦争を通じて伝搬したフランス革命が周辺各国に〈国民〉意識の覚醒を促したという定説は正しい。しかしサン=シモンおよびサン=シモン主義によって確認されたのは、民主化を志向するこの意識が産業化を通じて身体を与えられるまでは、〈国民〉は観念にとどまり続け、歴史的実在を獲得することは決してないということであった。〈国民〉という表象を自立化させず、つねにその物質的基盤に立ち返ろうとするという意味で、これは優れて唯物論的な発想である。存在が意識を決定するというマルクスの言葉をもじっていえば、実在が表象を創造するのであって、その逆ではない。鉄道を例に挙げよう。アンダーソン（および彼が依拠するベンヤミン）によれば、鉄道がもたらす「均質で空虚な時間」はローカルな共同体に生きる人々の土着の時間を解体する国民化の一手段であるが[2]、この解釈は〈国民〉ありきを前提にしなければ成り立たない。すなわちアンダーソン・テーゼは、第三世界に対象を限定するといいながら、実は西洋近代における〈国民〉および国民国家の成立経緯を所与のものとし、それを基に作り上げたモデル表象を第三世界に密輸入している可能性がある。サン=シモン主義の視座から見れば、この「均質で空虚な時間」は身分制秩序の桎梏から解放された人々が平等な物体として運動するために必要な客観的な時間にほかならず、したがってそれを可能にした鉄道が都市空間や商品経済とともに身体的=物理的な要件となり、期せずして〈国民〉が誕生したのである。〈国民〉を創出するために鉄道が利用されたので

[2] Cf. Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Revised Edition (London and New York: Verso, 2006), pp. 23-29. ベネディクト・アンダーソン『（増補）想像の共同体』（白石さや・白石隆訳、NTT 出版、1997 年）、49-55 頁参照。

はなく、鉄道が隈なく国土に張り巡らされることにより、結果として〈国民〉が誕生したのだ。サン=シモン主義が国民国家状況（ナショナリズム）成立の自然的な理路を体現していることがわかるだろう。そこから導かれる最も重要な結論は、万人が〈産業者〉となって万人の生存のニーズを満たす〈産業社会〉が、「国民国家」の名において「祖国のために死ぬ」ことを人々に要求するなどあり得ないということである。

サン=シモンの教義の中でその後サン=シモン主義者たちによってさえ十分に理解されなかったものがあるとすれば、それは「新キリスト教」であろう。サン=シモンは来たる〈産業社会〉――それはフランス一国から究極においてヨーロッパ全体を同心円状に包括するはずであった――の統合原理を、キリスト教の根本思想をさらに純化した「汝ら、兄弟のように振る舞うべし」という道徳命題に求めた。〈産業者〉というアイデンティティは、社会の物質的基盤の生産に各々がその職能を通じて携わることではじめて獲得される。だが、人々に〈産業者〉階級としての意識が根付くまでの間、組織化された労働を通じて万人が相互利益の恩恵に浴する〈産業社会〉が成立を見るまでの過渡期においても、人間的な善、生の目的、共同生活の意味のようなモラルの問題に解答を与えるものが、そして人々を〈産業社会〉の中に統合されるよう導くものが必要であった。それが「新キリスト教」である。かつてのカトリック教会に代わって人々の精神的教導者となるものを欠いたままでは、かえって抑制の効かない利己主義とプチ・ブルジョワ的精神に侵食され、〈産業社会〉の成立も覚束なくなってしまうとサン=シモンは考えていたのである。

言うまでもなくアンファンタンは師のこの思想の先鋭な継承者であったが、その極端なモラリズムが災いして初期のサン=シモン主義運動は頓挫してしまう。この点に関するマニュエルの指摘は、サン=シモン主義をナショナリズムの文脈で理解する上でもある重要な点を衝いているように思われる。

> 彼ら〔サン=シモン主義者〕は無限の、普遍的な同胞愛のなかを泳いでいた。マツィーニも社会主義者も、サン=シモン派を読むことができ、また彼らの情緒が誠実に報告されているものと思った。しかし、この性格の人間主義的な神秘主義は選ばれたグループによってはじめて実践が可能であった。それは教会内のキリスト教神秘主義でなかったのと同じく人民の示威運動でもない。国際共産主義運動とあらゆる型のナショナリズムの有能なオルガナイザーは通常兄弟愛において差し出される武器のみならず、鉤爪をもって

いた[3]。

サン=シモンの「同胞愛」「兄弟愛」の思想は、サン=シモン主義者たちにあってはある種のエソテリックなセクト主義として内閉化していった。だがそれはサン=シモン主義に限ったことではなく、すべての思想運動に広範に観察される傾向である。ナショナリズムや社会主義ですら、「下から」の自然発生的な民衆運動のように見えて、その発端はつねにキリストの使徒たちに似た少数のシンパたちであり、始祖の教義を護符のように奉じる戦闘的な精鋭グループであった。しかしアンファンタン失脚後に運動の主導権を握ったシュヴァリエらは、その徹底した世俗性と経済志向によって広範な大衆的支持を集め、第二帝政の体制イデオロギーの座をめぐる覇権闘争に勝利する。したがって、ナポレオン三世治世下のフランスが精神を欠いた利己主義の蔓延する金融資本主義体制でしかなかったとしたなら、それをもたらした責はサン=シモンの思想そのものにではなく、弟子たちのサン=シモン主義運動に帰せられるべきなのである。ここで問われているのは、産業主義がそれ自体で人々に「同胞愛」をもたらす倫理たりうるかということである。経済に狂奔し安逸さを貪るプチ・ブルジョワの豊かな生活と炭鉱労働者の過酷で貧しい生活とを対照的に描いたゾラの小説は、第二帝政当時の国民生活の実態を暴いたものとして読むこともできるし、「階級なき社会」を掲げるマルクス主義がなぜ登場しなければならなかったかを感得させもするだろう。

サン=シモンの思想がナポレオン三世という庇護者に恵まれたことは思想史上稀に見る僥倖として語り継がれるが、この文脈ではむしろ歴史の皮肉として記憶されるべきエピソードとなるかもしれない。「馬上のサン=シモン」の異名をとったこの稀代の政治家の評価はいまだ定まらず、現代の福祉国家や行政国家の発案者に始まって、民主主義的独裁者、合理主義的僭主、原ファシスト、詐欺師にまで至る毀誉褒貶の渦中にある[4]。だが皇帝の称号に執着したこの紛れもなき君主は、自らを人格的な心服の対象として演出することによってフランスに幻想の「一つの国民」を作り出し、階級社会の過酷な現実を糊塗したとも考えられる。そうして聖化された〈国民〉観念こそが、「愛国主義」の美名を借りたガリカニスムやショーヴィニスムのように、現実の国民国家にしばしば見られる〈産業社会〉と

[3] フランク・E・マニュエル、フリッツィ・P・マニュエル『西欧世界におけるユートピア』(門間都喜郎訳、晃洋書房、2018 年)、775 頁。
[4] Cf. Eric Anceau, *Napoléon III: un Saint-Simon à cheval* (Paris: Tallandier, 2008).

は本来無縁な閉塞的で覇権主義的傾向を正当化してきたのである。ナポレオン三世という庇護者に恵まれなかったら、サン=シモンの思想がどのような歴史的評価を受けることになるかは依然として興味深い問題である。

サン=シモンを評価する現代の数少ない経済学者の一人であったシュンペーター（Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950）は、かつてこう述べたことがある。

> サン=シモン……に対しては純粋に科学的な功績がことごとく否認されていく一方である。かくして確かにこの点での彼の意義は存しない。しかし彼の独創性と深遠さは、預言者として振る舞おうとする彼の性向を多くの点で凌駕している。いかに多くの彼の思想が後にわれわれの学問の中にふたたび見い出せるかは、驚くほどである[5]。

サン=シモンを自由主義的市場経済か社会主義的計画経済かの構図から解き放ち、哲学者として評価したシュンペーターは慧眼であった。ただしサン=シモンは、まさしくその「独創性と深遠さ」によって「預言者」たり得たというべきではないだろうか。ポスト伝統、ポスト宗教、ポスト君主制の時代を迎えつつ、依然として「国民国家」の住人たるわれわれは、いかなる絆によって結ばれているのか？　サン=シモンの思想は現代にそう問いかけているのである。

---

[5] Joseph Schumpeter, *Economic Doctrine and Method: An Historical Sketch*, trans. R. Aris (New York: Oxford University Press, 1954), p.102. シュンペーター『経済学史』（中山伊知郎・東畑精一、岩波書店、1945年）、172 頁。

参考文献一覧

A．一次文献

１　サン=シモンの著作

サン=シモンのテクストは主として次のものを使用した。

Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon Tome 6, Paris: Anthropos, 1868.

森博訳『サン=シモン著作集全５巻』、恒星社厚生閣、1988 年。

引用・引照にあたっては以下に挙げる略号を用い、アントロポ版全集と邦訳著作集の該当する巻数・頁数を並記する。Anthropos 版と森訳『著作集』収録された翻訳との異同については、次の記号を付した。

また和訳にあたっては既出和訳を参照しつつ、必要に応じて訳を一部変えた。

●　：森訳『著作集』が別の版をテクストとするもの

●　●：Anthropos 版は一部分のみ収録し、森訳『著作集』は別の版をテクストとし、翻訳では Anthropos 版その他は参照にとどまる。

●●●：Anthropos 版は一部分のみ収録、森訳『著作集』は別の版をテクストとし、翻訳では Anthropos 版と他の版に異同と欠落を認め、他の版と併用して参考とする。

★　：Anthropos 版に収録なし。

▲　：『著作集』は別のテキストから訳し、Anthropos 版との内容に著しい相異が認められ、意味が同等の箇所も見られるもの。

『ジュネーヴの一住人からの手紙』（●）＝ LHGC, t I,

Saint-Simon, Claude-Henri, Lettres d'un habitant de Genève a ses contemporains, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome I A, Paris: Anthropos, 1868, pp. 11-60.

森訳『著作集』第 1 巻、39-74 頁。

森使用テクスト：初版本(Bibliothèque de l'Alsenal. F.E. 603)および Alfred Pereire, Saint-Simon: Lettres d'un habitant de Genève a ses contemporains, Paris: Alcan, 1925, pp. 1-69.

『19 世紀の科学的研究序説』＝ ITS19S, t VI,

Saint-Simon, Claude-Henri, Introduction aux travaux scientifiques du dix-neuvième siècle. *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome VI*,* Paris: Anthropos, pp. 1-216.

森訳『著作集』第 1 巻、89-204 頁。

『新百科全書素描、または 19 世紀の哲学序説。思想家諸氏に献じる書、第一概要』(●)＝nePDD, t I,

Saint-Simon, Introduction a la philosophie du dix-neuvième siècle, *Œuvres de Claude-Henri de*

Saint-Simon, Tome I A*,* Paris: Anthropos, 1868, pp. 89-96.
森訳『著作集第 1 巻』、205-215 頁。
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 Esquisse d'une nouvelle encyclopédie, ou Introduction à la philisophie du dixneuvième siecle ; Ouvrage dédié aux penseurs, Premier aperçu, 8 p, [Bibliothèque Nationale. Rp. 433]

「百科全書についての覚書」（●）＝ ME, t I,
Saint-Simon, Claude-Henri, Mémoire sur l'Encyclopédie, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome I A*,* Paris: Anthropos, 1868. pp. 147-149.
森訳『著作集』第 1 巻、213-215 頁。
森使用テクスト：O. Rodrigues, De Henri Saint-Simon, Le Producteur, tome III, 1826, pp. 430-432.（森は注を付して「「百科全書についての覚書」はロドリーグが国立図書館所蔵の書片（Bibliothèque Nationale. MSS. N.A.F.24605, f°s. 202, 206, 252, 298）の諸部を繋ぎ合わせて作られたと考えられる」と指摘している）

『新百科全書』（●●）＝NE, t VI,
Anthropos 版にあるのは以下の抜粋。
Saint-Simon, Claude-Henri, Épitore dédication à mon neveu Victor de Saint-Simon, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome I*,* Paris: Anthropos, 1868, pp. 96-101.
Saint-Simon, Claude-Henri, Préfaceou aperçu de la conception dont mon ouvrage sera le dévelopment, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome VI*,* Paris: Anthropos, 1868-1876, pp. 317-330.
森訳『著作集』第 1 巻、217-231 頁。
森使用テクスト:パリ国立図書館所蔵の原本Nouvelle Encyclopédie, par C. H. de St.-Simon. Première Livraison, servant de prospectus, Paris, de l'Imprimerie de J.-L. Sherff, 1810, [Bibliothèque Nationale. Rés. m.Z. 187(6)].

「百科全書の計画――第二趣意書」（●●●）＝ PE, t VI,
Saint-Simon, Claude-Henri, Projet d'Encyclopédie, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome VI *,* Paris: Anthropos, 1869, pp. 279-330.
森訳『著作集』第 1 巻、233-265 頁。
森使用テクスト：Projet d'Encyclopédie par C.-H. Saint-Simon, Second Prospectus. パリ国立古文書館所蔵のサン=シモン直筆原稿（F7. 4233）および国立図書館所蔵の無名氏による筆写原稿（N.A.F. 24605, Fos. 250-292）。
＊Anthropos 版は部分的で、他の版（Nauroy 版、H. Gouhier 版）と相互に異同がある。
Saint-Simon, Claude-Henri, Project d'Encyclopédie, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome VI*,* Paris: Anthropos, 1868-1876, pp. 279-315.

『哲学的・心情的書簡』（レーデルンへの書簡）＝ LphSe, t I
Saint-Simon, Claude-Henri, Lettres phirosophiques et sentimentales, Correspondance avec M. de

Redern, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon ,* Tome I, Paris: Anthropos, 1868, pp. 111-118.
森訳『著作集』第１巻、283-288 頁。

『人間科学に関する覚書　第一分冊』（●）＝MsSH, t V,
Saint-Simon, Claude-Henri, Mémoire sur la science de l'homme, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome V B, Paris: Anthropos, pp. 1-213.
森訳『著作集』第２巻、2-196 頁。
森使用テクスト：Saint-Simon, Claude-Henri, Mémoire sur la science de l'homme, Œuvres choisies, Tome II, pp5-116.

『ヨーロッパ社会の再組織について』（●）＝ RorgSE, t I,
Saint-Simon, Claude-Henri, De la réorganization de la société européenne, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome I A*,* Paris: Anthropos, 1868, pp. 153-248.
森訳『著作集』第２巻、197-260 頁。
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 De la réorganization de la société européenne, ou de la nécessité et des moyens de rassembler les peoples de l'Europe en un seul corps politique, en conservant à chacun son indépendence nationale, Paris, Adrien,Egron, octobre 1814, in-8, [Bibliothèque Nationale. 8º Z. 8086(3)]により、併せて第二版（広島大学、GE 三六三-Sa 二二）を照合。

『産業』（●）（▲）＝ Indu,　t I, または t II,（邦訳の無い場合は「／邦訳なし」と付す）
Saint-Simon, Claude-Henri, L'industrie, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome I, Paris: Anthropos, 1868, pp. 128-214. et, L'industrie, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome II, Paris: Anthropos, 1868, pp. 12-173.
森博は、アントロポ版の『産業』をすべてサン=シモンの手からなるもとは認めていない。森によれば『産業』はサン=シモンの論集『産業』におけるサン=シモンの論考の抜粋、すなわち「産業の趣意書」２枚、『産業第２巻』「『産業』第３巻の趣意書」「『産業』第３巻回状集」、『産業第３巻第４分冊』『産業第４巻第１部』『産業第４巻第２部』からなる。したがってアントロポ版の『産業』が弟子達によって編集され章立てられた一つの書物であるのに対して、『著作集』の『産業』は森が原本を確認しサン=シモンの手によるものと認め編集・翻訳したもので構成されている。したがってアントロポ版にはある章も、『著作集』にはない章がある。
森訳『著作集』第２巻の 315-361 頁、さらに第３巻の 1-135 頁に渡って収録されている。
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本
『産業の趣意書』Henry saint-simon a Messieurs les culitiveurs les fabricants, les negociants et les banquiers, dans A. Pereire, Autour de Saint-Simon, 1912, pp. 2-4. Et, Prospectus. L'Industrie, ou…… 2 pages in-4, Imprimerie de C.L.F. Panckoucke, [avril] 1817, [Bibliothèque Nationale, Rés. m.Z.187／8].
『産業第２巻』*L'industrie, Discussions politiques morales et philosophiques, dans L'intérêt de tous les hommes livrés à des travaux utiles et indépendans,* Tome second, Paris: Au Bureau de

l'Administration, 1817. [Bibliothèque Nationale: 8^0 Z. 8085].
『産業第３巻第四分冊』*L'industrie, Discussions politiques morales et philosophiques, dans L'intérêt de tous les hommes livrés à des travaux utiles et indépendans,*Tome troisième, Quantrième Cahier, Paris : L'Imprimerie de J. Smith. in-4, Octobre 1817, [Bibliothèque Nationale, Rés. m.Z.187(17)].
『産業第４巻第１部』*L'industrie, Discussions politiques morales et philosophiques, dans L'intérêt de tous les hommes livrés à des travaux utiles et indépendans,* Paris : L'Imprimerie de J. Smith. in-4, Octobre 1817, [Bibliothèque Nationale, Rés. m.Z.187(17)].
『産業第４巻第２部』*L'industrie, Discussions politiques morales et philosophiques, dans L'intérêt de tous les hommes livrés à des travaux utiles et indépendans.* Paris, chez Verdière, in-8, Maiou Juin 1818, [Bibliothèque Nationale, 8º Z. 8085(2) et (3)].

「コミュヌ」＝ Com, t VI,
Saint-Simon, Claude-Henri, "Les communes ou Essais sur la politique pacifique par une société des gens de letters", dans Ed. *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome VI*,* Paris: Anthropos, 1868-1876, pp. 381-398.
森訳『著作集』第３巻、149-162 頁。

『政治学』（●●）＝（1）: Pol-pni, （2）: Pol-af.
アントロポ版には以下の二編だけが収録されている。また森博は『政治家』と訳したが『政治学』と訳すのが適切だろう。
（1）Saint-Simon, Claude-Henri, Le parti national ou industriel comparé au parti anti-national'', *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome II A*,* Paris: Anthropos, pp. 195-209.
（2）Saint-Simon, Claude-Henri, "Sur la querelle des abeilles et des frelons, ou sur la situation respective des des producteurs et des consommateurs non producteurs'', *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome II A*,* Paris: Anthropos, pp. 211-234.
森訳『著作集』第３巻、163-240 頁。
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 Saint-Simon, Claude-Henri, *Le politique, par une sociéte de gens de lettres*, Paris, 1819, in-8, xxvii-54-521 p, [Bibliothèque Nationale. 8º Z.8147].
森博によるサン=シモンの政治論からの選集である。以下 1-7 のうち 1-5 はアントロポ版未収録である。

(1) Le Politique, ou essai sur la politique qui convient aux hommes du XIXe siécle, Introduction, (Ier Vol., Ire Livraison, janvier 1819).
(2) Introduction, Première partie, Essai Nº II, (IIe Livraison, janvier 1819).
(3) Sur la proposition faite à la Chambre des Pairs par M. Barthélemy, (VIe Livraison, février 1819), pp.183-190.
(4) Que veulein-ils ? Que voulons-nous ? (VIIe Livraison, mars 1819), pp.233-238.
(5) Moyens directs de constituer la liberté, d'établir l'évonomie et donner de la solidité à la royauté, *ibid*., pp.,239-251.

(6) Le parti national ou industriel comparé au parti anti-national, (Xe Livraison, avril 1819), pp. 353-367.
(7) Sur la querelle des abeilles et des frelons, ou sur la situation respective des des producteurs et des consommateurs non producteurs, (XIe Livraison, avril 1819), pp. 405-427.

『組織者第一分冊』（●）＝ Org. 1e, t II,
Saint-Simon, Claude-Henri, L'Organisateur. Ier livraison, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome II B*,* Paris: Anthropos, 1869, pp. 13-61.
森訳『著作集』第３巻、261-291 頁
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 L'Organisateur, Ier livraison Troisieme edition, augmentee d'une esquisee du nouveau systeme politique, 1819, in-8, [Bibliothèque Nationale. 8° Lc^{3}.133 bis].

『組織者第二分冊』（●）＝ Org, t II,
Saint-Simon, Claude-Henri, L'Organisateur, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome II B, Paris: Anthropos, 1868, pp. 61-240.
『組織者』は第一・第二・第三分冊の全三冊からなるが、アントロポ版では第三分冊の「追伸」のみを収録している。
森訳『著作集』第３巻、293-404 頁。
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 L'Organisateur. IIe livraison. 2e édition, considérablement augmentée, Tome Ier, 1820, in-8, 203p, (pagination: 63-265), [Bibliothèque Nationale. 8° Lc^{3}. 113 bis].

『産業体制論第一部（全三部）』（●）＝SI1, t III,
Saint-Simon, Claude-Henri, Du Systèm industriel. *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome III A , Paris: Anthropos, 1868, pp. 3-240
森訳『著作集』第４巻、21-408 頁。
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 Du Systéme Industriel, Paris: De l'imprimerie de Craplet, [Fev.] 1821, in-8, xx-311p, [Bibliothèque Nationale. 80 R. 3734].
森参照 Du Systèm industriel. Première partie. *Œuvres*, t. XXII (=Éd. Anthropos, Tome III A), pp.3-240 ; et *Œuvres,* t. XXI (= Éd. Anthropos, Tome III B), pp.3-134

『産業体制論第二部』（●）＝SI2, t II, ou t III.
Saint-Simon, Claude-Henri, Du Systèm industriel, Tome II, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome III B, Paris: Anthropos, 1868, pp. 3-134 : et Tome III C, Paris: Anthropos, 1868, pp. 17-95.
森訳『著作集』第４巻、21-408 頁。
森使用テクスト：アルスナル図書館所蔵の原本 [Bibliothèque de l'Arsenal. F.E. 354]. 森の記録によれば Du Systèm industriel. Deauxième partie はパリのポルトマン未亡人印刷所による八折版の次の六冊から構成されている。

(1) *Au Roi. Première adresse*. Paris [avril] 1821, 128 p.

(2) *A MM. Les Députés qui sont industriels. Première lettre,* [mai] 1821, 16 p. (pagination : 129-144).

(3) *Deuxième lettre*, [juin] 1821, 34 p, (pagination : 145-178).

(4) *Troisième lettre*, [juillet] 1821, 17 , (pagination :179-195).

(5) *1er Opinion plitique des industriels*, [septembre] 1821, 16 p, (pagination : 197-212).

(6) *Henry saint-simon à Messieurs les Ouvriers,* [novemble] 1821, 8 p, (pagination : 213-220).

森参照 Du Systèm industriel. Deauxième partie. *Œuvres*, t. XXII, (=Éd. Anthropos, Tome III B), pp.135-162; et *Œuvres,* t. XXIII, (= Éd. Anthropos, Tome III C), pp.17-95; et Éd. Anthropos, Tome VI,　pp.435-451.

『産業体制論第三部』（●）＝SI3, t VI,

Saint-Simon, Claude-Henri,　Du Systèm industriel, 3ème partie, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome VI, Paris: Anthropos, 1868, pp. 461-495.

森訳『著作集』第４巻、21-408 頁。

森使用テクスト：第三部も第二部と同様で『第三部抜粋』として別々のタイトルを持つ三冊からまとめられたもので、それぞれパリ国立図書館所蔵の原本を使用。

(1)*Travaux Philosophiques,scientifiques et poétiques, ayant pour objet de faciliter la réorganisation de la société europénne,* Janvier 1822, in-8, 20 p, [Bibliothèque Nationale. 8º Z. 8087 (11)]

(2)*Deux lettres à Messieurs les électeurs du Département de la Seine qui sont producteurs*, Juin 1822, in-8, 12 p, [Bibliothèque Nationale. 8º Z. 8087 (13)].

(3)Sur les intérêts politiques des producteurs. Juin 1822, in-8, 13 p, Non-pagination [Bibliothèque Nationale. 8º Z. 8087 (12)]

「続ブルボン家とスチュワート家」（●）＝SbBS

Saint-Simon, Claude-Henri, Suite à la brochure des Bourbons et des Stuarts. *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome VI, Paris, Anthropos, 1868, pp. 507-526.

森訳『著作集』第４巻、363-379 頁。

森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 Saint-Simon, Claude-Henri, Stuite à la brochure des Bourbons et des Stuarts. 24 janvier. 1882. in-8, [Bibliothèque Nationale. 8º Z. 8087 (10)].

『社会契約論』（★）＝ 略号なし

森訳『著作集』第４巻、409-415 頁。

森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 Suite des travaux ayant pour objet de fonder le systèm industriel. Du contrat social, Paris, chez les marchands de nouveautés, Avril 1822, in-8, 191 p, [Bibliothèque Nationale., 8º Z. 8086(16)].

森参考 ‘Du contract social’. Dans “Opuscule fundamental” d’Auguste Comte”, par P. Laffite, La Revue occidentale, 18e année, Nº1, 1er janvier 1895, pp. 11-14. サン=シモン「農業、製造

業、商業の経営主諸氏に」とオーギュスト・コント「社会を再組織するために必要な科学的作業の趣意書」、さらにサン=シモン書下ろしの感情についての論考から成り、分冊販売される予定だった。

『産業者の教理問答』（●）＝CI, t IV, あるいは t V,
Saint-Simon, Claude-Henri, Catéchisme des industriels, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Tome IV A, Paris, Anthropos, 1868, pp. 3-203 ; et Tome V A, pp. 1-49.
森訳『著作集』第５巻、1-162 頁。
森使用テクスト : パリ国立図書館所蔵の原本 Catéchisme des industriels, 4ciers,de décembre 1832 à juin 1824, [Bibliothèque Nationale. 8º Z. 8090 (1-4)].

『新キリスト教』（●）＝ Nc, t III,
Saint-Simon, Claude-Henri, Nouveau christianisme, Dialogues entre un Comservateur et un Nouvateur. Première dialogue, *Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon*, Tome III C, Paris: Anthropos, pp. 98-192.
森訳『著作集』第５巻、239-295 頁。
森使用テクスト：パリ国立図書館所蔵の原本 Nouveau christianisme, Dialogues entre un Comservateur et un Nouvateur. Première dialogue. Paris, Bossange père, avril 1825, in-8, [Bibliothèque Nationale, 8º Z.1840(2)].

２　サン=シモン主義者の著作

Bonaparte, Napoléon-Louis, *Des idées napoléoniennes* (Paris : Amyot et Henri Plon, 1860).翻訳と理解においては *Des idées napoléoniennes* (Bruxelles: Société Typograhique Belge, 1839).さらに Napoléon-Louis Bonaparte, *Napoleonic Ideas*(translated by James A. Dorr, New York : D.Appleton & Company, 1859).を参照した。
———, *Analyse de la question des sucres* (Paris : L'Administration de librarie, 1843).
———, *Discours et Messages de Louis-Napoléon Bonaparte* (Paris: Plon, 1853).
———, *Extinction du Pauperisme* (Paris: Pagnerre, Editeur, 1844).
ルイ=ナポレオン「貧窮の絶滅」、河野健二編『資料　フランス初期社会主義――二月革命とその思想』（1979 年、平凡社）。

Chevalier, Michel, "Conversations avec le Peré," *Le livre Nouveau des Saint-Simoniens, Manuscrits d'Emile Barrault, Michel Chevalier, Charles Duveyrier, Prosper Enfantin, Charles Lambert, Leon Simon et Thomas-Ismayl Urbain (1832-1833),* introduction et notes par Philippe Regnier (Tusson: Charemte, Du Lerot, 1991).
———, *Religion Saint Simonienne : Politique Industrielle et Systèm Méditerranée* (Paris, 1832).
———, *Lettres sur l'inauguration du chemin de fer de Strasbourg à Bâle* (Paris : Librarie de Charles Gosselin, 1841).

———, *Introduction*, *Rapports Du July International* (Paris : Imprimerie Administrative de Paul Dupon, 1868).

Commission impériale, *Rapport sur l'Exposition Universelle de 1855 présenté a l'Empereur par S. A. I. le Prince Napoléon président de la commission* (Paris: Imprimerie Impériale, 1857).

Commission impériale, *Rapport sur L'Exposition universelle de 1867, a Paris* (Paris: Imprimerie Impériale, 1869).

Enfintin, Barthelemy-Prosper, *Doctrine de Saint- Simon, Prèmiere Année, Exposition, 1829*(Paris : Au bureau de l'organisateur, 1830).
バザールほか『サン−シモン主義宣言』（野地洋行訳、木鐸社、1982 年）.
野地使用テクスト：*Doctrine de Saint- Simon, Exposition, Prèmiere année, 1828-1829*, Nouvelle édition, publieé avec introduction et notes par C. Bouglé et. Élie Halévy (Paris, Marcel Riviére, 1924).

———, H Carnot, H Fournel et Ch Duveyrier, *Doctrine saint-simonienne : exposition*(Paris: Librarie Nouvelle, 1854)

Ｂ．二次文献

（欧文）

Anceau, Eric, *Napoléon III: un Saint-Simon à cheval* (Paris: Tallandier, 2008).

Anderson, Benedict, *Imagined Communities*, Revised Edition (London and New York: Verso, 2006).ベネディクト・アンダーソン『（増補）想像の共同体』（白石さや・白石隆訳、NTT 出版、1997 年）。

Baltran, Alain, et Pascal Griset, *La Croissance economique de la France 1815-1914*(Paris: Armand colin, 1988.)

Bulletin des lois de la République Française, X: 1851-1852 (Paris: Imprimerie Impériale).

Charléty, Sébastien, *Histoire Du Saint-Simonisme(1825-1864)….*, (Paris: Librairie Hachette, 1896).セバスティアン・シャルレティ『サン=シモン主義の歴史』（沢崎浩平・小杉隆芳訳、法政大学出版局、1986 年）。

Christie, Agatha, *A Murder is Announced*, Paperback edition (London: Harper Collins, 2016). アガサ・クリスティ『予告殺人』田村隆一訳、早川書房、2003 年）。

Duby, Gerorges, et Armand Wallon (éd), *Histoire de la Frence rurale* (Paris: Seuil, 1976), t 3,

Giedion, Sigfried, *Space, Time and Architecture: The Growth of a New Tradition,* Fifth revised and enlarged edition (London: Harvard University Press, 2008).

Fishman, Robert, *L'utopie urbaine au XXe siècle: Ebenezer Howard, Frank Lloyd Wright, Le Corbusier* (Bruxelles: Editions Mardaga, 1979).

France, Anatole, *Les Dieux ont Soif* (Paris: Calmann-Lévy, 1912). アナトール・フランス『神々は渇く』（大塚幸男訳、岩波書店、1977 年）。

Gellner, Ernest, *Nation and Nationalism* (New York: Cornell University Press, 2008).アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』（加藤節ほか訳、岩波書店、2000 年）。

Hazareesingh, Sudhir, "A Saint-Simonian in the Republic: Eugene Pelletan and ideological transformation of nineteenth century French republicanism*", Journal of Political Ideologies*, Volume 5, Issue 1(London: Taylor & Francis Online, 2000).

Iggers, Georg G., *The Cult of Authority: The Political Philosophy of the Saint-Simonians* (Heiderberg: Springer, 2012).

Kedourie, Elie, *Nationalism*, Fourth, Expanded Edition (Oxford: John Wilei & Sons, 1993). E・ケドゥリー『ナショナリズム』（小林正之・栄田卓弘・奥村大作訳、学文社、2000 年）

Kohn, Hans, *The Idea of Nationalism* (New York: Routledge, 2005).

MacLaughlin, Jim, *Reimagining the Nation-State: The Contested Terrains of Nation-Building* (London: Pluto Press, 2001).

Miller, David, *On Nationality* (Oxford, Clarendon Press, 1995). デイヴィッド・ミラー『ナショナリティについて』（富沢克ほか編訳、風行社、2007 年）。

———, *National Responsibility and Global Justice* (Oxford: Oxford University Press, 2007）. デイヴィッド・ミラー『国際正義とは何か ——グローバル化とネーションとしての責任』（富沢克ほか訳、風行社、2011 年）。

Mitterand, Henri, *Zola journaliste: De l'Affaire Manet à l'Affaire Dreyfus* (Paris: A. Colin, 1962).

———, *Zola et le naturalisme*, Que sais-je ? (Paris : Presses universitaires de France, 2002).
Musso, Pierre, *Saint-Simon et le saint-simonisme*. Que sais-je ? (Paris : Presses Universitaires de France, 1999).
Leroy – Beaulieu, Paul, “Chevalier (Michel)”, L Say. *Nouveau Dictionnaire d'Economie Politique*, Tome 1 A-H, (Paris: Guillaumin et Cie, editeurs, 1893).
Prochasson, Christophe, *Saint-Simon ou l'anti-Marx : Figures du saint-simonisme français xixe-xxe siècles* (Paris : Perrin, 2005).
Picon, Antoine, *Les Saint-Simoniens: Raison, imaginaire et utopie* (Paris: Editions Belin, 2002).
Schumpeter, Joseph, *Economic Doctrine and Method: An Historical Sketch*, trans. R. Aris (New York: Oxford University Press, 1954). シュンペーター『経済学史』（中山伊知郎・東畑精一、岩波書店、1945 年）。
Tafuri, Manfredo and Francesco Dal Co, *Modern Architecture*, translated by Robert Erich Wolf (New York: H. N. Abrams, 1979).
Schivelbusch, Wolfgang, *Railway Journey: The Industrialization of Time and Space in the 19th Century*(Berkeley: University of California Press, 1986).ヴォルフガング・シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史——19 世紀における空間と時間の工業化』(加藤二郎訳、法政大学出版局、1982 年)。
Tamir, Yael, *Liberal Nationalism* (New Jersey: Princeton University Press, 1993).ヤエル・タミール『リベラルなナショナリズム』(押村高ほか訳、夏目書房、2006 年)。
Marc Vial, André, *Germinal et le* “*Socialisme*” *de Zola* (Paris : Éditions sociales, 1975).
Wesemael, Pieter van, *Architecture of Instruction and Delight: A Socio-historical Analysis of World Exhibitions as a Didactic Phenomenon* (1798-1851-1970) (Rotterdam: 010 Publishers, 2001).
Wimmer, Clemens Alexander, *Geschichte der Gartentheorie* (Darmstadt: Wiss. Buchges, 1989), S.108.
Wolin, Sheldon S.， *Politics and Vision* (Princeton: Princeton University Press, 2004).シェルドン・S・ウォリン『西欧政治思想史』（尾形典男・福田歓一ほか訳、福村出版、1994 年）。
Wolmar, Christian*, Blood, Iron & Gold: How The Railways Transformed The World* (London: Atlantic Books, 2010).クリスティアン・ウォルマー『世界鉄道史 ——血と鉄と金の世界変革』 （安原和見・須川綾子訳、河出書房新社、2012 年)。
Yonnet, Franck,“La banque saint-simonienne: le projet des sociétés mutuelles de crédit de 1853 des frères Pereire,” *Revue française d'économie*, 13 (1998).

（邦文）
アーレント、ハンナ『人間の条件』（志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994 年）。
アスン、ポール=ロラン『フェティシズム』（西尾章泰・守谷てるみ訳、白水社 2008 年）。
アングールヴァン、アンヌ=ロール『バロックの精神』（秋山伸子訳、白水社、1996 年）。
アンダーソン、ベネディクト『比較の亡霊』（糟谷啓介ほか訳、作品社、2005 年）。
イグナティエフ、マイケル『民族はなぜ殺しあうのか』（幸田敦子訳、河出書房新社、

1996 年)。
———『ライツ・レヴォリューション ——権利社会をどう生きるか』(金田耕一訳、風行社、2008 年)。
ロザンヴァロン、P『連帯の新たなる哲学——福祉国家再考』(北垣徹訳、勁草書房、2006 年)。
ヴィアル、ジャン『教育の歴史』(高村昌憲訳、白水社、2007 年)。
ヴィアール、ブリュノ『100 語でわかるロマン主義』(小倉孝誠・辻川慶子訳、白水社、2012 年)。
ヴィンセント、アンドルー『現代の政治イデオロギー』(重森臣広監訳、昭和堂、1998 年)
ヴェバー、マックス『職業としての学問』(尾高邦雄訳、1936 年)。
———『支配社会学 I』(世良晃志郎、創文社、1960 年)。
———『支配社会学 II』(世良晃志郎、創文社、1962 年)。
———『都市の類型学』(世良晃志郎、創文社、1964 年)。
———『宗教社会学』(武藤一雄ほか訳、創文社、1976 年)。
———『職業としての政治』(脇圭平訳、岩波書店 1980 年)。
———『社会主義』(濱島朗訳・解説、講談社、1980 年)
———『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』(富永祐治ほか訳、折原浩補訳、岩波書店、1998 年)。
ヴェルナンビュルジェ、ジャン=ジャック『聖なるもの』(川那部和恵訳、白水社、2018 年)。
ヴェントゥーリ、フランコ『百科全書の起源』(大津真作、法政大学出版局、1979 年)。
ウォーラーステイン、イマヌエル『近代世界システム 1600～1750——重商主義とヨーロッパ世界経済の凝集』(川北稔訳、名古屋大学出版会、1993 年)。
ヴォルテール『ルイ 14 世の世紀 (全 4 巻)』(丸山熊雄訳、岩波書店、1958 年)。
———『カンディード他 5 編』(植田祐次、岩波書店、2005 年)。
エーコ、U『記号論 (I・II)』(池上嘉彦訳、岩波書店、1996 年)。
エピクロス『エピクロス——教説と手紙』(出隆・岩崎允胤訳、岩波書店、1959 年)。
エリアス、ノルベルト『宮廷社会』(波田節夫ほか訳、法政大学出版局、1981 年)。
———／ミヒャエル・シュレーター編『時間について』(井上晌二・青木誠之訳、法政大学出版局、1996 年)。
———『モーツァルト』(青木隆嘉訳、法政大学出版局、2014 年)。
エルマン、ジャック『社会学の言語』(原山哲・樋口義広訳、白水社、1993 年)。
エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』(戸原四郎訳、岩波書店、1965 年)。
———『空想より科学へ』(大内兵衛訳、岩波文庫、1966 年)。
オークショット、マイケル『リヴァイアサン序説』(中金聡訳、法政大学出版局、2007 年)。
オールセン、ドナルド・J『芸術作品としての都市』(和田旦訳、芸立出版、1992 年)。
カーン、スティーヴン『時間の文化史——時間と空間の文化 : 1880-1918 年 (上下巻)』(浅野敏夫訳、法政大学出版局、1993 年)。

カウツキー、カール『フランス革命時代における階級対立』（堀江英一ほか訳、岩波書店、1959 年）。
———『キリスト教の起源』（栗原佑訳、法政大学出版局、1975 年）。
ガダマー、H・G『真理と方法 I 』（轡田収ほか訳、法政大学出版局、1986 年）。
カルヴェ、アンリ『ナポレオン』（井上幸治訳、白水社、1966 年）。
カントロヴィッチ、エルンスト『祖国のために死ぬこと』（甚野尚志訳、みすず書房、1993 年）。
ギース、ジョセフほか『中世ヨーロッパの都市の生活』（青島淑子訳、講談社、2006 年）。
———ほか『中世ヨーロッパの農村の生活』（青島淑子訳、講談社、2008 年）。
———ほか『大聖堂・製鉄・水車』（栗原泉訳、講談社、2012 年）。
———ほか『中世ヨーロッパの城の生活』（栗原泉訳、講談社、2013 年）。
キャナダイン、デヴィッド『虚飾の帝国』（平田雅博・細川道久訳、日本経済評論社、2004 年）。
キャリントン、ノエル『英国のインダストリアル・デザイン』（中山修一・織田芳人訳、晶文社、1983 年）。
ギュイヨ、リュシアン『香辛料の世界史』（池崎一郎ほか訳、白水社、1987 年）。
クマー、クリシャン『ユートピアニズム』（菊池理夫ほか訳、昭和堂、1993 年）。
———『予言と進歩』（杉村芳美ほか訳、文眞堂、1996 年）。
クラカウアー、ジークフリート『天国と地獄——ジャック・オッフェンバックと同時代のパリ』（平井正訳、1991 年）。
グレトゥイゼン、B『ブルジョワ精神の起源』（野沢協訳、法政大学出版局、1974 年）。
ゲデス、パトリック『進化する都市』（鹿島出版会、1982 年）。
ケネー『「経済表」以前の諸論考』（坂田太郎訳、春秋社、1950 年）。
———『経済表』（平田清明・井上靖夫訳、岩波文庫、2013 年）。
コーン、H「ナショナリズム——近代史における普遍的推進理念としてのナショナリズム——」（A・P・ダントレーブほか編『国家への視座——［叢書］ヒストリー・オブ・アイディアズ』佐々木毅ほか訳、平凡社、1988 年）
コバスト、エリック『100 の神話で身につく一般教養』（小倉孝誠・岩下綾訳、白水社、2012 年）。
コンドルセ「公教育の全般的組織についての報告と法案」、阪上孝編訳『フランス革命期の公教育論』（岩波書店、2002 年）。
コンボー、イヴァン『パリの歴史〔真版〕』（小林茂訳、白水社、2002 年）。
作者不詳『女哲学者テレーズ』（関谷一彦訳、人文書院、2010 年）。
シーマン、J・C・B『ヴィクトリア時代のロンドン』（社本時子ほか訳、創元社、1987 年）。
シィエス『第三身分とは何か』（稲本洋之助ほか訳、岩波書店、2011 年）。
シヴェルブシュ、ヴォルフガング『闇をひらく光』（小川さくえ訳、法政大学出版局、1988 年）。
シャルル、クリストフほか『大学の歴史』（岡山茂ほか訳、白水社、2009 年）。
シャルレティ、セバスティアン『サン=シモン主義の歴史——1825-1864』（沢崎浩平・

小杉隆芳訳、法政大学出版局、1986 年)。
シュタイン、ローレンツ・フォン『平等原理と社会主義 ――今日のフランスにおける社会主義と共産主義』(石川三義・柴田隆行・石塚正英訳、法政大学出版局、1990 年)。
シュトラウス、レオ『ホッブズの政治学』(添谷育志ほか訳、みすず書房、1990 年)。
シュノ、ベルナール『フランス国有企業』(長谷川公昭訳、1970 年)。
ショシャール、ポール『道徳と生理』(吉岡修一郎訳、1956 年)。
スキナー、クェンティン『思想史とはなにか――意味とコンテクスト』(半沢孝麿・加藤節ほか訳、岩波書店、1990 年)。
スタンダール『赤と黒　上下巻』(桑原武夫・生島遼一訳、岩波書店、1958 年)。
ストレンジ、スーザン『国家の退場――グローバル経済の新しい主役たち』(櫻井公人訳、岩波書店、1998 年)。
スミス、アントニー・D.『ネーションとエスニシティ』(巣山靖司ほか訳、名古屋大学出版会、1999 年)。
セール、ミシェル『火、そして霧の中の信号――ゾラ』(寺田光徳訳、法政大学出版局、1988 年)。
ソーニエ、V-L『中世フランス文学』(神沢英三・高田勇訳、白水社、1958 年)。
ゾラ、エミール『ゾラ・セレクション(全 11 巻別巻 1 冊)』(宮下志朗ほか責任編集、藤原書店、2003 年)。
ゾンバルト、ヴェルナー『恋愛と贅沢と資本主義』(金森誠也訳、講談社、2000 年)。
ダイシー、A・V『法律と世論』(清水金二郎訳・菊池勇夫監修、1972 年、法律文化社)。
ダヴァル『フランス社会思想史』(串田孫一・中村雄二郎訳、白水社、1954 年)。
タピエ、ヴィクトール=リュシアン『バロック芸術』(高階秀爾・坂本満訳、白水社、1962 年)。
ダントレーブ、A・Pほか編『[叢書]ヒストリー・オブ・アイディアズ　国家への視座』(佐々木毅ほか訳、平凡社、1988 年)。
チエン、アンドレほか『100 語でわかる中国』(井川浩訳、白水社、2011 年)。
ティーゲム、フィリップ・ヴァン『フランスロマン主義』(辻昶訳、白水社、1954 年)。
ティエリ、J・N・オーギュスタン『メロビング王朝史話(上下巻)』(小島輝正訳、岩波書店、1992 年)。
ディドロほか編『百科全書――序論および代表項目』(桑原武夫訳編、岩波書店、1971 年)。
デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波書店、1997 年)。
―――『情念論』(谷川多佳子訳、岩波書店、2008 年)。
―――『方法序説』(山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2010 年)
デランティ、ジェラード『コミュニティ――グローバル化と社会理論の変容』(山ノ内靖・伊藤茂訳、NTT 出版、2006 年)。
デリベレ、モーリス『色彩』(久保田浩資訳、白水社、1971 年)。
デルマス、クロード『ヨーロッパ文明史』(清水幾太郎訳、白水社、1963 年)。
デュメニル、ジェラールほか『100 語でわかるマルクス主義』(井形和正・斎藤かぐみ

訳、白水社、2015 年)。
デュルケム、エミール『社会主義およびサン=シモン』(森博訳、恒星社厚生閣、1977 年)。
———『社会分業論(上下巻)』(井坂玄太郎訳、講談社、1984)。
デュロゼル、J・B『カトリックの歴史』(大岩誠・岡田徳一訳、白水社、1967 年)。
テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上下巻)』(杉之原寿一訳、岩波書店、1957 年)。
ドイッチュ、K・W『ナショナリズムとその将来』(勝村茂・星野昭吉訳、勁草書房、1975 年)。
トクヴィル、アレクシス・ド『旧体制と大革命』(小山勉訳、筑摩書房、1998 年)。
ドゥボール、ギー『スペクタクルの社会』(木下誠訳、筑摩書房、2003 年)。
ドゥムイ、パトリック『大聖堂』(武藤剛史訳、白水社、2010 年)。
ドゥルーズ、G ほか『アンチ・オイディプス』(市倉宏祐訳、河出書房新社、1986 年)。
———、ほか『千のプラトー』(宇野邦一ほか訳、河出書房新社、1994 年)。
ナイト、F・H・「経済学の観念学」、『〔叢書〕ヒストリー・オブ・アイディアズ——経済学のメソドロジー』(上山隆大ほか訳、平凡社、1988 年)
ナンシー、ジャン=リュック『無為の共同体——バタイユの恍惚から』(西谷修訳、朝日出版、1985 年)。
ニーダーマイヤー、ミヒャエル.『エロスの庭——愛の園の文化史』(濱中春・森貴史訳、三元社、2013 年)。
ニーチェ『善悪の彼岸』(木場深定訳、岩波書店、1970 年)。
ニスベット、R・A『共同体の探求——自由と秩序の行方』(安江孝司ほか訳、梓出版社、1986 年)。
ヌリス、アンドレ『フランの歴史』(上杉聰彦訳、白水社、1971 年)
ネイミア、ルイス『1848 年革命 —— ヨーロッパナショナリズムの幕開け』(都築忠七・飯倉彰訳、平凡社、1998 年)。
ハーシュマン、アルバート・O『情念の政治経済学』(佐々木毅・旦祐介訳、法政大学出版局、1985 年)。
ハーバーマス、ユルゲン『公共性の構造転換』(細貝貞雄・山田正行訳、未来社、1994 年)。
———『近代 未完のプロジェクト』(三島憲一編訳、岩波書店、2000 年)。
バーキー、R・N・『社会主義』(淺沼和典訳、早稲田大学出版部、1985 年)。
バーリン、アイザイア『バーリン選集(全 6 巻)』(田中治男ほか訳、岩波書店、1992 年)。
———『バーリン ロマン主義講義』(田中治男訳、岩波書店、2000 年)。
バーンズ、ジュリアン『海峡を越えて』(中野康司訳、白水社、1998 年)
ハイエク、F・A.『隷属への道』(西山千明訳『ハイエク全集 I』別巻所収、春秋社、1992 年)。
バタイユ、ジョルジュ『呪われた部分 ——全般経済学試論・蕩尽』(酒井健訳、筑摩書房、2018 年)。
バルト、ロラン『物語の構造分析』(花輪光訳、みすず書房、1979 年)。

———『恋愛のディスクール・断章』（三好郁朗訳、みすず書房、1980 年）。
———『表徴の帝国』（宗左近訳、筑摩書房、1996 年）。
———『ロラン・バルト モード論集』（山田登世子編訳、筑摩書房、2011 年）。
ハワード、E『明日の田園都市』（長素連訳、鹿島出版会、1968 年）。
ハント、リン『人権を創造する』（松浦義弘訳、岩波書店、2011 年）。
———編『文化の新しい歴史学』（筒井清忠訳、岩波書店、1993 年）。
ピノー、マドレーヌ『百科全書』（小嶋竜寿訳、白水社、2017 年）。
フィヒテ、J・G『（改訂）ドイツ国民に告ぐ』（大津康訳、岩波書店、改版 1940 年）。
———『ドイツ国民に告ぐ』（鵜飼哲ほか編訳『国民とは何か』所収、インスクリプト、1997 年）。
フーコー、ミシェル『言葉と物』（渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974 年）。
———『監獄の誕生』（田村俶訳、新潮社、1977 年）。
ブールジャン、ジョルジュほか著『社会主義』（船越章・富永利彦訳、白水社、1953 年）。
ブノワ、リュック『博物館学への招待』（水嶋英治訳、白水社、2002 年）。
フランシス、Mほか編『庭の意味論』（佐々木葉二ほか訳、鹿島出版会、1996 年）。
フリーデル、エーゴン『近代文化史 3——ヨーロッパ精神の危機／黒死病から第一次世界大戦まで』（宮下啓三訳、みすず書房、1988 年）。
ブリュレ、イヴ『カトリシスムとは何か——キリスト教の歴史をとおして』（加藤隆、白水社、2007 年）。
ブリュシュ、F ほか『フランス革命史』（國府田武訳、白水社、1992 年）。
プロ、ドニ『崇高なるもの——19 世紀パリ民衆生活誌』（見富尚人訳、岩波書店、1990 年）。
フロイト、ジークムント『自我論集』（竹田青嗣編・中山元訳、筑摩書房、1996 年）。
ブローマン、ロニーほか『不服従を讃えて——「スペシャリスト」アイヒマンと現代』（高橋哲哉ほか訳、産業図書株式会社、2000 年）。
フロベール『ボヴァリー夫人（上下巻）』（伊吹武彦訳、岩波書店、1939 年）。
ブロック、オリヴィエ『唯物論』（谷川多佳子・津崎良典訳、白水社、2015 年）。
プレスト、J『エデンの園——楽園の再現と植物園』（加藤暁子訳、八坂書房、1999 年）。
ペイン、トーマス『コモン・センス他 3 篇』（小松春雄訳、岩波書店、1976 年）。
ベッカー、カール『十八世紀哲学者の楽園』（小林章夫訳、上智大学出版、2006 年）。
ベッケール、ジャン=ジャック『第一次世界大戦』（幸田礼雅訳、白水社、2015 年）。
ベック、U ほか『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』（松尾精文ほか訳、而立書房、1997 年）。
ヘッセ、ヘルマン『クヌルプ』（高橋健二訳、新潮社、1983 年）。
ペルヌー、レジーヌ『近代市民社会の形成——フランス・ブルジョワジーの起源』（山上正太郎訳、1954 年）。
ベンヤミン、ヴァルター『ボードレール他 5 編』（野村修編訳、岩波書店、1994 年）。
———『複製技術時代の芸術』（佐々木基一編・解説、晶文社、1999 年。）
———『パサージュ論（全 5 巻）』（今村仁司・三島憲一ほか訳、岩波書店、2003 年）。
ボードレール『人工楽園』（渡辺一夫訳、角川書店、1955 年）。

———『ボードレール全詩集 I・II』（阿部良雄訳、筑摩書店、1998 年）。
ホッブズ、トマス『リヴァイアサン（全 4 巻）』（水田洋訳、岩波文庫、1992 年）。
———『市民論』（本田裕志訳、京都大学学術出版会、2008 年）。
ホブズボーム、E・J『産業と帝国』（浜林正夫ほか訳、未来社、1984 年）。
———ほか『つくられた伝統』（前川啓治・梶原景昭ほか訳、紀伊國屋書店、1992 年）。
———『ナショナリズムの歴史と現在』（浜林正夫ほか訳、大月書店、2001 年）
マイヤー、オットー『時計じかけのヨーロッパ——近代初期の技術と社会』（忠平美幸訳、平凡社、1997 年）。
マクファーソン、C・B『所有的個人主義の思想』（藤野渉ほか訳、合同出版、1980 年）。
マッツィーニ『人間の義務について』（齋藤ゆかり訳、岩波書店、）。
マニュエル、フランク『サン=シモンの新世界』（森博訳、恒星社厚生閣、1975 年）。
———ほか『西欧世界におけるユートピア思想』（晃洋書房、2018 年）。
マルクーゼ、H『エロス的文明』（南博訳、紀伊國屋書店、1958 年）。
マルクス、カール『フランスの内乱』（木下半治訳、岩波書店、1952 年）。
———『経済学批判』（武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳、岩波書店、1956 年）。
———『フランスの階級闘争』（中原稔生、大月書店、1960 年）。
———『ユダヤ人問題によせて——ヘーゲル法哲学批判序説』（城塚登、岩波書店、1974 年）。『ルイボナパルトのブリュメール 18 日【初版】』（植村邦彦訳、柄谷行人付論、平凡社、2008 年）。
———ほか『マルクス=エンゲルス全集 12』（大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1964 年）
———ほか『新編輯版ドイツイデオロギー』（廣松渉編訳・小林昌人補訳、岩波書店、2002 年）。
マルティモール、エメ=ジョルジ『ガリカニズム——フランスにおける国家と教会』（朝倉剛・羽賀賢二訳、白水社、1987 年）。
マンハイム、カール『マンハイム全集（全 5 巻）』（樺俊雄訳、潮出版社、1976 年）。
———『イデオロギーとユートピア』（高橋徹責任編集、『世界の名著６８　マンハイム　オルテガ』所収、中央公論社、1979 年所収）。
マンフォード、ルイス『都市の文化』（生田勉訳、鹿島出版会、1974 年）。
———『新版ユートピアの系譜——理想の都市とはなにか』（関裕三郎訳、新泉社、2000 年）。
ミノワ、ジョルジュ『悪魔の文化史』（平野隆文訳、白水社、2004 年）。
ミル、J・S『女性の解放』（大内兵衛・大内節子訳、岩波書店、1957 年）。
メーダ、ヴェド『ハエとハエとり壺——現代イギリスの哲学者と歴史家』（河合秀和訳、みすず書房、1970 年）。
メチヴィエ、ユベール『ルイ 14 世』（前川貞次郎訳、白水社、1955 年）。
———『アンシアン・レジーム』（井上堯裕訳、白水社、1965 年）。
メルシエ『タブロー・ド・パリ（上下巻）』（原宏訳、岩波書店、1989 年）。
モア、トマス『ユートピア』（平井正穂訳、岩波書店、1957 年）。
モッセ、G・L『大衆の国民化』（佐藤卓巳ほか訳、柏書房、1994 年）。

モニス、ジェラール『20 世紀の建築』（森島勇訳、白水社、2002 年）。
モリス、ウィリアム『ユートピアだより』（川端康雄訳、岩波書店、2013 年）。
———ほか『社会主義』（大内秀明監修・川端康雄訳、晶文社、2014 年）。
モルウ、ジャン=シャルル『建築の歴史』（藤本康雄訳、白水社、1995 年）。
モンテスキュー『法の精神（上中下巻）』（野田良之ほか訳、岩波文庫、1989 年）。
ヤノコ、グザヴィエ『フランス植民地帝国の歴史』（平野千果子訳、白水社、1998 年）。
ヤング、マイケル『メリトクラシー』（窪田鎮夫・山元卯一郎訳、至誠堂選書、1982 年）。
ユイスマンス、Ｊ・Ｋ『さかしま』（渋澤龍彦訳、河出書房新社、2002 年）。
ラスマッセン、D『普遍主義対共同体主義』（菊池理夫ほか訳、日本経済評論社、1998 年）。
ラコフ、サンフォード・A「社会主義——古代からマルクスまで」二階堂達郎訳、『財と社会のダイナミクス——［叢書］ヒストリー・オブ・アイディアズ 24』（二階堂達郎ほか訳、平凡社、1987 年）。
ラトゥール、ブリュノ『近代の〈物神事実〉崇拝について——ならびに「聖像衝突」』（荒金直人訳、以文社、2017 年）。
ラプージュ、ジル『ユートピアと文明——輝く都市・虚無の都市』（中村弓子ほか訳、紀伊國屋書店、1988 年）。
ラプラス『確率の哲学的試論』（内井惣七訳、岩波書店、1997 年）。
ランドウ、ジョージ・P『ラスキン——眼差しの哲学者』（横山千秋訳、日本経済評論社、2010 年）。
ランツ、ティエリー『ナポレオン 3 世』（幸田礼雅訳、白水社、2010 年）。
リシュタンベルジェ、アンドレ『18 世紀社会主義』（野沢協訳、法政大学出版局、1981 年）。
リスト、フリードリッヒ『農地制度論』（小林昇訳、岩波書店、1974 年）。
ルークス、スティーヴン「個人主義」（フィリップ・P・ウィーナーほか編『西洋思想大事典』平凡社、1990 年）。
ルフェーブル、アンリ『マルクス主義』（竹内良知訳、白水社、1968 年）。
ルソー、エルヴェ『キリスト教思想』（中島公子訳、白水社、1975 年）。
ルソー、ジャン=ジャック『政治経済論』（河野健二訳、岩波書店、1951 年）。
———『社会契約論』（桑原武夫訳、岩波書店、1954 年）。
———『告白（上中下巻）』（桑原武夫訳、1965 年）。
———『ルソー選集（全 14 巻別巻 2 冊）』（白水社、1978 年）。
ル・コルビュジエ『建築を目指して』（吉阪隆正訳、鹿島出版会、1967 年）。
———『輝く都市』（坂倉準三訳、鹿島出版会、1968 年）。
———『アテネ憲章』（吉阪隆正編訳、鹿島出版会、1976 年）。
———『伽藍が白かったとき』（生田勉ほか訳、岩波書店、2007 年）。
レーリヒ、フリッツ『中世ヨーロッパ都市と市民文化』（魚住昌良ほか訳、創元社、1978 年）。
レッシング『人類の教育』（西村貞二訳、創元社、1949 年）。

赤司道和『19 世紀パリ社会史――労働・家族・文化』（北海道大学大学院文学研究科、2004 年）。
東浩紀・北田暁大『東京から考える――格差・郊外・ナショナリズム』（日本放送出版協会、2007 年）。
安達正勝『物語　フランス革命』（中央公論新社、2008 年）。
荒井政治・竹岡敬温編『概説西洋経済史』（有斐閣、1980 年）。
安西信一『イギリス風景式庭園の美学――〈開かれた庭〉のパラドックス』（東京大学出版会、2000 年）。
安藤裕介「フィジオクラット」、『岩波講座政治哲学 2　―― 啓蒙・改革・革命』（犬塚元責任編集、岩波書店、2014 年）。
―――「18 世紀フランスにおける統治改革と中国情報――フィジオクラットからイデオローグまで」、『立教法学』第 98 号（2018 年）。
安藤隆穂『フランス自由主義の成立――公共圏の思想史』（名古屋大学出版会、2007 年）。
飯島昇藏『社会契約』（東京大学出版会、2001 年）。
飯田鼎「パンカースト著 サン=シモン主義者ミルおよびカーライル：近代思想序説」、慶應義塾経済学会編『三田学会雑誌』（1958 年）。
飯田操『川とイギリス人』（平凡社、2000 年）。
イギリス都市・農村共同体研究会編『巨大都市ロンドンの勃興』（刀水書房、1999 年）。
―――、東北大学経済史・経営史研究会編『イギリス都市史研究――都市と地域』（日本経済評論社、2004 年）。
池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店、1984 年）。
石坂昭雄ほか編著『新版西洋経済史』（有斐閣、1976 年）。
石田潤一郎・中川理編『近代建築史』（昭和堂、1998 年）。
石塚正英ほか編著『戦争と近代――ポスト・ナポレオン 200 年の世界』（社会評論社、2011 年）。
泉利明「文学の過去と現在（二）――スタール夫人」、『言語文化論叢』第 10 号（2002 年）。
伊藤邦武『フランス認識論における非決定論の研究』（晃洋書房、2018 年）。
今井登志喜『新装版 都市発達史研究』（東京大学出版会、1951 年）。
今井義夫「ハリコフの最初の消費組合（一八六六年－七一年）とニコラーイ・バールリン――南ロシア（ウクライナ）の初期協同組合運動史から」、『一橋論叢』第 89 巻 1 号（日本評論社、1983 年）。
今橋映子編『都市と郊外――比較文化論への通路』NTT 出版、2004 年）。
岩田靖夫『ヨーロッパ思想入門』（岩波書店、2003 年）。
岩間一雄『ナショナリズムとは何か』（西日本法規出版、1987 年）。
岩本吉弘「ペクール・ノート：国家社会主義構想の成立過程」、『一橋大学科学古典資料センターStudy Series』No. 30（1993 年）
上田正昭『平安京から京都へ』（小学館、1994 年）。
上野喬『ミシェル・シュヴァリエ研究』（木鐸社、1995 年）。
上森亮「バーリンとナショナリズム」（早稲田大学大学院社会科学研究科編『社学研論

集』所収、2008 年)。
臼井実稲子『ヨーロッパ国際体系の史的展開』(南窓社、2000 年)。
内田繁隆「社会科学の特性と世界観の問題」、国士舘大学政経学会編『国士舘大学政経論叢』第 2 号(1964 年)。
———「国家と経済の関係の原理的考察」、国士舘大学政経学会編『国士舘大学政経論叢』第 8 号(1968 年)。
———「階級国家論と福祉国家の理論」、国士舘大学政教研究所編『政教研究所紀要』第 1 号(1974 年)。
———「近代的社会観と唯物史観の限界——マルクス主義を超えて」、国士舘大学政経学会編『国士舘大学政経論叢』第 23 号(1975 年)。
梅田百合香『ホッブズ　政治と宗教——『リヴァイアサン』再考』(名古屋大学出版会、2005 年)。
宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編『社会統合と宗教的なもの——19 世紀フランスの経験』(白水社、2011 年)。
宇野弘蔵『経済原論』(岩波書店、2016 年)。
小笠原弘親・小野典明・藤原保信編『政治思想史』(有斐閣、1987 年)。
———・飯島昇藏編『政治思想史の方法』(早稲田大学出版部、1990 年)。
小倉孝誠『近代フランスの誘惑——物語 表象 オリエント』(慶應義塾大学出版会、2006 年)。
———『ゾラと近代フランス——歴史から物語へ』(白水社、2017 年)。
小幡道昭『経済原論——基礎と演習』(東京大学出版会、2009 年)。
大澤真幸編『ナショナリズムの名著 50』(平凡社、2002 年)。
———『帝国的ナショナリズム——日本とアメリカの変容』(青土社、2004 年)。
———『ナショナリズムの由来』(講談社、2007 年)
———・姜尚中編『ナショナリズム論入門』(有斐閣アルマ、2009 年)。
大塚久雄『国民経済——その歴史的考察』(講談社、1994 年)。
———『共同体の基礎理論』(岩波書店、2000 年)。
———『欧州経済史』(岩波書店、2001 年)。
岡並木『江戸・パリ・ロンドン——比較都市論の旅』(論創社、1994 年)。
岡田裕之「研究ノート(書評論文)1847 年恐慌と 2007-09 年世界金融・実物恐慌 : 川上忠雄『1847 年恐慌』御茶ノ水書房、2013 年、に寄せて」、『経営志林』51 巻 1 号(法政大学経営学会編、2014 年)。
奥西孝至ほか編著『西洋経済史』(有斐閣、2010 年)。
小田川大典ほか編著『国際政治哲学』(ナカニシヤ出版、2011 年)。
小野紀明ほか編著『岩波講座政治哲学 2 ——啓蒙・改革・革命』(岩波書店、2014 年)。
———『岩波講座政治哲学 5 ——理性の両義性』(岩波書店、2014 年)。
重田園江『連帯の哲学 I——フランス社会連帯主義』(勁草書房、2010 年)。
———『社会契約論』(筑摩書房、2013 年)。
加賀美雅弘・川手圭一・久邇良子『第二版 ヨーロッパ学への招待——地理・歴史・政治からみたヨーロッパ』(学文社、2010 年)。

鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会――サン=シモンの鉄の夢』（小学館、2000 年）。
―――『怪帝ナポレオンⅢ世 ――第二帝政全史』（講談社、2004 年）。
―――『明日は舞踏会』（中央公論新社、2000 年）。
―――『パリ・世紀末パノラマ館――エッフェル塔からチョコレートまで』（中央公論新社、2000 年）。
―――『デパートを発明した夫婦』（講談社、1991 年）。
片木篤ほか編著『近代日本の郊外住宅地』（鹿島出版会、2000 年）。
金山直樹『法典という近代――装置としての法』（勁草書房、2011 年）。
鎌田大資「社会解体論の原点を求めて――原初の社会主義者としてのサン=シモンから初期シカゴ学派が継承したもの」、『椙山女学園大学研究論集社会科学篇』（椙山女学園大学、2017 年）。
萱野稔人『新・現代思想講義ナショナリズは悪なのか』（NHK 出版、2011 年）。
川北稔『イギリス近代史講義』（講談社、2010 年）。
川口幸也編『展示の政治学』（水声社、2009 年）。
河野健二編『フランスブルジョワ社会の成立――第二帝政期の研究』（岩波書店、1977 年）。
―――編『資料フランス初期社会主義――２月革命とその思想』（岩波書店、1979 年）。
姜尚中『ナショナリズム』（岩波書店、2001 年）。
菊谷和宏『「社会」の誕生――トクヴィル、デュルケーム、ベルクソンの社会思想史』（白水社、2011 年）
木崎喜代治・阪上孝・筒井清忠編『社会思想史』（有斐閣、1987 年）。
北河大次郎『近代都市パリの誕生――鉄道・メトロ時代の熱狂』（河出書房新社、2010 年）。
木下賢一『第二帝政とパリ民衆の世界――「進歩」と「伝統」のはざまで』（山川出版社、2000 年）。
北山晴一『おしゃれと権力』（三省堂、1985 年）。
―――『おしゃれの社会史』（朝日新聞社、1991 年）
木村尚三郎『世界の都市の物語１　パリ』（文藝春秋、1992 年）。
喜安朗・川北稔『大都会の誕生――出来事の歴史像を読む』（有斐閣、1986 年）。
久保田明光『重農学派経済学』（前野書店、1959 年）。
倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』（東京堂出版、1997 年）。
黒宮一太『ネイションとの再会――記憶への帰属』（NTT 出版、2007 年）。
桑原武夫編『フランス革命の研究』（岩波書店、1959 年）。
小池滋・青木栄一・和久田康夫編『鉄道の世界史』（悠書館、2010 年）。
小泉順三「「一ヂュネーヴ住民の書翰」に現れたるサン=シモンの思想」、三田理財学会編『三田学会雑誌』第 22 巻 6 号（1928 年）。
―――「サン=シモンと「19 世紀科学的研究に関する序論」」、三田理財学会編『三田学会雑誌』第 22 巻 12 号（1928 年）。
―――「サン=シモンの歴史哲学と人類の科学」三田理財学会編『三田学会雑誌』第 23 巻 2 号（1929 年）。

———「サン=シモンの欧洲社会改造論」、三田理財学会編『三田学会雑誌』第 23 巻 8 号（1929 年）。
———「産業主義者サン=シモン : 「欧洲社会改造論」以後「新キリスト教」に至る迄」、三田理財学会編『三田学会雑誌』第 24 巻 8 号（1930 年）。
———「サン=シモンの宗教論 : Nouveau christianisme と彼の晩年」、三田理財学会編『三田学会雑誌』第 25 巻 3 号（1931 年）。
小関隆『プリムローズ・リーグの時代——世紀転換期イギリスの保守主義』（岩波書店、2006 年）。
古賀和史『近代フランス産業の史的分析』（学文社 1983 年）。
五島茂・坂本慶一責任編集『世界の名著 続８ オウエン サン=シモン フーリエ』（中央公論社、1975 年）。
後藤久『西洋住居史——石の文化と木の文化』（彰国社、2005 年）。
小林龍馬「フランスの銀行制度とサン=シモン主義」、同志社大学経済学会編『経済学論叢』（1988 年）。
齊藤寛海・山辺規子・藤内哲也編『イタリア都市社会史入門——12 世紀から 16 世紀まで』（昭和堂、2008 年）。
佐伯啓思『倫理としてのナショナリズム——グローバリズムの虚無を超えて』（NTT 出版、2005 年）。
阪上孝『フランス社会主義』（新評論、1981 年）。
———『近代的統治の誕生——人口・世論・家族』（岩波書店、1999 年）。
坂本慶一『フランス産業革命思想の形成』（未来社、1961 年）。
坂本達也『社会思想の歴史』（名古屋大学出版会、2014 年）。
桜井邦朋『新版天文学史』（筑摩書房、2007 年）。
佐藤茂行「サン=シモン主義の経済学者, ミシェル・シュヴァリエ」、北海道大学経済学会編『経済学研究』第 27 巻 2 号（1977 年）。
———「サン=シモン教について : サン=シモン主義と宗教的社会主義」、北海道大学経済学会編『経済学研究』第 35 巻 4 号（1986 年）。
佐藤彰一・中野隆生編『フランス史研究入門』（2011 年、山川出版社）。
澤田肇ほか編『パリという首都風景の誕生』（上智大学出版、2014 年）。
重松佳江『プランタン 巴里 ベルエポック』（講談社、1985 年）。
柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編著『世界歴史大系　フランス史(全 3 巻)』（山川出版社、1996 年）。
———『フランス史 10 講』（岩波書店、2006 年）。
澁澤龍彦『快楽主義の哲学』（文藝春秋、1996 年）。
澁谷浩『保守政治の論理』（北樹出版、1994 年）。
社会思想研究会編『社会思想史十講』（社会思想社、1962 年）。
白瀬小百合「「新キリスト教」の行方 : サン=シモンの宗教思想と後継者による継承をめぐって」、東京大学教養学部フランス語部会「Résonances」編集委員会『Résonances 第 7 巻』（2011 年）。
———「封建体制から産業体制へ——サン=シモンの社会思想」、東京大学大学院総合文

化研究科・教養学部ドイツヨーロッパ研究室編『ヨーロッパ研究』（2013 年）。
———「産業と有用性：アンリ・サン=シモンに見られる J.-B.セーの影響と思想的展開」、東京大学教養学部フランス語部会「Résonances」編集委員会『Résonances 第 9 巻』（2015 年）。
陣内秀信ほか『図説 西洋建築史』（彰国社、2005 年）。
神野由紀『趣味の誕生——百貨店がつくったテイスト』
杉田敦『権力』（岩波書店、2000 年）。
杉山吉弘「エコノミー概念の系譜学序説」、『札幌学院大学人文学会紀要』第 97 号（2015 年）。
世界経済調査会編『ナショナリズムの研究』（慶應通信、1956 年）。
関嘉彦『ベルンシュタインと修正主義』（早稲田大学出版部、1980 年）。
———『金鶏叢書 6　社会主義の歴史 1——フランス革命から 19 世紀末へ』（力富書房、1984 年）。
関口尚志ほか編『中産層文化と近代——ダニエル・デフォーの世界から』（日本経済評論社、1999 年）。
施光恒・黒宮一太『ナショナリズムの政治学——規範理論への誘い』（ナカニシヤ出版、2009 年）。
添谷育志編『近現代英国思想研究、およびその他のエッセイ』（風行社、2015 年）。
高池久隆「ハインリヒ・ハイネの *Verschiedence*」、『岡山理科大学紀要 B, 人文・社会科学第 27 巻』（1991 年）。
高木八尺ほか編『人権宣言集』（岩波書店、1957 年）。
高草木光一「サン=シモンの「ヨーロッパ概念」」、慶應義塾経済学会編『三田学会雑誌』第 99 巻 4 号（2007 年）。
高瀬荘太郎「サン=シモンによる産業者政治の制度」、東京商科大學一橋論叢編輯所編『一橋論叢』第 4 巻 6 号（岩波書店、1939 年）。
高橋幸八郎編『産業革命の研究』（岩波書店、1965 年）。
高橋五郎・磯辺俊彦「サン=シモン, フーリエの思想にみる生産協同組合論——生産協同組合論の萌芽と継承」、千葉大学園芸学部編『千葉大学園芸学部学術報告』43 号（1990 年）。
高橋和之『新版 世界憲法集第二版』（岩波書店、2012 年）。
高山宏『世紀末異貌』（三省堂、1990 年）。
———『近代文化史入門 ——超英文学講義』（講談社、2007 年）。
多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』（岩波書店、2000 年）。
田中浩『ホッブズ——リヴァイアサンの哲学者』（岩波書店、2016 年）。
田中秀隆「サン=シモンの階級論」、東京大学大学院社会科学研究科ソシオロゴス編集委員会編『ソシオロゴス』No.8、1984 年。
田中文憲「クレディ・スイスとスイス経済の発展」、『奈良大学紀要』37 号（奈良大学、2009 年）。
田村真八郎『ユートピアと食生活』（農山漁村文化協会、1981 年）。
谷川稔「近代国民国家への道」、福井憲彦編『（新版世界各国史 12）フランス史』（山川

出版社、2001 年）
———ほか編『近代フランスの歴史——国民国家フランスの彼方に』(ミネルヴァ書房、2006 年)。
遅塚忠躬『フランス革命——歴史における劇薬』（岩波書店、1997 年）。
角山栄『時計の社会史』（中央公論社、1984 年）。
寺田元一『「編集知」の世紀 ——18 世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』（日本評論社、2003 年）。
寺田光徳『欲望する機械——ゾラの「ルーゴン=マッカール叢書」』(藤原書店、2013 年)。
寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』（思文閣出版、2017 年）。
都市史図集編集委員会編『都市史図集』（彰国社、1999 年）。
富岡勉「サン=シモン再考」、『北陸学院短期大学紀要』第 6 号（北陸学院短期大学、1974 年）。
———「サン=シモン「新キリスト教」への一解釈」『北陸学院短期大学紀要』第 8 号（北陸学院短期大学、1976 年）。
———「サン=シモンのプロテスタンティズム批判について」、『北陸学院短期大学紀要』第 9 号（北陸学院短期大学、1977 年）。
———「サン=シモンと信仰」、『北陸学院短期大学紀要』第 10 号（北陸学院短期大学、1978 年）。
———「サン=シモンの社会組織論について」、『北陸学院短期大学紀要』第 12 号（北陸学院短期大学、1980 年）。
———「サン=シモンの科学と宗教」、『北陸学院短期大学紀要』第 13 号（北陸学院短期大学、1981 年）。
———「サン=シモンはなぜ『新キリスト教』か」、『北陸学院短期大学紀要』第 17 号（北陸学院短期大学、1985 年）。
富沢克編『「リベラル・ナショナリズム」の再検討——国際比較の観点から見た新しい秩序像』（ミネルヴァ書房、2012 年）。
富永健一『近代化の理論』（講談社、1981 年）。
———『社会学講義——人と社会の学』（中央公論新社、1995 年）。
———『思想としての社会学』（新曜社 2008 年）。
永井陽之助編『政治的人間——狂熱よりはむしろ冷徹に成熟する思惟（現代人の思想 16）』（平凡社、1968 年）。
中金聡『オークショットの政治哲学』（早稲田大学出版部、1995 年）。
———「イギリス保守主義と近代化 ——《ポスト集産主義》的条件化の政治的伝統」、国士舘大学政経学会編、『国士舘大学政経論叢』104 号（1998 年）。
———『政治の生理学——必要悪のアートと論理』（勁草書房、2000 年）。
———「庭園をつくる——エピクロス主義の〈逸れ〉について」、政治哲学研究会『政治哲学』第 23 号（2017 年）
中川洋一郎『暴力なき社会主義？——フランス第二帝政下のクレディ・モビリエ』（学文社、2004 年）。
仲正昌樹編『美のポリティクス』（御茶ノ水書房、2003 年）。

中村菊男『政治文化論――政治的個性の研究』()
中村秀一『産業と倫理――サン=シモンの社会組織思想』（平凡社、1989 年）。
中村賢二郎『都市の社会史』（ミネルヴァ書房、1983 年）。
―――・倉塚平編『宗教改革と都市』（刀水書房、1983 年）。
中村雄二郎『術語集』（岩波書店、1984 年）。
縫田清二『ユートピアの思想――個と共同の構想力』（世界書院、2000 年）。
西川長夫「国民(Nation)再考――フランス革命における国民創出をめぐって」、京都大学『人文學報』第 70 号（1992 年）
西田雅嗣編『ヨーロッパ建築史』（昭和堂、1998 年）。
西部邁『西部邁の経済思想入門』（左右社、2012 年）。
日本建築学会編『西洋建築史図集 3 訂版』（彰国社、1953 年）。
―――編『近代建築史図集 新訂版』（彰国社、1954 年）。
野地洋行編『近代思想のアンビバレンス』（御茶ノ水書房、1997 年）。
蓮見重彦『帝国の陰謀』（日本文芸社、1991 年）。
―――・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成 IX――自己／統治性／快楽』（筑摩書房、2001 年）。
―――・―――監修『ミシェル・フーコー思考集成 X――倫理／道徳／啓蒙』（筑摩書房、2002 年）。
服部春彦・谷川稔編『フランス近代史』（ミネルヴァ書房 1993 年）。
原輝史「フランス鉄道経営の史的分析――北部会社の事例を中心に」、早稲田商学同好会編『早稲田商学』通号 260（1976 年）。
―――編『フランス経営史』（有斐閣、1980 年）。
―――『フランス資本主義』（日本経済評論社、1986 年）。
比較都市史研究会編『比較都市史の旅』（原書房、1993 年）。
平野繁臣『国際博覧会歴史事典』（内山工房、1999 年）。
廣田明「サン=シモンの社会組織思想における市民社会と国家（全 2 シリーズ）」、法政大学社会学部学会『社会労働研究』第 20 巻 1 ・2 号（1974 年）。
―――「フランスにおける福祉国家の成立：福祉国家の思想史のために」、法政大学社会学部学会『社会労働研究』第 45 巻 4 号（1999 年）。
福井憲彦編『（新版世界各国史 12）フランス史』（山川出版社、2001 年）
藤田その子「ミシェル・シュヴァリエ小論――フランス産業革命期における『実践的サン=シモン主義』の意義」、日本西洋史学会編『西洋史学』（1976 年）
藤原孝「サン=シモンの前期国家論序説」、政治・経済・新聞学編『日本大学法学部創立百周年記念論文集』第 2 巻（日本大学法学部、1989 年）。
藤原保信『西洋政治理論史』（早稲田大学出版部、1985 年）。
―――・飯島昇藏監修『西洋政治思想史(I・Ⅱ)』（新評論、1995 年）。
―――『藤原保信著作集（全 10 巻）』（新評論、2005 年）。
堀井敏夫「サン=シモン、フーリエ対オウエン：思想形成の英仏比較」、史学研究会編『史林』第 48 巻 5 号（京都大学文学部内、1965 年）。
前田祝一「サン=シモン主義の分裂（全３シリーズ）」、駒澤大学外国語部編『駒澤大学

外国語部論集』第 28・29・32 号（1988・89・90 年）。
松井道昭『フランス第二帝政下のパリ都市改造』（日本経済評論社、1997 年）。
松園伸『産業社会の発展と議会政治――18 世紀イギリス史』（早稲田大学出版部、1999 年）。
丸山真男『日本の思想』（岩波書店、1961 年）。
―――『丸山真男セレクション』（杉田敦編、平凡社、2010 年）。
御崎加代子『フランス経済学史――ケネーからワルラスへ』（昭和堂、2006 年）。
三宅理一『エピキュリアンたちの首都』（學藝書林、1989 年）。
―――『パリのグランド・デザイン』（中央公論新社、2010 年）。
村松茂美「フレッチャーにおける「国民的政治共同体」と国際世界」、『啓蒙と社会――文明観の変容』（佐々木武・田中秀夫編、京都大学学術出版会、2011 年）
村松正隆「感覚性・共感・模倣――カバニスの人間学を巡って」、『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』創刊号（2003 年）。
三島由紀夫『若きサムライのために』（文芸春秋、1996 年）。
水田洋『近代人の形成――近代社会観成立史』（東京大学出版会、1954 年）。
宮沢俊義編『世界憲法集』（岩波書店、1960 年）。
宮下志朗ほか編『いま、なぜゾラか――ゾラ入門』（藤原書店、2002 年）。
元岡展久『パリ広場散策――美しき首都の成り立ち』（丸善、1998 年）。
森博「サン=シモンの寓話裁判」、望月礼二郎ほか編『法と法過程――社会諸科学からのアプローチ』（創文社、1986 年）。
安永勲ほか編『政治学講義』（成文堂、2014 年）。
山内弘隆ほか編『交通経済学』（有斐閣、2002 年）
山内昌之『民族問題入門』（中央公論社、1996 年）。
山口拓美「エクスプロイテーション（搾取）概念の系譜――サン=シモンからヌスバウムまで」、神奈川大学経済学会編『商経論叢』第 46 巻 3 号（2011 年）。
山口廣編『郊外住宅地の系譜――東京の田園ユートピア』（鹿島出版会、1987 年）。
山下晋司編『観光人類学』（新曜社、1996 年）。
横山正彦『重農主義分析』（岩波書店、1958 年）。
横張誠『芸術と策謀のパリ』（講談社、1999 年）
―――編訳『ボードレル語録』（岩波書店、2013 年）。
吉田静一『サン=シモン復興――思想史の淵から』（未来社、1975 年）。
吉田光邦『改訂版 万国博覧会――技術文明史的に』（NHK 出版、1985 年）。
―――編『万国博覧会の研究』（思文閣出版、1986 年）。
吉見俊哉『博覧会の政治学』（中央公論社、1992 年）。
米田庄太郎「サン=シモンの社会改造哲学及び社会連帯思想」、京都帝国大学経済学会編『経済論叢』第 16 巻 1 号（1923 年）。
―――「サン=シモン派の社会改造哲学及び連帯思想（全５シリーズ）」『経済論叢』第 16 巻 3- 6 号、および 17 巻 4 号（1923 年）。
若林幹夫『都市への／からの視線』（青弓社、2003 年）。
―――『郊外の社会学――現代を生きる形』（筑摩書房、2007 年）。

和辻哲郎『和辻哲郎全集（全 20 巻）』（岩波書店、1961- 63 年）。

年　　表

サン=シモンの著作	フランス史上の出来事
	1756 年：外交革命
1760 年：サン=シモン生まれる。	
	1763 年：パリ条約、フランスはアメリカ大陸から撤退する。
1789 年：サン=シモン 29 歳	1789 年：フランス革命。フランス人権宣言が採択される。 1792 年：王制廃止、ルイ 16 世処刑。 革命戦争突入。
1793 年：サン=シモン 33 歳	1793 年：ジャコバン政権成立／対仏大同盟成る。 1794 年：テルミドール反動。ロベスピエールが失脚しジャコバン政権が崩壊。総裁政府が成立。
1795 年：『共和主義トランプについての手紙と趣意書』	1795 年：ポール・バラス政権が誕生。 1798 年：第二次対仏大同盟 1799 年：ブリュメール 18 日のクーデター。ナポレオン・ボナパルトが執政政府を樹立。 1800 年：ナポレオンによるイタリア遠征 1801 年：リュネヴィルの和約。オーストリアが対仏講和。第二次政教和約。
1802 年：サン=シモン 42 歳 『リセの協会に』	1802 年：アミアンの和約。イギリスが対仏講和。
1803 年：『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』 「ヨーロッパ人への手紙」	1803 年：アミアン和約が破れ、ナポレオン戦争がはじまる。
1804 年：「社会組織についての試論」	1804 年：ナポレオン・ボナパルトがナポレオン一世となり、皇帝即位。第一帝政がはじまる。 ナポレオン法典が成立。 1805 年：ナポレオン軍結集／第三次対仏大同盟。 ウルム戦役。 トラファルガーの海戦。 アウステツリッツの戦い。

	1806 年：大陸封鎖令。 親ナポレオン諸国によるライン同盟成立。 神聖ローマ皇帝フランツ二世が退位し神聖ローマ帝国が消滅。 第 4 次対仏大同盟。 ナポレオン軍がベルリンに入城。 ナポレオンによる大陸封鎖令。
1807 年：『19 世紀の科学的研究序説第 1 巻』	1807 年：ティルジット和約。 ワルシャワ公国が独立を回復。 フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』を講演。
1808 年：『19 世紀の科学的研究序説第 2 巻』	1808 年：ナポレオンがスペイン内乱に介入、スペイン独立戦争として泥沼化。 1809 年：第 5 次対仏大同盟
1810 年：サン=シモン 50 歳 『新百科全書素描』 「百科全書についての覚書」 『新百科全書――趣意書の役をはたす第一分冊』 「百科全書の計画――第 2 趣意書」	1810 年：第一帝政が絶頂期を迎える。 ナポレオン一世が皇后所是フィーヌと離婚。オーストリア皇女マリー・ルイーズと再婚。
	1811 年：ナポレオン二世が誕生、教皇領がフランスに併合され、ローマ教皇ピウス 7 世は幽閉、ナポレオン二世がローマ王に即位。 1812 年：ロシア遠征。ナポレオン軍が大敗。
1813 年：『人間科学に関する覚書　第 1 部』 『人間科学に関する覚書　第 2 分冊』	1813 年：第 2 次政教和約。 諸国民解放戦争が勃発。 第 6 次対仏大同盟。 ライプツィヒの戦いでナポレオン軍が敗走。
1814 年：『ヨーロッパ社会の再組織について』	1814 年：連合軍がパリへ入城、ナポレオン一世が退位、エルバ島へ流される。 ウィーン会議。 ルイ 18 世が即位、第一次復古王政。
1815 年：『ナポレオン・ボナパルトによるフランス国土の侵犯についてのサン=シモン伯爵の所信表明』 『公法の組織化について』 『国有地所有者協会の企画』	1815 年：ナポレオンの百日天下／第 7 次対仏大同盟。 ナポレオンがセントヘレナ島へ配流。 第 2 次パリ条約が締結（革命戦争以来の断続的戦乱が終結）。 ウィーン議定書が締結。 神聖同盟により正統体制が発足。

1816 年：サン=シモン 56 歳。 『初等教育協会の総会に提出されたド・サン=シモン氏の若干の意見』 『『産業』の「趣意書」(1)』 1817 年：『『産業』の「趣意書」(2)』 『『産業』第 2 巻』 『『産業』第 3 巻の趣意書』 『『産業』の著者の回状』 『『産業』第 3 巻第 4 分冊』 『『産業』第 4 巻第 1 部』 1818 年：『フランス一般新聞の編集者への手紙』 『『産業』第 4 巻第 2 部』 「産業の政治的利益」 「コミュヌ」 1819 年：『政治家』 『財政法に 1 条項の追加を要求するための請願に関する考察』 『下院への請願書』 『『組織者』趣意書』 『『組織者』第一分冊』 1820 年：サン=シモン 60 歳 『『組織者』第二分冊』 組織者の寓話が革命的であるとされ、逮捕、裁判にかけられる。 『陪審員諸氏へのアンリ・サン=シモンの手紙』 裁判で無罪を勝ち取る。 『『組織者』第 3 分冊に関する回状』 『選挙法について』 『産業体制論　第 1 部』 1821 年：『産業体制論　第 2 部』 「プロレタリアの階級」 1822 年：『ブルボン家とスチュアート家』 『続ブルボン家とスチュアート家』 『産業体制論　第 3 部』 『社会契約論』 1823 年：サン=シモンが自殺を図るも、右目を失明し、生き延びる。	

弟子になるロドリーグと出会う。 『『産業者の教理問答』第 1 分冊』	
1824 年：『『産業者の教理問答』第 2 分冊』 コントがサン=シモンと決別する。 『『産業者の教理問答』第 3 分冊』 『『産業者の教理問答』第 4 分冊』 1825 年：『文学的、哲学的、産業的意見』 『新キリスト教』 サン=シモン 65 歳。死去。	1824 年：ルイ 18 世が死去し、その弟シャルル 10 世が即位 1830 年：七月革命。シャルル 10 世が退位し亡命。オルレアン家のルイ・フィリップが即位。七月王制が成立。 1848 年：二月革命。第二共和制が成立。 六月蜂起を経て 12 月に憲法制定、大統領選挙。ルイ=ナポレオンが大統領に就任。 1851 年：ルイ=ナポレオンによるクーデター。独裁大統領になる。 1852 年：ペレール兄弟がクレディ・モビリエを創業。国民投票を経てルイ=ナポレオンが皇帝に即位。ナポレオン三世になる。フランスは第二帝政へ。 1853 年：クリミア戦争。 1855 年：最初のパリ万国博覧会。 フランスでロートシルト商会を中心に非クレディ・モビリエ系資本による金融連合が組織される（後のソシエテ・ジェネラル） 1856 年：パリ条約が締結されクリミア戦争が終結。 アロー戦争。イギリスと連合し清との間で戦争を開始。 ベトナム出兵。スペインと連合してベトナムと交戦。 1858 年：天津条約、アロー戦争の結果として英仏軍が中国から引き上げるが、清朝が批准を拒み

	再戦になる。 インドシナ出兵。 徳川幕府との間で修好通商条約を締結。 （ボードレールが『人工楽園』の一部を上梓。） 1859 年 : イタリア統一運動に介入しオーストリアと開戦。 11 月にオーストリアとヴィッラフランカ休戦協定を締結、ロンバルディアを得る 1860 年 : イギリスと通商条約（コブデン・シュヴァリエ条約）を締結。 サルデーニャ王国とトリノ条約を締結しロンバルディアを割譲する一方でサルデーニャ王国からサヴォワとニースがフランスに編入される。 北京条約、アロー戦争が終結。 1861 年 : メキシコ出兵。 1862 年 : サイゴン条約。インドシナ出兵の結果、阮朝がベトナムの開国とフランスのコーチシナ東部 3 省の領有を認める。 1865 年 : タイと修好通商条約を締結。 ラテン通貨同盟を結成。 1866 年 : メキシコ撤兵。 1867 年 : メキシコ皇帝マクシミリアンが処刑される。 2 回目のパリ万国博覧会。日本がはじめて国際博覧会に出品する。 ルアン・パバーン条約、タイにおけるフランス権益を拡大。 クレディ・モビリエが倒産。 1869 年 : スエズ運河開通。 1870 年 : エムス電報事件 普仏戦争が開戦。9 月、スダンの戦いでナポレオン三世が虜囚となり第二帝政が崩壊。ウジェニー皇后が家族とイギリスに亡命。レオン・ガンベッタが共和制を宣言し、国防政府が発足。第三共和制がはじまる。 1871 年 : プロイセン王ヴィルヘルム 1 世がヴェルサイユ宮殿で戴冠式を行いドイツ皇帝に即位。

	統一ドイツが成立。 議会選を経てティエリが国防政府首班に就任。フランクフルト講和条約に調印し、普仏戦争が終結。国防政府首班ティエリは帝位の正式な廃位を宣言。フランスはアルザスを失う。 パリ・コミューンとその鎮圧。 1873 年：三帝同盟。ドイツ・オーストリア・ロシアとの間に同盟が結ばれる。 1875 年：フランス第三共和国憲法が制定される。 1878 年：3 回目のパリ万国博覧会。 1882 年：三国同盟。ドイツ・オーストリア・イタリアの間で同盟が結ばれる。 1883 年：阮朝とユエ条約を締結、アンナン・トンキンを保護国化。 1884 年：仏清戦争が開戦。（ユイスマンスが『さかしま』を上梓。） 1885 年：天津条約を清と締結し仏清戦争が終結。清がフランスのベトナム保護権を認める。 1886 年：仏英通商条約（イーデン条約）が締結される。 1887 年：独露再保障条約。 フランス領インドシナ連邦が成立。 1888 年：ブーランジェ事件。大衆に人気を誇る対独強硬派の軍人政治家ブーランジェによるクーデター未遂事件が起こる。 1889 年：4 回目のパリ万国博覧会。 1892 年：パナマ運河疑獄事件。パナマ運河会社の清算に絡み発覚した一大収賄事件。 1894 年：仏露同盟。 ドレフュス事件。ユダヤ系将校ドレフュスによる軍事機密漏洩が疑われ、その捜査と

	処分を巡りフランス世論が二分した事件。 1898 年 : エミール・ゾラがドレフュス事件の扱いについて政府へ公開質問を行い、政府の反ユダヤ姿勢を告発した。 1899 年 : フランス領インドシナにラオスを編入。 1900 年 : 5 回目のパリ万国博覧会、第 2 回目のオリンピックであるパリ五輪と同時開催。万博会場にエッフェル塔が建つ。